ティーニータイニー塾のガキンチョたち（約　１８７０００字）

作　萩原　尚　町田市藤の台２の２の２６の１０３
電話　０４２　７２７　７３１９
携帯　０９０　２４４３　０６６１

２０２３年７月４日より新住所になります。

〒１９４－０２１５　町田市小山ヶ丘１－１４－１
桜美林ガーデンヒルズＤ棟１１４号室

目次

1　ツッパリくん　6
2　ちびでぶデップリンの入塾　7
3　ツッパリくんとチビガキたち　9
4　チビガキたちの劇あそび「桃太郎」　13
5　「デップリンくん、きみはこよなく豊かな少年だ！」　16
6　ツッパリくんの目　19
7　ツッパリくんたちの高校受験　21
8　ツッパリくんたちが高校生クラスを作ってしまう　24
9　二の字二の字の下駄のあと　25
10　青白い少年ホッホくんの入塾　29
11　リーダーシップを学ぶキャンプ　33
12　「リーダーなんてできない」と泣いた少女　35
13　指示の多いリーダーと少ないリーダー　38
14　できない知らないホッホくん　44

15 紙の名刺で割ばしを切る 48
16 不良少年に決闘を売る 49
17 ホッホくんが決闘の練習相手になる 52
18 決闘 57
19 「先生、子どもはほめて育ててください」 61
20 朝日新聞コラムへの塾生たちの感想文 66
21 中二生の理王が外国人生徒に日本語を指導 68
22 学習障害児アッキー 70
23 イケダマスオ少年の才能を発見、育てた担任教師 74
24 デップリンが〈遊びの合宿〉の大親分になる 76
25 〈人と触れ合う遊びの合宿〉が始まる 80
26 遊んで、語って、考えて 85
27 「やってみせても、やってやるな」 88
28 障害児アッキーの抗議 90
29 不良少年マキト 91
30 無言少年太一 92

31 おろおろホッホくん 94
32 遥かな景色の中で歌う少女、リサ 96
33 「太一、相手の目を見なさい！」 98
34 言葉がおそい鉄平 99
35 デップリンが下級生に批判される 100
36 戦争孤児だったおじさんと出会う 102
37 中一生優心を生徒たちが追放する 107
38 ホッホくんがリーダーなる 109
39 「表現意欲はどうやって育てるの？」 111
40 目立たない生徒たちがかっこいい役に 115
41 「なにやってんだ、おれ、悪ぶってんじゃねえよ！」 117
42 追放された中一生優心の父親が来塾 119
43 ホッホくんが家出 123
44 「天声人語」にティーニータイニー塾がとりあげられる 124
45 「ティーニータイニー塾はどうやってできたのですか？」 126
46 教師としての失敗と反省 132

４７　英語劇「ブレーメンの音楽隊」の練習　１３７
４８　ホッホくんがさわやかお兄ちゃんに　１４０
４９　言葉のおそい鉄平が劇の主役に　１４３
５０　「わたしはあなたを大好物です」　１４９
５１　ルール無視の剣矢の高校受験　１５１
５２　「デップリンが人を生かせるようになった！」　１５３
５３　「ブレーメンの音楽隊」の劇発表　１５９
５４　塾を卒業する生徒たちの言葉　１６３

1　ツッパリくん

東京都町田市の郊外、丘のふもとの畑の中に、ティーニータイニーという名前の木造の小さな学習塾がある。

ティーニータイニーとは「ちいちゃいちいちゃい」という意味の英語で、イギリスの昔話の中に、「ちいちゃいちいちゃい村の　ちいちゃいちいちゃいおうちの　ちいちゃいちいちゃいおばあちゃんが　ちいちゃいちいちゃい帽子をかぶって……」というふうに、ティーニータイニーという語がくりかえされていくお話がある。手作りの心を持った小さな塾を創りたいと思っていた宮坂豪利が、その音の響きと意味が面白くて、〈ティーニータイニー〉という名前の学習塾を開いたのである。

塾の庭には分厚い木製の看板が立っていて、子どもたちのはじけるような笑顔が描かれ、〈小さな教室、大きな笑顔〉という文字が彫刻刀で彫り上げられている。玄関を入ると台所部屋で、本棚には絵本と教材が並び、その奥の作業部屋にはキャンプ用品がつめこまれている。教室は庭に面した六畳間二つをつなげた一つだけで、生徒が十人も入ればいっぱいになる。

春、三月の夕方、中学一年生五人と塾長の宮坂豪利が、庭で花の種をまいていると、鋭いブレーキ音と地面を派手に滑らせるタイヤの音をたてて自転車が止まった。

迷彩服を着た少年が自転車にまたがったまま看板を見上げた。

庭にいた塾生の少女マリポンが、「あの人、わたしの学校の生徒よ！」と華やいだ声をあげた。

少年が生徒たちの方を見た。目の鋭い少年だった。少年はひらりと自転車を降りると、音もたてずに自転車を地面に横たえ、大またで庭の中へ入ってきて、豪利の前に立った。

「自分は中一で、植田といいまっす。授業見学をさせてくんさい」

声変わりが終わったばかりの中性的な声だった。

「おお、授業が始まるところだ。入りたまへ」

生徒たちは勢いよく靴を脱いで、ぬれ縁から教室に入り、机を手早くどけて空間を作り、車座になって絵のカードを配りはじめた。

豪利が植田少年に説明した。「授業の初めに英語のカード取りをやるので、机をどけて空間を作ったのだ。この机は生徒たちが、十二ミリの厚さのベニヤ板をノコギリで切ってニスを塗り、スチール製の脚をとりつけたもので、軽くて動かしやすいんだ。絵カードの絵も生徒たちが描いたものでね、僕がその絵に合った英文を読み上げると、生徒たちがカードを取り合うのだ。にぎやかだぞ。きみもいっしょにやってみないか？」

「自分は見学がいいっす」

生徒たちは豪利が読む英文に合わせて勢いよくカードを取りあい、面白そうな絵のカードはかざして少年に見せた。

絵カード取りが終わると、少年は「ありがとざんした」とだけ言って帰っていった。

翌日、植田少年の母親がやってきた。「息子が『本物を見つけた。入塾する。手続きしてくれ』と言いましたのでお願いします」
「おお、植田くんはそう言ったのですか！」
「いつもああいう一言だけなのです」
「彼の雰囲気は中一生ではないですね」
「突っ張って背伸びしているのです」
「背伸びする子は伸びます」
次の中一の授業の日。最初にやってきた細野小夜子が、庭に改造自転車が止めてあるのを目にして教室の中を見ると、植田少年が黒板に向かってスピードのある腕の動きで絵を描いていた。小夜子は続いてやってきた生徒たちに向かって唇に指を当て、みんなで庭から少年の絵を見つめた。ガクランを着て、金髪を逆立て、鋭い目をした少年の絵だった。
最期にやってきたマリポンがキャッと声をたてた。植田少年が絵を消そうとした。
「消すな。勢いのある絵だ」と豪利は言った。
少年は描き終わると、「I am TUPPARI-KUN.」と大きく書き、ぬれ縁から首を突っこんで見ている生徒たちに体を向けた。「オッス、よろしっく！」
「オッス、よろしっく、ツッパリくん！」
「ゴリ先生、ツッパリくんの絵を、カード取りに加えたーい！」
「おお、いいね。植田くん、その絵をこのカードに描いてくれないか？　絵カード取りに加えたい」
豪利は白いカード用紙を少年に渡し、生徒たちには「英文は何てしようか？」と聞いた。
「I am a man. I am strong. I am TUPPARI-KUN！」

2　ちびでぶデップリンの入塾

四月。ティーニータイニー塾の庭の畑で、豪利と中学二年生になった生徒たちが、芽をふいたジャガイモに土寄せをしていると、派手なブレーキ音をたてて自転車がとまった。それと同時に「こんにちは！　お兄ちゃまはこの塾に入っている人ですか？」というかん高い声がした。
生徒たちが垣根越しに見ると、丸々と太って、ほっぺたがぱんぱんに張った色白の男の子二人と母親が、にこにこ顔でツッパリくんの前に立っていた。同じ顔の小、中、大の三人で、同じ柄のセーターを着ていた。
「ぼくは小学三年生の伊藤ヒロキといいます。これは兄と母です。おたずねします。この塾はどんな塾ですか？」
「おまえに似合う塾だぜ」
「感激です！　お兄ちゃまのお名前は何ておっしゃるのですか？」
「ツッパリくんだ」

「すばらしいお名前です！　ぼくは気に入りました」
庭から見ていた生徒たちが笑い声を立てると、ヒロキ少年はにこにこして庭に入ってきた。
「先生でしょうか？　ぼくと兄はこの塾に入りたいです」
「おお、うれしいね」
豪利は親子三人を庭に招き入れた。「きみたちはどうしてこの塾に入りたいのかな？　それを中学生たちに説明できるかな？」
「できますとも！」とヒロキ少年が張り切った。「ぼくはこの塾の子どもたちを、折につけ目にしてきました……」
「折につけだって」と中学生たちが笑った。ヒロキ少年は太った両腕をひろびろと広げ、手首を1くるりとリズムよく返して、「まあ、まあ、まあ、お静かに願います」と制した。「この塾の子どもたちはのびのびしていて、ぼくたちはかねてから興味がありました。それでこの塾に入りたくてやってきました。すると今、かっこいいお兄ちゃまが塾の前に自転車を止めました。ぼくはすぐにお兄ちゃまがこの塾の人だってわかりました」
豪利は、ヒロキ少年の説明を楽しそうに聴いている中学生たちを見ながら、母親に聞いた。「ヒロキくんは丁寧な言葉づかいをしますね。お宅は由緒あるご家系なのですか？」
「ちがいます！　ちがいます！」と兄が笑いながら両腕で大きなバツを作った。「お父さんもお母さんも実家は漁師です。海の男の言葉です。こいつが勝手に変な言葉を創ってるんです」
母親がころころ笑った。「お隣に西洋音楽を楽しみ、お爺ちゃま、お母ちゃま、お兄ちゃまと呼びあうお宅があるんですの。この子は幼児のときからそのお宅の言葉づかいに憧れているんです」
ヒロキ少年はツッパリくんにまんまる笑顔を向けた。「お兄ちゃまはぼくの言葉をどう思いますか？」
ツッパリくんは鋭い目を少年に向けた。「言葉を大事にするヤツはいいぜ。おまえはおれのダチ公だ。おまえに似合った言葉を創れ」
「感激です！　ぼくは今日からお兄ちゃまのダチコウです！　ぼくに似合った言葉を創ります」
四月。弟は英語の低学年クラス、兄は高学年クラスに入った。
ティーニータイニー塾の低学年生の授業は、初めの数分間を豪利が悪役になって子どもたちと戦うことから始まる。女の子もいっしょで、最後は豪利がやっつけられる。
ヒロキは入塾した最初の日から、満面の笑みで豪利に跳びかかってきた。「おっ、重いな」と豪利はずっしりした体を受け止めて、ころりんと転がした。
ヒロキが金色の声で喜んで立ちあがったとき、小二生としては小さい理王が、小三生としては大きすぎるヒロキに向って突撃した。ヒロキはにっこりと受け止め、太った腹を突き出と。理王は吹っ飛んだ。理王は一瞬で顔から足の先までを真っ赤になって立ち上がり、

また突撃し、また吹っ飛んだ。ヒロキは少女たちに向かってもまーるいお腹をポン、ポンとたたき、少女たちは全力でまんまるお腹を押した。

この日を境にして、子どもたちの戦う相手は豪利からヒロキに代わった。戦いが終わると豪利が絵本を読んでやり、そのあとは英語の絵カード取りになった。

豪利は絵カードの中に植田少年が描いてくれた怖い目のツッパリくんの絵を加え、「I am a man. I am strong. おれは男だ、強いんだ。I am Tsuppari-kun.」と読んだ。

ヒロキが興奮した。「みなさん、お聴きください！　このツッパリくんというお兄ちゃまがぼくのことを、『言葉を大事にするヤツはいいぜ。おまえはおれのダチコウだ』って言ったんです！」

「ダチコウって、なあに？」

「あー、わかりません！　先生、ダチコウって、子分という意味でしょうか？」

「おお、きみが大きくなって、その意味に出会うまで待つんだな。うれしい言葉だぞ」

この小低クラスに、小一のルリ子がいた。ルリ子は「のろま」と言われて学校でいじめられ、学校にはちょっと行っただけで休んでいる。

ヒロキが真剣な顔になって質問した。「ルリ子さんがいじめられているなんて、ぼくは許せません。あなたはどんなふうにいじめられているのですか？」

「みんなが冷たい目で見るんだもん」

「みんなはどうして冷たい目で見るんですか？」

ルリ子は説明できなかった。

「それではぼくは質問を変えます。ルリ子さんは、先生が読んだ英語の絵カードが自分の目の前にあると、『これ』ってぼくたちに教えてくれます。どうして自分では取らないのですか？」

これにもルリ子が応えられずにいると、理王が考える顔になって言った。「ルリ子は、人がカードを取って喜ぶのを見るのが、うれしいんじゃないかな」

「そうよ」と小三のリサが受けた。「ルリちゃんはいつもにこにこしてみんなを見ていて、お母さんみたいなんだよ」

「素晴らしいです。僕はその説明に納得しました。ルリ子さん、この塾は子どもがのびのびとしているところです。もうすぐ小学生サマーキャンプです。みなさんと友だちになれます。ルリ子さんも参加して、のびのびしてください」

「あんたも入ったばっかりじゃん」とキララ子がびっくり顔になった。

3　ツッパリくんとチビガキたち

夏休みが近い日、ツッパリくんが顔に青いあざを作って授業にやってきた。

「ケンカしたのか？」と豪利が聞いた。

「そっす。中学野郎がチビガキどもをいじめていたもんすから」
ツッパリくんはそれ以上は話さなかった。
数日後、ツッパリくんがまた血をにじませているのを見て、豪利が誘いをかけた。「この塾の小学生サマーキャンプで、きみ、子どもたちの遊び相手をやってくれないか？」
豪利はこの少年がケンカをするのは、つきあう仲間が同年齢ばかりだからであり、もっとほかの年齢の人たちと付き合ったなら、この少年はものの見方を広げるにちがいない。この塾の野外活動を手伝ってくれているガメラという大学生と出会わせようと思った。
ガメラに豪利は一年前に出会った。豪利がバスに乗っていると、腰の曲がったお婆さんが乗ってきた。一人の若者が「お婆さん、こちらへどうぞ！」と堂々とした声で呼びかけ、お婆さんを支えながら席をゆずった。
若者は双眼鏡を首から吊るし、洗いざらしのシャツとすりへった半ズボンを身に着け、陽に焼け、あごひげをのばしていた。脚は毛むくじゃらだったが、清潔感があった。
若者が薬師池公園バス停で降りたので、豪利も続いた。
薬師池公園は池の周りが樹木で囲まれ、カメラを持った人たちがカワセミを撮りに集まっていた。若者はその群れを通り越して脇の細道に入って行き、双眼鏡で木々を見まわした後、手のひらにエサを置いた。白と黒の小鳥が寄ってきて手のひらに乗った。豪利が興味を持って近づいていくと、若者は人なつっこい笑顔をした。
「シジュウカラです。人をこわがらない鳥です」
若者は東大医学部の渡辺学という学生で、小鳥の観察が趣味で、陽に焼け、脚が太いのはサッカーをやっているからだった。豪利は自己紹介をしたあと、学生に「僕の塾の小学生サマーキャンプで、子どもたちの遊び相手になってくれないか？」と誘った。学生は興味を持ち、小低の子どもたちの動きを表情よく見学した。
夏が来て、小学生サマーキャンプになった。小学生たちはこの渡辺という学生を一目見ると、でっかいメガネのごっつい顔に、「マンガの怪獣ガメラだ！」と大騒ぎをした。
ガメラはガハハハと笑い、子どもたちといっしょに野を走り、川に入り、火をたき、食事を作り、夜は床につくと、すぐに眠ってしまった。豪利は彼が本気で子どもたちと遊ぶ姿が嬉しく、その年の秋の授業から、中三生の数学、理科の学生講師になってもらった。
今年も夏が来て、小学生サマーキャンプの日になった。豪利とガメラが十数人の子どもたちを連れて、道志川のキャンプ場に着くと、派手に改造された自転車があるのをヒロキが見つけて、「もう、ツッパリくんが来ています！」と興奮し、段々畑のようになっているテント場を見上げ、金色の声で「ツッパリくーん！」と叫んだ。みんなで耳をすました。
森閑とした林の高い場所から、「へーい」と声がして、迷彩服、カウボーイハットのツッパリくんが軽やかに下りてきた。
ガメラが大またで近づいていって、「ツッパリくんですね。ぼくはガメラです」と両腕を広げ、ツッパリくんを強く胸に抱いた。
ヒロキが得意になって力いっぱいの声で紹介した。「みなさん、このお兄ちゃまが、英

語のカード取りの絵のツッパリくんです。ぼくに『言葉を創っていくヤツはいいぜ。おまえはおれのダチコウだ』って言ってくれたお兄ちゃまです」
「オッス、ガキンチョども。おいらはツッパリくんだ、よろしっく！　だがヒロキ、おいらをお兄ちゃまと呼ぶのはやめろ」
　小学生サマーキャンプは三泊である。一日目はキャンプ場に泊まるので、坂の上の一番高いテント場に三つのテントを張ることにして、ガメラがツッパリくんに聞いた。「女の子たちのテント張りは、きみが指導してやれるかな？」
「うっす！　へーい、ジャリンコども、こっちへこい！」
　ツッパリくんはボーイスカウトに入っていて、テントの扱いが上手だった。子どもたちはツッパリくんの乱暴な言葉の中で嬉しそうに動いた。
　草原で遊んでいたとき、ヒロキがときどきへんなかっこうをして歩くことに、ツッパリくんが気がついた。
「面白い歩き方するな。なんだ、それ？」
「聞いてくださって感激です！」。ヒロキは丸い体でふにゃーり、ふにゃーりと歩いた。
「これはチャップリンの歩き方です」
「その歩き方、みんなに見せてやれ」
　ヒロキは喜んで、かん高い声で言った。「みなさんはアメリカの喜劇俳優のチャップリンを知っていますか？　チャップリンはやせていますが、ぼくはデブです。デブがチャップリンの真似をします」
　すると小一のルリ子が、「いま、なんて言ったの？　デップリンて言ったの？」とかわいい声で聞いた。
　ヒロキが大きなおなかをポン、ポーンと叩いた。「ぼくは気に入りました！　デップリンという名前を気に入りました。これからはぼくを、デップリンと呼んでください！」
　ぱんぱんに張ったほっぺた、半ズボンの下からドーナツのように丸くはみ出した太ももの肉。骨なし動物のように歩いてみせるデップリンの姿は、こっけいで、かわいくて、たちまち高学年男子たちのおもちゃになった。
　デップリンは相撲を取ると、力だけでは高学年生に負けなかったが、技を使われると簡単に転がされた。デップリンはそのつど不思議な声を出して立ち上がって向かっていったが、そのうちに喜んでいるのか悲鳴を挙げているのかわからない声に変わった。
　すると、「ぼくが戦う」と、体の小さな理王が真剣な顔になって高学年生たちに挑み始めた。高学年生たちは理王には手加減をした。理王がそれを気に入らなくて余計に真剣になるのを見て、ツッパリくんが呼びかけた。「へーい、チビンコ理王、おいらが相手をする。おいらは本気だ。おまえも本気でかかってこい！」
　理王は一瞬で顔を赤くして、右足、左足でツッパリくんに蹴りかかった。ツッパリくんは右、左とかわし、最後に蹴らせてから理王を持ち上げ、理王の頭が地面にぶつからないように草むらにたたきつけた。

子どもたちは水着に着がえ、道志川の水で遊んだ。ガメラには男の子たちがくっつき、背負われたまま水の中をくぐったり、川の中に放り投げられたりした。ツッパリくんの周りには、小五のチャンちゃんをリーダーに、女の子たちが集まって草原の中で跳ねた。

夕食はキャンプ場の炊事場でカレーライスを作った。子どもたちに包丁やナタの使い方、煮炊きは、ガメラとツッパリくんが指導した。

リサがツッパリくんに言った。「ルリちゃんにも火をつけさせてやって。ルリちゃん、学校に行ってないの」

「いじめられてんのか？」

「そうなの。お友だちがいなくって、遊びが覚えられないの。だからティーニー塾でいろいろさせてあげたいの」

「そっか。ルリ子、火をつけてみっか？」

夕食が終わるとうす暗くなりかけていた。ツッパリくんが花火で子どもたちと遊んでいると、目の下のテント場で大騒ぎをしているグループがあった。ツッパリくんは子どもたちを集めて肩を組み、何事かをひそひそと話した。

子どもたちが「わぁっ！」と声をあげた。ツッパリくんが唇に指を当てると、子どもたちも唇に指を当てた。ツッパリくんが怪しい格好をして身をかがめると、子どもたちも怪しい格好をして身をかがめた。

ツッパリくんはロケット花火を目の下のグループに向け、火を点けた。花火が火を吹いて飛んでいった。

「伏せろ！」

子どもたちがいっせいに伏せた。同じことを三回もやった。

デップリンの腰がぬけ、這ってやってきて、豪利の太ももの上にうつ伏せになった。

「先生、ぼく、死にそうです」

デップリンの心臓のドッキンドッキンが、豪利の太ももに伝わってきた。

「びっくりしたか？　怒鳴りこまれたら俺が謝るからな」と豪利はデップリンのイガグリ頭をなでてやった。小五のアズミも緊張した顔で、デップリンの背中をさすってやった。

「アズミもびっくりしたのかな？　だが花火はあの人たちの所までは届いていないよ」

豪利はガメラに頼んだ。「子どもたちが興奮している。みんなをムササビを観察に連れて行って、落ち着かせてやってくれ」

ガメラは一本の大きな木を見上げる所に子どもたちを連れて行った。

「この木にね、ムササビというリスの一種が巣を作っているんだ。ムササビは前足と後ろ足が膜でつながっていて、空を飛ぶんだ。今頃の時間に飛ぶ姿が見られるから、静かに待っていよう」

空にはこうこうと月が輝いていた。

「ほら、ムササビが巣穴から出てきた。目が光っている……飛ぶよ」

月光の中を、ムササビがすーっと舞った。

4　チビガキたちの劇あそび「桃太郎」

十二月。英語劇の練習が始まった。ティーニータイニー塾では毎年三月に、幼児クラスから中三クラスまでが集まって、英語劇の発表をおこなう。

子どもは劇あそびが好きだ。豪利も劇では子どもをほめてやることがいっぱいできるから、劇あそびを大切にしている。「大きい声を出して」と言ってもできなければ、豪利がやってみせると子どもはできるようになる。少しでもよくなれば、「おっ、よくなった」と言ってやれる。「言い方がおもしろい」「腕の振り方がかっこいい」「歩き方にリズムがある」など、ほめることはいくらでも見つけられる。子どもはほめられると、やる気を出して目に見える成長をする。それを見て他の子どもたちも刺激を受ける。

子どもたちのやりたい劇が決まると、練習をしながら日本語でセリフを創り、そのセリフを豪利が英語になおして録音し、子どもたちはそれを家で聴いて覚える。小学生の英語クラスは週一回一時間だが、三か月もあれば、英語劇の完成度は日本語劇と変わらない。

小低クラスは三年生のデップリン、キララ子、リサ、二年生の理王、一年生のルリ子の五人である。子どもたちは「桃太郎をやりたい」と言った。

「鬼と戦うところがあるの？」

「戦いたければ創ればいいさ」

「戦いたーい！」

デップリンとルリ子は今年の春に入塾したばかりだから、英語劇は初めてある。

「ぼくは英語の歌を歌えます」とデップリンが誇らし気に言った。

「おお、歌ってみせてくれ」

「いいですとも！　みなさん、聴いてください」

デップリンはにっこりにっこり、オー・ソレ・ミオを歌った。

「きみの声にはお日さまがさんさんと射しているな。どうやってこの歌を覚えたのだ？」

「隣の家のお爺ちゃまが、いつもこのレコードをかけていて、それで自然に覚えました」

「おお、そうか、これはイタリア語の歌だが、きみは聴いているだけで覚えてしまったのか！　きみは英語劇のセリフも見事に表現できるぞ」

「それでしたら、ぼくに桃太郎をやらせてください！」

「おお、やってみろ！」

デップリンが桃太郎役に決まって、次にだれがどの役をやるかを決めた。犬の役は理王、サルはリサ、キジはキララ子、川で桃をひろうおばあさん役はルリ子になった。

リサが言った。「お婆さん役は桃をひろうところしか出ないんでしょう？　ルリちゃんをもっと出してあげたいな」

「どうしてかな？」

「ルリちゃん、学校を休んでいて、お友だちと遊べないから、ティーニー塾でいろいろさせてあげたいの」
「おお、いいね……ルリちゃん、きみは劇にもっとたくさん出たいかな？」
ルリ子はリサを見上げたまま首をかしげた。
「リサを見ないで言おうね。ルリちゃんは、劇にもっといっぱい出たいですか？」
ルリ子がこっくりした。
「よーし、ではお婆さんが活躍できる場面を、みんなで考えてみよう」
お婆さんが川で桃をひろう場面から劇の練習を始めた。ルリ子がお婆さん役になって、ちょこちょこと歩いた。ルリ子にはふんわりと咲く花の雰囲気がある。
「かわいいお婆ちゃん！」
「元気な女の子みたい！」
「おお、そうだね……お婆さんを村の女の子に変えた方がルリちゃんに似合うね」
「桃太郎はどうして鬼が島に鬼退治に行くのですか？」とデップリン。
「鬼たちが村をおそって、食べ物をとっちゃうからだよ」とキララ子。
「それだったら、村の女の子が鬼にさらわれることにしたい。その女の子を桃太郎が助けに行く。女の子の場面を創れる」と理王。
「そうしたら動物たちが鬼と戦える！　ツッパリくんに鬼、やってもらいたーい！」
「あっはー、きみたちはツッパリくんと戦いたいんだな。うん、ルリちゃんが出る場面もふえる。よーし、きみたちのアイディアでいこう。ルリちゃん、ティーニー塾の劇では、桃の実とか包丁とかの道具は使わないで、手振りと身振りだけでやるからね。ではルリちゃん、村の女の子になって出てきて、桃をひろうところからやってみよう。いいかな……ほら、桃がどんぶらこ、どんぶらこ、って流れてきたよ」
ルリ子は突っ立ったまま、腕をほんの少しだけ動かして桃をひろうかっこうをした。
「おっ、ルリちゃん、腕が動いたね、いいぞ！　では、みんな、ルリちゃんが元気な女の子らしくするのには、どうしたらいいか考えてくれるかな」
「女の子が川岸でスキップして遊ぶ」
キララ子がスキップをやってみせると、ルリ子が真似をした。
「ルリ子さん、スキップが上手です！」とデップリン。「あなたはのろまではありません！」
「そうとも、ルリちゃんはのろまではないぞ！　ではルリちゃん、スキップの後、女の子は何をしたらいいかな？……ほら、いま、川に水が流れているよ……ルリちゃんは何をしたくなるかな？……ルリちゃんはサマーキャンプで、川の中に入って楽しそうだったね。どうして楽しかったのかな？」
「お水が気持ちよかったの」
「おお、いいね！　では、『お水が気持ちいい』って思って、川の中で遊んでごらん」
ルリ子は足先で水と遊ぶようにして歩いた。「気持ちよさそう！」とリサ。

「おやおや、桃が流れてきたぞ！」
「わたしが桃になる！　ルリちゃん、『あっ、桃！』って言ってひろって！」とキララ子。
キララ子が桃になってくるくる回る。ルリ子が「あっ、桃！」と指でさす。キララ子がルリ子に近づき、誘うように手を伸ばす。ルリ子がその手を取った。
「おっ、女の子は桃を手に取って何て言うかな？」
「おいしそう、って言って桃を切る！」
「ぼくに桃をやらせてください！　ぼくが桃太郎です！」
デップリンが桃の実になって、太った体を丸くして、「デップリコン、デップリコン」と流れていってルリ子にひろわれ、ルリ子は包丁になった腕を、女の子らしく振り下ろした。桃が割れて、デップリンはぴょっこんと体を起こし、ほほに指をあて、「やあ、こんにちは、ぼくは今、生まれました！」と首を傾けた。ルリ子がキャッと笑った。
次の週は犬、サル、キジの場面に進み、理王、リサ、キララ子が最初は日本語でやってみたが、三人ともすっきりしない顔になっていた。
「面白くないのかな？」と豪利が聞いた。「どうして面白くないんだい？」
「三匹とも『キビ団子ください』って言って、桃太郎について歩くだけだもん」
「うん、そうか……では面白いと思うようにやってみよう。理王、イヌは何をしたい？」
「戦いたい」
「あっはー、デップリンとだな？　ではイヌはどうやって桃太郎と戦うのかな？」
理王はぱっとぬれ縁から庭に飛び降り、はだしで一周して、床の上にすべりこんだ。
「ぼく、イノシシになって桃太郎に突撃する！」
「おお、いいね！　カード取りに、理王が描いた金色のキバ持ちイノシシの絵があるものな。でも大きな金色のキバだぞ。戦ったら、桃太郎がけがしちゃうんじゃないのか？」
理王はまた飛び出し、今度はお爺さんみたいに腰に手を当て、ゆっくりゆっくり歩いて戻ってきて、デップリンの大きな背中に自分の太ももを押し当てて寄りかかった。
「イノシシのキバが折れて、桃太郎に助けてもらう」
「おおっ、おもしろい！　だがどうしてキバが折れてしまったのだい？……どうやって桃太郎に助けてもらうのだい？……そのあとはどんなふうにキビ団子をもらうのかな？」
みんなで考え、考えた。
「イノシシがキバをきたえたくって、木の幹に突進する」
「キバが幹に突き刺さって、ぬけなくなる」
「桃太郎がやってきて、イノシシをかかえて引きぬく」
「キバが折れる。イノシシが痛がる」
「桃太郎がキビ団子をあげる。イノシシが食べる。新しいキバがはえる」
豪利の問いかけに、そのあとの場面も子どもたちが考え考えた。サルの役はタヌキに変わり、キジの役はツルに変わった。
こうして週一回の劇あそびが続いていき、英語劇発表会の前の週には、ツッパリくんた

ち中二生がやってきて鬼の役になり、戦う場面も完成した。

5　「デップリンくん、きみはこよなく豊かな少年だ！」

三月、英語劇の発表会の日が来た。

ティーニータイニーは生徒数四十人ほどの塾だが、藤の台団地の小さなホールは、生徒と親たちでいっぱいになった。会場の準備や案内、プログラムの進行は高校生がやった。

幼児クラスの「三びきのやぎのがらがらどん」の元気いっぱいの姿に、客席の生徒や親たちが喜んだ後、小低クラスの「桃太郎」の発表になった。

カーテンを閉めた舞台の上で、豪利が桃太郎劇の子どもたちに言った。「このカーテンが開くと、僕が音楽を流すから、ルリちゃんはスキップしながら舞台を一周して立ち止まって、客席の方を見るんだよ。客席が川だからね。デップリンが桃になって客席の間を舞台の方へ流れてくるから、ルリちゃんは桃をひろうんだね。じゃあ、始めまーす」

カーテンが開いた。音楽が流れ、ルリ子がリズムよくスキップで登場して一周し、正面を向いて立ち止まった。するとルリ子の表情がかたくなった。

桃の実になって、客席から得意のふにゃーり歩きで舞台に近づいていたデップリンが、ルリ子の様子に気がついて、「ルリ子さん、『あっ、桃』と言って、ぼくを指すんです」と小さく声をかけた。だがルリ子はかたい表情のままだった。

するとデップリンは大きな声になって、「ルリ子さん、『あっ、桃』って言ってください」と指示を出したが、やはりルリ子は動かなかった。豪利はこの少年がこの場面をどうするのか見たいと思った。

デップリンは舞台下に駆け寄り、今度は両腕を大きく広げて客席を指した。「ルリ子さん、ここはティーニータイニー塾です。あなたにいじわるする人は一人もいません。ほら、ごらんなさい。みんなニコニコしています」

デップリンが舞台に駆け上がり、体の小さなルリ子の手を取った。「ほら、ごらんなさい、みんながルリ子さんに手を振っています。みなさん、お聞きください」

デップリンは真剣な表情で言った。「ルリ子さんは学校を休んでいます。同級生たちがのろまと言って、遊んでくれないからです。でもルリ子さんはのろまではありません。夏のキャンプでは元気に跳ね回っていました。ルリ子さんがのろまに見えるのは人と競争しないからです。そういうルリ子さんのことを、この理王は、『ルリ子は人が喜んでいるのを見ているのが好きなんだ』と言い、この女性、リサさんは、「ルリちゃんはお母さんみたいに優しい気持ちでみんなを見ているんだよ』って言います。そんなルリ子さんを、ぼくたちはこよなく愛しています」

「ブラボー！」と叫んで一人のお爺ちゃんが立ち上がった。「デップリンくん、きみはこよなく豊かな少年だ！　ここにいる親たちは今、きみをこよなく愛している。感謝する、デップリンくん！」

猛烈な拍手が起こった。豪利も舞台に上がり、ルリ子の手を取り、デップリンを抱きしめた。「僕が言うべきことを、この小学三年生が説明してくれました。ご家庭でお子さんたちからデップリンという名前を聞いていると思いますが、この少年が年上からも年下からもこよなく愛されているデップリンです。キララ子のお爺ちゃん、『ブラボー！』をありがとうございます……では、ちょうど良い機会です。このクラスの雰囲気を味わっていただきましょう。鬼の役の中二生たちと、夏の小学生キャンプで子どもたちの人気者になった大学生のガメラ、舞台に上がって、この子たちといっしょに『桃太郎』を歌って行進してくれ。キララ子がリードだ」

中二生たちがさっと舞台に上がった。にツッパリくんがデップリンの背中をぽんぽんとたたき、小夜子がルリ子と手をつなぎ、ガメラが理王を肩車した。客席全員が「もーもたろさん　もーもたろさん　おこしにつけた　きびだんご」と歌い、キララ子を先頭に、ルリ子と小夜子、リサ、ガメラ、理王、デップリン、ツッパリくん、中二生たちがつながって舞台の上を回った。

「オーケー、ありがとう。席に戻ってくれ。では英語劇、『桃太郎』の発表を始めまーす」

舞台の上から人がひき、静かな空間ができた。

翌日、ティーニータイニー塾に小一の宮本ルリ子と母親がいた。

「デップリンくんは、素敵な坊ちゃんですね。ルリ子がよくデップリンと言うものですから、どんなお子さんかと昨日は楽しみ劇を観に行きました」

「たいした子です。思ったことを言うし愛嬌もあるから、みんなに信頼されているんです」

そう言ってから豪利はルリ子に聞いた。「劇をやり直してからのルリちゃんは、とっても生き生きとした村の女の子になったけど、どうしてあんなふうに変われたんだい？」

「ルリ子をみんなが優しい目で見てたからだよ」

「うん、そうだったよね。それはルリちゃんを見ていると、みんなの心がぽかぽかするからだよ。学校にだって、ルリちゃんを好きになる子がいっぱいいるはずだよ」

「ルリ子、学校、行かない」

「ありゃ、そうか……」

「先生、この子はこちらの塾と、市の「図書館へ行くこととで満足しているのです。わたしも泣く子の手を引っぱって学校へ行かせることはやめにしました。毎日つらい思いをするために学校へ行くなんて、子どもの成長には良くないって思ったからです。ティーニー塾は週一回ですが、ルリ子にはこちらへ来ることで週三日くらい楽しんでいます」

「ルリ子、毎日楽しんでるよ。ティーニー塾のこと毎日思ってる。妹、かわいいし。ママ、温かい。パパはおひざの中にルリ子と妹をだっこしてくれる。パパのおひざ、大きな池みたいだよ」

「おお、そうか、ルリちゃんは池の中で揺られている小舟になってるんだね……うん、ルリちゃんには〈すてきなお家〉という場所がある。学校には行かなくていい」

「ほんと、先生？　ルリ子、学校に行かなくていい？」
「うん、いい。学校は悲しくなりに行く所じゃない。それでルリちゃん、四月から、リサ、キララ子、デップリン、理王が高学年生クラスに移ってしまうんだ。だけど低学年クラスには新しく三人が入ってきてね、一人は桃香という女の子だ。桃香は桃太郎の劇で鬼の役をやってくれた小夜子という中二のお姉ちゃんの妹だよ」
「そのお姉ちゃん、劇の練習のとき、ルリ子のこと、だっこしてくれたよ」
「うん、そうだったね。桃香はのんびりしていて楽しいよ。町田市のはずれに住んでいて、バスで町田駅まで来て、駅からここまでは歩くんだって。途中にお父さんの仕事場があるから、その前を通りたいんだって」
「ルリ子、仲よくする」
「うん、良いお友だちになれるね。さて、お母さん、ご相談とは不登校の子どもたちの活動についてですか？」
「はい。私はルリ子が不登校になるなんて思ってもいなかったものですから、心の準備ができていなくて、おろおろしていたんですが、昨日の英語劇発表会で、子どもたちの生き生きした演技を観て、学校に行かない子たちには、劇を楽しませるのがいいんじゃないかって思ったのです。イノシシ、サル、ツルは子どもたちが考えたのですか？」
「みんなで、あーだこーだとやっているうちに、ああなったのです」
「くわしくおうかがいできますか？」
「はい、子どもたちの面白くなさそうな顔に、僕が気がついたことから始まったのです。最初は昔話にあるように、イヌ、サル、キジで劇の練習に入ったのですが、子どもたちがちょっとつまらなそうだったので、僕が『面白くないのか？』と聞いたら、『言葉も動きも同じでつまらない』ってわけです。もちろんこんな言葉がすぐに出たのではありません。僕が子どもたちの様子を見ながら問いかけていく中で、そういう言葉になったのです。次に僕が『じゃあ、どうやったら面白く遊べそうかな？』と問いかけたら、小三のデップリンが、『リサさんのような上品な女性が、サルになって鬼たちを爪でひっかくなんて似合いません』てね。するとキララ子も『サルを他の動物に変えたい』って言い、『ではどんな動物がいいかな？』となったのですが、面白いストーリーは浮かびませんでした。次の週になって僕が『リサの得意なことは何かな？』と聞いたら、ルリちゃんが『木琴だよ』と言ったものですから、デップリンが自分のお腹をポンポンポンとたたき、それを見た理王が、『大きいおなか、タヌキのおなか』って触ったんです。その言葉で、僕の頭の中で、リサのくりくり目玉がまんがのタヌキの目玉と重なって、童謡の『しょ、しょ、証城寺、証城寺の庭は』が浮かんで、『月夜の晩に、タヌキが浮かれて踊って、おなかのタイコを叩きすぎ、おなかの皮を破いてしまった』と言ったら、子どもたちが『桃太郎がキビ団子でなおしてやる』と反応して、サルがタヌキに変わったのです。ツルはキララ子の希望です。夏のキャンプで、草の緑の中で遊んでいるキララ子の姿を見たツッパリくんが、『白いツルみたいだ』と言ったことからです。そして『ツルは猟師に矢で撃たれて横たわって

いるところを、桃太郎のキビ団子を食べて傷がなおる』となりました。桃太郎たちと鬼たちが戦う場面は、『鬼が島が高い城壁で囲まれていたので、桃太郎とイノシシが突進して城壁を壊す。鬼たちが金棒を持って襲いかかる。ツルが空から降りてきてツルの舞をやる。鬼たちが見とれる。タヌキがお腹のタイコを叩く。鬼たちも桃太郎たちも浮かれて踊り出す。仲良くなる。鬼たちは桃太郎や村の女の子から作物を作ることを教わり、村を襲うことをやめる』となったのです。僕が子どもたちのつまらなそうな気持ちに気がつかなければ、子どもたちは言われたままを真面目にやりますが、発展性は乏しいでしょうね。子どもの気持ちに気がつき、問いかける、そうするとだれかが応える、まただれかがそれに反応し、みんなが反応していく。子どもを楽しませようとして問いかけたという単純なことがふくらんだのです」

6　ツッパリくんの目

ツッパリくんが中学三年生になって間もない数学の授業のときだった。とつぜんツッパリくんが机を激しく叩いて、「なんでおいらには数学がわからねぇんだよ！」とわめいて机につっぷしたのだ。数学の大学生講師のヒューモくんと生徒たちが息をつめて見ていると、ツッパリくんは起きあがり、黙って教室を出ていった。

ヒューモくんは今年から中三生に数学、理科を教えている大学生である。ガメラがこの三月に大学を卒業し、ティニータイニー塾の学生講師を終わるので、医学部の後輩の杉浦紳之という学生を、自分の後任の講師として連れてきたのである。

彼の最初の日の授業が終わったとき、細野小夜子がみんなに言った。

「杉浦先生に、ニックネームをつけない？」

「ユーモアがあるから、ユーモアくんとかにしたらどうかね？」

「ヒューマニズムを感じるぜ」

「それなら、ヒューモくんがいい！　杉浦先生、その呼び方、気に入る？」

穏やかで品のよい学生はニコッと笑って、指でピースのサインを出した。

そういうヒューモくんの教え方はわかりやすかったから、今のツッパリくんの激しい態度に生徒たちはとまどった。

翌日、ツッパリくんの母親が豪利を訪ねてきた。「息子は帰ってくると、『数学がわからない』って大泣きしたのです。わたしは言葉を見つけられませんでした。あの子は仲間とつるんで歩いたりしませんが、ケンカはまだやっています。どうしたらいいでしょうか？」

「ツッパリくんがよそのお子さんだったら、あなたは彼をどう思いますか？」

母親はパッと手のひらで顔をおおった。手をはずしたときには輝く表情になっていた。

次の授業のとき、ツッパリくんがみんなに謝った。「でっかい声出して、悪かったす。数学がわからなくて情けなかったんす。むしゃくしゃしてることもあったもんすから」

ヒューモくんは「数学は基礎をていねいにやって、理解し納得することから始まるよ」

と言って、自分の子ども時代の話をしてくれた。
「ぼくは長いあいだ入院していて、病院のベッドの上で一人で勉強していたんだ。学校の教科書というのは、基礎的なことがていねいに書かれているから、ぼくは教科書をしっかりやり、その上で問題集を基礎問題からやった。そうすると難問も解けるようになっていった。ツッパリは基礎勉強をていねいにやったら、数学が見えてくる人だと思う。ツッパリがみんなと喋っているのを聴いていると、ツッパリにはイメージ力があることを感じる。そういう人は、数学でも問題をイメージして遊ぶことができるんじゃないかな。解けた解けないよりも、問題と遊んだらどうだろうか。それで今思ったんだけど、間もなく始まる夏期講習では、ぼくは数学と遊ぶ問題を創ってみようと思う.」
豪利がツッパリくんに聞いた。「きみはむしゃくしゃしていることがあったと言ったが、ケンカをしたのか？」
「そうっす。自分はケンカする気がねえのに、相手ににらまれるんす」
「きみは肩で風を切って、強そうに歩いたりはしないよな？」
「しないっす。自分の目つきが悪いんす」
「それは違うね」と、ヒューモくんがやわらかな表情でツッパリくんを見つめた。「きみは深い目をしているよ」
「深い目？……自分の目がですか？」
「そう。深くって、優しい目だよ」
「おおっ」と豪利が声を出した。「そうか、子どもたちがツッパリを好きになるのは、その目なのか……うん、だがきみは相手からにらまれたら、にらみ返すのか？　『おれは男だ、強いんだ。おれはツッパリくんだ』ってやってるのか？」
「へい、まだガキなんす。だがそんなかっこをつけるのがめんどうになってきてるんす」
「そうか……ツッパリの目を好きな子たちがいる。同じ目にケンカを売る子もいる」
「自分の心の持ち方ってこってすか？」
「なあ、ツッパリ、合氣道を学んでみないか？　合氣道は人を優しく見つめる武道だ。何よりも、自分を優しく見つめられるようになる武道だ」
次の日、ツッパリくんは合氣道の道場を見学し、入会した。ツッパリくんの豪利への報告は一言だけだった。「合氣道には、人間にとっての真実があります」
数日後、ヒューモくんが中一、中二の復習問題を、図形問題、計算問題に分けて創ってきて、二時間にわたってテストをした。
ツッパリくんがまた大声をあげた。「なんちゅうこったい、この問題は！」
生徒たちはぎょっとしたが、そのあとにツッパリくんのつぶやきがあった。「この問題の創り方には、学ぶ者への愛情がある」
ヒューモくんが、「わが意を得たり」という表情をした。少ししてからまたツッパリくんが、今度はおだやかな声で聞いた。「この問題はヒューモくんが創ったんすか？」
ヒューモくんは指をピースの形にして、胸を張った。女の子たちがキャッと声をあげた。

「だめーっ、テスト中にそんなことやったら、手が笑って字が書けないじゃん！」
生徒たちが帰ると豪利がヒューモくんに聞いた。「ツッパリの言葉をどう思ったかな？」
「あれ以上の光栄はないです。ツッパリからは国語力の高さを感じていましたから、数学もできるはずだと思って、彼を念頭において問題を創ったのです」

7　ツッパリくんたちの高校受験

中三生の夏期講習第一日目の朝、マリポンが質問した。
「先生、天然まぬけのマリポンには都立高校はむり？」
「むりじゃないさ。五科目合計で、あと百点上げればいいんだ。マリポンならできる」
「えっ、ほんと！　入試まで半年しかないんだよ」
「半年もある。マリポンはなぜ都立高校に行きたいんだ？」
「お母さんが一人で子ども育ててきて、うち、お金ないから」
「それだけか？」
「それだけじゃなーい。天然まぬけの湯原マリエが、五科目に挑戦したくなったの！　でもさあ、勉強って、おもしろいん？　マリポンは北とか南とかってわかんないんだよ」
「じゃあ、マリポン、太陽の出る方はどっちだ？」
「こっち！　お日さまが『おはよう』って言う方」
「そうだ。毎朝マリポンがお日さまに挨拶を返す方、つまり体の前の方が東、背中の方が西だ。右と左はわかるか？」
「わかる！　こっちが左！　わたし、左ききだもん」
「うん、そのまま両腕を広げてごらん。左腕のある方が北だよ」
「じゃあ、右腕が南！　わかった！　わたしの家が薬師池公園の南側って意味がわかった！　わたしはもう、天然まぬけじゃなーい！」
「その天然まぬけって、だれがつけたんだ？」
「自分がつけた！　わたし、勉強できないもん」
「マリポンはまぬけなんかじゃないぞ。きみは遊ぶときには目がいっぱいに開いて、頭が働いて、工夫ができる。体はまりのようにポンポンはずむ。マリポンの気持ちが勉強に向かう時が来たら、きみは勉強でも伸びるぞ」
「ヤッターッ！　マリポン、勉強する！　子ども相手の仕事する人になりたい！」
「それ聴いて、わたしも嬉しい！」と細野小夜子が喜んだ。「あんたは子どもが好き、子どももあんたを好き。あんたは自分が見えてきた。わたしも自分が見えかかってる。ゴリ先生、わたしの体の中にはいつも音があるんです、メロディーというよりも、何か土っぽい音なんです。それが何か知りたいです。町田高校に入って、吹奏楽をやります」
「おお、楽器を演奏しているときの小夜子には、自分の奏でた音の行方を追っている雰囲

気がある……吹奏楽、やってみろ……熊谷奈緒美、きみは花に心を寄せているんだよな？」
「野の花にです。わたしは花好きですが、自分が花好きだって知ったのは、ゴリ先生からマンジュシャゲの短歌を聞いた時からです。昨年、わたしが土手に咲くヒガンバナを摘んで持って来たら、先生はマンジュシャゲ　咲く野の日暮れは　なにかなしに　キツネが出ると思う　大人の今も』という歌を教えてくれました。その歌でわたしの目の前に、花が咲く野原の夕景色が広がって、キツネが見えたのです。わたしは園芸高校に行きます」
「先生、ぼくは中学校卒業したら料理人に弟子入りしようって思ってるんだけど、親は高校を出てからにしなさいって言ってるんです」と神谷正人が言った。
　村上洋も「ぼくもそう。ぼくは鍼灸マッサージの高校へ行きたいけど、親からは普通高校で学んでから、鍼灸の道へ入れって言われているんです」
「おお、神谷も村上も同じ悩みか……手に技術を持ちたいと言うのは俺も賛成だが、問題は、中学を卒業してすぐにその世界に入って行くことがどうかということなんだな？　きみたちはどうしてその道に進みたいんだ？」
「ぼくは小さい頃から料理が好きで、親が料理を作るのをよく見てきました。昨年のティーニー塾の夏合宿で、ぼくの料理班は中二のぼくがリーダーになって食事作りをやり、みんなにほめてもらいました。それでぼくは料理人になろうと思いました。だけど中三生にやらせる班リーダーを、先生はどうして中二のぼくにやらせてくれたのですか？」
「おお、ちゃんとした理由がある。一昨年の合宿で、高校生たちが、『中一の神谷は料理を作っている時の表情が良い』って言ったんだ。それで俺がきみを見たら、きみは嬉しそうに料理を作っていたんだ。それから一年間きみを見てきて、（神谷には対話力がある。リーダーをさせたら、対話を通して神谷らしい発見をする可能性がある）と思って、昨年の合宿で食事当番のリーダーをさせたんだ。そうしたら対話の向こうに、イメージを描いている表情が見えたんだ。きみは料理を創っている時は何を思っているんだい？」
「ぼくの料理がその人の力になることを期待して創っています。ぼくはいつか料理店を持ちます」
　ツッパリくんが言った。「神谷が料理店を出す日が来たら、おいらが最初の客だぜ」
「おお、良い励ましの言葉だ。神谷、良い料理人になれよ……村上、きみは走るのが特別速いが、アスリートではなく、鍼灸師になりたいとはなぜだ？」
「ぼくは中一の時に全国大会に出たくって練習やりすぎて、腰を痛めてしまい、なかなか治らなかった時に、鍼灸の医者を紹介されて、それでよくなったんです。鍼灸の医者はぼくの体を丁寧に触ってくれました。今、ゴリ先生は対話と言う言葉を言いましたが、鍼灸の先生はぼくの体と対話してくれました。それでぼくは人の体と対話して直す人になりたいと思ったんです」
「おお、神谷も村上も自分の生き方を感じ取ってるんだ。うん、その道を目指したらいい……ただ、中学を卒業してすぐにその道に入ってしまうのはどうなのかな？……俺も一時期、手作業の技術を売りにする多店舗経営の会社に入ったんだ。俺に手作業の技術はなか

ったが、営業面に向いていたから、幾つかの店の店長をやって、何人もの職人さんを部下に持った。そういう職人たちの中には素晴らしい技術を持っていながら、人とうまくやれなかったり、対話を嫌がって、せっかくの技術を人に伝えられない人もいた。神谷も村上も一流の職人になるだろうが、何よりも対話ができるから、指導者になってほしい。いろいろの人と出会い、対話力を深めるためには、高校は行った方がいいんじゃないのかなぁ」

関口門太は都立町田高校を受験すると言った。「門太の親は、国立大学付属高校に進めと言っているぞ」

「それについてはもう親と話がついています。ぼくは友だち作りが下手なので、地元の高校で部活をやり、友だちをたくさん作ることを目的の高校生活を送ります」

「おお、俺もそれに賛成する。ところで門太、きみは発言を求められれば、自分の考えを表現して、その内容も良い。だが求められないと黙っているから、きみの良さが人に伝わりにくい。なぜ表現しないんだ？」

「ぼくは失敗が……」

「うん、そうか……だが、きみは失敗したとしても、それを乗り越える力を持っている。俺がこの塾を開いたとき、小学生のきみはそのチラシを持って一人で訪ねてきて、俺にいろいろ質問したんだ。きみにはそういう積極性がある。それを表に出せ。出せば出会いがある。失敗もできる。失敗は〈なぜ？〉を考えるから学びがある。門太は忍耐強く学んで、実を結ばせることができる人間だよ」

ツッパリくんは昨年できたばかりの都立薬師高校に行くと決めていた。「自分は歴史のない学校で、自分に何ができるかをやってみたいんす」

夏期講習が始まった。豪利は全員に同じことを学ばせるというやり方をとらず、学力に応じてコース分けをした。英語、国語、社会科の教材は豪利が創り、数学は「この問題作りには学ぶ者への愛情がある」とツッパリくんに言われたヒューモくんが創った。

問題集は易しい問題から高度な問題まで四つのコースに分かれていて、生徒は自分でコースを選ぶ。基礎ができていない生徒は「手を貸してくださいコース」、基礎を確認しながら足元をしっかり見つめて歩く「ハイキングコース」、高い所まで登って、行き先を眺める「見晴らしコース」、そして遥かな高度で遊ぶ「宇宙遊泳コース」に分かれている。

マリポンは英語も数学も「手を貸してくださいコース」を希望し、授業は好奇心の強いマリポンを刺激するような方法をとった。理科と歴史と地理については、門太、小夜子、ツッパリくんに、「マリポンが面白がる講義をしてくれ」と、それぞれに二回ずつ講義をさせた。三人は張り切り、マリポンが「わかった！　できた！　おもしろーい！」と叫ぶにぎやかな夏期講習になった。

半年後、それぞれが志望高校に合格した。マリポンは五科目総合成績で、夏より百三十点ほど伸びていた。

8　ツッパリくんたちが高校生クラスを作ってしまう

四月。高校生になったツッパリくん、門太、小夜子が豪利に会いに来た。
「高校生クラスを作ってくれだって？……どういうことだ？」
「先月のスキー教室でチビガキたちに求められたんです。『中三が終わったら、ティーニータイニー塾を卒業なんて、許せない』って」
「愛の心を伝え続けてほしいって言われたんす」
「愛の心？……そんな言葉を創るのはデップリンだな？」
「理王もキララ子もです」
「ちょっと待て。俺は高校生を教える知識なんてない。大学受験指導なんてとんでもない」
「そんなのはやらなくていいです」
「質問されたときに答えてくだされば、いいです」
「おいらたちはゴリ先生独自の考え方や知恵に触れたいんでっせ」
こうしてツッパリくん、門太、小夜子は週二回、中一生の授業が終わった後の夜九時にやってきて、トランプやお喋りを楽しんだり、お互いの高校生活の様子を語り合ったりした。ツッパリくんは新設の高校で野外活動部を創り、門太は町田高校の演劇部、小夜子は吹奏楽部に入った。
だが豪利の気持ちはあいまいだった。「こんなに遅い時間にやって来て、しかも喋ってばかりいる。それでいいのか？　きみたちは大学受験があるのだろう？」
「受験の心配はいらねえ。ゴリ先生にはよ、教科の勉強じゃないことをしゃべってほしいんだ。おいらたちガキは、そこから『大人ってそう考えるのか』って学ぶんでっせ」
「『自分の言葉を持って、自分の足で歩く人間になれ』と言ってるのはゴリ先生です」
「ねえ、ツッパリくん、門太、ティーニー塾の原点はカード取りじゃん。そこからエネルギーが出てくるじゃん。高校クラスも英語のカード取りをやろうよ！」
「それだよ！」と三人は意思表現や人との交わりに必要な英文を選び出し、カードの絵は小学生、中学生たちにも描いてもらうことにした。
高校生たちが絵カード作りを楽しんでいたある日、豪利が門太に問いかけた。「門太、どうした？　何か考え事をしている顔だな？」
「ほーら、門太、言われちゃった。あんた、田沢の言葉なんかに悩んでないで、ゴリ先生に相談しなさいよ」
門太は松葉杖をついていた。
「ぼくは『自己責任をとれ』ってやじられたんです」
高校の文化祭で、門太のクラスは劇発表をすることになり、門太と田沢が主役に立候補し、門太が大差で選ばれた。
「門太の立候補演説には信頼感がありました。それにふだん田沢が女子を見る目は侮蔑的で、あんな奴に女子は手を挙げません」

ところが劇の稽古が始まって間もなく、門太は足を捻挫し、松葉杖を使うことになってしまった。門太が田沢に主役を代わってほしいと言ったところ、「自己責任だ。自分でやれ」と冷ややかに断られ、門太は稽古を続けたが、体が動かず、もう一度田沢に交代を頼んだが、「松葉杖をつきながらやれ！」とやじられたのだ。

それを聴いてツッパリくんが平然と言った。「松葉杖とはいいぜ」

「うん、面白い。松葉杖を演技の道具として使え。田沢とは正面から向き合え。たぶん田沢は逃げる。自己責任なんて言って人を責めるような者は、いざとなったら逃げだす奴だ」

一か月後の文化祭で門太の松葉杖は、元の台本の真面目な登場人物を、ユーモアのある人物にふくらませていた。

夏が来た。ティーニータイニー塾中学生の「人と触れ合う遊びの夏合宿」に、この三人の高校生も参加したいと望んだので、豪利はその気持ちを受け入れた。

三人は中三生たちのリーダーぶりには口を出さず、自分たちも生徒の一人になって働いた。だが遊びになると、三人は大学生のヒューモくんに負けない爆発的なエネルギーを発揮し、小夜子は「あねご」と呼ばれる女親分になった。

この年以後、高校生たちは、夏の小学生サマーキャンプ、中学生の夏合宿、冬の小中学生スキー教室でリーダーとなり、自分たちに「かっこいい役名をつけよう」と張り切って、〈カウンセラー〉という呼ばれ方を見つけ出した。それ以来、カウンセラーという役と音は、年下の子どもたちの憧れになっている。

9　二の字二の字の下駄のあと

二年後、デップリン、キララ子、リサが中学生になり、小六の理王はティーニータイニー塾に来なくなっていた。

理王は幼児でこの塾に入った。豪利は幼い理王を肩に担いで、「ヘリコプター！」と言ってぐるぐる回ったり、寝転がって脛の上に理王を乗せ、前後左右にゆらし、「宇宙探検、しゅっぱーつ！」などとやったものだった。

豪利は理王の表情の中に、知性の輝きを感じることが多かった。塾の庭で飼っているチャボが卵を産み、動かないで卵を温めている姿を、幼児だった理王はいつまでも見つめ、ヒナがかえり、ヒナが母鳥の羽の下から可愛い姿をのぞかせているのもまた、飽きることなく見つめ、豪利は（この子はいったい何を見ているのだろうか？）と思ったものだった。

そのチャボが生んだ卵を、「おいしいよ」と言って豪利が理王にあげると、理王はその卵を母親の布団の中に入れ、母親は気がつかないで踏みつぶしてしまった。理王は「お母さんの布団の中は温かいからヒナになる」と思ったのだ。母親は感激し、生命誕生の本を理王といっしょに読んだ。

理王が小五になるとき、豪利は母親から、「理王が算数の面白さをもっと知りたがっています。指導をお願いできませんか？」と求められたが、豪利は「理王のそういう知的関心に応えられる力は僕にはありません。理王には、科学への興味や感性を刺激し、育ててくれる人が他に必要です。そういう出会いを求めてください」と勧めた。

理王は自分の足で塾をめぐり、算数の奥深さに導いてくれる塾を見つけ出し、そこで受けた刺激で、深夜まで算数を楽しむようになっていった。豪利は小五の子どもが二つの塾に通うことには無理があると思って、理王にティーニータイニー塾を休ませた。豪利は（可愛い理王とはこれで別れになる）と思ったが、理王は「ゴリ先生はぼくにティーニータイニー塾からやめさせようとしている」と怒った。母親は『理王はこちらへ来る日を楽しみにしているのです』言った。デップリンは「いつもぼくの背中に寄りかかっていた理王に、ぼくはもう会えない」と泣いた。

この年、関口門太は高校三年生になり、豪利に大学受験について相談をした。豪利は大学受験の指導はしないという約束で高校生クラスを開いたのだったが、門太からの真面目な相談であったし、今では高校生クラスは高一から高三年まで八人の合同クラスになっていたので、大学受験について、高校生たちと話し合ってみることにした。

「門太は京都大学に行って、日本の古典文化を研究したいと言っていたぞ。どうして都立大学志望に変えたのだ？」

「学者になって研究している姿は、自分に似合いすぎています。もっと別の自分と出会いたいです。ぼくは都立大学の合氣道部に入りたいです」

「合氣道？……なんでだ？」

「ぼくはツッパリが中三のときに言った、『合氣道には人間にとっての真実がある』という言葉に強い感銘を受けました。僕と同じ中三生がそんなことを考えるなんて衝撃で、自分も『いつか、合氣道を学びたい』と思ってきました」

「どうして今まで黙っていたんだ？」

「運動をやることに自信がなかったんです。でもツッパリの言葉がずっとぼくの中で鳴っていて、先生の言葉で決断しました」

「俺の言葉？　俺はきみに合氣道をやれなんて言ってない」

「先生が中三のぼくに、『門太は忍耐強く学んで、実を結ばせることができる』って言ってくれた言葉です。その言葉と合氣道についてのツッパリの表現がぼくの中で鳴り続け、いくつかの大学の合氣道の稽古を見学し、都立大学の稽古の雰囲気にひかれました。それがたまたまツッパリが学んでいる心身統一合氣道会の合氣道だったものですから、『都立大学に合格したら入部します』と約束してきました。ぼくがティーニー塾に入ったときは、中学生はぼく一人だけで、ぼくは先生とこたつにあたりながら勉強しました。先生はぼくの知らない世界のことを話してくれ、ぼくの視野を広げてくれました。今度はぼく自身で、自分と向き合うために合氣道を学びたいと思っています」

「そうか、そうだったのか……俺は中学生時代の門太には自己表現力が足りないと思って

いたが、きみは高校生になると劇の主役をやり、学校文化祭の実行委員長にもなったんだよなぁ。きみは忍耐強く学んで、実を結ばせることができる人間だ。うん、納得した」

小夜子は音楽大学を希望した。「和太鼓を打ってみたら、音が体の中をめぐり、余韻が体に残りました。音大でドラムか和太鼓か、自分に合っている方をやりたいです」

ツッパリくんは言った。「桜美林大学に行く。ボーイスカウトでおいらに教えてくれたおっさんリーダーが、来年から桜美林大で講座を持つことになった。あのおっさんに講座を持たせるような大学はいい。おいらはそこで学び、おっさんの手伝いをする」。

半年後、門太、小夜子、ツッパリくんは志望大学に進んだ。

理王は筑波大学付属駒場中学校に合格し、ティーニータイニー塾に戻ってくることになった。豪利は理王が来なくなってから、ふと腰のあたりに小さな理王がちょろちょろしている姿を感じることがあって、（理王め、座敷わらしになって出てきたのか？　宇宙探検をやりに来たのか？）と思うこともあった。

その理王が三月、英語劇発表会を観にやってきた。デップリンの喜びはひとしおで、すっと背が伸びた理王を横だきにして、「理王、理王、わが友理王！」と生徒たちの間を跳び回った。ツッパリくんは三年ぶりに理王を見て、「いいツラになってるぜ」と言った。

英語劇発表会で、ツッパリくんたち高校生は「ブレーメンの音楽隊」を演じた。ツッパリくんは年老いてよぼよぼになったロバの役を、全身を振り、っこよくギターを弾いて歌った。小夜子はイヌ役になってドラムを叩いたが、一本のバチの頭にはソフトボール大の玉をくくりつけ、もう一本の頭にはピンポン玉くらい球をくくりつけ、笑いを誘うバチさばきをした。ネコ役の美音は、〈ツゴイネルワイゼン〉をバイオリンで奏でながらステップをリズムよく踏み、オンドリ役の門太は、イタリア民謡の〈フニクリフニクラ〉をバリトンの声で歌った。

英語劇発表会のあとの春休みには、北アルプスの栂池高原スキー場で、小学生から高校生までのスキー教室を行なった。小学校を卒業したばかりの理王は、二日目の早朝に夜行列車で白馬大池駅に着くと、新雪が十センチも積もっている坂道を、高下駄をはいて歩いてやってきた。生徒たちの大騒ぎの声で豪利が玄関に出てゆくと、理王が白い息をはきながら、下駄の歯の間につまった雪を落としていた。

「俺が駅に車で迎えに行くと言ってあったじゃないか？　それに、なんで高下駄なんだ？」

「二の字二の字の下駄のあと」をやってみたかったんです」

デップリンはそんな理王を見て、「理王はソバの実を石臼でひきたくて、石臼を買ったような人なのです」と自慢そうに言った。

子どもたちは、スキー場で朝から夕方まで滑りまくり、夕食後は雪の上に出て、高校生たちに挑んでいっては、雪の中に丸められていた。中二のデップリンは、大人の平均以上の体格になっていて、汗だくになって小中学生の相手をした。

豪利がデップリンに、「きみはよくそこまで徹底して遊んでやれるものだな」と感心すると、デップリンは、「ツッパリくんがぼくたちガキンチョと徹底して遊んでくれました。

ぼくはその愛の心を受け継ぎます」と応えた。豪利がその言葉をツッパリくんに伝えると、「違うっす。ガメラのおっさんが、おいらたちガキンチョと徹底して遊んでくれたんす。おいらはそれを引き継いだんす」と軽く応えた。豪利がその言葉を、今は海外で医療活動に携わっているガメラに送ると、ガメラから手紙が来た。

「ガメラのおっさんのやったことが、そんなふうに伝わっているとは光栄です」

四月、ツッパリくんは大学生になり、雑誌の広告で、ハーレイダヴィッドソンの古い型のオートバイが仙台で売り出されたことを見つけた。広告には「故障中。修理可能」とあった。ツッパリくんは売り主の男性に連絡し、「アルバイトをして資金を作るので、夏まで待ってほしい」と申し入れた。

夏、ツッパリくんは仙台に行き、売り主の車庫を借り、部品を買い集めて自分で修理をし、夜は広瀬川の河川敷で野宿をした。売り主のおじさんはツッパリくんの気っぷのよさを気に入って、我が家に泊まれと勧めたが、ツッパリくんは「こうやって苦労して修理すると、このむだにでっかいオートバイに愛着がわきますから」と辞退した。修理が終わって別れのとき、おじさんはレイバーンのサングラスをはずしてツッパリくんの額にかけた。

「こいつをきみのアメリカ横断のお供に連れて行ってくれ」

中一生になった理王は、〈人と触れ合う遊びの夏合宿〉でイタズラ小僧に変身していた。わっと騒ぎが起こると、その中心に理王がいた。

生徒たちが自由にグループを組んで好きな所へキャンプへ行く日のことだった。中二のキララ子とリサ、中一の元気のいい女の子三人が、「ティーニー塾の男たちはいつも女の子をかばってくれるから、今日は女子の力だけでキャンプをやってみたい」と豪利に許可を求めてきた。豪利は男子高校生のヒッポと女子高校生のキイロをいっしょに行かせることで許可した。

中学生の女の子たちは、キイロにもヒッポにも荷物を持たせず、自分たちでテント、ナベ、カマを持ち、十リットルの水の入ったタンクは、一人が「あの木のところまで私が持っていく」と、うんうん言いながら運び、次の女の子がまた次の目標を決めて運ぶ、ということをくりかえしながら、長い道のりを歩き通して鹿島川の土手に着き、工夫しながらテントを張った。

テントの設営が終わると、ヒッポが女の子たちを誘った。「一時間ほど散歩に行こう。このあたりには東京では見られない花がいっぱい咲いているんだ。ぼくについておいで」

一時間後、散歩からにぎやかに帰ってきた女の子たちが立ちすくんだ。

「テントがゆれている」

ヒッポが首をかしげた。「この辺にはカモシカがいるから、カモシカかな？」

「でも、テントの入口がしまっています」

「じゃあ、サルかな？」

中一の女の子たちがヒッポの背中の後ろに隠れた。

「テントの中に、だれかいますか！」
中二のキララ子が叫んだ。返事がなかった。
「テントの中にいる人はだれですか！」
テントがゆれた。
キララ子がそっとテントに近づき、リサを手招きした。テントの入口に靴が二足あった。靴のそばに紙があり、「リサ、誕生日おめでとう」と書かれていた。
「理王だ！　理王でしょう？」
「もう一人はデップリン！」
「どうぞお入りください」
女の子たちが駆けより、テントの入口を「いっせーのせっ！」と開けた。
「リサさん、誕生日おめでとうございます！」
テントの中に理王とデップリンが正座し、真ん中には大きなパンケーキが置いてあった。

１０　青白い少年ホッホくんの入塾

次の春。デップリン、キララ子、リサが中三になり、理王が中二になった。このクラスに二年前にサッカー少年剣矢が加わり、昨年は小夜子の弟で桃香の兄の鉄平が入り、この四月に、私立中学校に通っている江川少年が入塾した。
江川少年は青白い顔で頼りなげだったが、いっしょに塾を訪ねてきた母親は、少女のような雰囲気で、声のきれいな人だった。「主人が代々続いてきた医院を閉じてしまったものですから、この子に医院を復活してもらいたいと思っています。この子は東大医学部に行くつもりです」
「おやおや、それでしたら、そういうところを目指している生徒たちが通っている予備校に行った方がいいですよ。しっかり教えてもらえます」
「そうですよね。今、この子はそういう所に通っているんですの。それなのにこの人ったら、こちらの塾に移りたいって言うんです。こちらは偏差値がたいへん伸びる塾だそうですけど、受験指導はどんなふうにやっておいでなのですか？」
「特別なことはやっていません」
「特別な指導をやらないのに、偏差値が伸びるなんてことがあるのですか？」
「ありますね。親の子育ての成果です」
「そんな……あの……どんな育て方なのでしょうか？」
「子どもを子どもたち同士の中で遊ばせているってことかな」
「……お勉強はどうしているのでしょうか？」
「うーん……質の良い遊びをさせているってことが勉強ってことですかね……親と子どもがおしゃべりをする。親子でお菓子作りをするなんてのも、質の良い言葉が交わされる場でしょうね……そういう中で育った子どもは、自分の力で伸びていくみたいです」

「あの、こちらの塾はそんなお子さんたちに、どんな指導をなさっておいでなのですか？」
「自分自身と向き合わせるようにしていますけどね」
「自分自身と向き合わせるって……どんなことでしょうか？」
「人はそれぞれ違います。子どもは違いを認められ、ほめてもらえれば、励みになり、自覚ができ、自分の力で伸びていこうとします」
豪利は、ティーニータイニー塾には、遊んで、作業して、しゃべって、聞いて、人と触れ合い響き合う〈遊びの合宿〉というものがあり、生徒たちはそれに参加して人の長所に触れ、自分の長所に出合っている、ということをていねいに話した。
母親はぼんやりした顔になっていた。
「ぼく、この塾に入ります」
「えっ、幸夫ちゃん……あなた、お医者さまになりたいのでしょ？」
「ぼくはちゃんと勉強します」
「でも幸夫ちゃんがこちらの人たちとやっていける自信……お母さんは持てないわ」
「お母さんは……ぼくに自信が持てない」
少年は母親を見ずにつぶやいた。「そんな子どもに育てたのはだれなのですか？」
母親が震えた。豪利は気楽そうな雰囲気を演じた。
「江川くん、きみはどうしてこの塾に目をつけたのかな？」
「この塾の人たちは輝いています。ぼくも輝きたいと思いました」
「おお、嬉しいね。きみの友だちにも輝いている人は多いんだろうね」
「ぼくは友だちがいません。だれも話しかけてくれません」
「きみが話しかけたらいいじゃないか」
「話しかけ方がわからないです」
「そうか……では、きみの長所は何だい？」
「ないです。ぼくが何かやろうとすると、この人がすぐに手を出すんです」
「よし、江川くん、この塾に入りたまえ。長所のない人なんていない。きみの長所は、この塾のだれかが見つけてくれるよ。ここは自分でも長所を見つけられるようになる塾だよ」
豪利はしょんぼりしてしまった母親に言った。「江川くんはこの塾との出会いを、きっと良き出会いにします。江川くん、きみからはそれを感じられるんだ」
このとき新中三生の剣矢が台所部屋で話を聴いていた。剣矢は次の中三クラスの日に、「医者志望で、日陰の野菜みたいなやつが入ってくるよ」と伝えた。
ちょうどそこへ江川少年がやってきた。
「あーっ、きみ、江川！」。デップリンが歓迎の声をあげた。「この人、ぼくと小学校でいっしょだった人です！」
江川少年は顔の筋肉を動かさずに、「あぁ、伊藤くん」と小さな声で応えた。
「なんだよ、こいつ！　表情ねえよ！」と剣矢が言った。「こんなやつが医者になったら、患者はもっと悪くなっちゃうよ！」

パシーンと剣矢の背中でキララ子の手のひらが鳴った。ガツーンと豪利のゲンコツが頭に落ちた。
理王が笑いながら「この席が空いてます」と示し、リサが椅子をひいてやった。
豪利は江川少年に自己紹介をさせたが、少年は自分の名前と学校名を言っただけだった。
デップリンが吠えた。「それでは何もわかりません。ぼくたちがあなたに興味を持てるように、しっかり言ってください！」
キララ子が「趣味はなあに？」と聞いた。少年は「ないです」と口ごもった。
「どうしてないんだい？」と豪利が言った。「それに応えられたら、そこにきみの姿が表れてくるんだがね……では聞こう。きみが入塾したいと訪ねてきたとき、俺がきみにその理由を聞いたら、きみの応えがとてもよかった。それを言えばいいのだ」
下を向いていた少年がはっとしたように顔を上げた。「ぼくはこの塾の人たちに、輝やくものを感じていたので、ぼくも輝きたくて訪ねてきました。そして先生の話を聞いて、この塾には生徒の間に響きあいがあるということを知りました。ぼくも響きあいたいです」
「素敵な説明ね。江川くんのこと、わかったわ」とリサが優しいソプラノの声で言った。
豪利はティーニータイニー塾の授業の進め方を江川少年に話した。
★教科の授業は基礎をていねいにやる。理解がゆっくりの生徒に合わせて進めていく。
★他の生徒たちはそれにつきあってもいいし、自分で先に進んでもいい。
★興味のあることに出会ったら、自分で興味を育てていくといい。人は考えようとすれば考えられるようになり、工夫ができるようになるものだ。
★この塾は生徒がしゃべる機会がとても多い。しゃべることで自分や人の長所に出合う。きみもしゃべるようにしよう。
「以上だが、質問はあるかな？」
少年はおずおずと聞いた。「先生は『長所のない人はいない』って言いました。でもぼくに長所があるなんて思えません」
「あるよ！」と剣矢が叫んだ。「おれたちみんな気がついてるよ。おまえの長所は……」
「待って、剣矢！」とキララ子が制した。「江川くんに考えさせてやって」
困った顔になった江川少年にデップリンが聞いた。「あなたがこの塾に入ったのは、あなたの意志ですか？　親の勧めですか？」
「ぼくの意志です」
「それがあなたの長所です」
理王は言った。「きみがこの塾に入った理由が、『自分も輝きたい、人と響きあいたい』ということなんだから、きみはおれたちの良い仲間になる」
江川少年は入塾した。だが少年はクラスにやってきても、生徒たちの働きかけに対して目を伏せていて、はっきりした表情を見せなかった。豪利は（入塾の気持ちがはっきり言い、生徒たちにも歓迎されたのに、このあいまいな態度はどうしてだ？　息子がこの塾でやっていくことに対する母親の不安が子どもには見え、子どもが自信を持てないでいるの

ではないのか？）と想像した。
　ある日の数学の授業のとき、剣矢が江川少年に忠告した。「おまえさあ、知らない問題が出てくると、例題をすぐに探して、ないってわかると、もう考えようとしないじゃん。それって、だめなんじゃねえの？」
　江川少年が「ホッホッホ」と笑った。
「なんだよ！　ホッホッホなんて笑うな！」
　それに対しても少年はホッホッホと笑った。すると克兄ちゃんと呼ばれている学生講師が、「その笑い方、やめなさい！」と強い声で注意した。
　克兄ちゃんはヒューモくんの大学の後輩で、二人は碁会所で知り合った。ヒューモくんは克兄ちゃんの碁の打ち方の大らかさが気に入って、自分の後のティーニータイニー塾の講師には、この人がふさわしいと考えて連れてきたのである。中三生たちもゆったりとしたこの小松克典という学生を好きになって、〈克兄ちゃん〉と呼んでいる。その克兄ちゃんが、江川少年の笑い方に厳しい顔をした。デップリンが、「どうして人はホッホッホって笑うのですか？」と聞いたので、克兄ちゃんはその理由を生徒たちに考えさせた。
　結論は「自信のない者が、相手をコバカにすることによって、自信のなさを隠そうとする行為だ」となり、理王は「自信のなさを、自分自身に対しても隠そうとしているのだ」と言った。
　この日から江川少年は、生徒たちに〈ホッホくん〉と呼ばれるようになった。豪利はその呼び方をやめさせようとしたが、江川少年は「その呼び方がいいです」と言った。その理由がわかったのは、もっと後になってからである。
　数学の図形問題をやっていた時のことだった。ホッホのノートをのぞきこんでいた剣矢が、「ちょっと見せて」とノートを取りあげ、「おれ、この問題、六行で証明できたよ。なんでホッホは行数をいっぱい書いてんだ？」と、ノートを理王のところへ持って行った。理王はそれを読み終わるとホッホをじっと見た。「この問題はある定理を使えば簡単に証明できるけど、おまえ、その定理を知らないのか？……知らないのに、こんなに書けたのか」と、今度は理王が、そのノートを克兄ちゃんに見せた。
　デップリンが「定理を知らないのに、答えに行き着いたんですか？」と聞くと、克兄ちゃんは、「答えに行き着いたかどうかは大事なことではない。江川くん、きみはひたむきな人だね」とほめた。
　ホッホの青白い顔がみるみる赤くなった。「はい、でもホッホと呼んでください」
　授業が終わって中三生たちが帰ると、克兄ちゃんが豪利に楽しそうに言った。「理王のおかげで、ぼくはホッホの良さに気がつきました。ホッホ、剣矢、理王、ぼくと、驚きの連携があったと言ってはおおげさですが、ぼくは生徒と向き合う面白さを知りました」
「俺もだ。ホッホは自分には長所がないと言ったから、『この塾の誰かが長所を見つけてくれるさ』と俺は言ったんだが、これがそうだとしたら、克兄に感謝だな」
「ぼくは理王に感謝です。ところで先生、理王は授業のとき、ノートをとらないで黒板を

見つめているだけなのですが、何を見つめているのでしょうか？」
「理王の頭の中なんか、俺にはとてもわからない。あの顔は一代でできた顔ではない。彼はどんな世界を切り開いていくのかなぁ」
「そんな理王だけど、とんでもないイタズラをするんです」と、克兄ちゃんの授業見学に来ていた高校生のアズミが目を細くした。「理王のイタズラには、優しさがあるんです」

１１　リーダーシップを学ぶキャンプ

その週の高校生クラスで、キイロが生徒たちに相談した。「あのリサちゃんが中三生になったのよ。でもリサちゃん、中三生は夏の合宿でリーダーをやらなければいけないってわかって、自分にはリーダーなんてむりって、泣いちゃったんです」
「リサが泣いた？」と豪利が驚いた。「リサは幼児で入って以来、小学生キャンプ、中学生合宿、スキー教室で、兄ちゃん姉ちゃんたちのリーダー振りは見てきているのにか？」
ティーニータイニー塾の中高生は、毎年夏に、北アルプスのふもとの安曇野の大町で、〈人と触れ合う遊びの合宿〉を八泊九日間かけて行っている。
夏合宿では教科の勉強はしない。豪利は〈子どもは遊んで育つ。子どもの成長には質の良い遊びの環境が大切だ〉と考え、塾を開いた最初の年から、人と人が触れ合うことを目的にした〈遊びの合宿〉を始めた。その一年目の小学生サマーキャンプに、ガメラというパワーいっぱいの大学生を迎えたことで、子どもたちは刺激を受け、遊び方が活発になった。次の年には八日九日間の〈中学生遊びの合宿〉を信州長野県の山奥の無人の古い民家を借りて行った。
塾が始まってまだ二年目のことで、生徒数は中一、中二生合わせてまだ九人だけだったのに、全員が合宿に参加した。この時は最初の四日間は英語、国語、数学を勉強した。英語では英文の物語を、中一生でも目がついてこられるようにと、みんなでゆっくり読み、訳し方は中一生がわかるようにと中二生が日本語にしていった。例えば、I had a dog when I was a child は、「私は　飼っていた　犬を、　when は～のとき、わたしが子どもだったとき」というふうに、単語が出てくる順に訳していくと中一生でも物語を楽しめた。
国語は平家物語の面白い場面を豪利のあとについて音楽的に読み、数学は中一生には中二生が教え、中二生にはガメラが教えるというやり方をし、生徒たちは積極的に学んだ。だが生徒たちの心に一番残ったことは、田舎のわらぶき屋根の、黒光りするケヤキ材の古民家で寝泊まりしたこと、土をかためてできた古いカマドで、薪を燃やして煮炊きをしたこと、イナゴを捕まえ、大騒ぎで佃煮にし、恐る恐る食べてみたらうまかったこと、そして仲間と好きな所へ出かけてキャンプをし、いつまでもおしゃべりしたことなどであった。
豪利は緑いっぱいの田舎で、室内に閉じこめて教科の勉強をさせるよりも、生徒が面白がるように活動させた方が、生きていく力を生徒自身が育てると考え、以後、夏の中学生合宿は教科の勉強はやめ、〈遊んで、語って、考えて、人と触れ合い、人の長所、自分の

長所に出会う〉合宿に変えた。
　今年の夏合宿は、ほぼ全員の三十人の中高生合宿である。食事は生徒数人が当番になって全員分を作る。食事作り当番、後片付け当番がそれぞれ二回、好きな所へグループを組んで行くキャンプが二回あり、この全てを中三生がリードするから、中三生は一人ひとりが数回はリーダーをつとめることになる。
「泣いたリサちゃんにリーダーをやらせてはいけないのかしら？」とキイロが言った。
「むりやりでもやらせた方がいい」とヒッポは断言した。「ティーニー塾でのリーダー経験は、将来、必ず意味あるものになるのだから」
「そう思います」とアズミが受けた。「ぼくも自分がリーダーをできるなんて思っていなかったけど、この塾でリーダーやらされているうちに自信がついてきたんです」
「うん、そうやって生徒たちは自信をつけていくのだが、リーダーをやるのが怖い、と泣いたような生徒を、どうやったらやる気にさせられるのかな？」
「それでわたし、リサちゃんをかわいがってきた大学生のツッパリくんに相談したんです。そしたらツッパリくんが、『夏の合宿前に、中三生のために〈リーダーシップを学ぶキャンプ〉をやって、リーダーの役割を学ばせたらいい』ってアイディアをくださったんです」
「それ、面白い！」と高校生たちが乗り気になった。
「ぼくたちも、中三でリーダーやることになったときには不安だった。前もってリーダーの心構えを学んでから合宿に臨めたら、リーダー役に意識的に取り組めると思う」
「その場合、中三生にリーダーシップのとり方を指導するのはぼくたち高校生だよ。でもぼくたちだってまだ子どもだ。指導の仕方が一方的になったり、中三生を教わるだけの受け身の人にさせてしまいかねない。中三生が主体的にかかわるにはどうしたらいいかね？」
「中三生リーダーの指示で、班員たちが何かを作る、というのはどうだろうか？」
「いいね！　リーダーが言葉をいっぱい使って指示する作業にしよう。何がある？」
「食事作りがある！　食事作りは、リーダーが自分の作りたい料理のイメージや作り方を、班員にわかりやすく説明する必要がある」
「その場合、リーダーの下で班員になる生徒は、料理の作り方や火のおこし方など、〈何も知らない人〉ということにして、その何も知らない人に、〈中三生リーダーが教え、指示する〉ということにしたらどうだろうか？」
「班員たちはその命令に対して、『はい、わかりました』と言うことと、作業が終ったら『終わりました』と報告することしかできない。『次は何をしたらいいですか？』など、リーダーを助けるような質問もしてはいけないことにする」
「そうすることで、リーダーの指示が悪ければ、班員の動きの悪さになって表れるから、リーダーは自分の指示の良さ悪さに気がついて、自分で考えて指示を修正できる」
「リーダーの指示ぶりを、周りで他の中三生、高校生が観察して、食事がすんだら、良い点、なおすべき点を指摘する合評会をやろう」

１２　「リーダーなんてできない」と泣いた少女

豪利が「おおっ、面白い！　中三生五人全員にやらせたい」と賛成した。
「いえ、初めての試みですから、一人のリーダーを、みんなでじっくり観察する方がいいと思います。夕食と朝食一人ずつにしましょう」
「おお、そうか。ではだれにやらせるのだ？」
「リサとデップリンです」
「おい、リサは泣いたんだぞ。やらせればリサはがんばるが、この厳しいルールに対応できなくておろおろするかもしれないよ。そうなったとき、リサを励ましてやれるのか？」
「これはひと先ずのルールにしかすぎません。そうなったときは変更自由です」
「だが、リサは真面目に落ちこむぞ。落ち込んだときのリサを立ちなおらせるような励まし方ができるのか？」
「リサはそんなに弱い子じゃないよ。リサはよく泣くし、見た目にはいかにも女の子らしいけど、本当は強い子だよ」と、高二のチャンちゃんが説明した。「リサが小低の時だけど、栂池高原スキー場の高い所までゴンドラに乗って、リサがみんなにくっついて行ってしまったことがあったの。そこからみんなで滑り降りようとしたら、リサがスキーをやったことがないってわかって、カウンセラーのガメラがつきっきりで教え始めたんだ。そしたらリサが、『ガメラはみんなを指導する役なんでしょ？　わたしはだいじょうぶ。チャンちゃんに見てもらいます』って言ったの。そして自分で、『こら、リサ、泣くな。涙よ、飛んでけ！』って言って、緩い坂の林間コースを転びながら降りたんだよ」
「そういうリサちゃんだから、泣いたからってリーダーをやらせなかったら、プライドが傷つくかもしれないわ。リサちゃんの強さを生かすことにしましょう」
「そうか、そうだよな、ではもう一つ言っておく。リサが中一のときの夏合宿でのことだったが、リサがみんなといっしょにキャンプに出かけて行く姿を見て、カウンセラーのヒューモくんが、『リサは疲れています。キャンプに行かせてはいけません』と俺に言ったんだ。俺は医学部の学生に言われたから、リサの後を追いかけて、額に手を当てたら熱があった。連れ戻して布団に寝かせたら、リサはそのまま何時間も眠り続けた。相当疲れていたんだ。その疲れは、まだ中一生なのに、〈お兄ちゃんお姉ちゃんたちの期待に応えて、がんばろう〉とした精神的なものから来ていると俺は思った。それまでの俺は、生徒たちのやる気の方にばかりに目を向けて、生徒の体調や気持ちに目を向けていなかった。俺はこの時、〈がんばらせてはいけないことがある〉ことを知った。合宿は面白くて、中学生たちはがんばってしまう。がんばりすぎないように、年上のきみたちが気をつけてくれ」
「心に留めます。それでツッパリくんがスキー教室のときに言ったんですが」と、アズミが眉を三日月にした。「リサが立ち去った後には、優しさがあたりに漂っている、って」
　ヒッポも誇らしそうな顔をした。「ぼくもリサを励ます案を持っているんだ。昨年の空飛山キャンプでのことだけどね、リサが木崎湖を見下ろす景色の中で、石川啄木の〈初

恋〉を歌っていたんだ。その声がきれいだったから、ぼくが『フルートで伴奏したいね』って言ったら、リサが『この景色を見ながら、ヒッポの伴奏で歌いたい。来年は空飛山にフルートを持ってきてください』って、指切り約束をしたんだよ」

「遥かに広がる景色、フルートの響き、リサのソプラノ……」とアズミが遠くを見る目をした。「では、デップリンがリーダーをやることについては、どう思いますか？」

高一のモトキの顔が輝やいた。「デップリンは勢いが強いから、ぼくたち高校生でも彼から学ぶことがたくさんあると思います」

「ヤツの熱い言葉、強い動きには俺は学ぶことが多い」と高一のジュニアもうなづいた。

「そうなんだけど……」とアズミは思案気な顔になった。「この『リーダーシップを学ぶキャンプ』というアイディアを初めて実行するのに、最初のリーダーをデップリンがやるというのは、ぼくは疑問だな。あの人、しゃべり出したら〈間〉がない。勢いも強烈だ。『それは違うんじゃないか？』と言いたくても、ぼくなんかでは止められない。ぼくのイメージの中には、リーダーになった中三生たちがこの厳しいルールに縛られて戸惑っている姿、考えこんでいる姿があるんだ。その姿を見て、ぼくたち高校生が、『どうやって励まそうか』と頭をめぐらせている姿があるんだ。だけどデップリンがリーダーをやったら、ぼくなんかでは押しまくられてしまって、その頭を使えないような気がする」

「そうだよね。指導する人と指導される人の間には、考え、やりとりする〈間〉が必要だよね」とヒッポがあいづちをうった。「ゴリ先生ならリーダーをだれにやらせますか？」

「俺は鉄平にやらせたい」

「えっ？　あんなしゃべらない人にですか？」

「うん、鉄平は入塾してまだ一年で、合宿の経験も一回だけだから、リーダーをやらせればとまどうだろう。だがそれを見たきみたちは、鉄平のとまどいを自分のことのように思うんじゃないのかな。今、俺はアズミの言葉を聞いて、きみたちが〈人の励まし方〉を考え学ぶのには、鉄平がいいと思った。それに俺は鉄平に人としての味わいを感じていて、あの味わいは何なのかを知りたい。俺は剣矢のリーダー振りも見たい。剣矢はケンカ速くて。ひどい言葉で人をやっつけてしまうことがあるが、率直でいさぎよい。俺は剣矢がどう振舞うかを、合宿前に見ておきたい」

「それでしたら、ぼくが剣矢の班員をやります」

「おお、ヒッポ、剣矢にはゲンコくれていい。あのガキはへこたれないし、反省ができる。もう一人の班員は、ホッホという入塾したばかりの生徒に体験させてやりたい」

数日後、アズミが中三生たちに〈リーダーシップを学ぶキャンプ〉について詳しく説明すると、デップリンが張り切って、「そういう厳しいルールにするのでしたら、リーダーなんていう当たり前の呼び方でなくて、〈親分〉、班員は〈子分〉にしましょう」と叫んだ。

豪利が「そんな古めかしい呼び方は、この塾には合わないよ」と言うと、生徒たちは「そのギャップが面白い」と笑い、中三生がやる各班のリーダーを親分と名付け、班員を子分と名付けることにした。

キララ子が「高校生がやるカウンセラーと、中三生がやる親分の役割とは、どう違うのですか？」と質問し、豪利が「カウンセラーは合宿全体のことを考え、中三生親分は自分の班のことを考えるのだ」と応えた。

アズミが「中三生に数学と理科を教えている克兄ちゃんが良い感じの人なので、ぼくたちのお兄さん役として、夏合宿に参加してもらいたい。このキャンプにも誘ってみます」と言い、キララ子は「ツッパリくんも誘ってください」と求めた。

「もちろん誘います。もともとこのキャンプはツッパリくんのアイディアです。だけどツッパリくんは、夏はオートバイでアメリカ横断をやるので、夏合宿には来られません」

「あーっ、ツッパリくんが夏合宿に来られないのなら、この食事作りキャンプは、ぼくが親分をやります。ツッパリくんにぼくの親分ぶりを見てもらいたいです」とデップリン。

「わたしは理王の親分ぶりを見たいです。小さいころの理王はやんちゃでしたけど、理王の言葉をきっかけに、ものごとが面白く展開することがよくありました。でも最近の理王は口出ししません。今のしゃべらない理王と、おしゃべりデップリンが並んで親分をやったら、わたしたちはタイプの違うリーダー像を学ぶことができると思います」とキララ子。

理王が応えた。「おれもデップリンと並んで親分をやってみたい。それにこのキャンプは中三生のために考え出されたのだから、キャンプ全体の指揮官をキララ子にやらせたい」

こうして〈リーダーシップを学ぶキャンプ〉は神山キララ子が指揮官、第一日目の夕食作りの親分はデップリンと理王、二日目の朝食の親分は鉄平と剣矢に決まり、五月十五日、十六日、道志村のキャンプ場でやることになった。

「五月十五日は私の誕生日です」とキララ子がにっこりした。

「では、メニューはこれです」。アズミがレシピを配った。「子分は〈何も知らない人〉ということにしますから、中三生たち親分は、火のおこし方、料理のイメージ、作り方の手順をわかりやすく説明できるように、言葉の練習を十分にやってきてください」

「おれ、親分の自信ないよ」と鉄平がのんびり応えた。すると剣矢が嬉しそうに言った。

「鉄平ののんびりは、頼りになる近所のオッチャンみたいな感じだよ」

「おれ、しゃべれないもん」

「リサだってしゃべんないよ。だけどリサがしゃべるときの言葉は心が入っている。おまえの、ぼそっと言葉にも心が入ってるよ」

「おれ、言葉、すぐに出てこない」

「おお、鉄平、きみは言葉をゆっくり言うことが特長になっていて、味わいがある。それからリサ、今、剣矢に言われた『心が入っている言葉』とは良い表現だぞ」

ヒッポはヒポポタマス（カバ）のような大きな顔を笑みでいっぱいにしてリサに語りかけた。「昨年の合宿の空飛山のキャンプで、リサは『この景色を眺めながら、ヒッポのフルート伴奏で、石川啄木の〈初恋〉を歌いたい』って言ったよね？」

「言いました！　わたし、ヒッポのフルート伴奏で、空飛山で歌いまーす！」

「決まりました。二日目の朝食の親分は鉄平、子分は理王と高校生のモトキ。もう一人の親分は剣矢で、子分は高校生がヒッポで、中三生はホッホ……ホッホってきみのこと？」
「そう。こいつね、親の反対を押し切ってこの塾に入ったっていうのに、人の顔も見ないでしょぼしょぼしてんだ。おれが一から鍛えてやるから、ヒッポ、口出ししないでよ」

１３　指示の多いリーダーと少ないリーダー

五月の土曜日、午後。ティーニータイニー塾の中学生六人、高校生五人、克兄ちゃんと豪利が道志川のほとりのキャンプ場に集まった。
中学生たちは高校生のアドバイスを受けながら、親分としての指示の仕方の練習と、包丁とナタの使い方を確認した。
耳をすまして何かを待っていたキララ子が、「ツッパリくんが来た！　オートバイの音がする」と小さく叫んだ。
「へぇー、なんでツッパリくんのオートバイってわかるんだ？」と剣矢が驚いた。
オートバイの音がみるみる近づき、激しい音をたててキャンプ場の入り口でとまった。
若緑の木々の間から、長身に黒の上下服をまとい、革のロングブーツをはいた金髪の若者が現れ、「オッス！」と呼びかけた。
「オッス！」。生徒たちが初夏の光を浴びながら応えた。
克兄ちゃんが豪利に聞いた。「あの方がツッパリくんですか？　かっこいいですね」
「うん、ツッパリは生徒たちの期待に応えて、かっこよく振舞ってくれているんだ」
ツッパリくんは豪利に挨拶をすると、克兄ちゃんにまっすぐに体を向けた。「克兄ちゃんですね。参加を感謝します。自分はティーニー塾ＯＢで、桜美林大二年の植田です」
「ぼくは東大二年の小松です。ツッパリくんのことは中三生たちからたくさんうかがっています。ごいっしょできて光栄です」
炊事場に生徒たちの二組の輪ができた。今日の夕食作りは二つの班が同時に行うことになっていて、親分はデップリンと理王である。
メニューは同じで、ミネストローネと野菜サラダ、白いご飯である。ミネストローネの材料と作り方は前もってレシピを与えられているが、その通りにやるかどうかは親分の自由である。
二つの班が数メートル離れてそれぞれのカマドを囲み、その間に指揮官のキララ子が立ち、高校生、ツッパリくん、克兄ちゃん、豪利が座った。
二人の親分が自分の班の子分を集め、料理作りの説明を始めたが、デップリンの声が大きすぎて、理王の声が聞こえなくなってしまった。
キララ子が「二人の親分がいっしょにしゃべり出すと、どっちの説明も聴き取れません。最初にデップリン班のデップリン、子分のリサと剣矢が作業に入り、ある程度やってからもう一つの班が始めることにします。理王班はしばらく見ていてください」

デップリンがもう一度説明をした。「ミネストローネとはトマト味で煮こんだ野菜スープです。先ずニンニクをきざんで、オリーブオイルでいためて、オイルにニンニクの香りをしみこませ、ベーコンを小さく切っていためます。そこへきざんだタマネギとニンジンを入れ、タマネギが透き通るまで炒め、さらにきざんだキャベツを加えて炒めてから、水、トマトジュース、コンソメ、香りをつけるためのローリエというこの葉っぱを入れて、こととこと三十分煮こみます。それからジャガイモを一センチ角に切って加え、弱火で十五分煮てから、塩とコショウで味を調えてできあがりです」

デップリンは材料を切る大きさも、塩、コショウの量もきっちり指定した。するとキララ子が観察席からストップをかけた。

「あんた、剣矢が理解できたかどうか見てんの？　剣矢は料理はやったことないんだよ。そういう人にべらべら説明したって頭に入いらないよ。もう一度やりなおせってーの」

剣矢も言った。「デップリンは説明がうまい。料理のイメージがおれの頭に浮かんだ。だけど一度に説明されるとわかんなくなっちゃう。説明を途中で切って、おれが理解できたかどうか見てから次の手順に入ってよ」

リサは「わたし、毎年キャンプに参加してるのに、恥ずかしいけど、薪の燃やし方を知らないんです」と言った。「夏合宿で年下の人たちに指導できません。先に火の起こし方を教えてください」

「はい、そうします」とデップリンは張り切って、慣れた手つきでリサにナタの使い方、火のおこし方をやってみせ、「次にミネストローネの材料を刻みましょう」と、たくさんの言葉で指示を出し、包丁づかいが上手なリサに、ベーコンを切る大きさを指示し、手つきの危なっかしい剣矢には包丁の持ち方、切り方を教え、自分はニンジンを巧みに刻み、またリサのところに巨体をゆすって戻り指示した。すると剣矢が笑いだした。

「剣矢は何がおかしいのですか？　なんでヒーヒーケンヒャラケンヒャラ笑うのですか？」

「えっ、今、何て言ったの？」

「あなたは笑いすぎだと言ったのです」

「笑っちゃうよ。おまえ、さっきリサに説明したことをまた言ったんだよ」

「あー、そうなのです。ぼくは心配性なのです。だけど心配性がそんなにヒーヒー笑われることなのですか？」

「笑っちゃうよ。おまえの図体は堂々としてるし、顔はニッコリニッコリンしてるんだよ。そんなやつに心配性なんて似合わねえ！　リサにまかせてゆったりしてろってーの」

「そうはいきません。ぼくは親分です。リサさんは子分です。子分は親分の命令に、『はい、わかりました』としか言ってはいけないのです」

「少しくらい失敗したっていいじゃねえか！」

「よくありません。ぼくはおいしい物を食べてもらいたいのです」

「おせっかいなヤツ！」

キララ子が心配顔になって、豪利に寄ってきたので、豪利は言った。「まあ、待て。デ

ップリンにはあのままやらせてみよう。デップリンは小さい時から、あの人柄と強烈な表現意欲でリーダーをやってきて、どこででもだれからも、文句を言われたことがないはずだ。反抗される体験をさせてみよう」
「でもリサがあんなに命令されてかわいそうです」
「ほら、見てごらん」
豪利の視線の先にキイロがいて、リサのところへ寄って行くところだった。キララ子はさりげなく近づいてリサの後ろ立った。
キイロが穏かな口調で、「リサちゃん、どうかしら?」と聞いた。
リサの目に涙が浮かんだ。「わたし、夏の合宿でデップリンのような親分はできません。剣矢みたいに言い返されたら、どうしていいかわからなくなってしまいます」
「そうよね、リサちゃんはデップリンの真似なんかできないし、真似しちゃだめなのよ」
キイロは「リサを借ります」とデップリンに声をかけると、リサの手を引いて、理王の班の前に連れて行って並んで座った。キララ子が声を張った。
「理王の班が作業に入ってください。デップリンの班はいったん手をとめて、理王の班の作業を見てください」
理王が子分役の鉄平と高校生のジュニアに説明を始めた。「野菜サラダはおれが作る。ではどの役をやりたいか言ってください」
「ぼくはご飯たきをやりたいです!」と高一のジュニアが勢いよく手を挙げた。「でも、ぼくは火のおこし方もご飯のたき方も知りません」
見ている生徒たちが笑った。ジュニアは野外活動が得意なのだ。
「ではジュニアがご飯たきね。火のおこし方はおれが教えます」
「それなら、おれ、ミネなんとかを作る」と鉄平。「おれ、その料理知らないから、理王はゆっくり説明してよ」
「うん、作り方はね、ベーコンと野菜を切って、トマトジュースと水を加えて、全部いっしょに煮こめばいいんだ。食材は表面積がいっぱいあるように切ってよ」
「表面積って何のこと?」
「切り口の面積のこと。このジャガイモを一回だけ切ったら切り口は一つだよね。これをサイコロのように立方体に切ったら、切り口はいくつある?」
「六つ」
「そう。小さく切ると切り口がいっぱいできて、表面積がふえるよね。そうしたら材料から、いい味がスープにたくさん出る……んじゃ、ねえか、なあ……煮こんでいって、スープにいい味がついたら、塩を加えて、鉄平がみんなに食べさせたいと思う味にしてよ。ティーニー塾の料理は山賊料理みたいなものさ。テキトーでいいからね。それからジュニア、おれね、米をたいたことはあんまりないから、いっしょに相談しながらやろう。先ず火のつけ方からやってみよう」
理王はジュニアの前に同じ大きさの薪を二本置いた。

「この二本のどっちが燃えやすいか、わかる？」
「同じように見えるけど、見てわかるの？」
「どっちが古そう？」
「あっ、そうか、こっちは皮が新しくてみずみずしいね。理王の肌みたいだ。こっちは水っ気がなくてかさかさしている。ゴリ先生みたいかな」
「もうすぐミイラだ。どっちが重い？」
「こっち。中がつまっていて理王の脳みたいだ。こっちは軽いから、中がすかすかってことだね」
「では二本を比べて、どういうことがわかった？」
「軽い方は水分がぬけていて、燃えやすいってことがわかった」
ジュニアが釜の下の杉の枯葉に火をつけ、「薪はどのくらいくべたらいいですか？」と聞き、理王は「テキトーに」と応え、ジュニアは「では、テキトーに」と応じた。
もう一人の子分の鉄平は、野菜を切ったりちぎったりして、動きにとまどいがなかった。理王は野菜サラダを作りながら鉄平を手伝い、ジュニアに話しかけ、ごみをひろい、役目が終わった道具をかたづけたりした。
キイロは理王の班の姿をリサに見せながら、「リサちゃんの長所って何かな？」と問いかけた。「人を優しく思う心でしょ。リサはそういう心から出てくる言葉を口にすればいいのよ。そうしたらリサに反抗する人なんていないわ」
リサはキイロの肩に頭を乗せたまま聴いていた。「こうやっていると落ち着くなぁ。ゴリ先生が、キイロちゃんの心からは、雪のしんしんと降る音が聴こえてくる、って言ってたけど、本当だわ」

食事がすみ、片づけが終って、キララ子の司会で、二人の親分のリーダー振りを検討する合評会が始まった。
日はとっぷりと暮れていた。五月の道志村はまだ寒い。生徒たちはしっかり着こんで、枯れ木でキャンプファイアーを作り、その周りに腰をおろした。火に薪をくべると、炎が大きくなり、真っ暗な森のそこだけが明るくなった。
「剣矢は、デップリンの班のミネストローネは『手がこんでいて、こまかすぎる』って文句を言いながらも、よく創ったじゃないか」
「理王の班のミネストローネは大ざっぱな創り方だったけど、うまかった」
「鉄平は表情も動きも生き生きしていた。鉄平、感想を言ってください」
「理王はおおざっぱに指示したあと、おれに任せてくれた。おれ、やる気になれた」
「理王の親分ぶりについて、子分のジュニア、お願いします」
「理王は任せることが多く、自分が動くときは、子分たちの仕事の隙間をうめる程度の作業をしただけで、口は出さなかったから、子分としてはやりやすかった」
キララ子が聞いた。「理王は『テキトー』という言葉をよく使ったのに、子分たちは手

を抜かなかったわね。理王、あんたのテキトーはどういう意味なの？」。
「おれは良いリーダーっていうのは、仲間の人たちの持ち味を響き合わせることができる人だと思う。だけど、おれはそんなことはまだできない。できるのは、どんな作業をするかをグループの共通認識にすることと、それぞれがその人らしくやってほしいっていうことだけだ。だから『テキトーに』と言った」
「理王の『テキトー』には、人への信頼みたいなものがあるのかしら……ツッパリくん、いかがでしょうか？」
ツッパリくんはキララ子をじいっと見た。「おまえの目もいいぜ」
「嬉しいです……ではデップリンへの評価は、「指示力は見ていて圧倒されるが、剣矢の反抗的な態度も理解できる」だった。
キララ子が剣矢に顔を向けた。「納得できないことに反論するのは剣矢の良いところだけど、あそこまで親分に突っかかることないんじゃない？」
「デップリンはおせっかいで、うっとうしいんだよ」
「あーっ、なんてことを言うのですか！　親分が子分の仕事ぶりをチェックするのは当たり前じゃないですか！」
「こまかいことまで指示しすぎだよ。やってる方はリズムが狂うよ。おまえ、わかりやすく説明したんだぞ。あとは子分に任せりゃいいじゃねえか。しゃべってばかりいやがって」
「おしゃべりはぼくの得意技です」
「ちょっと待ってよ、デップリン」とアズミが穏かに制した。「今の剣矢の『リズムが狂う』って言葉は心に留めるべき言葉だよ。この塾の人たちは、仕事でも遊びでもノリがいいでしょ。リズムがいいってことだよね。デップリンがしゃべりだすと止まらないのも、リズムに乗ってるからじゃないのかな？　だったらきみも子分がリズムに乗ってるときには、見守っていたらいいじゃないのか？」
「わたしもそう思うわよ。それでね、デップリン、あんたが剣矢を自分の子分に指名したのよ。言い返してくるはずの剣矢を、あんたはどうして自分の子分に指名したのさ？」
「はい、ぼくは小さいときからいつもリーダーです。そういう自分をかっこいいと思ってきました。でもティーニー塾で中学生になってから、それはうぬぼれかもしれないと思うこともあります。もしそうなら、ぼくのリーダーぶりをチェックしてくれる人が必要だと思って、きついことを言うかもしれない剣矢を子分に選びました」
「おおーっ」と高校生たちがどよめいた。「デップリンは雄大な心の人だ！　おまえ、その雄大な心を誰から学んだんだ？」
「ティーニー塾の先輩たちを見ていて学びました。先輩たちは反対意見や批判に耳を傾けて話し合い、良いものを創り出していきます。だからぼくも批判されるところがあるのならなおそうと思って剣矢を指名しました。でも、あんなに反抗されるなんて思っていませんでした……もう一人の子分をやってくれたリサさん、あなたにとってぼくの親分ぶりは

どうだったでしょうか？」
「わたし……デップリンからたくさんの言葉で指示されているうちに、なんだか自分が情けなくなってしまいました」
「あーっ……ぼくはリサさんの自信をなくさせてしまったのでしょうか？」
「そうよ。あんたはリサに命令ばかりしていて、リサを縛りつけていたんだよ。リサは料理が大好きなのよ。あんたがここから先はリサに任せるというふうにしてやったら、リサは生き生きと動いて、自分の長所に自信を持ったはずよ」
「ちがうの、キララ子、わたしね、毎年ティーニー塾のキャンプに参加して、薪で火を燃やすことを見てきたのに、何も関心持ってこなかった自分が情けなくなってしまったの」
　デップリンは「あー、でもぼくの心配性が出てしまったのです。リサさん、ごめんなさい」とうめいて、大きな腰をゆるゆると地面に落とした。
「ちがうの。わたしはデップリンの心には親切心がいっぱいつまっているってことがわかったわ。わたし、デップリンの言葉を聴くのが好きなのよ」
　理王がやわらかな声で言った。「立ちな、デップリン。おまえの感動する心は、いつもおれたちに勇気を与えてくれているんだ。リサはそれをちゃんと理解しているよ」
　キララ子はツッパリくんに呼びかけた。「デップリンに何か言ってやってください。デップリンはツッパリくんにほめてもらいたくて、親分をやったのです」
「そっか。へい、デップリン、おまえは自分の気持ちを言葉で伝えられるのがいいぜ。だが教えようとする気持ちが強すぎて、相手が学ぼうとしている気持ちを見ていない。おまえは口数を少なくしろ。相手にしゃべる機会を与えて、相手を生かしてやれ」
「ありがとうございます！　ぼくは小三のときに、ツッパリくんに『言葉を大切にするやつはいいぜ』ってほめられました。それ以来、ぼくは言葉を意識しています。でも今日は剣矢に反抗され、リサさんの自信をなくさせてしまいました。ぼくは今のお言葉で反省しました。ぼくはおしゃべり屋を廃業します」
「デップリンがおしゃべり屋廃業するって！」と剣矢が笑い転げた。「おまえはそんなことできねえよ！　それにしゃべらないっデップリンなんてつまんねえよ」
「そうだぞ、デップリン」と豪利が声をはさんだ。「きみのおしゃべりについて、リサは今、何と言ったんだ？」
「はい、ぼくの心には親切心がいっぱい詰まっていると言ってくれました」
「良い言葉じゃないか。きみはその言葉をどうするつもりだ？」
「はあ？　どうするつもりって、どういうことでしょうか？」
「きみは心配性の人になるのか、親切心いっぱいの人になるのか、どっちだ？」
「はあ？　先生が何をおっしゃりたいのかわかりません」
「そうかな……〈雄大な心〉という言葉をもらった人は自分で考えて意味を見つけるんだな。さて、ツッパリ、きみはもうすぐアメリカに立つ。理王、リサ、キララ子は小さい頃からきみに憧れてきている。別れの言葉を言ってやってくれ」

「そっすか」。ツッパリくんは理王を見た。「理王といえば、おいらには真っ赤な顔で蹴りをいれてきた小鬼の姿になるが、三月、久しぶりに会ったおまえは理知的なガキになっていた。あのやんちゃな小鬼と今の理知的なガキ、どっちがおまえだ？　両方か？……リサは六年前のサマーキャンプで、『小一のルリ子は学校をずっと休んでるから、ティーニー塾でいろいろ体験させてやりたい』と言った。おまえの体からは、そういう温かなものがいつも流れ出ているんだぜ」

「ツッパリくーん」。デップリンが大きな声を出した。「キララ子にも何か言ってやってください。キララ子の心の中には、ツッパリくんがいるのです」

ツッパリくんはキララ子を見た。「おまえの目は澄んでいる。その目に合った言葉を育てていけ」

「はい、心がけます……では、ゴリ先生、今日の締めの言葉をお願いします」

「うん、その前に、理王とデップリンに並んで親分をやらせようと考えたのはキララ子だ、キララ子の感想を聞きたい」

「はい……理王は言葉は少ないけど、子分たちを生き生きさせました。一方、言葉が多いデップリンは剣矢をいらいらさせ、リサを不安にさせました。でも、そのリサは『デップリンの心には親切心がつまっている』って言いました。二人のリーダーぶりの違いから、わたしたちは『人はぶつかりあい、考えあい、響きあって成長するものだ』ということを学ぶことができました。この学びを大切にしたいです。明日の朝食は鉄平と剣矢が親分です。みなさま、今日はご苦労さまでした。おやすみなさい」

「誕生日、おめでとう！」。理王がキララ子に小さな花束を差し出した。森の野花で創ったものだった。

１４　できない知らないホッホくん

リーダーシップを学ぶキャンプ二日目。　朝のしじまをぬって、「集合！」の声がかかった。生徒たちが集まると、カマドの前でアズミが困った顔をしていた。

「ホッホから携帯電話に連絡があって、一時間ほど遅れると言ってきたんだけど、どうしようか？」

「なんだよ、何にもできないやつが遅刻かよ！　だれかホッホの代わりに子分やってよ！」と食事作り親分の剣矢がわめいた。

ホッホからは前もって、キャンプ一日目はテスト勉強したいから参加できないが、二日目の朝食作りの子分はやりたいので、親に車で送ってもらって参加したいと申し出があり、みんなは納得していた。豪利は剣矢の怒りが強いので、「こんなことはよくあることだ。どうしたらいいかみんなで考えたらいい」と言った。

アズミがキララ子に顔を向けた。「このキャンプの指揮官はキララ子だよ。キララ子が決めな」

「はい」とキララ子は木漏れ日を顔に受けながらきっぱりと言った。「ホッホくんにはキャンプを体験させたいですから、到着を待ちます。鉄平班は食事作りを始めてください」
鉄平は「うん、わかった」とのんびり言って、子分役の理王と高校生のモトキを呼んだ。
「おれの班、白いごはんの予定だったけど、おかゆに変える」
観察役の高校生たちがびっくりした。「急に変えちゃってだいじょうぶかよ？」
「ほら、川べりにセリがいっぱい生えている。おれ、セリを入れたおかゆ、作りたい」.
「セリってどんなもの？」
鉄平は浅瀬の水の中に腕を入れ、たっぷりと浮いている緑のかたまりから茎を数本引き抜いた。
「これがセリだよ。手でもんで、においをかいでみな」
「えー、良いにおいだ。春のにおいって言うんだね」
「そう、このセリをおかゆといっしょに煮る。白いおかゆの中にセリの緑がきれいだよ。赤い根っこはおひたしにする。春の味だよ」
子分役の理王とモトキが張り切って動き、おかゆと肉じゃがの準備ができ、それぞれのかまどに火が入ったところで、キララ子がみんなに声をかけた。
「食事作りを見ながら感想を言いあうことにします。食事班の三人も作業をしながら話に加わってください。剣矢、あんたの見方は面白いから、最初に感想を言って」
「うん、言う。言葉が遅いって自覚している鉄平は、料理の説明言葉をいっぱい練習してきたはずなのに、なんで急におかゆに変えっちゃったんだよ？　それに春の味って言葉言ったし、ナタや包丁の使い方が上手だった。それもなんでだよ？」
「おれのうち、家族でよくキャンプする。おれ、こういうこと、好きなんだ」
「あ、そうなん……じゃあ、ふだん口数が少ないのはどうしてなのさ？」
「おれんち、母ちゃん、姉ちゃん、妹がしゃべるから、おれ、しゃべんなくていい。だけど、おれ、心の中ではしゃべってる」
リサは言った。「わたしは、親分を鉄平くんみたいにのんびりやってもいいんだってことと、親分は子分に助けてもらってもいいんだってことを知りました」
「鉄平ののどかな雰囲気がとても良かったです。おれ、宮坂剣矢は先を急ぎすぎ、てことに.気がつきました」
感想が終わったところへ、ホッホがおずおずとやってきた。剣矢が「何にもできねえヤツが遅れてきやがって」と言いかけると、ホッホは「テスト勉強を遅くまでやっていて、お母さんに何度も起こされたんですけど、起きられなかったんです。責任放棄で本当にすみませんでした」と頭を下げた。
「へー、おまえ、ちゃんと謝れるんだ」と剣矢がちょっと驚いた顔をした。「おまえ、おれの班の子分だ。じゃあ、おれの班、食事作りを始めます！」。
剣矢が子分役のヒッポとホッホ相手に料理の説明に入り、剣矢の端切れの良い言葉にみんなが集中していた時、ホッホの携帯電話が鳴った。

剣矢がいらだって、「なんだよ！」と電話をひったくり、生徒たちの電話を集めてある場所に、放り投げるように置いた。
「剣矢、それは失礼です！」とデップリンが怒った。「緊急電話かもしれないでしょう。それに携帯電話禁止の理由を、ちゃんと説明してやりなさい！」
剣矢はとがった声で言った。「キャンプに来たら、外のことは忘れて、ここにいる仲間の顔を見て話すんだ。ホッホ、おまえは川の水で米を洗え。米はカップに六つだ」
ホッホの頼りなげな様子が気になって川について行った高校生のモトキが戻ってきて、剣矢に告げた。「ホッホが米を洗剤で洗っているよ」
剣矢が川へすっとんで行った。ホッホがナベの中の米を、おぼつかない手つきでかきまわし、あわだてていた。
「なにやってんだ、おまえ！　米を洗剤で洗ってどうすんだよ！」。剣矢はゲラゲラ笑った。「洗剤でといだ米なんか食えねえ！　おまえ、中三にもなって、そんなこともわかんねえんだ。あぁ、あ、もうこの米、食えねえ。川に捨てろ！　捨てろってえの！」
ホッホは川に米を捨て、足元の砂の中から流れ出てゆく米を、情けなさそうに見ていた。「おまえ、米はもうやんなくていい。こっち、来い」と剣矢は炊事場に戻り、「火をおこせ」と、ホッホに新聞紙とマッチをわたした。
ホッホはマッチを手にしたままぼんやりした。ジュニアが剣矢に耳打ちした。
「ホッホはマッチを使ったことないみたいだよ。教えてやりな」
「こうやってやるんだよ」と剣矢はマッチをすって新聞紙に火をつけ、「あとは薪を燃やすだけだ」と言って、自分の作業に入った。
ジュニアがまた剣矢のところへ寄って来た。「いつまでも怒ってんじゃねえよ。ほら、ホッホに火のおこし方、教えてやりな」
見るとホッホが太い薪の上に新聞紙を乗せて火をつけていた。新聞紙だけがめらめらと燃え、黒い燃えかすが薪の上に残った。
「なにやってんだ、ホッホ！　こんな太い薪の上に新聞紙乗せて火をつけたって、薪に火がつくわけねえだろう！　あーあ、おまえってやつは、なーんにも知らねえんだ！」
剣矢は体を折り曲げて笑い、歌いながら踊りだした。

ぼーくのなまえは　ホッホくん。
知らないできない　中三生。
こーめをせんざいであらったら
だーれも食べてはくれません。

剣矢のきみょうな歌と踊りにみんなは手をとめた。

ぼーくのなまえは　ホッホくん。
知らないできない　中三生。
まーきのうえのしんぶんし
もえたがまきに火がつかない。

「「やめろ！」という鋭い声がおこった。「てめえ、人に向かって、そこまでやるのか！」
ツッパリくんが剣矢の方に大またで向かった。生徒たちが緊張した。
だがツッパリくんは剣矢には目もくれず、ホッホの前に立った。ツッパリくんは両腕をホッホの肩に乗せ、「すまん。おれがあやまる」と言って、ホッホを抱き寄せた。
豪利はツッパリくんの言葉と体温が、ホッホの体にしみこむだけの時間をとってから、生徒たちに呼びかけた。
「いったん作業中止。集まってくれ」
克兄ちゃんはうつむいているホッホの腕に自分の腕をからませて、静かに言った。
「ホッホ、空を見てごらん。ほら、青い空だよ」
生徒たちはホッホが顔を上げ、空を見上げるのを待った。
豪利が言った。「ホッホ、悪いのは俺だ。俺も笑ってしまった。すまなかった」
「ホッホくん、ごめんなさい。わたしは疑問に思ったけど、言葉にできませんでした」。
豪利は生徒たちを見回した。「ツッパリがいなかったら、みんなの笑いが、いつの間にかいじめに発展していった、なんてことにならなかったかな？」
「ならねえよ」
ツッパリくんだった。「ティーニータイニー塾じゃ、ならねえ」
空を見上げていたホッホが、不思議な音で泣き出した。
リサがそっと寄って、ティッシュペーパーをホッホに渡した。ホッホは涙をふき、その紙をキララ子が駆け寄って受け取り、花粉症のデップリンが大きなティッシュペーパーボックスをリサに渡し、リサがペーパーを一枚抜いてホッホに、ホッホが涙を拭いてキララ子に渡した。
豪利が笑いをかみ殺しながら言った。「剣矢はこのあと、ホッホをどうするつもりだ？」
キララ子も「ホッホくんはどうしたいのですか？」と柔らかく呼びかけた。
ホッホは空に向けていた顔を戻して生徒たちを見た。生徒たちはうなずいた。
「ぼくは何か一つだけでも、覚えて帰りたいです」
「それなら決めました！」と剣矢が叫んだ。「ホッホはおれの班をぬけて、理王に火のおこし方を教わってください。理王は相手の気持ちになって教えてくれる人です」
「ホッホ、今日はよく参加してきたねえ。こんなことがあっても、なるべく参加しなよ。参加しなければ学ぶことはゼロだが、参加すれば良い出会いがある。傷つくことはあっても、マイナスの経験は、気持ちの持ち方でプラスに変えることができるからね」
そう言ったとき、豪利は「あれっ、もしかしたら、さっきの電話はお母さんからなのか？……そうか、そうか、お母さん、心配してたんだ。おお、それなのに、よく来た、よく来た。お母さんに電話してあげなさい。明るい声でだぞ」
理王がホッホをカマドに誘い、克兄ちゃんがカマドまでホッホの背中を押していった。
「火とは作るもの、育てるもの」と理王は言って、新聞紙をくしゃくしゃっと丸めた。

「こうやって空気を含ませてからね」と新聞紙の上に杉の枯れ葉を乗せ、割りばしほどの細い枝を置いてから、新聞紙に火をつけた。小さな炎が新聞紙、枯れ葉、細い枝へと移って、大きくなっていった。理王はもう少し太い枝を乗せ、それに火が移ると、さらに太い枝を乗せ、火を育ててみせた。

「こういうことをやってると、おれは自分の中の野性みたいなものに出会えるような気がするんだ。想像力が刺激されるんだ」。

理王はホッホに最初からやらせた。見ていた剣矢が、「ホッホがもう良い顔になっている」と驚き、キララ子は「ホッホくんの目に火がともったわ」とつぶやいた。

豪利はツッパリくんの隣りに並んだ。「ホッホを抱きしめてくれて、ありがとな」

「自分も目つきが悪くてからまれて、嫌気がさしていたときに、ガメラから抱きしめられ、ヒューモくんから『深い目をしている』と言われて、気持ちが楽になったんです」

15　紙の名刺で割ばしを切る

「割ばし切りを始めまーす。ツッパリくん、指導をお願いします」

二週間前、リーダーシップを学ぶキャンプの説明会の後、塾の庭で生徒たちがキャンプ用の薪作りに、長い柄のついたオノを振り下ろして丸太を割ろうとしたが、手足のバランスが悪く、うまく割れなかった。そこで豪利が軽くオノを振り下ろすと、丸太がきれいに割れた。

「えーっ、ゴリ先生はお歳で、もう力がないんでしょ？」

「うん、力はいらない。俺の子どものころは、カマドもストーブも燃料は薪だったから、中学生になると男の子の仕事は薪割りだった。慣れだな」

「ゴリ先生は合氣道をやっていて、紙の名刺で割りばしを切ることができるって聞いたんですけど、本当ですか？」

「ああ、できる。力を抜いてやれば、きみたちだってできる」

「うっそ！　先生、やり方、教えて！」というわけで、今日のキャンプでツッパリくんが教えることになったのだ。

ツッパリくんは生徒たちを二人一組にさせ、両足を踏ん張り、I am a man. I am strong. と強そうに胸を張らせてから、ごく軽い力で交互に相手の背中を押させた。すると押された方はかんたんにぐらついた。そこで体の力を抜いて、リラックスした姿勢にさせてからさっきと同じ力で押させるとぐらつかなかった。

次に生徒たちは、そのリラックスした姿勢で、腕をしなやかに振り下ろす練習をした後、割りばし切りに挑戦した。一人が二十センチほどの長さの割りばしの両端を指先で持って相手の胸の前に差し出し、相手は紙の名刺を持って割りばし目掛けて腕を振り下ろした。だれがやっても紙で木を切れるはずがなかったが、それぞれの生徒が数回もやらないうちに、「切りました！　割りばしが切れました！」と叫び声があがった。

キララ子が華やかな声で、真ん中から十センチほどに切り分けられた割りばしを高々とかざしていた。
「こっちもできました！　キイロちゃんが切りました！」
生徒たちがわぁーっと湧きかえった。「本当に紙で木が切れるんだ！」と張り切って、おたがいに相手の割りばし目がけて腕を振ったが、もう切った生徒はでなかった。
「なんで女にできて、男ができないんですか？」と剣矢がツッパリくんに聞いた。
「今おまえが見た『力を抜けばできる』ということを信じればできる。一番かんたんだが一番むずかしいことだ」
「おれ、合氣道をやりたい。ゴリ先生、おれに道場を紹介してください。　おれ、決闘するんです」
「決闘？……決闘って、命をかけて戦うことだぞ」
「はい、その決闘です」
「だれと？」
「不良とです」

１６　不良少年に決闘を売る

数日前のことだった。剣矢がクヌギ林に入って行くと、細道の先に三人の少年の姿があった。一人はひょろりと背が高く、制服からシャツがでれっとはみだし、ズボンはずり落ちそうだった。ころころ丸い少年は木に向かってパンチをくりだし、もう一人はごつい体で倒木に座っていた。
（不良だ！）と剣矢が木のかげに隠れようと動いたとき、パンチをくりだしていた少年がこっちを見た。剣矢は隠れようとしたことを見られたと思って、木のかげから出ると彼らの方に向かい、彼らのことに気がつかない振りをして通りすぎた。
「おい！」と声がかかった。
剣矢はどきっとしたが、振り向いて、「なんだ！」と応えた。
「おまえ、名前は何て言うんだ？」
ネギのようにひょろりと長い少年が、木に寄りかかってタバコをくわえていた。
「人に名前を聞くんなら、てめえの名前を先に言え！　不良め！」
ヒョロネギがゆらりと木からはなれ、くわえタバコで両手をポケットにつっこみ、ゆらゆらと剣矢に向かってきた。「なんかぬかしたな」
そう言ったはずみに、ヒョロネギの口からタバコがぽろりと落ちた。
「火を消せ！」。剣矢が鋭く言った。
ヒョロネギは反射的にタバコを踏みつけた後、仲間を見て、照れたように笑った。
「ガキのくせに、タバコなんか吸うんじゃねえ！」
「なんだと！」

ヒョロネギが剣矢の肩をついてきた。剣矢は軽く身をかわした。
「吸い殻、片づけとけ！　明日、見に来るからな」
次の日、剣矢はクヌギ林に行った。少年たちはいなかった。タバコの吸い殻も落ちていなかった。剣矢が拍子抜けがした気分で帰りかけたとき、木のかげから黒いものがゆらっと現れた。
「きのうはごあいさつだったな」
ヒョロネギはかすれたソプラノみたいな声で言った。
剣矢は相手の目を見つめたまま黙っていた。ヒョロネギは長い腕で剣矢の胸ぐらをつかんで木に押しつけた。
「カネ、持ってるか？」
「持ってねえ」
「持ってこい」
「いくらだ？」
「せ、千円」
「たけえよ」
「五百円」
「いつ？　どこへ？」
「あした、五時。こ、ここ」
ヒョロネギは剣矢を突き放すと、ふらつくように去っていった。
次の日の夕方五時、剣矢はクヌギ林に行った。剣矢は少年サッカーチームに入っている。動きは機敏で足は速い。ボールが来ると、自分一人でゴールをねらってしまうことがある。体が小さいから相手の選手とぶつかるとふっとばされる。それでもぶつかっていくからファールをとられ、相手に得点の機会を与えてしまうことがある。「一人で試合やってんじゃねえよ！」と仲間から言われている。
そんな剣矢だから、（ヒョロネギなんか、一発ぶんなぐって、はなれ、ぶんなぐって、はなれ、ってやって戦えば、相手はくたびれてへたりこむはずだ）と決めて行った。
待ち合わせの場所には三人の少年が立っていた。
「あのやろう、仲間を呼びやがって！」
剣矢は足もとの土を右手ですくって固く握った。襲われたら、土だんごを相手の顔にたたきつけて、目つぶしにしてやろうと思った。
剣矢は三人の前に立った。ヒョロネギは下を向いた。
「おまえらん中の親分はだれだ！　デカ、おまえか？」
剣矢はごっつい体のぎょろ目の少年を左手で指さした。
「親分？……なあに、それ？」とコロコロ丸い少年が聞いた。
「おまえらん中の一番強えやつだよ。デカ、おまえが親分か？　おれと決闘しろ！」
「……決闘？……決闘って、なあに？」

「このヒョロネギが『カネ持って来い』って言ったんだ。おれはそんな卑怯者は認めねえ。だから卑怯者の親分と決闘するんだ」
がっしりした体のデカは何も言わず、剣矢を見ていた。
「待ってよ。その体でこいつと戦うの？　勝てると思うんか？」
「思わねえ。だから決闘は七月だ」
「二か月も先だよ。どうしてよ？」
「勝つ方法、考えるんだ」
「武器、使うんか？」
「そんなことするか！　素手だ。七月十五日。おれの誕生日だ。朝八時。ひなたむら公園の石垣下の草原だ」
剣矢はこぶしの中の土をデカの足元にたたきつけると、くるりと背を向け、ヒョロネギみたいに肩をいからせた。
ティーニー塾の中高生たちは、剣矢から決闘のことを聞くと、「鼻っ柱だけ強いおバカさん」とあきれた。「金をせびるようなやつらを、まともに相手にしてどうするのさ？」
「相手は決闘の申しこみを受けたのか？」
「受けてません。だけどデカは受けます」
「なんで？」
「おれの直感です」
「直感？……このバカ！　直感なんかで決闘するんじゃない」
「おれ、言っちゃったもん。男の言葉に二言はねえもん」
「ツッパリくーん、このバカに、何か言ってやってください」
「そういう年齢ってこったい。おいらも自分で説明できねえことをやってたよ」
豪利が聞いた。「剣矢はサッカーの脚で相手を蹴るつもりなのか？」
「蹴りません。サッカー選手の脚は危険だから、人を蹴ってはいけないって、コーチから言われています」
「そうか……剣矢は力では勝てない。だが蹴るのはやらない。それでも戦うのか？」
「女が名刺で割りばしを切ったのですから、合氣道を習って力をぬいて戦えば、小さなおれでも、でっかいやつと戦えるんじゃないでしょうか？」
「ばっかだねえ。そこまでなるのに、長い訓練が必要だってこと、わかんないの？」
「お父さん、お母さんはこのことを知っているの？」
「おれ、話した。おやじは『バカおやじにはバカ息子ができるのか。逃げなかったのはいい』って言って、おふくろは『バカはバカらしくやり通せ』って言った」
「だめーっ、やり通しちゃだめーっ」
「さーて、さて、どうしたもんずら？……教え子のバカっぷりを知った以上、『オラ、知らねえ』とは言えねえしなぁ……どうするか……ではこれでキャンプを終わる。ツッパリ、『リーダーシップを学ぶキャンプ』というアイディアをありがとな。多くの学びがあった。

きみは七月中旬にはアメリカの大平原を、ハーレイダヴィッドソンで突っ走っている。ツッパリらしい出会い、発見があるだろう、期待するよ。克兄、きみに何かをやってもらう機会はなかったが、きみの存在感はしっかり生徒たちの中に入っている。ありがとな」

ツッパリくんは克兄ちゃんに歩み寄ると握手をし、生徒たちには、「みんな良い面構えになっている。おいらもそういう面構えで大平原を突っ走る。あばよ」ときびすを返した。

リサがキララ子の背中を押した。オートバイにまたがろうとしていたツッパリくんはキララ子に気がついて、土手の黄色い野花を一本折り取ってキララ子にわたした。

ハーレイダヴィッドソンの轟音が山の中に吸いこまれていった。

17　ホッホくんが決闘の練習相手になる

リーダーシップキャンプの帰りに、中三生たちは道志川の河川敷に下りて遊んだ。向こう岸へ石投げをしていた時、ホッホの投げた石が横にいた生徒の方へ飛んできた。剣矢がホッホに石を投げさせてみると、ホッホは腕の振り方も石の放し方もできていなかった。

剣矢がホッホに投げ方を教えるうちに、ホッホは投げたい方向へ石を投げられるようになった。「おまえ、覚え方が速い。なんで？」と剣矢が驚いた。

数日後、剣矢とホッホは-ツッパリくんに連れられて、合氣道の道場に吉田館長を訪ねた。

「この男が一木剣矢です。もう一人、連れてきました」

館長先生はにこにこして穏かな人だった。「剣矢くんのことは宮坂豪利先生から聞いています。きみは決闘に勝つために合氣道を習いたいのですね？」

「はい。そんなのだめですか？」

「動機はなんでもけっこうです」

館長先生はツッパリくんに聞いた。「サッカー選手の剣矢くんは、脚をケンカには使わないと決めているそうですね？」

「はい。こいつはこいつなりの原則を持っているのです」

「ほう、どんな原則ですか？」

「自分は若いから電車やバスでは座らない、とかです」

「ぼく、中途半端な年寄りや女の人が来たとき、席を譲ろうかどうしようかって迷うよりも、座らないって決めておいた方が楽です」

「剣矢くんは逃げるのが嫌いだそうですね。きみにとって逃げるとはどういうことを言うのですか？」

「相手に背中を見せることです」

「なるほど」。館長先生は周りに集まっている道場生たちに、「技をやってみせるように」と指示した。若いお兄さんとお姉さんが前に出て向かい合った。

「今からお兄さんがお姉さんに襲いかかります。剣矢くんはお姉さんがどんな動き方をするのかを見てください」

大きな男の先生が、小柄な女の先生に向かって腕を振り下ろした。女の先生はすっと動くと、男の先生を前方へ投げ飛ばした。男の先生はくるりと一回転して立ち上がり、ストレートパンチをくりだした。女の先生はまたすっと動いて男の先生を投げ飛ばした。

剣矢には優雅な踊りのように見えた。動から静へ、静から動への変化がきれいだった。

「剣矢くんにはどう見えましたかな？　お姉さんは背中を見せて逃げていましたかな？」

「いいえ、投げたあと、すぐに次の攻撃に備えて、相手と向かい合っていました。あの女の先生みたいに動けば、ぼくは決闘に勝つことができますか？」

「そうです。島岡先生のように動くことができれば勝てますね。それには心を静め、相手の氣を尊重することです」

（心を静める？　氣？）と剣矢は思ったが、『合氣道には人間にとっての真実がある』と言っているツッパリくんの言葉に導かれて入会を決めた。

ホッホはおずおずと、「ぼくは運動神経が鈍いんです」と言うと、館長先生はにこにこ応えた。「まじめに稽古をすれば、だれでも上達します」

二人は子どもクラスに入った。稽古はいつも受け身から始まった。くるりくるりと前へ転がる受け身、走っていって前方へ跳びこみ、回転して立ち上がる受身などだ。サッカーで転ぶことになれている剣矢の上達は速かったが、運動能力がなさそうに見えたホッホの上達も速かった。

立っているときの姿が安定しているかどうかのテストが毎回あった。「きをつけ」の姿勢で胸をぴんと張って立つと、体に力が入って、ほんのちょっと押されただけでもぐらついた。リラックスして立つと少しくらいの力で押されても動かなかった。ホッホは剣矢よりぐらつかなかった。

「なんでおまえみたいなへなちょこができて、おれができねえんだよ」

指導の島岡先生が涼やかに笑った。「剣矢くんは力を抜いたつもりでも、押されると、動くまいと思って体に力を入れてしまうから動くのよ。江川くんは力を抜いていて、相手が押してきた力を吸い取ってしまうから動かないの。江川くん、とてもいいわ」

投げ技も学んだ。初心者が黒帯の先生たちを投げ飛ばすことなどできないが、技に〈氣〉が入っているときには、先生たちは投げられてくれた。投げられてくれないときには、剣矢は「力を抜いて」と言われ、ホッホは「氣を出して」と言われた。

剣矢が道場に入って一ヶ月ほどしたとき、ツッパリくんが剣矢の稽古を見にやってきて、「力んでやがる」とつぶやいて、館長先生に頼んだ。「剣矢は勝てない相手を倒そうと思っています。むりだってことを教えてやってください。ただ、剣矢は言葉で言われても納得しません。やつが納得できるようにやってください」

「宮坂豪利先生は決闘のことを、何と思っているのですか？」

「剣矢は無理な戦いとわかってやっている。剣矢は学ぶ力があるから、失敗はさせた方がいい、と言ってます」

「それならこちらも少し荒療治をやってみましょうか。島岡先生、いかがですかな？」

「剣矢くんは受け身が上手です。あまり手加減しないで相手をしてみます」
最初に剣矢が島岡先生を攻撃することになって、こぶしを突き出して突進した。剣矢は体がふわりと浮いたと思ったら、畳の上に転がされていた。次に島岡先生が剣矢に打ちかかった。剣矢はその腕をつかんで投げようとしたが、小柄な女の先生はそのまま動かなかった。剣矢がもう一度投げようと力んだ瞬間、剣矢はコマのように回って横たわっていた。
剣矢はさっと立ち上がると島岡先生に一礼して、道場のすみに行って正座し、道場で教わっている呼吸法をやった。目をつぶって息をゆっくり吸いゆっくり吐く、を繰り返した。
島岡先生が「剣矢くん」と声をかけてきた。
「はい、ぼくは力ではだめだってことがわかりました。ぼくはケンカ腰でやっていて、静かな心がありません」
島岡先生は剣矢の言葉を館長先生に伝えた。
「ほう、剣矢くんはもうそんな理解ができるのですか」と館長先生はうなずいて、ツッパリくんに言った。「このあとどうするかは、きみが剣矢くんに問いかけてください。豪利先生の教育方針があるでしょうから」
ツッパリくんが剣矢を呼んだ。「おまえは本当に決闘をする気か？」
「します」
「どうやって戦うつもりだ？」
剣矢は館長先生に向かって言った。「攻撃の受け方だけにしぼって学びたいです」
「ではそうしましょう。島岡先生、剣矢くんには間合いをとること、心を静めること、相手の氣を尊重することを指導してください。投げ技はまだ教えないでください」
島岡先生の指導が始まった。「剣矢くんは〈間合いをとる〉の意味がわかるかしら？」
「わかりません」
「相手が一歩踏みこまないと、自分に届かない距離のことよ」
立っている島岡先生に対して、剣矢が間合いをとった。
「では、わたしの肩をつかまえにきてごらん」
剣矢が先生の肩をつかまえにいった。先生がすっと動いて、剣矢はさわることができなかった。
次は島岡先生が攻撃する番で、剣矢が間合いをとった。先生の姿には攻撃をする雰囲気がなかったが、アッと思ったときには剣矢は肩をつかまれていた。
「もう一回やってみようね」と、島岡先生が攻撃の姿勢をとったので、剣矢が身がまえると、先生は「そんなにらんではいけないのよ。にらむということは、心に力が入って、体がかたくなっているということだから、相手の動きに対応できないの。力をぬいて心を静め、穏やかな気持ちで相手を見るようにしてごらんなさい」
島岡先生がこぶしを突き出して攻撃をしてきた。剣矢が後ろに大きく跳んだ。
「そんなに大きく跳んだら体に力が入って、次の動きが鈍くなって、相手に踏みこまれてしまうわ。こぶしに打たれないていどに体を開き、相手の氣を尊重して、『どうぞ』とい

う気持ちで、相手に道をゆずってやるのよ」
稽古の帰り道で、剣矢がホッホに言った。「氣って、『やる氣がある』の氣だろう？　おれ、いつだってやる氣を出してるよ。だけど力を抜けって言われる。氣を出すことと力を抜くことって、どうやれば両立できるんだろう？　心を静めるってことも、おれの一番できないことなんだ」
「剣矢くんは学校の帰りに、薬師池公園で一人稽古をやっているのでしょう？　ぼくでよかったら相手をします。学んだことを練習しましょうよ」
「えっ、おまえがおれの相手をできるの？」
ティーニー塾の中三クラスの授業で、豪利が剣矢に聞いた。「きみは決闘の心構えがもうできているとツッパリが言っている。きみの決闘相手のデカとはどんな少年だ？」
「顔も体もでかくてごついやつです」
「やーだ、剣矢くん、そんな人と戦って勝てると思ったの？」
「思わなかった。だけどおれの直感が決闘って言っちゃったんだもん」
「直感が？　何て言ったんだ？」
「デカはおれを堂々と負かす、って言った」
「堂々と負かすか……剣矢は直感と言う単語をよく使うし、キララ子も剣矢の直感をほめている。おい、キララ子、きみは剣矢の直感をどう思ってるんだ？」
「はい、剣矢が瞬間的に言ったりやったりするときは、いつも新鮮なものをわたしは感じています」
「そうなのです」とデップリンが大きな声を出した。「剣矢がティーニー塾に入ったのも、庭の看板の、〈小さな教室、大きな笑顔〉という言葉と子どもたちの笑顔の絵を見て、直感的に、『自分はこの塾に入るべき人間だ』って思ったからです」
「うん、そうだったな……では、その直感とはなんだ？……きみたち、どう思う？」
「幼いころから良いものに触れ、良いものを感じとり、無意識に育ててきた感覚が、何かの時に一瞬で判断するものだと思います。剣矢くんは良い直感が優れています」
「おお、キララ子はそう思うのか。よし、剣矢、この決闘は剣矢の良き直感が創り出した戦いと思って俺は納得する。堂々と負かしてもらってこい」
剣矢はホッホに相手をしてもらい、薬師池公園の林の中で決闘の練習をした。
ホッホが攻撃し、剣矢が受けた。剣矢はホッホの一回目の攻撃はかわせても、連続して攻撃されると捕まえられてしまった。
「今みたいな攻撃は、どうやってかわせばいいのかなぁ？」
「剣矢くんはぼくが攻撃の構えをとると、ぼくが何にもしないうちに動き始めるから、ドタバタしてしまって、ぼくからは次の動きが見えてしまうんです」
「そうだよね、おれには静かな心がないもんね」と剣矢は納得して、心を静めたつもりになってやってみたが、やはり捕まえられてしまった。
「どうやってよければいいのかなあ？」

「あの……よけるって言葉は、逃げるって言葉と同じじゃないでしょうか？」
「よけると逃げるが同じ？……どういうこと？」
「逃げるは、剣矢くんがきらいなマイナスの心です。よけるもマイナスの心じゃないでしょうか？　島岡先生は、攻撃してくる相手の氣持ちを尊重して、『どうぞ』と、通りすがりの人に道をゆずるみたいにするんだって言いました。そうすると相手は空振りするし、自分は打たれません。これなら余裕のあるプラスの心ではないでしょうか？」
「そうか……なんか、わかったような気がする」
　剣矢は青い草の中に一人で立って、相手が攻撃してくる姿を想像し、「どうぞ」「お先にどうぞ」と言いながら、見えない相手に腕を差しのべて道をゆずった。
「ほんとだ。気持にゆとりができる」
　剣矢はホッホを見つめた。「おれ、おまえのこと、生きていく知恵がない、へなちょこ坊やだって思ってた」
　二人は向き合って間合いをとった。ホッホが跳びかかり、剣矢が軽くステップを踏んで、「お先にどうぞ」と声に出して道をゆずった。次の攻撃ではホッホはゆるゆると小走りに近づいていって、剣矢を捕まえた。
「なんだよ！　ゆっくり攻撃なんてするなよ。跳びかかってこいよ」
「あの……決闘やるのに、相手に攻撃の仕方を注文できるんですか？」
「あ、そうだよね」と剣矢は草の上にひっくり返って笑った。
「そうやって草の上に寝るって、どんな感じなのですか？」
「おまえ、草の上に寝転がったことないんだ。裸足になったこともない……じゃあ靴ぬいで、靴下ぬいで、横になってみな」
　ホッホは靴ぬいで、靴下ぬいで、草の上に寝転んだ。
「あぁ……草のにおいがする。光の中で木の葉がゆれている……さわやかって、こういう感じを言うんだなぁ……空が青い……ぼくッパリくんに『顔を上げろ。空を見ろ』と言われた時の空の青さと、ツッパリくんの体の温かさを思い出すなぁ」
「あのとき、おまえ、泣いたよね。おれ、ひでぇことやったもんね」
「そうじゃないんです。あのとき、ぼくは空が青いことを初めて知ったんです。ぼくはものを見てこなかった、『これからはものをしっかり見よう』って思ってみんなを見たら、みんなが優しい目でぼくを見ていたんです。そうしたら、『ぼくはティーニータイニー塾と出会ったのだ。ぼくはここで何かを始められる』って思えて、涙が出たんです」
「何を始めたんだ？」
「扉を開けました。光が射しこんで、目がくらむくらいです」
「よくしゃべるようになったもんね。おまえ、友だちいないんだって？」
「人がこわかったんです。そんなんじゃ、だれも相手にしてくれません。テストでいい点とったときだけ、みんなは幽霊見るみたいにぼくを見ますが、それっきりです。でもティーニー塾に入ったら、ホッホ、ホッホってみんなが呼んでくれて、『ぼくは存在している

んだ』って思えたんです。剣矢くんには『ホッホッホって笑うな』ってやっつけられて、その通りだと思いました。それにホッホって、いい音です」
「おれもおまえのことをばかにして、ツッパリくんに『人に向かって、そこまでやっていいのか！』って怒られたことで、おれも人間のことを考えるようになってるんだ」

18　決闘

ひなたむら公園の林の中に小さな草地がある。周りは土手で、その一辺は石垣である。
七月十五日。剣矢、デップリン、ホッホが草地で緊張して待ち、ツッパリくんは寝ころんでいた。ツッパリくんはアメリカ行きを数日延ばして、決闘の審判をすることにしたのである。
「来ました！　やつらです」
ツッパリくんがむっくり起き上がった。「剣矢は真ん中に立て。二人は土手にさがれ」
林の中から少年たちが現れた。少年たちは金髪のツッパリくんを見て顔を寄せあった。
「こんにちは！」。デップリンが腕を大きく振った。「応援の人はこちらでーす！」
「いっしょに応援しましょう！」とホッホも呼びかけた。
デカが大またに近づいて、ツッパリくんの顔を見ないで剣矢の前に立った。
「決闘に来たんだな？」。ツッパリくんが後ろから声をかけた。
「はい」。デカが振り向いてツッパリくんを見た。デカのギョロ目がぎぎーっと音をたてるくらい開いた。
ツッパリくんはうなずいた。「おいらは植田だ。大学生をやっている。この勝負はおいらが審判をつとめる。おたがいに向き合って名をなのれ」
「中三、一木剣矢だ！」
「中三、青木清だ」
「じゃあ、決闘とやらを見せてもらおうか」とツッパリくんは土手に腰を下ろした。
身構えていた剣矢とデカはきょとんとした。
「へい、へーい、始めてくれーい……剣矢、おまえから動け」
「動けません。青木が攻撃してこなければ、おれは動けません」
「何を言ってるんだ。きみが勝手に決闘を決めたんだ。そっちからかかってこい！」
剣矢は動かなかった。ツッパリくんが土手にいるコロ丸とヒョロナガを呼んだ。
「おまえらはなんで決闘の挑戦を受けたんだ？」
「ぼくに原因があります！」
「おまえか、かつあげしようとしたのは？」
あの日、ヒョロナガは剣矢に恥をかかされた腹いせに、「カネを持ってこい」と、思ってもいなかったことを口走ってしまったのだった。次の日、ヒョロナガはクヌギ林でふる

えながら剣矢を待った。そこへデカとコロ丸がやってきた。ヒョロナガはかつあげを白状した。
「青木がぼくの責任をとって、決闘を受けてくれたんです」
「ぼくたち、小さいときからいっしょに育ってきました」
「そっか……剣矢、どうする？……おしまいにするか？」
剣矢が中途半端な顔になった。
「このまま別れたんじゃあサマにならねえって顔だな？」
ツッパリくんの声が変わった。「よし、けじめをつけよう。ルールを決める」
ツッパリくんは、何か言いたそうにしているコロ丸とヒョロナガを土手に戻し、デカには、「剣矢は逃げることをしない。サッカーをやっているから、その脚で人を蹴らないとも決めている」と話した。
「禁じ手は、剣矢は蹴ること、青木はなぐることだ。勝負は、青木が剣矢を捕まえるか、剣矢が背中を見せて逃げるかしたら青木の勝ち。剣矢が青木に捕まえられなければ剣矢の勝ちとする。勝負は三分だ」
剣矢とデカが向かいあって間合いをとった。
「はじめ！」
ツッパリくんの凛とした声がクヌギ林の中に響いた。
デカが低く吠え、両腕を高く上げ、大股で近づき、剣矢をつかもうと腕を振り下ろした。剣矢は横へ一歩、スッと踏み出した。デカは、あれっ、という顔になった。
デカは今度は小走りに近づき、腕を振り下ろした。空振りだった。振り向くと目の前に剣矢が立っていた。デカの顔から笑いが消えた。デカは吠えるのをやめ、勢いよく走って腕をのばした。わずかなところで剣矢を逃がした。
デカの顔が本気になった。デカはとつぜん「メーン」と叫んで鋭く踏みこみ、竹刀で打つように両腕を振り下ろした。剣矢があやうく身をかわすと、デカはまた「メーン」と叫んで跳びこんできた。一瞬の間もないスピードに剣矢は対応できず、その場にぱっと四つんばいになった。デカは空振りし、剣矢の体につまずいて転んだ。
「青木！」とツッパリくんが声をかけた。「おまえ、剣道の段、持ってるな？」
「はい。持ってます」
「剣矢、勝てねえよ。今みたいに連続攻撃されたら、おまえにはさばけねえ」
「でも、やります」
デカと剣矢は中央に戻って向かい合った。デカは剣矢が間合いをとるのを待ってから、刀を持つようにして正眼のかまえをとり、「メーン」と打ちこんだ。剣矢は大きく跳んで、バランスをくずした。
デカはそれを見て連続攻撃をやめ、剣矢の姿勢が整うのを待ってから、じりっ、じりっと前へ進み、剣矢を石垣まで追いつめると、くるりと背中を見せ、大またで中央に戻った。剣矢は走ってデカの前に立った。

「清ちゃん、攻撃しろ！　休むな！　まじめにやれ！」
「まじめにやってるよ、こいつ！」と剣矢がどなった。
それがすきになった。デカが気合とともに跳びこみ、剣矢を抱え、地面に押し倒し、膝をついて上から見つめた。
「きみ、何のスポーツやっているんだ？」
「サッカーだ」
「サッカーにはない動き方があった」
「合氣道だ」
「良い稽古になった」
デカは剣矢を引き起こし、ツッパリくんに向かって頭を下げた。
コロ丸とヒョロナガが駈けよってきた。「清ちゃん、もしかして、この人？」
「そうだよ。植田のお兄ちゃんだ！」
「ヤッタ　ヤッター！」。二人は飛び上がって叫んだ。「植田のお兄ちゃんだ！　植田のお兄ちゃんに、ついに会えた！」
「おまえら、あのときのマンガ三兄弟だな？」
「はい！　ぼくたち、あのときのマンガ三兄弟です！　あのときは助けてくれて、ありがとうございました！」
六年前のことだった。小三の男の子三人が、この石垣の前でサッカーボールで遊んでいると、乱暴な顔をした一人の中学生がやってきて、三人からボールを取り上げ、自分の前に三つのボールを置き、体の大きなデカをキーパーにして立たせ、ボールを次々に蹴りこんだのだ。
中学生はボールがそれて石垣ではね返ると、コロ丸とヒョロナガにひろいに行かせ、蹴ったボールがデカに捕られると腹をたて、数メートルまでデカに近寄って蹴りこんだ。デカは中学生の強いボールを体に当てて耐えた。コロ丸とヒョロナガは「やめて！　やめてください！」と叫んだ。
そこへ中二のツッパリくんが通りかかり、中学生と取っ組みあいになった。ツッパリくんは相手が戦闘意欲を失うまでやっつけ、土手から下の草むらに突き落とした。そのあとツッパリくんは、恐怖でひきつっていた少年たちとサッカーボールで遊んでやった。ツッパリくんは三人の体の特長と雰囲気から「マンガ三兄弟」と呼び、少年たちは「植田のお兄ちゃん」と言ってなついたのだった。
「ぼくたち、植田のお兄ちゃんに会いたくて、ときどきここへ来たんです」
「そっか。おいらも剣矢が話す三人の様子と、吸い殻が片づけられていたということから、不良少年三人とはマンガ三兄弟だと想像がついたぜ」
「青木くん！」とデップリンが呼びかけた。「ぼくです。子ども剣道クラブでいっしょだった伊藤です。青木くんには負けてばかりで、いつも泣いていた伊藤ヒロキです」
デップリン、ホッホ、剣矢は、ティーニータイニー塾で待っている中三生たちのところ

へ戻り、決闘の様子とマンガ三兄弟の姿を面白おかしく話した。
豪利が剣矢に声をかけた。「どうした、剣矢？　口数が少ないな？」
剣矢は立ち上がった。「おれのことでみんなに心配かけてしまって、すいませんでした。おれ、デカに決闘を申しこんだ瞬間に、おれはバカなことを言ってるって思ったんだけど、口にしてしまったから引けなかったです。みんながクヌギ林にあいつらを探しに行ったり、ツッパリくんが審判をしてくれるなんて思わなかったです。それと、今日、デカはおれがよけられないってわかると、おれの体勢が整うのを待ってから攻撃するように変えました。『おれって人を見る目がないやつだ』って思いました」
「おお、そうか。俺は決闘のことを知った以上、決闘の日にはその場に行って戦いをやめさせるか、ルールのある戦いにさせるつもりだった。高校生たちもツッパリに相談したら、ツッパリが『自分が決闘に立ちあう』と言ってくれたんだ。ツッパリは剣矢が語った不良少年三人とは、数年前に出会ったマンガ三兄弟とわかって、『あいつらなら心配はいらない』と言った。俺はそれを中三生と高校生たちに話し、剣矢の母ちゃんにも伝えた。母ちゃんは『あのオッチョコチョイはこわい目に合った方がいい。その子たちのことは剣矢には言わないで決闘に行かせる』って笑った。さて、剣矢、決闘は終わった。もう、合氣道を学ぶ目的は果たせたかな？」
「はい、果たせました。だけど、おれ、合氣道は続けます。おれ、サッカーで球際に弱いんで強くなりたいです。おれは体が小さいから、でかい選手とぶつかると吹っ飛ばされるんです」
「小さい者が吹っ飛ばされるのは当たり前だ。がんばったら怪我をする」
「吹っ飛ばされない方法って、合氣道から学べないですか？」
「もうきみは学んでいるよ。きみは受け身がうまいそうだ。それは体を柔らかく使えていることなんだから、がんばらないで肘の力をぬけば、ぶつかっても腕が相手の力を吸収できるし、転んでも素早く立ち上がれるんじゃないのか？」
「はい、そう感じ始めています。だからおれ、心と体の関係をしっかり学びたいです。だってさあ、紙で木を切るなんてことを見てしまったし、女が二人とも切ったのを見てしまったんだよ。そんなの見たから、力じゃないってことはわかった。だけど、じゃあなぜ力をぬけば切れるのかってことはわかんない。〈力を抜いたらできるオレ〉ってなると、ぜんぜんイメージできない。ゴリ先生はイメージトレーニングだけで合氣道の稽古をやってるって言うけど、どうやってんの？」
「おれは関節の病があって稽古ができないから、イメージトレーニングをやってるんだが、これがとてもいい。剣矢は学んだ技を一人稽古で復習したのかな？」
「したよ。決闘に備えて、相手の動きを想像して、一人稽古、いっぱいやった」
「その時、相手の動きのスピードも想像してやったのか？」
「そんなこと想像しなかった」
「だが、決闘ではデカのスピードに応じられたみたいだな？」

「うん、ある程度は応じられた……どうしてだろ？」
「俺は一人稽古で、相手が仕掛けてくる技、それに応じる技をイメージして、技のスピードは極めてゆっくり、スローモーションでやっている。そうするとイメージの中で心と体が一致する。心が体を動かすことがわかる。だから俺は稽古はやめたのに、合氣道は上達していると思っている。剣矢はものの感じ方、とらえ方が良い。ものの本質に触れて驚くということができる。それを長所と自覚して育てたらいい」

19　「先生、子どもはほめて育ててください」

中三生の二週間にわたる夏期講習の初日、豪利は生徒たちに、ティーニータイニー塾で創った数学の問題集について感想を求めると、キララ子が目を輝かして応えた。
「中学生だったツッパリくんが、大学生のヒューモくんが創った問題に、『学ぶ生徒への優しさがある』って言って、そこからできたのがこの数学の問題集なのですか？」
「そうだよ。ツッパリの言葉を受けて、ヒューモくんが張り切って創ってくれたのだ」
「先生、ティーニー塾では入試対策はしないんだよね？」と剣矢がきいた。
「するよ。手取り足取りして教えこむことをしないだけだ」
「もうちょっと丁寧に説明してよ。おれ、多摩丘陵高校のサッカーが好きだから、あの学校に行きたい。だけどおれ、数学できない。五十点くらい上げないと合格しない」
「剣矢は伸びる」
「ゴリ先生はそう言うけどさ、きらいな数学を五十点も上げるなんてできんの？」
「できる。気持ちの持ち方しだいだ。剣矢はできるようになろうと思えばできる」
「よっし、おれ、気持ち変えよう！　数学を面倒くさいって思わないで、面白いことを学べるって思うようにしよう」
「剣矢はそうやって気持ちを前向きに変えられるんだよね」とデップリンが感心した。
「先生、ぼくの心配性とおせっかいはなおせるのでしょうか？　心配性とおせっかいがぼくを小さくしているんです」
「デップリンはこの前もそう言ったが、その時リサからなんと言われたんだっけかな？」
『デップリンの心には親切心がつまっている』って言ってもらえました」
「きみはその言葉の意味をちゃんと考えているのか？」
「考えています。でもリサさんからの励ましの言葉と、ぼくの心配性、おせっかいとがどうつながるのでしょうか？」
「うん、そうか……デップリンは〈見つめる〉ということをやっていないんだ……きみが見つめることを覚えれば、いろいろ見えるようになると俺は思っているんだがな」
「見つめるって、どういうことでしょうか？」
「そこは自分で考えるところだぞ。きみは雄大な人物になることを期待されている人だ」
「ありがとうございます。自分で考えます！　見つめるってどういうことかを考えながら

夏期講習に臨みます」
「素直なやつ」と剣矢が笑った。「だけどおまえが見つめるなんてこと、できんのかな？」
「おお、デップリンならできるとも！　心がどこまでも良いんだ。その心を自分に向けるようにしたら、できるようになる」
キララ子がきいた。「ゴリ先生はそうやって子どもをほめることが最初からできたのですか？」
「いや、いや、俺は子どもの教育のことを、そんなに深くは考えないで塾を開いた。だが子どもの成長に携わりたくて塾を始めたことは確かだから、子どもは〈本気でほめてやれば、張り切って自分を伸ばしていく〉ということを体験で知ってからは、ほめようとするようになった。ほめることは意識すれば見つけられるようになるものだ」
「先生は子どもを叱らないけど、どうしてですか？」
「いや、初めはマイナス面をなおしてやろうとする気持ちが強くて、叱ってしまうことをよくやったよ。（俺は叱って指導することしかできないのか？）と思っていたとき、ある生徒の一言で俺は励まされ、自信になり、生徒たちに対する俺の姿勢が決まったのだ」
「生徒の一言って、どんな一言だったのですか？」
「うん、数年前の夏合宿でのことだ。中学生たちがキャンプファイアーの火を囲んでいた時、田中タケルという中三生が、『ゴリ先生は必ずぼくたちの長所をほめてくれる』と言ったのだ。タケルは授業でも合宿でも目立たなかったし、そんなことを言うタイプの生徒でなかったから.俺は驚いた。俺は彼にどんなほめ言葉をかけたのかと思い出そうとしたが思い出せなかった。それなら（今、彼をほめてやるとしたら、俺はどんなほめ言葉をかけてやれるのか？）と考えたが、それも見つけられなかった。それで俺はタケルに、『俺はどんなことできみをほめたのか？』と聞いたんだ。そうしたら、彼が落書きをしていたノートを俺が手に取って、『のどかな絵だ。タケルは人に安らぎを与える心を持っている』と言ったんだそうだ。『ぼくはそれが自信になりました』と彼は言った。俺はこの時、俺こそタケルの言葉で（教師として、自信をもらった）と思って、みんなの前でタケルに感謝した。以後、俺は叱ることが少なくなり、ほめることが多くなった。今、タケルは障害のある人たちのお世話をする仕事に就こうと、専門学校に通っている」
「あー、ぼくは小学生の時、いつもいつもゴリ先生のほめ言葉に恋い焦がれて、ティーニータイニー塾に通ってきていました」
「おお、デップリンはそうだった。俺がタケルの言葉に出会った頃、俺は小五のきみが書いた作文で、『先生、子どもはほめて育ててください』という言葉に出会ったのだ。その文章はこうだ。『ぼくはゴリ先生にほめてもらいたくて、ティーニータイニー塾に来ています。ぼくは先生のほめ言葉に恋い焦がれています。でも先生はときどき冷たい目でぼくを見ます。そういうとき、ぼくの体は骨まで凍って、ぽきぽき折れてしまいそうになります。先生、子どもはほめて育ててください』
これを読んだとき、俺は子どもの心を思って涙が出た。『冷たい目で見る』には参った。

俺は冷たい目で子どもを見ていないはずだが、デップリンにそう思われたのは、デップリンの声がでかくて、ときどき（うるせいな）と思う気持ちが顔に出て、『冷たい目』ととらえられてしまったのだと思った。以後、俺は反省し、表情に気を付けている……ん？リサ、何か言いたそうだな。何だ？」

「わたしは小六のとき、ゴリ先生から、『反省するよりも、自分をほめろ』って言われました。英語劇の小人の役で、わたしが他の人たちみたいな大きな声が出せなくて、うじうじ反省したら、先生は『声の大小は体質だ。そんなことを反省しないで、自分の声の美しさをほめろ』って言われて、うれしくって、自分の声に目を向けたら、自信が出て、大きな声も少し出せるようになりました。先生はデップリンの声を（うるさい）と思った気持ちの反省を、ほめることにつなげられたのですか？」

「おお、その問いに俺はちゃんと応えられるかな？……うん、俺は（うるさい）と思ったことを反省して、でかい声をプラスに捉えようと考えた。すると、デップリンは（率直で、正直で、善意で、いつも温かい）とほめ言葉が次々に浮かんできた。声量は豊かで、人の耳に心地良い。（うるさい）と思ったことへの反省は自分にとってのことで、他人には関係ないが。だが、大きな声をプラスにとらえて発見したほめ言葉は、自分一人の言葉ではなくなって、相手を喜ばせ、他の人たちにも良い影響を与えられる。そういう言葉を持てた自分をほめてもやれる、と俺の自信にもなった。

それ以来、俺は生徒のかくれた心根を見つめ、長所をつかみ、言葉に出してほめてやろう、と意識するようになった。子どもを叱らなくなった」

「どうやったら子どもを叱らなくなれたのですか？」「

「叱られることよりも、ほめられることで子どもは成長するとわかり、俺の意識が変わったからだ。例えば俺があることで生徒を叱り、その生徒が良くなったとする。だが良くなったのは俺が期待したレベルまでだ。つまり俺という人間のレベルまでだ。一方ほめられたら、生徒の心は伸びやかになり、弾み、自分で工夫し、創造的になる。ほめることができない者は人を見る目がない。叱ることしかできない者は人として貧しい。俺はそう考えるようになったら、案外かんたんに叱ることをやめられた。だがほめる目を持つことの方は、人としての成長が必要だから努力しないとな……さて、鉄平、きみの志望高校はどこだい？」

「おれ、高校、どこでもいい」

「どうして？」

「おれ、なんで高校に行くのかわかんない」

「だめです」とデップリン大きな声を出した。「ちゃんと高校生になってください」

「なるけど……高校生になるって、なんかよくわかんない」

「俺もそうだったよ」と豪利が言った。「俺は高校生のときは剣道ばかりやっていて、他のことは何も考えなかった。高三になって、みんなが大学のことを話し出したときに、みんなが大学に行くから俺も行こう、くらいにしか考えなかった」

「でも先生は早稲田大学に入りました」
「うん、ある人との出会いがあったから早稲田に行った」
「どんな人と出会ったのですか？」
「俺が高校に入ったときの生徒会長で、幅下さんという実に素朴な人で、俺は幅下さんの朴訥な雰囲気に憧れてしまった。高一生では生徒会長なんて人と言葉を交わす機会はなかったが、高三の秋にその先輩と駅でばったり出会って、先輩から名前で呼びかけられたんだ。まあ、感激した。幅下さんによると、高一の俺が剣道の稽古で、指導教官から突き倒されたり、道場の板壁にたたきつけられたりしても、泣きながらかかっていく姿を見て、気骨のある生徒だと感心したんだって。だけど教官はやりすぎだと思って、生徒会長として抗議したら、教官は『しごいたのではない。打ちこんでくるときに力が入りすぎていたから、軽くさばいるだけで、この稽古は彼の希望だ。それに彼は面白い。枠にはまらない考え方をする』と応えたので、俺のことを記憶したんだそうだ。そして『早稲田に来なよ。自由な校風だ。個性の強い学生もいて、変なっぷりが面白い』って言われて、それで『俺は早稲田に行く』って決めたんだ」
「人との出会いってことになるんですね」
「言葉との出会いでもあるな。良き出会というものは、日々を一生けんめいに生きている者とか、何かを真面目に求めている者にやってくる。のんべんだらりんとしている者は、良き出会いとなるものが目の前に来ても気がつかない」
「おれ、一生けんめいに考えたことない」と鉄平がぼそりと言った。
　豪利が笑った。「高校へ行く意味を考えていない者に、受験勉強は意味があるのかな？　俺はこの夏期講習を受験対策にするつもりはないが、それでもみんなに、そういう問題集で勉強させようとしてるんだよな」
「先生、みんなが同じ勉強をするのはやめましょう！」とデップリンが言った。「理王は筑波大付属駒場中のまだ二年生、ホッホは系列の高校に進みます。ぼくとキララ子は町田高校、リサは農業大学の付属高校、剣矢はゴリ先生が伸びると言ってますから、もうみんな合格します。ですから、この講習はそれぞれがテーマを見つけて、自分の将来の力になるような学び方ってものを探ってみたら面白いと思います。
「賛成！　おれ、数学をうんとやろう！　鉄平は何やりたい？」
「わかんない。おれの頭ん中、ドラエモンばっかだから」と鉄平はデップリンを見た。
「おれ、この塾に入ったとき、『ジャイアンて、ティーニー塾の人だったんか？』ってびびったもん」
　リサが「わたしは地理と歴史の勉強をします」とつぶやいた。「わたし、学校の授業で先生から、『ヤマタイコクの女王はだれか』って聞かれて、『エリザベス女王』って答えたの。だって先生が黒板にヤマタイコクってカタカナで書いたんだもん」
　ホッホがリサをのぞきこんだ。「リサさんは知らなすぎです」
　理王がホッホをにらんだ。「おまえ、そんなこと言えるのか！　リサはてめえのまぬけ

ぶりを、ずっとかばってきたんだぞ」
「そうだよ、ホッホ、青い顔にならないで、なんか言えよ。表現意欲のない奴だ」
「まあ、待て、剣矢。ホッホはきみの決闘の練習相手を買って出たんだぞ。素晴らしい表現意欲じゃないか。だが、ホッホ、今のリサへの言い方はいけない……さて、リサ」と豪利はリサの地図帳を手にした。「リサの地図帳は新品のままだな」
豪利は黒板に世界地図と日本地図を張りつけた。「リサ、前に出てきてごらん。イギリスはどこかな？」
リサが恥ずかしそうに一点を指した。「うん、そこはアメリカだ。では北海道はどこだ？……それは九州だ……この講習が終わってから行く長野県の大町市は？……これまでリサは大町へはどうやって行ったのだ？」
「キララ子にくっついて行きました」
「そうか。じゃあ、リサは夏期講習は地図帳を見ることを主にやったらどうかな？　地図帳には情報がいっぱいあるんだぞ。リサなら地図帳をていねいに見ることで、今まで関心のなかったことが見えてきて、その関心が次の関心を育て、生活が面白くなると思うよ」
キララ子が「リサ、今年はあんたがわたしを大町まで連れて行ってね」と言った。
ホッホが遠慮がちに「リサさん」と呼びかけた。「さっきの言葉はすみませんでした。ぼくに地理の勉強のお手伝いさせてください。ぼく、地理が好きなんです」
「おお、ホッホ、手伝ってやれ。ただし教えこむな。リサは知恵がある。リサがその知恵を生かして、自分で学びたくなるように導くんだぞ。鉄平、きみは何を学びたいのかな？」
「おれ、英語、読めない。読めるようになりたい」
「おお、そうか。じゃあ鉄平、夏期講習でやる予定の、この本の最初のページを、今読んでみてくれ」と豪利は『ユーモアストーリー短編集』をみんなに配った。
鉄平がたどたどしく読み出し、もたつくと、すぐにデップリンが読み方を直してやり、鉄平はその真似をしながら読んでいった。途中で豪利がデップリンにストップをかけた。
「きみたち、デップリンの直し方をどう思う？」
リサは「デップリンらしい親切でした」と言った。
「そうかしら？　わたしは教えすぎだと思うわ。デップリンは、鉄平がどう読もうかを考える時間も与えないで直したのよ」
「あー、ぼくの口出しが早すぎたということでしょうか？　理王、ぼくをどう思う？」
「おまえはおせっかいオヤジをやっていたよ」
豪利は黒板に population という単語を書いた。「鉄平、これを読んでみてくれ。きみが読んだところに何回も出てきて、デップリンにそのつど訂正された単語だ」
鉄平は「ポ……プ……ラ……チ……」と読んだ。
「あー、鉄平がそう読んだということは、ぼくの直し方は、鉄平の役に立たなかったということです」
「うん、そうだ。鉄平は読めなかったけど、自分の目で見て読もうとしていたよ。だがデ

ップリンはそこに気がつかないですぐに直してやった。もしきみが、鉄平の目に字が見えるようにゆっくり読んでやっていたら、鉄平は今、読めていたと思う……鉄平、読み方は字をしっかり見ながらゆっくり読め。速く読む必要はない」
「うん、わかった。それと、おれ、国語の長文読解できるようになりたい」
「おお、そうか。じゃあ明日、話そう。ではこれでそれぞれが夏期講習中に何を勉強するかはほぼ決まったな。午前中の授業は俺、午後は克兄だが、好きにやってもいい」

20　朝日新聞コラムへの塾生たちの感想文

ティーニータイニー塾中三生の夏期講習二日目。
塾長の宮坂豪利が「鉄平の言った『国語の長文問題ができるようになりたい』ということについて考えてみよう」と話し出した。
「数年前のことになる。俺はティーニー塾に合った国語の長文読解問題を創ろうとした。入試問題によくあるように、文の一か所に線を引いて、『～とあるが、この文の意味を正しく表している内容は以下の文のどれか？』という問題を創り、答えの選択肢も定番の四つにしようとした。ところが正しい答えと間違っている答えはすぐに創れたのだが、残りの二つの選択肢がうまくできないんだよ」
「正しいのか正しくないのか迷うような答えを、二つも作るのが難しかったからですか？」
「おお、そうなんだ。俺はその時に思った。（受験者が迷うような不正解の答えを創る、という作業のために、俺は長い時間をかけていたのか）と思った。それで、以後は選択問題を創ることはやめて、『～とあることに対して、あなたの考えを述べなさい』というふうに変えたのだ」
「あ、それでティーニー塾のテストは、自分の考えを書く問題が多いんだ」
「そう。だから以後、俺は選択問題を創るときには選択肢を二つにして、正解、不正解がはっきりわかる内容にした」
「でも先生、入試問題は選択肢が四つあるじゃん。どうやって答えを選べばいいの？」
「うん、そうだよな。じゃあ、おれが高校生時代にやった方法を紹介しよう」
「先生、言わないで。自分たちで考えます！」と生徒たちが話し合った。
「できました！　最初は質問文に対する答えの選択肢の文は読まないで、自分の答えを考える。それから答えの選択肢の文を読んで、自分の答えと同じものがあったらそれを選ぶ」
「その通りだ。では、もう一つ俺がやったことがある。何かな？」
生徒たち七人は騒ぐでもなく、額を寄せ合った。
「まとまりました」とキララ子が話した。「文章を読んでいって、線が引かれた文まで来たら、それに対しての質問文を読まないで、自分だったらどんな質問をするかを考え、それから質問文を読む」
「おお、そうなんだよ」

「その質問文と先生が考えた質問とは、同じことが多かったですか？」
「同じであったりなかったりだ。だがそうやって考えたことで、それまでの文章の内容が理解できていたから、質問文を読んだとき、答えの選択肢の中に自分の正解を見つけることは難しくなかったな……さて、鉄平、高校入試で扱われる文章は中学生が共感できる内容だよ。それが難しく思えるのは、解かねばならないテスト問題文として受け身の気持ちで読んでいるからだ。そうではなくて、その文章が言っていることが『自分にとってはどうなのか』と、自分という人間をど真ん中に置いて読めば、内容が理解しやすくなる。『同感！』とか、『そうは思わない』などと思えるようになる」
そう言って豪利は一枚の文章のコピーを配った。「これは数年前の朝日新聞に載っていた〈バカロレア〉という文章で、中川という記者が書いたのだ。バカロレアというのはフランスの大学入学資格試験のことで、この文章はバカロレアをめぐって、教育について考えさせる内容だったので、その年のティーニー塾の中二の学力テストに、『この文章を読んで、思うことを述べよ』という形で出題したのだ。俺は中川記者が言っていることについて、中二生に感想を求めるのは無理だとは思ったが、ティーニー塾は、『話に耳を傾け、考え、表現し、自分の足で歩くことができる人になってほしい』と願って、授業も行事も組み立てているのだから、生徒たちは（少しは考えられるかな）という程度の期待で出題したんだ」
そのコラムの文章は、パリ駐在の中川記者が、「バカロレアの試験を終ったばかりのフランスの女子生徒に様子をたずね、彼女の取り組んだ問題を聞いてびっくりした」という書き出しから始まっていた。「哲学の問題に、『人はなぜ法律を書くのか』『芸術には必然的に宗教性が存在するか』『物体を測ることはこれを知ることになるか』などが出題され、一問を選び、解答は字数制限なしである。フランスの子どもは、街頭でいきなりマイクを突きつけられ、意見を求められても、自分の考えを理路整然と述べる」という内容だった。
中三生たちは黙って読んだ。
「俺はこの文章について、中二生に感想を求めるなんて乱暴なことだはと思ったが、中二生たちは真剣に考えてくれて、俺には感動の光景となった。それ以来、毎年中二生に出題してきている。その感想文の中から、よく考えられている文章を集めたのがこれだ」と豪利は新たなコピーを配った。
長い沈黙の後、キララ子がつぶやいた。「わたしもこれの感想文、書きたかったな」
剣矢は「なんでおれたちには書かせなかったんだよ？」と聞くともなく聞いた。
「おお、そう思うか？……実は、きみたちの一つ上の生徒の一人に、『ぼく、こんなことわかんない』って、テスト中に声に出して泣かれてしまったのだ。彼は哲学のテストで出された問題に答えるのだと思ったのだ。俺はあわてて、『そうではない。俺が求めたのは、〈この記者が言っていることについての、きみの感想を書け〉ということなんだ。俺もこんな哲学の問いは難しくて答えられないよ、と彼をなぐさめて、（やっぱりこんな感想を、中二生に求めてはいけなかったんだ）と思って、きみたちのときには出題をやめたのだ」

「あー、先生は自分がやっていることを甘く見ています。この塾の生徒たちはこの文章の意味を真剣に考えます。その泣いた人も真剣に考えたから泣いたのです」
「そうよ。先生、この感想文をこの記者さんに送ってあげてください。記者さん、（この文章を、こんなふうに真剣にとらえてくれた中学生たちがいる）って知ったら嬉しいです」

21　中二生の理王が外国人生徒に日本語を指導

昼食が終わり、中三生たちがトランプ遊びをしていると、「こんにちは！」と中二の少年がやってきて、「あーっ、デップリン、リサ、キララ子、みんないる！」と叫んだ。
「アッキーじゃん！　イギリスから帰って来たんだ！」
「リサちゃん、キララ子ちゃん、お久しぶり！」
「あらっ、理王のおばちゃん、どうしてアッキーといっしょに来たのですか？」
「ブラジルから来ているお友だちを連れてきたのよ。こちらがサントスくんで中学一年生、こちらがお母さんです。サントスくんの日本語の勉強のことで、ゴリ先生にお知恵を借りたくてお連れしたのよ」
目がぱっちりした褐色の肌の少年と、鼻がすっきりと高い外国人の顔の母親が、日本語でにこにこと挨拶をした。
豪利が説明した。「サントスくんは理王の友だちだ。理王からサントスくんの日本語の勉強をみてほしいと俺が言われたので来てもらった。この講習期間中、台所部屋で勉強することになる。ではサントスくん、自己紹介とどんな勉強をしたいのかを話してくれ」
「こんにちは。ぼくはブラジル人です」とサントスくんは人懐っこい表情で話した。「ぼくのひいお爺ちゃんが日本人で、ブラジルに働きに来てブラジルに住みつきました。ぼくは日本に来たとき、日本語はほとんどわかりませんでしたが、今は話せるようになりました。お父さんがもうすぐ茨木県の工場に移るのでぼくも引っ越します。ぼくは日本の字が読めなくて学校の勉強についていけないので、字の読み方を習ってから茨木県の学校に行きたいって思っていたら、理っくんがこの塾を紹介してくれたので、相談に来ました」
生徒たちがどよめいた。「完璧な日本語じゃん！　字を読めないって信じられない」
サントスくんの母親は「理科のテストはバツです」とたどたどしい日本語で応えた。
豪利は中学一年の理科の教科書を取り出してページを開き、「ここを読んでみてくれないか」とサントスくんに渡すと、サントスくんはまったく読めなかった。
リサは「そんなに日本語を話せる人が、どうして字を読めないのですか？」と聞いた。
剣矢は言った。「サントスくんは良い感じだ。おれたちみんなサンちゃんのこと、好きになる。勉強も手伝う。だけどさ、日本人と区別がつかないくらい上手にしゃべれる人が、どうして字を読めないのさ？」
サントスくんは悪びれない表情で、「ぼく、漢字を嫌いになったきっかけの字があります。それを書きます」と応えてチョークを手に持った。

サントスくんは先ず横線を引き、横線の真ん中あたりから上に向かって縦線を伸ばし、縦線の上の方から右に横線を書いた。生徒たちは「上」と叫んだ。
「合ってまーす。では他にはどんな読み方があるのか知ってますか？」
生徒たちは「知ってまーす！」とはしゃいで、上着の「うわ」、上手の「じょう」、川上の「かみ」などと応えた。
「合ってまーす。日本では一つの漢字に、こんなにいっぱい読み方があります。外国人にはむずかしいです。ぼくに日本語を教えてくれたボランティアの先生は、『一番易しい漢字だ』って言って、いろいろ読み方を教えてくれたけど、ぼくが覚えられないでいると、『こんな易しい字が覚えられないの？』ってあきれました。それでぼくはやる気がなくなりました。〈上〉はぼくには嫌いな漢字です」
母親は「別の先生に代えてもらったが、サントスはもう心を開かなかった」ということを、一生懸命に説明した。
豪利が「ボランティアの人って、人を励ましてくれる人たちなんだけどなあ」と憮然とすると、理王が「なぜ読めないかよりも、たった三年で、今みたいな説明を、日本語でできるようになったサンちゃんの成長力の方を考えるべきです」と言った。
「おお、そうだ、そうだ、理王の言う通りだ。ではサンちゃん、きみが短い期間にそんなに早く日本語をしゃべれるようになった理由を説明できるかな？」
「できます。ぼく、遊ぶのがだい好きだし、日本人は優しくて、いっぱい遊んでくれたから、ぼく、すぐに話せるようになりました」
「おお、いいねえ。サンちゃんは日本字を学ぼうという気持ちになれば、きみは必ず字が読めるようになる。サンちゃんは動物が好きかい？」と、豪利は絵本を取り出して、サントスくんに表紙の絵を見せた。サントスくんのぱっちり目が輝やいた。
「ぼく、ブラジルで子ヤギ飼ってたんだよ！」
「おお、かわいがっていたんだな。ではこの絵本の字を読んでごらん」
サントスくんは表紙の題名の字の中から、「き、の、や、……の、ら、ら……ん」を真剣な顔で読んだ。
「おお、サンちゃん、ひらがなが読めるじゃないか、いいね！　この最初の字はね、漢字で書かれた数字だよ」
「わかった！　やぎが三匹いるから『三びきの』、『や』があるから『三びきのやぎの』……あと、わかんない」
「がらがらどん」
「三びきのやぎのがらがらどん！」
「サンちゃん、絵から想像して字を読めてしまった！」と生徒たちがびっくりした。
「ぼく、ほめられた！」とサントスくんは日本語で母親に言うと、そのあとはポルトガル語で早口にしゃべった。母親の目がくりくりになって、高いきれいな音でサントスくんに何かをいっぱい返した。

「先生、サンちゃんには、字には筆順があることを教えたらいいんじゃないでしょうか？」
「おお、キララ子、そうだよ！　よし、キララ子が筆順の説明をしてやってくれ」
「サンちゃん、漢字にはね、書く順序があるのよ」とキララ子は黒板に〈花〉という字を書いた。「漢字はね、上の部分から書いて下の部分に移り、下の部分は左から書いて右に移っていくの。これは〈はな〉という字だけど、先ずこの草冠という部分を書いて、次にその下の〈化〉に移るのね。〈化〉は左側の〈イ〉を書いてから、次に右側を書くのよ。こういう書き順はどの漢字にも共通するの。それを覚えたら字が見えてきて、読めるようにも書けるようにもなると思う。この書き順に心を向けたらいいわ」
　キララ子の説明に、デップリンが「ぼくはキララ子を尊敬します」と顔を紅潮させた。「ぼくはキララ子の知識のことを言ったのではありません。ぼくはキララ子が会ったばかりのサンちゃんに、心をこめて説明してやっている姿に感動したのです」
　豪利も言った。「サンちゃん、書き順に従って、心をこめて数回も書いたら、きみは書けるようになる。それでも覚えられない字は、書くのをやめて読めるようになればいい。漢字で書く必要があるときは辞書を見て書けばいいからね。そこでだ、サンちゃん、もし理王くんがきみに日本語を教えてくれるとしたらどう思うかな？」
「ヤッターッ！　理っくん、教えて、教えて！　ぼくの先生になって！」
「うん、理王、きみがサンちゃんの相手をしてやれ。きみだったらどう導くかな？」
「読むことにしぼって、やさしい絵本から始めます」
「うん、それがいい。サンちゃん、引っ越しをするまでに、理っくんに書き順の基本と辞書の使い方を教わりな。では次、アッキーをここに呼んだ理由を話す」

22　学習障害児アッキー

「知ってる人もいるが、アッキーは日本字が読めなかったのだが、学び方を変えたら急速に読めるようになってな、アッキーのその経験を生かしてもらおうと思って、サンちゃんのお手伝いに呼んだのだ。アッキーが小四になったときだが、俺は親から、『アッキーには軽度の知的障害があって字が読めない。読めるようになる方法は何かないか』と相談されたのだ。そこで俺は黒板に、「そらにはしろいくもがうかんでいます」という文を書いて、アッキーに読ませてみたら、アッキーはそれを『そらに……はしろ……いくも』といったふうに読んだのだ。驚いたよ。小四になってもこんな読み方をしているのは、知的障害によるからだろうと思った。だが俺は知的障害の子の導き方など知らない。アッキーの母親の前だったけれど、俺は考えこんでしまった。ところが母親は、いっしょに連れてきたアッキーの妹が、アッキーとじゃれ合う姿を穏かに見ていたり、娘から話しかけられるとのんびりと応えていて、そこにはアッキーのことで、俺に助けを求めに来たという切羽詰まったものがなかったのだ。俺は（この家族の、のんびりした雰囲気はどういうことなんだ？　俺は考え方を変えなきゃいけないのか？）と思って、アッキーの入塾からのこと

を思いだしてみた。
　アッキーは小二でこの塾に入って以来、よくしゃべりよく笑っていた。サマーキャンプやスキー合宿でも活発に遊んでいたし、英語劇のセリフは俺の口写しで覚えて演技をやってきたから、アッキーに障害があるとは、俺も他の子どもたちも気がつかなかった。ということは、（アッキーには生活力があるということだ。アッキーを知的障害児という目で見るのではなく、おおらかに育てられた子ども、という視点で見ることにしよう。アッキーが字を読めるようにならなくても、それを責める言葉を俺は決して言わない）と心に決め、母親に言った。『字を読めるようにしてやれるかはわからない。指導方法も今は見当がつかない。だが、アッキーを一人の人間としてちゃんと扱います』と。
　こうしてアッキーを小高の国語クラスに入れた。その最初の日、子どもたちが声を出して童話を順番に読み、アッキーの番になって、アッキーがまったくのぽつりぽつりで読んでいた時だった。一人の男の子が……」
「先生、そこから先はぼくに話させてください。ぼくはあいつを許せません」とデップリンが強い声をあげた。「数年前のことです。ぼくと同じ小五の男子が、アッキーが読み始めるとすぐにバカにした笑い方をし、アッキーの顔をわざわざ下からのぞきこんで、『どうしてそんなに読めないの？』とからかったのです。そうしたらアッキーがかっとなって、そいつになぐりかかりました。ぼくはとっさにアッキーを抱きとめて、そいつに向かって抗議したのです。ゴリ先生もそいつに向かって、『ずるがしこいよけ方をするやつだ。アッキー、殴っちまえ』と言って、机をどけて空間を作りました。アッキーは殴りませんでしたが、全身を震わせてそいつをにらんでいました。キララ子はそいつに『いやらしいやつ。この塾はあんたなんかの来るところじゃない』と言ったのです」
「そうだったな。俺もアッキーの姿に感動して、（字を読めるようにしてやるぞ）と本気になった。だが教えこむのはアッキーには合わないと思った。ではどうしたらいいか？……きみたちならどうする？」
「字を読むことが楽しくなる方法を考える」
「絵本を読ませることをやる」
「絵本は文節ごとに一字空けてあるから、読みやすい」
「絵の助けで、想像力を働かせられる」
「そうだよな。俺は赤ちゃんだった自分の娘と母親とのやりとりの姿を思い浮かべた。〈赤ちゃんが言葉を覚えていくのは親が教えたからではない。赤ちゃんの方が、自分に必要な言葉を母親から引き出して学んでいくのだ〉と気がついた。母親は赤ちゃんの要求を見て、『パイパイほしいの？　だっこしてほしいのね？　おんもで遊びたいのね？』などと呼びかける。そうやって赤ちゃんは〈パイパイ、だっこ、おんも、～が欲しい、～したい〉などを学んでいく。俺はアッキーもそうやって学ぶはずだと考えて、アッキーの興味が何にあるかに注目し、彼の興味が車にあることを知って、「しょうぼうじどうしゃじぷた」の絵本を彼に見せた。そうしたらアッキーの表情が一瞬で輝いた。特に俺が驚いたの

は、アッキーが『救急車は近づいてくるときの音と、遠のいていくときとの音は違う』と言ったことだった。言われてみれば確かにそうだった。俺は（アッキーは耳で生きている。これは指導の手がかりになる）と思った。そして「しょうぼうじどうしゃじぷた」の絵本を、思い入れいっぱいの声、おおげさな表現で読んでやった。アッキーは人が興奮するとこれほど赤くなるのかと思うくらい赤くなった。

国語クラスには数人の生徒がいたから、アッキー一人のために使える時間はわずかだが、もし充実したわずかな時間を俺が創り出すことができれば、アッキーには充実した一時間になる。そんな時間を創ってやろうと思った。〈じぷた〉の絵本では、最初は俺が全文を大げさな表現で読んで、アッキーの想像力を刺激し、次はアッキーの目が字を追えるように、ごくごくゆっくり読んで、アッキーに復唱させた。たとえば『のっぽくんが』と俺が読むと、アッキーが『のっぽくんが』と読み、『見てくれ、ぼくの　はしごを』『するすると、はしごを　のばして』と読んでやると、アッキーはつっかえながらも俺と同じ声の調子で読もうとした。アッキーがつっかえても、アッキーが自分から読み直そうとしているときは俺はなおさない。俺はアッキー自身が、絵を見ながら、想像力を働かせて読んだ方が、アッキーは満足感があるし、内容も楽しめると思ったからだ。そうやっていくうちに、アッキーは内容がわかるようになり、読むのが面白くなっていった。おこずかいでマンガを買っては読むようになり、アッキーの努力は俺の想像を越えていった。宮沢賢治の〈よだかの星〉を子どもたちに一ページずつ読ませたときだが、俺はアッキーには数行くらい読ませたら、そこまでよし、とするつもりだった。ところがアッキーは他の子たちと同じ量だけ読んでしまった。アッキーのとつとつとした読み方が〈よだかの星〉の内容に合っていて、読み終わったときには子どもたちが感動の拍手をしたんだよ。それを受けて、アッキーの上気した顔がかわいかった。その後アッキーは親の海外勤務で二年ほど日本を離れていたが、先日、日本に戻ってきたので、アッキーがサンちゃんの相手をしながら字んだらいいい、と思ってここに誘ったのだ。二人への指導法は、以上を参考にしてもらえれば、あとは理王の知恵にまかせる」

豪利の話が終わるとホッホが、「理王くんが二人を指導するとき、ぼくはそばで見学したいです」と言い、そのあと理王とホッホは、サントスくんとアッキーを町田市の図書館に連れて行き、図書館の利用の仕方を教えた。

次の日から、サントスくんとアッキーが跳ねるように塾にやってきた。三日目、理王がサンちゃんに、「中三生たちにきみの『がらがらどん』を聴いてもらいな」と呼びかけた。二人は仲よく並んで絵本を開き、サントスくんが読めないところはアッキーが助けた。

サントスくんのぽつりぽつりの声が、数日もすると言葉のまとまりになりだし、読むときに字をたどっていた指がなくなっていた。

アッキーは童話をやったあと、童謡、唱歌の歌詞を読んだ。これには豪利が驚いて、「理王はどういう意図があって、童謡、唱歌の詩を読ませることにしたのだ？」と聞いた。「子どもの歌は絵が浮かびやすいし、詩にリズムがあります。アッキーにそういうことを

楽しんでもらいたいと思ってです。サンちゃんも聴いていて、楽しいみたいです」
「おお、なるほど。それなら理王も読んでやったらいい。きみの声は人の心に染み入る。その声で読んでやって、聴く楽しさを体験させてやってくれ」
中三生たちが英文を黙読していたとき、台所部屋から「夕焼け小焼けの赤トンボ」と読む声が聴こえてきた。耳を澄ましていたリサが、「ゴリ先生の子どものころは、十五でねえやは嫁に行ったのですか？」と聞いた。
「おお、そう思うか」と、豪利は台所部屋の四人を呼び、「リサ、赤トンボを歌ってくれ」とハーモニカでリードをした。
夕焼け小焼けの　赤とんぼ　おわれてみたのは　いつの日か
山の畑の　くわの実を　こかごにつんだは　まぼろしか
十五でねえやは　よめにゆき　お里のたよりも　たえはてた
「この歌詞は、きみたちのひい爺ちゃん婆ちゃんが子どもだった頃の日本の姿だ。ねえやとは自分の家に働きに来ているお手伝いの少女のことだ。その頃は義務教育であっても、家が貧しくて学校に行かせてもらえない子どもたちがいて、幼くして他人の家に住みこんで、男の子は荷物運び、遠くへお使い。女の子は台所仕事や子どものお守だった。俺の爺ちゃん婆ちゃんもそうで、爺ちゃんは小学四年が終わると、町に出て、自分の発想で、一人で運送業を始めたんだ。運送業といっても荷車を買う金はないし、十歳では荷車を引く力もないから、商店なんかを一軒一軒歩いて、「どこかへ届ける荷物はないかね？」と坊やの声で聞いて、預かった荷物を肩にかついで届けるということをやった。婆ちゃんも十歳で町の商店に住みこんで、その家の子どものお守をした。この歌は、幼いねえやの背中で育った子が、子ども時代を思い出している内容だ。『ねえやにおんぶされて、赤トンボを見たのは、いつの頃のことだったろうか。ねえやと桑の実を摘んで、口の周りを紫色に染めて食べたのは幻のような想い出だ。そのねえやは十五歳で嫁に行ってしまった。ねえやの実家から届いたネギや大根という便りも遠い昔のことになったよ』といった意味だ。

夏期講習五日目、生徒たちが講習の感想を述べた。
リサ：「地図帳のページごとに発見があって、地理が面白くなりました。テレビや新聞で知らないことが出てくると、地図帳や地球儀で調べるようになりました。何よりもわたしが住んでいる地域のことが見えてきたのが嬉しいです。ホッホくんの指導に感謝です」
鉄平：「都立高校入試の国語の長文問題を読んでいったら、内容が面白くって、文章を読むのがかったるくなくなってきた。読むってこと、知った」
デップリンは「英作文だけやっています」と言った。豪利がデップリンのノートを手に取った。「おお、よく考えた日本文を創っているな」
豪利は生徒たちにデップリンの日本文の一つを読んでやった。「ぼくは将来、人のお世話をする仕事に就きたいと思うようになっています。なぜならぼくは心配性でおせっかいだからです。塾の先生はぼくのおせっかいは親切心からくるのだと言います。だからぼく

は自分を生かして、人を助ける仕事をしたらどうか、と思うようになっています」
「先生、その英作文が文法的に正しいかどうかをチェックしてください」
「文法なんかにこだわるな。きみの相手をするような外国人は、きみの人間性に魅力を感じるからで、英語の間違いなど気にしない。それにきみの表現意欲、おしゃべり力なら、すぐにちゃんとした英語で表現できるようになる。きみは自分の豊かさを自覚して育てろ」

23　イケダマスオ少年の才能を発見、育てた担任の先生

窓の外の土砂降りの雨を見ながら、豪利が「八大竜王　雨やめたまえ」とつぶやいた。
「先生、それ、どういう意味ですか？」
「うん、明日から小学生サマーキャンプが始まるから、雨の神様に、『雨はたくさんいただきました。もう降らないでください』と頼んだのだ。『時により　すぐれば民の　嘆きなり　八大竜王　雨やめたまえ』。源実朝の歌だ」
「先生はよくそうやって歌や句を口にするけど、どうして詩が口から出てくるのですか？」
「恩師の影響だな。俺が大町中学校に入学したときの担任が伊藤利夫先生といって、入学したばかりのホームルームで、先生が黒板にこの歌を書いてな、雨の日で、先生は空を見上げながら静かに口ずさんだのだ。先生は左手に本を持ち、右の手のひらは胸の前で縦に開いて、何か祈るように言ってな、先生のかもし出す雰囲気は、中一の俺には魅力的で、先生のポーズを真似て、空を見上げながら『八大竜王　雨やめたまえ』とやったものだ。
伊藤先生は毎週月曜日の朝に、黒板に短歌か俳句を一つ書いて、その一週間、ホームルームで生徒たちに声をそろえて読ませた。先生は歌の意味を説明しなかったし、覚えろとも言わなかったが、子どもの脳は柔軟だから覚えてしまって、大人になった今でも何かの情景に出会うと、ふっと詩が口から出てくることがある。これはちょっと豊かな気持ちだ。
伊藤先生は仏像が大好きで、仏像の写真をしょっちゅう持ってきては生徒たちに見せたんだが、先生は『お優しいお顔の仏様ですね』と静かに言うだけで、やっぱり何も説明しなかったから、俺は（先生のお顔がお優しい仏様みたいだ）と思っただけだった。
先生は俺の作文をよくほめてくれた。だが、どこがどんなふうに良いのかを言ってくれたことがなくて、俺の顔を穏かに見つめながら、『ゴリくんは良い文章を書きますね』と言うだけだったから、俺はぴんとこなくって、自分の文章を見つめなおすことはなかった。俺は今、生徒を教える立場になってみると、教師とは、意味内容や自分の感動を言葉にして生徒に説明するべき立場だし、説明したくなる。だが伊藤先生はそれをしないで静かに見つめるだけだったから、俺はこの先生から何かを学んだという気持ちが弱い。
ただ一つだけだが、伊藤先生が前任の中学校で担任をした中一生クラスに、満州帰りのイケダマスオという少年がいて、先生がマスオ少年のことを語ったときの嬉しそうな表情だけは、強い印象として残っている。
先生はマスオ少年の絵の才能を高く評価していて、長野市の図画教師たちの講習会があ

ったとき、先生は中一のマスオ少年を連れて参加したんだ。絵の実習の後、講師の石井鶴三という芸術家が、受講者の図画教師たちの絵をこっぴどく批判して、最後にマスオ少年に向かって、「少年、絵を出したまえ」と言ったんだって。そしてマスオ少年が戸のかげに隠すように置いてあった絵を見つけて、その芸術家は猛烈にほめたんだそうだ。いつも穏やかな伊藤先生がこの時だけは実に嬉しそうに語ったよ。

このマスオ少年は大人になって、版画家になり、小説を書き、いろいろの分野で活躍する池田万寿夫になった。俺は美術に興味がなかったから、新聞なんかに出ていたその名前に気がつかなかったが、あるとき本屋で、本の背表紙の著者名に池田万寿夫とあるのを目にし、イケダマスオと読んで、あれっ、と本を手に取って開いたら、第一ページに、『自分の美術と文学の才能を発見し、育ててくれたのは、長野市柳町中学校の担任だった伊藤龍夫先生である』と書いてあった。名前は一字違っていたが、二十数年前に伊藤先生が中一の俺たちに話してくれたことと同じだったから、俺はその本を買って先生に贈った。先生は『まさに私のことです』と喜んでくれたよ。

マスオ少年は伊藤先生の仏像への思いからも大きな影響を受けたそうだ。いったいマスオ少年は、伊藤先生の説明しないで見つめるだけの目から、何を感じ何を学んだのだろうか？……芸術家は俺みたいな凡人には計り知れないものがある」

すると、「ゴリ先生！」とキララ子が鋭く声をかけた。「わたし、先生の『俺みたいな凡人』という言葉、嫌いです。ゴリ先生の今日のお話には、今まで以上に深いものをわたしは感じて聴いてました。だからその言い方はいやです」

豪利の目がキララ子の上で止まった。キララ子も見つめたままだった。

すると理王がゆっくりと言葉をはさんだ。「俺はキララ子と同じだ。ゴリ先生は生徒を励ます言葉、自分を励ます言葉を言わなきゃいけねえよ」

豪利はキララ子から目を離し、理王に目をやった。「おお、きみたちは俺に考えさせてくれたな……俺は伊藤先生から言われた『良い』の意味を、今まで真剣に考えたことがなかった。だがいつも伊藤先生が俺のそばに立って俺を見つめている気がして、手紙でも何でも書くときは、いつも真面目に『良い』文章を書こうとしてきたと思う。俺は伊藤先生から影響を受けていないなんて言ったが、俺はたっぷりと良い影響を受けていたんだ。『良い』の意味は考えなかったが、自分の気持ちを飾らず、かっこつけず素直に表すことだけはしてきたと今気がついたよ。ありがとな。

もう一つ伊藤先生のことで想い出すことがある。林間学校で、雨の夜、伊藤先生が古い宿の二階で〈牡丹灯篭〉という怪談を語ってくれたんだが、先生の『からんころん、からんころん』という幽霊の下駄の音は、雨が屋根を打つ音といっしょに、今も俺の耳に残っている」

「ゴリ先生も、その牡丹灯篭を昨年の夏合宿の夜に語ってくれたよ。ゴリ先生の『からんころん』も、今の『八大龍王　雨やめ給え』もおれたちの耳に残るよ」

「何かの情景に出会ったとき、詩が口をついて出てくるってすてきだわ。ゴリ先生も黒板

に詩を書いてください。毎朝のホームルームで声を合わせましょう」
「それよりも、ティーニー塾お得意のカルタ取りにしようよ！　ここにいいものがある」と、理王が本棚から「教科書に出てくる俳句、短歌」という本を取り出した。「この中からおれたちが気に入ったものを選ぼう」
「明日から一週間、夏期講習はお休みです。ゴリ先生は小学生のサマーキャンプで不在です。教室を使わせてもらいます。興味のある人は朝十時に集まりましょう」
次の日から俳句と短歌の選定が始まった。生徒たちは本の中にある俳句、短歌を読み合い、イメージしやすい作品を選びだし、読み札と取り札を作りながら、取り合って遊んだ。
夏期講習後半の最初の日、七人の生徒たちは床にさっと座って取り札をまき、「ゴリ先生は読む役です」と嬉しそうに読み札を豪利にわたした。
豪利が最初の札を手に取って、「不来方の　お城の草に　寝ころびて」と読みだすやいなや、生徒たちは「空に吸われし　十五の心！」と叫んで取り札に跳びついた。
「わたしたちの十五の心も、空に吸われていきまーす！」
にぎやかにカルタ取りが進み、豪利が「木崎湖に光の粒をまきながら」と読んで、「あれっ」と生徒たちを見た。生徒たちは猛烈な勢いで取り札に腕をのばし、「水面をなでる風の手のひら」と声をそろえた。
「先生、わかった？」
「おお、わかった。俵万智ちゃんの『四万十に光の粒をまきながら……』の詩だ」

24　デップリンが〈遊びの合宿〉の大親分になる

講習の最終日、サントスくんとアッキーが前に出て、「三びきのこぶた」の絵本を掲げ、地の文をアッキー、しゃべり言葉をサントスくんが読んだ。二人が元気な声で読み終わると、生徒たちが感動の拍手を送った。
「サンちゃん、登場人物らしい読み方になっていたよ！」
「アッキー、情景がよく見えた。理王、どんな指導をしたの？　理王の声、台所部屋からほとんど聴こえてこなかったのに」
「二人がこんなに上手になったのって、理王の教え方に何か秘密があるんじゃない？」。
「何もない。二人が一生懸命学んだからだよ」
「一生懸命になった理由は何なの？」
「ぼくが言う！」とサンちゃんがぱっちり目で理王を見た。「理っくんはね、ぼくが下手に読んでもおもしろそうに聴いてくれたよ。だからぼく、やる気になった」
「ぼくも言っていい？」と今度はアッキーが跳ねるように声をあげた。
「ぼくがなめらかに読めなくっても、理王が『登場人物の心が聴こえてくる』って言った。だからぼくも登場人物の心がぼくに聴こえるように読んだ」

「おお、アッキー、その思い方は素晴らしい。お母さんにゴリ先生が感動していたって伝えてくれ。さて、ホッホ、きみは二人を観ていて、何を思ったかな？」
「はい、理王くんの励ましで、二人がどんどん上手になっていく姿に感動していました」
「そういうホッホの成長も素晴らしいです！」とデップリンが喜んだ。「ホッホはリサさんから地理の質問をされると、ていねいに応えていて、ぼくはホッホが優しい人だってことを知りました。リサさんの心が、ホッホの中に隠れている優しさを引き出したのです」
「サンちゃん、きみは日本に来て三年間も日本字が読めないままだったのに、それが理王の指導を受けて数日もすると、字を追っていた人差し指が字を追わなくなった。信じられない成長の速さだ。もちろん理王の指導が良かったからだが、何よりもサンちゃんの気持ちの変化が成長させたんだと思う。サンちゃんは誰からも好かれる人だが、きみは日本についてはどう思うかな？」
「ぼく、日本人は『ありがとう』って言うから好き。日本人は優しい。お化けも優しい」
「日本はお化けも優しいか！　初めて聴いた言葉だ」
「サンちゃん、ブラジルと日本をつなぐ人になりなよ」とキララ子が目を輝かせた。
「ぼく、なりたい！　ぼく、漢字書くの、きらいだったけど、キララ子が教えてくれた書き順で、漢字を書く勉強を始めているよ」
「おお、サンちゃんはその気になったから、伸びるぞ。理王、サンちゃんの指導、ご苦労さんだった。俺も人を励ます力を、相阪理王から学んだよ。ホッホがサンちゃんを助けながらの指導も、聴いていて楽しかった。では、これで夏期講習は終了。一週間後、待ちに待った遊びの合宿が始まる。リーダーをやりたくないと思っていたリサ、リサらしくリーダーをやれそうかな？」
「はい、みんなに助けてもらいながらやります。ただ、『リサらしく』って言われると、どんなことかわかりません」
「おれも『鉄平らしく』って、わかんない」
「そうだよな……らしく、って何だろうな？」
「その人の本質、ってこと？」
「何をやったって、『まさにその人だ』ってやつ？」
「ねえ、リサ、あんたがキイロちゃんに、『リサらしくって何ですか？』って聞いたら、キイロちゃんは何て応えてくれるかね？」
「『いつも人を優しく見つめる目よ』って言ってくれると思うわ。わたし、その目で行動しよう！」
「おお、良い言葉に達したな」と豪利はうなずき、それから鉄平を見た。「『鉄平らしさ』って何だろう？……克兄、きみはリーダーシップキャンプで、鉄平の親分ぶりを興味を持って見ていたが、どう思う？」
「はい、ぼくは鉄平に、川を渡る風や森の緑を感じています。鉄平はぼくに、人の存在で、〈自然〉というものを感じさせてくれた初めての人です」

「おーっ！」と生徒たちが声をあげた。
鉄平は「おれっていいじゃん」と、もっそりつぶやいた。
「鉄平、あなたは素晴らしい発見をしました！」とデップリンが喜んだ。「あなたは受験高校も決めましたか？」
「おれ、薬師高校受ける。おれ、高校に行ったら野外活動やりたい。薬師高校の野外活動クラブはツッパリくんが創ったって姉ちゃんから聞いた」
「鉄平くんの五教科総合の偏差値はいくつですか？」とホッホが聞いた。
「偏差値って、なあに？……ああ、おれ、四十五くらいだよ」
「それでしたら鉄平くんは半年後には、偏差値が十くらい上がっていなければなりません。大変です。努力できますか？」
「なんだよ、おまえ！」と理王がにらんだ。「励ましたのか？　追いつめたのか？」
「あ、はい……ぼく、励ましたつもりです」
「バーカ、バーカのバカホッホ！」と剣矢が歌った。「良い話をしてるところで、話を偏差値なんかに持っていくな！　それに系列高校に行くおまえが、なんで都立高校の偏差値のこと知ってんだよ？」
「ごめんなさい。ツッパリくんが薬師高校を卒業したって聞いたものですから、どんな高校かと思って高校入試案内で調べたんです」
「失礼です！」とデップリンが大声をあげた。「ツッパリくんを偏差値なんかで判断しないでください！　あなたはそんな程度の人なのですか？」
「ま、ホッホはそんな程度のやつじゃないけどさ」と剣矢は言った。「だけどゴリ先生は偏差値のこと言わないんだよね。ゴリ先生は偏差値を無視してんでしょ？」
「してねえよ。偏差値を俺は生徒と向き合うときの判断材料にしないだけだ」
「だったら先生はどうやって生徒を励ますのさ？」
「じゃあ剣矢に聞くが、きみが数学をやる気になったのは、なぜなんだ？」
「克兄が『剣矢は言葉力があるから数学もできるようになる』って言ってくれたからだよ」
「そうだよな、きみはその一言でやる気になった。この前、俺はデップリンが小六のときに書いた『子どもはほめて育ててください』という作文の話をした。あの文章を剣矢はどう思ったんだ？」
「ほめるって、子どもの成長に一番大事なことだって思った」
「そうだろう。俺はあの作文に感動し、反省もした。ホッホは数学の証明問題で、面白い証明の仕方をして、剣矢、理王、克兄の心を波立たせた。そんな証明の仕方には、俺は加点をしたくなる。だが、テストには減点があって加点がない。偏差値は知識の量は表すが、知恵も人間性も表さない。だから俺は加点をしない偏差値で、人を判断することはしない」
「先生、知識と知恵は、どう違うのですか？」
「学んだ知識を、生きていく力にするのが知恵だ。この塾に話し合いや遊びが多いのは、生徒たちに知恵ある人として生きてほしいからだ。偏差値の積み上げだけにこだわる者は

視野が狭い。知恵を育てられる人は、何が大切かを考え、工夫ができる。そういう人間の能力や、『おれっていいじゃん』と思えた鉄平の魅力を偏差値は表すことができない。鉄平、入試まで半年もある。魅力ある鉄平はどんな勉強方法をとるのかな？」

「おれ、国語と英語は字が多くてやだかったけど、ゴリ先生から国語の長文の読み方教わったら、内容が読めるようになった。英語も他の科目も読む気になってる」

「鉄平、偏差値、十くらい上げちゃいなよ」

「うん、上げる」

「素晴らしい！　あー、ぼくはそんな鉄平をこよなく愛します！　だけど、ゴリ先生、ぼくは人を励ましたつもりが、委縮させてしまうことがあります。リサさんには面倒を見すぎた結果がおせっかいになり、かえってリサさんの自信をなくさせてしまいました。こだわりますが心配性はどうやったらなおせるのでしょうか？」

「おせっかいも心配性も、性格の問題にしてしまったらなおらない。きみはリーダーシップキャンプでみんなから何と言われたんだっけ？」

「ツッパリくんからは、『言葉数を少なくして、相手にしゃべる機会を与え、相手を生かせ』と言われ、理王からは『おまえの感動する心は人を励ます』と言ってもらいました」

「そしてきみは英作文で、『自分のおせっかいを生かして、人のお世話をする仕事をしたい』と書いた」

「はい、書きました。もう一つ質問します。先生はぼくに、『口数を少なくしろ。だがしゃべりたいのを我慢するな』と言いました。そんな難しいことができるのでしょうか？」

「そのことで、わたし、あんたに質問したい」とキララ子がデップリンを見つめた。「あんたはいつもみんなをリードしてきて、みんなも気持ちよく協力してきたけど、そのあんたが最近、『どうしたらいいですか？』って質問をするようになった。どうしてなの？」

「あー、ぼく、リーダーシップキャンプでやっつけられてから、ちょっと自信をなくしているんです」

「やーだ。デップリンが自信なくすなんて、だーめ」

「やだよね」と理王が親しみをこめて言った。「おれたちはデップリンが雄大な心の人になることを期待している。そういう人は、自分で考え自分で答えを見つけ出せるはずだ」

「うん、そうだぞ、デップリン。きみが〈見つめる〉ということをやるようになれば、きみは『どうしたらいいか』がわかり、いっそう大らかな人物になる。きみは夏合宿で見つめることに向かい合ってみろ」

「あの……〈見つめる〉ってどういうことでしょうか？」

「きみはいま理王に、『自分で考えろ』って言われたんだぞ。それは『きみを期待している』という言葉だと思うがな……さて、ホッホ、きみにはこの塾の初めての夏合宿が来るが、気持ちは整ったかな？」

「はい、ぼくに親分はむりですけど、合宿には行きます」

「おお、行くか！　むりなことはやらなくていい。見て、聞いて、驚いたり楽しめばいい。

では合宿の〈親分たちの中の一番のリーダー〉を決めることにしよう」
「その一番のリーダーを大親分と呼ぶことにしましょう！　その大親分をぼくにやらせてください！　ぼくは合宿の大親分になることがティーニー塾最高の名誉だと思います。ぼくはリーダーシップキャンプでやっつけられて以来、ぼくという人間を考え始めています。ぼくは夏の合宿ではおせっかいに気を付けて、〈心の姿の良い〉大親分を演じます」

25　〈人と触れ合う遊びの合宿〉が始まる

北アルプスのふもと、長野県安曇野の大町市。木崎湖のほとり。
小高い丘の上で、高校生カウンセラーたちと克兄ちゃん、豪利が話し合っていると、
「こんにちわー！」と伸びやかな声で、林の中からデップリンと理王が現れた。
「みなさん、聴いてください。中一の桜井雷介と木下茂樹が町田市からここまで二百五十キロメートルの道のりを、野宿をしながら十日間かけて歩いてきています。合宿が始まる夕方四時に、ここに着きます」
「えーっ、町田から歩いてきてるって？」
「そうなんです。みなさんをびっくりさせたいという二人の希望で、ぼくは先生にもカウンセラーの人たちにも話しませんでした」
「おいおい、中一生に無茶させたんじゃないのか？　アドバイスをしてやったのか？」
「しました。あの人たちはテントを持たないで野宿をし、食事も毎日三食を作ると言いましたから、『そんなのは無理だ。大町に着いたら寝こんで、ティーニー塾の合宿の面白さを体験できないで終わるかもしれない。緊急の場合に備えてテントは持って行け』って言いましたらそうしました。でも『野宿はする。一日二十五キロずつ十日間、歩き通す』って雷介が言い張りました」
「じゃ、夕方四時にここへ着くってことは、十日間も歩き続けたってことか！」
「はい、それは雷介の強い気持ちからです。雷介は理王の知性とイタズラに憧れていて、そんな理王をびっくりさせようとイタズラを考えたのですが、茂樹が『理王くんを感動させるようなイタズラなんか思いつかない。理王くんは単純なことの方が感動する』と言って、『それなら大町まで歩こう』となったのです」
「あの一年生たち、昨年、きみたち二人がやったことに刺激を受けていたんだよね？」
「そうなのです。昨年、この合宿に来るために、ぼくは町田から電車で新潟県の糸魚川まで行き、電車の窓から日本海を眺めながら青森に行き、青函連絡船で北海道に渡り、日本海に沿って稚内に行きました。理王は東京駅から太平洋側を北上，函館から太平洋、オホーツク海に沿って、ある日、ある時間に、ぼくたち二人は日本の最先端の岬で再会、がっちり握手をしました。それから南下して大町の夏合宿に参加したのです。雷介、茂樹はそのぼくたちに対抗して、大町まで歩いてきたというわけです」

「二人は途中の様子をきみにたち伝えてきたのか？」
「伝えてきませんでした。彼らの三日目に、ぼくが携帯電話に連絡したら、雷介が『自分たちで考えながらやっています。おせっかいはやめてください』と言って切ってしまいました。さっき初めて連絡があって、四時に夏期大学のこの庭に到着すると言ってきました」
「おお、歩き通したか！　そうか、そうか、そういうことなら理王、雷介の憧れのお兄ちゃんとして、きみらしい迎え方をしてやったらどうかな？」
「では高校生カウンセラーのミーティングを始めます。デップリンも理王も加わっていいです。発言も自由です。先ず最初に、初めてカウンセラーをやる高一のジュニアとモトキのために、カウンセラーの基本的な心得を話しあいましょう」
　克兄ちゃんが言った。「ぼくはティーニー塾に関わってまだ五か月だけど、この塾ではみんなの行動が一致するのは、しょっちゅう話し合っているからだとぼくは思っていたら、あんまり話し合わないんだよね。ゴリ先生もカウンセラーたちも指示、命令をそんなにしない。それなのにどうしてみんなの心が一つになるのでしょうか？」
「おお、克兄、いいところに気がついてくれた。きみたち、どうしてなのか考えてみろ」
　アズミが「それはぼくたちへの本質的な問いかけですね」と思慮深い表情をした。「モトキ、ジュニア、きみたちは小学生のときから、何人ものカウンセラーを見てきたけど、カウンセラーってどんな感じに見えていたの？」
「それはもう指導する姿がりりしくて、清々しくて、限りなく憧れの人たちです。ぼくも後輩たちの憧れの人になれるように活動するつもりです。そうだよね、ジュニア？」
「もちろんです。ぼくは他の子どもグループでも.リーダーたちを見てきました。その人たちはリーダーとしての自分を意識して、きびきび動き、かっこよく指導したんだけど、ティーニー塾のリーダーたちはあんまり指導しないのね。それなのに生徒たちはよく働き、よく遊ぶ。モトキが言ったように『りりしい』って言葉がぴったりします。女子カウンセラーは清々しい。それってどうしてなんだろう、って今、ぼくは思いました」
　アズミがうなずいた。「ぼくもそうだった。ぼくはね、女の子みたいな男の子だったんだ。それが小五でティーニー塾に入って、キャンプやスキーで中学生の男子の活躍を見て、いま言われた、『りりしい男子』を感じて憧れたんだ。ぼくも中学生になってからはりりしい男の子らしさをかわいく演じた。いま高校生になって、あのりりしさや清々しさって、どうやってできたんだろうと考えている」
「この塾は自覚的になれるからだよね」と高二のチャンちゃんが人なつっこい顔をみんなに向けた。「普段だらだら過ごしていても、学校や道でティーニー塾の年下の人たちに会うと、（あっ、わたしは憧れのお姉ちゃんなんだ）って背筋がピンと伸びるんだよ。伝統の力だと思う」
「それって気持ち良いだろうね」と克兄ちゃんが感心した。「ぼくはその伝統ということについて高校生たちに質問します。あるグループにとっての伝統というのは、強力な指導者がいて、その指導をグループの人たちが強く意識するところに育つものだとぼくは思っ

てきました。そしてこの塾のように、先生もカウンセラーも上から強い指導をしないところや、生徒たちもそれほど意識的に話し合ったりしていると思えないところでは、伝統というものは生まれないとぼくは思っています。ましてりりしさとか清々しさという精神的なものが伝統になるなんてありえないように思うんです。高校生たちはどう思いますか？」
「ありえます」とキイロが優しい声で言った。「デップリンが言うこの塾の『愛の心』が、りりしさや清々しさを伝統に育てているのです」

大糸線の電車の通り過ぎて行く音が聴こえてきた。
「さあ、中学生たちの到着だ！」
みんなで丘の上から木崎湖に沿った道路を見下ろして待った。
「来た、来た！　キララ子とリサとホッホだ。大きな荷物を持ってやってきた」
高校生たちが「ヤッホー！」と手を振った。下の道から「ヤッホー」が返ってきた。
キララ子とリサがリックを背負い、両手には合宿で使う共同の備品を持ち、えっさ、えっさと体を左右にゆらしながら坂を上ってきた。
「こんにちは！　先生、リサがここまでの来かたを全部調べて連れてきてくれたんだよ！」
「おお、リサ、できたか！　おい、おい、カウンセラーたちは女の子にこんなにススで汚れた物を持たせたのか！」
「二人の希望なんです」とキイロが笑った。「中学生の女の子がこんな物を持っていると、大人の人たちが声をかけてくるんです。それってちょっと自慢なんです」
リサは赤錆びのついたブリキの大きなバケツをつり下げ、バケツの中には火吹き竹、火バサミ、枝切ノコなどが入っていた。キララ子は二升五合炊きの大釜を両手で持ち、釜の中にはキャンプ用の鍋セットが納まっていた。
「わたしたちね、先生、大糸線の電車の中でお婆ちゃんに話しかけられたんです。それで合宿の話をしたら、オヤキっていうおまんじゅうをくれたの。おいしかった。オヤキって信州の食べ物なんでしょ？　作ってみたーい！」
ホッホは背にリュックを背負い、肩にテントとタープの入った大きな袋を担ぎ、男子の表情になっていた。「剣矢と鉄平はまだ来ていませんか？　高速バスに乗ったから、もう着いているはずなんですが」
ちょうどその時、下の道に大型のトラックが停まり、剣矢と鉄平が荷物を抱えて降り、
「乗せてもらったんだよ！」と坂を駆け上がってきた。
「えーっ、ヒッチハイクしたの？」
「新宿から高速バスに乗ったんだけど、途中のサービスエリアで、鉄平が『バスはつまんない。トラックに乗せてもらおう』って言って、長野ナンバーのトラックに次々に話しかけて、乗せてくれるトラックを見つけたんだよ」
「無口の鉄平が？　そんなこと言えたの？」
「おれ、言えた。　運転台が高くって、てんで気分よかった」

「鉄平たらね、ドライバーのお兄さんと川釣りのことで話が合っちゃって、合宿が終わったら、そのお兄さんと釣りに行くって約束までしたんだよ」
中一生と、とてつもなく元気のいい中二の女子五人もやってきた。
午後四時、中一の雷介と茂樹が到着する時間になったので、生徒たちと克兄ちゃん、豪利の二十八人が庭に集まって見つめていると、木立の中から二人が姿を現した。
みんなの歓声に雷介と茂樹は驚いたが、すぐに歓喜の顔になって、「キッ、キッ、キッ！　ぼくたちサルだ、山ザルだ！」と飛び跳ねた。
二人が落ち着くのを待ってデップリンが朗々と言った。「桜井雷介くん、木下茂樹くん、きみたちを寿いで、リサと理王が〈早春賦〉を歌います。歌の詞はゴリ先生の大町高校時代の同級生のお祖父さんが、大正時代にこの安曇野の風景を詩にしたものです。リサがメロディーを歌い、理王が低音部を歌います。低音部は克兄ちゃんの作曲です」
ヒッポの伸びやかなフルートの音に導かれ、リサと理王の二重唱が調和した。
春は名のみの　風の寒さや　谷のうぐいす　歌は思えど
時にあらずと　声もたてず　時にあらずと　声もたてず　（作詞、吉丸一昌）
「出迎え、ありがとうございます！」と茂樹がまだ子どもの声で感謝した。「でも本当はぼくたち、デップリンに言った通りにはできませんでした。町田から百キロほどは電車で来て、歩いたのは百五十キロほどです。食事も全部を作ったわけではありませんから、あんまりいばれません」
「百五十キロ歩いただけでもいばっていい。だけど、どうして計画変更したの？」
「デップリンから、『本当に大町まで歩けるかどうか、予行練習をしてみろ』って言われたので、一日だけでしたけど、実体験してみました」
「朝六時に町田を出発して、食事は携帯用のガスコンロと鍋セットで三食を作ってみました。ぼくたちが作るのはやっぱり大変でした。食事ばかり作っている感じで時間はかかるし、せっかく作った豚汁を雷介の長い脚が鍋ごと蹴飛ばしてしまったりで、夕食が終わったのは夜の十時でした。
「豚汁は作り直したのか？」
「いいえ、キャンプ用の銀色マットの上にひっくり返したので、二人で四つん這いになって汁をすすり、具は指でつまんで食べました」
「脚の長いヤツと短いヤツが四つん這いになって、顔をマットにくっつけてか！」と高校生たちが笑った。「距離はどのくらい歩けたんだ？」
「十六キロです。三食作って、一日平均二十五キロも歩くのは無理だってわかって、計画を変えました」
「夜は具がたくさんの鍋ものを作って、米はいっぱい炊いて、次の朝はその余ったご飯を雑炊にしました。昼食はパンで、料理された肉か魚、チーズを買って、キャベツをバリバリ食べ、果物を食べました。夕食が終わったのは八時でした」

「夜は無人駅の待合室とかプラットホームのベンチ、公園のあずまやで寝ました。人って親切だって思うこともありました」
「一面のキャベツ畑の土手でパンを食べていたら、畑のお爺さんが、『食いながら歩け。高原キャベツだ。味噌をつけて食べたらうまい』って言って、キャベツとテマエミソをくれました。その味噌がおいしかった。先生、テマエミソは長野県の味噌なんですか？」
「おお、全国津々浦々で作られている味噌だ。それぞれの味があってうまい」
「川原で石を組んで、ご飯を炊いていたら、怖い感じのおじさんに声をかけられました。緊張して応えたら、『歩いて大町まで行くのか！　ぼうずたち、えらい！』って感心して、腰の竹かごからニジマスって魚を二匹出して、『焼いて食べろ』って、魚のさばき方、塩の振り方、枝を切って魚に刺すやり方、その枝を火の周りに突き立てて遠火で焼く方法まで教えてくれました。ニジマスのお腹って、きれいなだいだい色でした。その夜は河原のススキを寝床に寝ました。空いっぱいの星空で、天の川もはっきり見えました。
　二人が話し終わると、アズミが宣言した。「ティーニータイニー塾の、『人と触れ合い、自分と出会う、遊びの合宿』を今、始めまーす！　空を見てください……周りの樹々を見てください……耳を澄ましてください……では、ゴリ先生、お話しください」
「見てくれ、この大きな木造の建物を。これが信濃木崎夏期大学の講堂だ。夏期大学はこの地方の文化や教養を育てるために、学者や文学者、芸術家、ジャーナリストなどが、一般の人たちを相手に、毎年夏に講座を開いている交流の場だ。大正六年に始まって以来、現在まで連綿と続いていて、この地域の人たちの誇りの場だ。感謝の気持ちで使おう」
「では第一班は夕食作りにかかってください。他の人たちは持ってきた共同装備品を出し、カウンセラーたちはチェックをしてください。もう一つあります。講堂と食堂をつなぐ渡り廊下で、中二のアッキーが食事作りをします。それについてはキイロが話します」
「アッキーには食物アレルギーがありますから、アッキーの食事の材料は何から何まで、農薬、化学肥料を使っていないものを、お母さんが探し出して送ってきたものです。わたしたちの食事当番は二日に一回まわってくるだけですが、アッキーは八泊九日間の自分の食事を、全部一人で作ります。アッキーを励ます心で見守ってください」
　台所で食事作りが始まった。毎回の食事作り班は、中三生が親分となって、中学生三人と高校生一人の構成で、三十人分の食事を作る。今夜のメニューはカレーライスと具がたくさんのスープで、牛乳と麦茶と生卵はいつでもある。
　今夜の食事作り班の親分はリサである。合宿の計画段階で、キイロが「リサちゃんは親分をやる心構えができています」と言ったので、豪利は料理好きのリサの気持ちが落ち着く場として、最初の食事作りをリサの班に任せたのである。
　料理は中学生が作るから、できあがるまでには二時間はかかる。台所では、リサの人柄を表して穏かな雰囲気の食事作りが始まり、広い大講堂では、生徒たちが遊んだりしゃべったりしながら、料理のできあがるのを待った。
「みなさーん、夕ごはんができました！」

「ご苦労さまでーす！」
生徒たちが食堂に走る。二升五号だきの大釜と四十人鍋、三十人鍋、大きなボールから、ライスとカレー、スープと野菜サラダを、持参の食器に盛りつける。
全員そろって、「いただきまーす」

26　遊んで、語って、考えて

合宿第一日目。夕食後の片付けの前に、高校生カウンセラーと中三生親分との短いミーティングをやった。
「今年の合宿参加者は中学生全員参加で、中一が八人、中二、中三が七人ずつ、カウンセラー役の高校生が六人、克兄ちゃんとゴリ先生の三十人です」
ヒッポがアズミに聞いた。「合宿参加者募集の説明会のとき、この塾の夏合宿では教科の勉強はしないということについて、中一生たちから疑問がでなかった？」
「雷介から出ました。それでぼくが、ティーニー塾の合宿は〈人と触れ合うこと、自分と出会うこと〉が目的だということを説明し、モトキが自分の体験を話してやりました」
「ぼくね、高校は大学進学率の高い、ある私立高校に行きたいから、中学生になったらティーニー塾をやめて進学塾に行くつもりだったんです。それをスキー合宿のとき、ヒッポに話したら、『ティーニー塾の合宿は、子どもの生活集団としては最も質が高く、人として学ぶべき知恵がいっぱいある。だから夏の合宿を体験してから進学塾に移ったらどうか』って言われたので、そのつもりで夏合宿に参加したら、この塾の面白さにはまってしまった、ということを話してやりました。雷介は納得しました。雷介は理解力が高く、ものをしっかり考えているので、二年後にはティーニー塾のリーダーになる人だとぼくは思うので、いろいろアドバイスをしてやってください」
「いや、雷介は体験したことの意識化が秀でている。町田から大町まで十日間かけて歩いてきたような人に、常識的なアドバイスならいらない」と理王が言った。
「ぼくはそうは思わない。いくら知性が高くても人から学ぶべきことはある。アドバイスされて知ることがある。ぼくはアドバイスをもらったことで世界が変わったんです」とアズミが言った。「ぼくのいとこたちはみんな女の子で、ぼくは一人っ子だったから、いとこたちとお人形遊びをやって育ったのね。それが小高になって、なんだか変だなあと感じ始めた時に、親がティーニー塾に入れてくれたんだ。忘れもしない。ティーニー塾に入って、小学生サマーキャンプで野外炊飯用の薪を河原で集めたときだけど、ぼくは自分の腕の太さほどの流木を一本だけひろって両腕で抱えて運んでいたら、ツッパリくんが何も言わないで、ぼくの腕の中に数本もの流木をがばって置いたんだ。びっくりして周りを見たら、ぼくと同じ歳の女の子のチャンちゃんとキイロが、両腕に何本もの流木を抱えて運んでいたんだ。女の子がそうやって運んでいる姿をぼくは見ていたのに、それが意識の中に入ってこなかったんだね。ぼくはツッパリくんがぼくの腕の中に置いた流木を運んだら運

ぶことができた。ぼくはこのとき初めて（ぼくは男だ）と思ったんだ。こういう体験やアドバイスの積み重ねで、『ぼくは男の子になれた』という気持ちがあるから、アドバイスはした方がいい。ではヒッポ、ぼくたちの大先輩として何かアドバイスをお願いします」

ヒッポは、「たった一つだけ年上のぼくが大先輩になっちゃうのか！」と、ヒポポタマスのような大きな顔の大きな口を開けて笑った。

「ぼくね、『ヒッポには上から目線がある』って、よく批判されてきたんだ。ぼくは勉強ができるし、スポーツも音楽もやるし、小、中、高校とも生徒会長をやってきたから、『勉強しかできないとか、運動しかできない』人には、（つまらない人）って思うところがあって、それがぼくの態度に出ていたんだけど、自分では反省する気持ちがなかった。ところが中三になったとき、大学生講師の高田潤一くんという東京工業大学の学生の話を聴いたことで、ぼくの姿勢は変わったんだ。高田ちゃんはしなやかな身振り、言葉遣いをして、美しさを感じさせるお兄さんだった。その高田ちゃんが、『自分は勉強しかできない、という気持ちがあったので、何かのスポーツをやろうと思って合氣道の道場に入ったら、ものごとをプラスに考える姿勢を教わって、そうしたら、一つでもできるものがあることはいいことだ、自分は勉強しかできないんじゃなくて、〈勉強ができることが自分なんだ〉って思えるようになった、という話をしてくれたんだ。ぼくの親戚は教員ばかりで、ぼくも小さいうちから教員になるのを当たり前のように思っていたけど、小高でティーニー塾に入ったら、この塾の大らかさに出会って、ぼくも（こういうクラスを創る先生になろう）と思ったのね。でもぼくは何でもできる子どもだったから、ぼくが教員になったら、よくできる生徒、目立つ生徒、強い生徒の方に目が行って、そうでない生徒には、〈上から目線〉をやってしまわないだろうか、という不安が漠然とあったんだ。そんな時に高田ちゃんの話を聴いて、ぼくの視野が広がったの。『何か一つでもできることを持っている人を尊重しよう。何もできないと言う人に対しても、その人らしい何かを持っているんじゃないのか、という目を向けるようにしよう』とね。ぼくはティーニー塾と高田ちゃんとの出会いで、〈生徒と共に歩むヒッポ〉のイメージに出会えた。ぼくはそのイメージに向かって歩いていくつもりだ。ゴリ先生、ぼくの上から目線はこんなふうになりました」

「おお、ヒッポがそう考えられたのか！　だがきみの上から目線は、ものがよく見えるからなんだ。見下し目線にならなければいい。お説教好きの教師にはなるなよ」

「おれ、そのお説教のことで先生に聞きたい」と剣矢が言った。「ゴリ先生はおれに、ゲンコツ一発くれるだけでお説教しない。先生はどうしてお説教しないの？」

「うん……俺はお説教が長々と続くと、（この人、何のためにお説教しているのだろう？）と、つまらないことをあれこれ想像していけない。だから俺は注意したいときには短い言葉を探す。短い言葉を見つけられなければ注意しない」

「ありがとうございました。では夏合宿のカウンセラーの役割分担を決めます。ゴリ先生、ぼくたち生徒で決めてしまっていいのですね？」

「おお、いい。生徒が決めたら、俺の考えとは違うことはあるが、それが生徒集団の勢い

になって面白いことも多い」
「それでしたら、ぼくにキャンプ用品の係をやらせてください。ぼくはジュニアから、キャンプのことをいろいろ学びたいです」
「おお、モトキはそう思うのか。俺はモトキは優しくて、すぐに涙を流すから、みんなの心の状態に気を配ってくれる役をやってもらおうと思っていたんだ」
「その役はチャンちゃんです」とキイロが言った。「中学生のとき、クラスに松葉杖の子がいたんですけど、その子のそばにはいつもチャンちゃんがにこにこしていたんです」
　克兄ちゃんが「ぼくにも何かの役割を持たせてください」と望んだ。
「克兄はぼくたちのお兄さん役です」。
「おお、それがいい。高校生や中三生たちは張り切ってがんばるから、克兄は彼らががんばりすぎないように、楽しみながら見ていてくれ。もう一つ、俺の不在中に何か問題が起こった時のことがある。この塾の高校生たちはしっかり判断できるようになってはいるが、大人の判断と違うこともあるから、克兄は大人としてアドヴァイスをしてくれ。克兄の役は固定しない」
「先生、大親分のぼくにもアドバイスをください」
［デップリンにアドバイスはいらない。きみはそこにいるだけで人は安心し、頼りにする］
「それではぼくは成長しません。ぼくはしゃべりすぎとかってあるじゃないですか？」
「だけどきみの話の内容は面白いんだよ。じゃあ、しゃべり方のことだけ言おう。きみは調子に乗ると話が長くなる。人の集中力は長くは続かないから、言いたいこと、結論に近いことを先に言い、『なぜならば』と続けるのがいい。そうしたら聴く方は話の展開に興味を持つし、きみも話を端的にできるからな」

　合宿第一日目の夕食後の片付けが一時間もかけて終わったのは夜の九時である。これが九日間の合宿が終わる時には、片付け時間が半分も短くなっている。
　アズミの呼びかけで、全体ミーティングが始まった。デップリンが豊かな体で両腕を広々と広げ、「みなさん、改めてこんにちは！」と呼びかけた。三十人の声が「こんにちは！」と高らかに返ってきた。
「ぼくはこの合宿で大親分をつとめる、ご存知デップリンです。ぼくはティーニー塾の〈愛の心〉をこよなく愛しています。この塾が始まったころに、ガメラやヒューモくんという大学生がいて、愛の心をツッパリくんたちに伝え、ツッパリくんたちがその心を、高校生や小中学生たちに伝えてくれました。そして大きくなったぼくたち中三生親分が、〈愛の心〉をみなさんにリレーしていきます。みなさんも愛の心を後輩たちにリレーできるように、合宿を楽しみ、挑戦し、失敗し、また挑戦していってください」
「合宿では、ぜったいに勉強してはいけないですか？」
「勉強は自由です。それから『ぜったい』という言葉はティーニー塾にはありません」
　カウンセラーたちによる合宿の意味、注意事項、明日は木崎湖キャンプ場で各班ごとに

野外炊飯を行うことなどの説明があって、全体ミーティングが終わった。
剣矢が食事班のメンバー表を持って豪利に質問に来た。
「ホッホの名前がおれの班に入っているけど、おれ、あいつをやっつけたんだよ」
「うん、きみにつけたんだ。きみはホッホの成長にとって大事なことは何だと思う？」
「人と交わって、もまれることです」
「うん、そうだな。きみは率直で、回りくどくなくていい。言いすぎることはあるが悪意がない。ホッホはそういうきみに心を開いているから、決闘の練習相手を買って出たのだ。今度はきみが、人といっしょに活動する楽しさをホッホに体験させてやれ」
それから豪利は克兄ちゃんに聞いた。「こんな感じの合宿だが、何か気がついたことはあるかい？」
「まさに〈愛の心〉がある生徒集団ですね。デップリンには独創性を感じました。彼の熱い心は人を動かします」
「おお、なるほど。確かにあの熱い心は独創的だ。俺はデップリンが『ティーニー塾には愛の心がある』と言った時には、ちょっと照れてしまったが、今は生徒たちが愛の心を大切にしていることを理解している。俺も生徒から学ぶことがたくさんある」

27　「やってみせても、やってやるな」

合宿二日目。朝食が終わると、大親分デップリンがみんなに話した。「今日の日帰りキャンプの目的は、合宿が初めての人たちに、この合宿の楽しさを知ってもらうことと、ぼくたち中三生が、親分としてのリーダーシップ力を自己検証することです。では高校生カウンセラーのみなさん、ぼくたち中三生親分のために、子分を指導する際のカウンセラー心得を唱和してください。ぼくたち親分はそれを復唱します」
「口は出しても、手は出すな！」
「やってみせても、やってやるな！」
「ミスは責めるな、おもしろがれ！」
復唱の後、剣矢が豪利に聞いた。「誰が見てもダメという場合でも、叱ったり、批判しちゃいけないんですか？」
「いいさ、時と場合による。必要と思ったらやればいい」
「でも先輩たちは怒らないじゃん？　何か決まったものがあるんでしょ？」
「ありません……でも、あるかな？　考えてみようか」とアズミ。「数年後には、学校の先生をやっているはずのヒッポ、生徒を指導するつもりで、司会をお願いします」
「ではどこから考えようか？」
「言われる立場の側から考えてみよう」
「こういう人とかこういう時には言われたくない、ってあるよね。何かな？」
「上から目線で言われること……こんなこともできないのかって言われること。努力して

いることを認めてくれない時。こちらへの愛情を持ってないことがわかる時。長所を見ないで、欠点だけをとりあげられる時、こっちの成長の仕方を考えないでやらされる時、誰かと比較されること……」
「いっぱいあるね！　では今度はぼくたちが指導する立場なった時、未熟なぼくたちは、どういう態度で指導したらいいだろうか？」
「いま出たことをしないようにすることだけど、基本的態度は何だろうか？」
「デップリンの言う『愛の心』を持つことだね。〈相手の人を、人として尊重する気持ちを持っていること〉が全ての基本ということです。ゴリ先生、後をお願いします」
「おお……俺はこういうことは考えないで塾を始めたなぁ……今、そんな俺が言えることは……俺は怒りたい時、注意したい時、〈自分はその生徒を励ます言葉を持っているかどうか〉を考えてみるということだ。励ます言葉を持っていなければ、（自分の目はまだ貧しい）と思って言わないようにしている」
　続いて、今日の日帰りキャンプの野外炊飯のことをキイロが話した。
「メニューは白いご飯と山賊鍋です」
「山賊鍋って？」
「リーダーシップキャンプで、理王が『ティーニー塾の料理は、山賊料理みたいなものだ』って言ったことを覚えているかしら？」
「覚えている。いろいろの野菜を切って、表面積を大きくして煮こめば、具からスープにいい味が出る、って理王は言った」
「そこから山賊鍋という名前にしたの。ここにいろいろのお野菜とお肉があります。各班ごとに好きな材料を使ってください。味はお好みです。塩味、しょうゆ味、ミソ、カレー、トマトジュース、どれでも使ってください」
「ぼくの班は牛乳で煮こみたいです。大町の松田牛乳は用意してありますか？」
「デップリンの初恋の味だもの、用意してあるわ。先生、アッキーはどうしますか？」
「ジュニアの班の隣りのカマドで煮たきさせてやれ。アッキーは薪で煮炊きの経験はしていないから、ジュニアが面倒見てくれ。克兄は鉄平の班に入ってくれるか？　きみが鉄平を『自然を感じさせる人』と称した言葉はよかった」
　キャンプ場に生徒たちの薪を割る音が響き、班ごとにカマドの前で料理を始めた。
　ジュニアがナタを手にアッキーに説明しているのを見て、豪利がジュニアに寄って行った。「アッキーには、ごく軽いが、知的障害があるんだ。言葉だけで説明されるとわからないことがある。やってみせながら説明してやってくれ」
「あっ、そうですか。ごめんね、アッキー。もう一度やりながら説明しなおすね」
　このときアッキーの表情が変わったことに、豪利は気がつかなかった。
　料理ができあがった班から食事になった。親分とカウンセラーたちは、お互いの班の山賊鍋を味わった。自炊生活をしている克兄ちゃんは、「薄塩でたくさん作っておいて、味を変えていけば、数日楽しめるね。山賊鍋をぼくの得意料理にしよう」と喜んだ。

木崎湖の藍色の空を白いパラグライダーが舞い、岸辺にはあずき色のハギの花が秋の訪れを告げていた。生徒たちは水面に反射する光の矢になって、叫び、飛びこみ、遊んだ。

28　障害児アッキーの抗議

宿舎の夏期大学に戻って、このキャンプで学んだことを中三生と克兄ちゃん、豪利が話し合っていると、アッキーが豪利のところへやってきた。

「先生はジュニアに、ぼくの障害のこと言った。言ってほしくなかった」

「えっ、そう？　中三生も中二生も知ってることじゃないか？」

「他の人に知ってほしくなかった」

「おお、そうか……では聞くが、きみはジュニアの説明がわかっていたのか？」

「わかんないことあった。けどぼく、こういうことがわかんないんだって思って聞いてる」

「おお、そういう自覚の仕方をきみはできるんだ！　それならきみのことをジュニアに話していいかどうかをきみに聞いてから、俺はジュニアに言うべきだったな……だがきみが言わないでくれと言ったとしても、俺はジュニアに言ったけどな。どうしてかわかるか？」

アッキーは首をかしげた。

「きみが小四のときだったが、きみにある文章を読ませたら、一人の男の子に、『どうしてそんなに読めないんだよ』って馬鹿にされて、きみがその子に殴りかかったことがあった。覚えているかな？」

「先生が殴り返せって、机、どけた」

「うん、俺はきみが殴りかかったことに感動したことと、彼のよけ方がずるかったからだ。俺は、きみに障害があることを前もって生徒たちに話しておけば、きみは馬鹿にされることはなかったと思った。もう一つ、きみは『口で説明されたらわからないから、やってみせてほしい』と俺に言ったことがある。きみの親も俺にそう言った。だからジュニアに障害のことを話したんだ。この合宿でも、きみの障害のことを知らない生徒が、もしかしたらきみをからかうかもしれない。俺はそれを見たくない。このことは後でみんなに話す」

夕食後、豪利は生徒たちを集め、アッキーは小四のとき、ひらがなも読めなかったが、素晴らしい努力で読めるようになって、今ではブラジル人中学生の日本語勉強にも付き合うまでになったこと、そして今日の豪利への抗議の様子をくわしく話した。

「以上だ。アッキー、何か言いたいことはあるか？」

「先生は生徒にこんな文句言われて、悔しくないの？」

「おー、悔しくないぞ。俺は子どもの成長に手を貸したくてこの塾を開いたんだ。教え子に抗議されるなんて、俺の指導の成果だって思うよ。きみの成長は俺の誇りだ」

29　不良少年マキト

中二の柴山マキトが顔をほてらせて豪利に言った。

「ぼくは昨日、町田駅から大町まで、ずっとアッキーといっしょでした。アッキーはよくしゃべってよく笑ってたんですけど、ときどきぼくの言ったことが理解できてないみたいで、変だなと思いました。今、アッキーのことを知ることができてよかったです。ぼくは障害のある人たちが真剣に生きている姿が好きです」

マキトの言葉を聞いた生徒たちの共感の声が、空気にゆるやかなさざ波を立てた。

アズミはアッキーを包むように見つめた。「高校生たちもきみのことを知ることができてよかったよ……中一、中二は解散！　カウンセラーと親分は合同ミーティングをします」

中二の少女たちがマキトとアッキーに駆け寄り、二人の手を取って引っ張っていった。

剣矢がその姿を見送りながら豪利に聞いた。「あのマキトってやつのことなんだけど、おれのサッカーチームにマキトと同じ中学校の選手がいて、そいつが『おまえの塾にいる柴山マキトはケンカばっかりするし、警察にしょっちゅうつかまっている』って言ってる。あいつ、今日のキャンプでも、パンツを脱げそうにしていたり、でっかい音でガーッてのどを鳴らして、ツバを吐いてた。あいつ、不良なの？」

「何てことを言うんですかー」とデップリンが即座に抗議した。「マキトがアッキーについて言った言葉から、マキトの人間性がわかるじゃないですか！」

理王も言った。「マキトはおれの班だけど、動きがなめらかだし、質問の内容や理解の仕方がいい」

「剣矢はマキトを不良と思っているのか？」

「思ってません。俺が『そんなツバの吐き方するな』って言ったら、恥ずかしそうな顔して、『ごめんなさい』って言った」

「そうよ、人なつっこいし、小さい時は跳ねまわっている姿がかわいかったんだ」とチャンちゃんが話した。「マキトのお兄ちゃんがわたしと同じバイオリン教室で学んでいて、マキトはお兄ちゃんにくっついて来ていたの。生きがよくって、両親にもお兄ちゃんにもとてもかわいがられていたよ」

豪利が続けた。「そのマキトが中学生になるとケンカをするようになって、警察にも何度か補導され、それでマキトの親がティーニー塾に入れてもらえないかと相談してきたんだ。俺は（小さい時に親に愛された子は気持ちが安定しているから、荒れているとしても一時的なものだろう）と考えて、マキトと母親に授業見学に来てもらった。そうしたらマキトは生徒たちの英語のカード取りを興味深そうに見ながら、よく母親に話しかけたのだ。俺はあの年齢では、母親といっしょに道を歩くとき、『この人、俺と関係ない』って顔をして離れて歩いていたから、マキトの姿には感心して、俺の方が入塾歓迎になってしまった。マキトが入った時には中二クラスには男の子がいなかったが、マキトは女の子たちと楽しく話ができて信頼されたんだ。女性に信頼される男は本物だよ」

「マキトの学校での様子を、先生は知っているのですか？」
「うん、担任教師とはぶつかるみたいで、よく相談にくる。ついこの間も担任から、『来年の修学旅行にはきみを連れて行かない。よその学校の生徒とケンカするに決まっているから、学校に残って勉強していろ』って言われたんだってさ」
「えーっ、一年も先のことを！」
「たくさんの生徒を預かる教師としては、マキト一人に振り回されたくないということなのだろうけど、判断が幼い。俺は『修学旅行に行けないのなら、その間は学校にも行くな。きみは考古学が好きなのだから、どこかの遺跡を泊まりがけで訪ねたらいい』と勧めた」
「マキトはどう答えましたか？」
「ちょっと意外な顔をしたから、『きみは修学旅行に行って、ガンをつけたのつけられたのってやりたいのか？』って聞いたら、そんなような顔をした。それで俺は『日本文化の歴史の地に行くんだぞ。法隆寺の建物のヒノキは、山の中で千何百年間生き抜いたものが切られ、法隆寺になって更に千何百年も経っているのに、カンナで削ると今もいい香りがするそうだ。きみは縄文遺跡の発掘で、土の中に土器の破片を見つけると、『土器が愛しくなって、昔の人と対話している気になる』と俺に言ったじゃないか。そんな感性のきみは、法隆寺の柱に触れたら何かを感じるはずだ。そういう人間が、仲間にかっこつけたいだけで就学旅行に行くのか？』と言ってやった」
「それでも、『行きたい』と言ったら、先生はどんなアドバイスをするのですか？」
「そうさなぁ……『生徒たちのコースとは逆に回って、どこかでばったり鉢合わせをして、生徒や先生を驚かせ、思い切りかっこよくバイバイしろ』とでも言ってやろうかな」
「マキトはその担任を嫌っているんですか？」
「いや、嫌ってはいない。担任は若い教師で、お説教ではなくて、本気になってマキトに怒ってくるんだって。マキトが警察に補導されて、それがつまらない理由だったりすると、担任はお巡りさんとケンカするんだってさ。学校出たての教師は、くそ真面目だが余裕がない。『マキトの方が余裕もある。きみが先生を育ててやれ』って言ってやった」
「マキトは何て言いましたか？」
「十四歳が二十四歳を育てるんですかってびっくりしたから、『マキトは担任が若い時代に最も手を焼いた生徒の一人になったらいい。心ある教師ならそこから学ぶ』と言ってやった。マキトがツバを吐くのは、この合宿中にやらなくなる」

30　無言少年太一

「中一の優心と草琳はいとこなんですか？　二人は寄ると触ると口ケンカばかりしているんです。名前もユーシンとソーリンで音が似ています」
「いや、知らない。そうなのか、デップリン？」
「いとこではありません。ぼくは優心とは子どもの剣道クラブでいっしょでした。優心は

妹たちを可愛がり、お父さんはすばらしい紳士です」
「優心は授業で良い発言をする。お母さんも素敵な女性だ」
「先生、小林太一のことですけど」と高一のモトキが聞いた。「太一が中一になりましたが、相変わらず何も言わないままですか？」
「そうなんだよ。太一は入塾して二年半になるが、俺は太一のことがわからない。太一は塾へやってくると、台所の本棚の三十センチくらい前に正座して、本の背表紙をじっと見つめたまま動かないんだ。『太一、授業を始めるよ』と言うと、小さな体でとことこっと歩いて、輪の中に入ってカード取りをやり、カードには飛びつくのだが、取れても表情を変えない。子どもが表情を変えないって、どういうことだ。母親は太一の様子を書いたメモをよくくれるのだが、なぜ太一がそうなのかは、人見知りということ以外はわからないみたいだ。太一は塾を休んだことがないし勉強は好きだ。小学生キャンプもスキー教室も全部参加している。小四の時には妹の手を引いて、岩手県のお爺ちゃんの家まで遊びに行ったそうだ。そうやって何でもやるのになぜか表情がない」
「太一はわたしの班ですけど、声を聴いてません。キイロちゃんは聴いてますか？」
「ごめん、太一のことは気にもならなかったから、声も覚えてないの」
「あっ、そうだ！　マキトとアッキーは、太一といっしょに町田から大町までやって来たんだ」と理王が二人を呼んだ。
「はい、太一はぼくたちが大町は初めだってことを知って、電車の出発時間と乗り換え駅の時間を、メモに書いて渡してくれました。ぼくたちはそんなこと、太一に頼んでいません。出発の朝、町田駅に行ったら太一が一人でいたので、太一は一人がいいのかなって思ったけど、誘ったら、ここまでいっしょに来ました」
「その間、太一はしゃべったの？」
「全然。ぼくとアッキーだけでしゃべってましたが、様子に変なところはなかったです」
「だけど太一を放っておいていいのでしょうか？」とモトキが心配顔になった。
「ほら、見て」とアズミが指でさした。「太一が自分の周りを荷物で囲んでいるよ。ああやって、人を寄せつけないようにしてるんだよね」
「そうなんです。三月のスキーのときも、太一は自分の階段ベッドの場所が決まると、そこに登って、中からカーテンを閉めてしまったんです。それで茂樹がカーテンを開けて、『遊ぼうよ』って誘ったんだけど、少ししたらまた閉めたので、茂樹は『見るくらいはしなよ』って怒ったんです」
　その太一は今、講堂の隅の壁を三角形の二つの辺にし、もう一つの底辺をリュックサック、帽子、水筒、小荷物を並べて作り、その三角形の真ん中に、ちょこんと座っていた。
「ああやって自分の城を作っているんです」とモトキが困った顔をした。
「きみたちは太一に話しかけているのか？」
「話しかけてます。だけど、あいつ、こっちの顔を見ないから、話が続かないです」
「そうなんだよな。俺も話しかけるが、顔を見てくれないから、話しかける気がなくなっ

てしまうんだ」
「あー、先生がそれではいけません！　先生は太一をほめてやったことがあるのですか？先生は今、太一の良い姿を話してくれました。でも先生はそれを言葉にして太一に言ってやっているのですか？」
「言葉にはしてない……だが俺は（太一は良くやっている）と思っているから、俺の気持ちは太一には」
「伝わっていません！　子どもに以心伝心なんてありえません。先生は『言葉を大事にしろ』と日ごろから生徒たちに言っているじゃないですか。先生は言葉で太一をほめてやってください。そうすれば太一の心はほぐれ、笑うようになるかもしれません」
　すると中一のルリ子がのんびりと言った。「わたし、今、太一を笑わせたいな」
「それ、やろう、あの城を壊そう！」と理王がすっくと立ち上がった。
「ぼくがやる！　ルリ子、ぼくを追いかけて！」
　茂樹がとつぜんサルになって、キッ、キッ、キッと大声で走り出し、ルリ子が「待てー、サル！」と追いかけた。二人は生徒たちの間を走り回り、太一の作っている三角形の中に走りこんで、茂樹が派手に転んだ。
　ルリ子が小荷物を拾って、「太一、こんな所に荷物を置いたら、あぶないよ」と太一の前に行き、「どけていい？」と聞いた。太一は目を伏せたままだった。ルリ子は座りこんで、太一の顔の前に自分の顔を近づけた。「どけて、いい？……ねえ、こっち見て！　見てくれないんなら、チュウ、しちゃうよ」
　太一がびくっとして目を上げた瞬間、ルリ子は首を左右に振って、思い切り変な顔を作った。
「太一が笑った！」。ルリ子がピョンピョン跳ねた。

31　おろおろホッホくん

　高校生カウンセラーのジュニアが、明日の一泊二日のキャンプの説明をし、五か所のキャンプ地の名前を黒板に書いた。
「この一泊キャンプは食事の班とは別で、だれとでも、好きな所へ行っていい。各グループに高校生カウンセラーが一人ずつ付くけど、親分は中三生がやるんだよ」
　キャンプ地は景色を楽しむのなら鷹狩山と空飛山で、鷹狩山からは正面に峻険な北アルプス連峰を望める。空飛山は眼下に木崎湖を見降ろし、「遥かに広がる景色の中へ飛び出したくなる」ということから、生徒たちが空飛山と名付け、ヒッポは「交響曲が聴こえてくる景色だ」と言った。三か所目は北アルプスの水が流れる鹿島川、四つ目は湿原の林の中、五つ目は山の中にひっそりとある乙女池である。
　先ず各班の親分となる中三生が自分の行きたい所を決め、中二生も女子だけでかたまらないようにばらばらになった。中一生は上級生たちのアドバイスを受けながらキャンプ地

を選び、どのグループにも中一から中三まで入った構成になった。
一つだけ大親分のデップリンが、「中一の優心と草琳は離れなさい」と命じた。「あなたたちはケンカばかりです。特に優心の言葉にはトゲがあります。ぼくが知っている優心はそんな人ではありません。どうしてなのですか？」
高校生たちは各キャンプ地の中学生メンバーを見てから、自分たちが行く班を相談した。
アズミがキイロに聞いた。「空飛山班の親分はリサだけど、リサ、できそうだよね？」
「もうだいじょうぶよ。リサちゃんはいろいろのタイプのリーダーがあっていいって思ったみたい。それにリサはヒッポのフルート伴奏で空飛山で歌いたくて、ヒッポを誘ったの」
「太一が鷹狩山に行くから、鷹狩山班のカウンセラーはぼくがやります」とモトキが手を挙げた。「太一の存在は忘れられがちだけど、ぼくは気になります。克兄もいっしょに行きませんか？　景色が大きいです」
「鹿島川班は鉄平が親分をやるから、ぼくが行きたい」とアズミが主張した。「克兄が『鉄平には風と緑を感じる』と言ったので、ぼくは鉄平の風と緑を感じてみたいです」
「剣矢はホッホに親分を体験させてやりたいらしく、湿原班に行こうって誘っているんだけど、ホッホに親分できるかね？」
「どうかなあ、ホッホは学校でもリーダーというものをやったことがないみたいだし、リーダーシップキャンプでは剣矢にやっつけられたんだよね。剣矢はそんなホッホに、なんで親分をやらせたいのだろう？」
「剣矢の判断は面白いことが多い。剣矢はどうしてホッホに親分をやらせたいのかね？」
「おお、そうだよな」と豪利が相づちを打った。「今日の日帰りキャンプが終わった後で、剣矢がホッホのことで、俺に面白いことを言ったのだ。『ホッホはぼくにバカ扱いをされたのに、ツッパリにかばってもらえたらすぐに立ち直り、理王からのアドバイスも嬉しそうに受け、ぼくの決闘の練習相手も買って出た。夏期講習でホッホはリサを馬鹿にした態度をとって、それを理王にとがめられると素直に反省した』と剣矢は言って、剣矢はそういうホッホを、『前向きになり方がいい。六日目のキャンプでは親分をやらせたいから、明日のキャンプでは、練習のつもりで親分やらせてみる』と言ったんだ」
「先生もやらせてみたいのですか？」
「うん、剣矢の指摘を聞いて、そう思った。明日、ホッホが剣矢の助けで親分をやってみれば、ホッホは六日目の親分をどうやってやろうかと考えると思う。俺もホッホの前向きのなり方には興味がある。この塾に入ったのもホッホの意志だ」
「なるほど、ホッホに自信がつくかもしれないね」
「それならホッホの班のカウンセラーはチャンちゃんがいいです。チャンちゃんならホッホの気持ちを明るくして、やる気にさせることができます」
こうしてそれぞれのキャンプ地が決まった。ホッホは湿原班の親分に指名されると、顔から血の気がひいた。
剣矢が「おまえ、そんなに急に青くなれるって、才能じゃん」と笑い転げた。

親分になったホッホは、食事のメニュー決めで、リードに自信がなくておろおろしていると、チャンちゃんが助け船を出して、「わたしが言うことを、ホッホらしい言葉で言いな」と指示した。すると、ホッホはチャンちゃんが班員に、「何を食べたいですか？」と聞けば、「何を食べたいですか？」と聞き、剣矢に「少しは違った言い方をしなよ。この塾では失敗してもいいんだからさ」と励まされ、中一の茂樹に「ギョーザを作っていいですか？」と聞かれて応えられないでいると、チャンちゃんから、「作り方を知らないなら知らないって言うの。みんなが助けてくれるわよ」と励まされた。

ホッホは「ぼく、作り方、知りません。助けてください」と消え入りそうな声で言った。

「はーい、助けまーす」

湿原のメンバーがホッホの周りにさっと集まった。

ホッホの顔に少し血の気が戻った。ホッホが「ひき肉って何のことですか？」と聞くと、中一の茂樹が教えてやった。

「班員たちに、親分としての言葉を言いな。素直な気持ちで言うんだよ」とチャンちゃんがホッホに勧めた。

頼りなげだったホッホの表情が少し引き締まっていた。「ぼくはこんなふうに何も知りません。でも明日はみなさんに相談して、教えてもらいながら、親分やります」

剣矢が「おまえっていい！　学んでいく姿が見える」と励ました。

それぞれの班のメニューが決まったあと、ジュニアがみんなに「天気予報によると、明日の夜はかなり冷えこむから、温かい衣類と寝袋を忘れないように」と注意した。

32　遥かな景色の中で歌う少女、リサ

合宿三日目。豪利は車で各キャンプ地巡りをした。最初に湿原に行くと、中一の草琳がホッホに話しかけていた。

「ホッホくんは、どうしてホッホって呼ばれているんですか？」

「ぼくがホッホッホッて笑って、みんなから叱られたからなの」

「ホッホッホッて笑ったらいけないんですか？」

「こうやってあごを上げて、下目を使って、口をとがらして、ホッホッホッて笑ったんだ」

「やな感じ。でもホッホくんは面白い感じ」

豪利が二人のやり取りを見て、「ホッホ、良い顔をしているぞ」と話しかけた。

「はい、みんなが助けてくれます。知らないって言えるのって、安心です」

空飛山の草地ではリサとヒッポが、眼下の木崎湖から遠く遥かに広がる景色を眺めていた。「わたしはここで、ヒッポのフルートに合わせて、〈初恋〉を歌うことを一年間、楽しみにしてきたんです」

「二番の歌詞はできたの？　リサが創ることになっていたけど？」

「無理でした。それで啄木の詩の一部を変えて歌詞にしました」

「ほら、ゴリ先生の車がやってきた。さあ、リサ、心をこめて歌おう。ぼくも心をこめてフルートを吹く」
生徒たちと豪利が草の上に腰をおろした。木崎湖からの上昇気流に乗って、トンビが眼の下で輪を描いていた。フルートの音色がリサの透き通った声を誘った。
〈砂山の砂に　砂にはらばい　初恋のいたみを　遠く遠く思い出ずる日〉
（詩：石川啄木　曲：安達達之介）
〈空飛びの草に　草にいだかれ　初恋のいたみを　遠く遠く思い出ずる日〉

近くに止まっていた軽トラックから、日焼けしたおじさんと若者が降りてきた。
「お姉ちゃん、きれいな声だいね。いい歌、聞かせてもらったわやぁ」とおじさんは笑顔でリサを包んだ。
「こちら様は先生かね？　おらは近くの部落の小林ってもんだがね」
「やあ、おらは宮坂という者です。一木商店の店主はおらの従弟ですんね」
「ややっ、これさこれさ、一木のオヤジさの親戚かね！　じゃあ、毎年夏期大学で合宿やってる町田の学生さんてことかね？　毎年、ここにテント張ってる衆かね？」
小林さんは上機嫌で豪利と昔の話をした後、リサの手を両手でにぎって、「いい歌をありがとさん、ありがとさん」としみじみとした口調で言って帰っていった。
リサがソプラノの声で伸びやかに叫んだ。「みなさーん、林の中でたきぎを拾ってくださーい。茂樹は食材を出してくださーい」
「すいませーん！　塩を持ってくるのを忘れてしまいました！」
「ドンマーイ、ドンマーイ。よくあることよ。メニューは、トマトで煮る具たくさんのミネストローネと野菜サラダなんだけど、お塩なしでいいかしら？」
「だめでーす。ぼくの責任でーす。近くの部落に行って塩を分けてもらってきまーす」
「部落は数キロも先よ」
「I am a man. I am strong！　ぼくは安曇野の風になって、夕陽の中を走りまーす」
中二のアユ子も「わたしも安曇野の風になります」と夕陽の中に飛び出していった。
「先生、鷹狩山の理王から携帯電話です。中一の太一がティーシャツと短パンだけで、寒くて震えているんですって。誰も余分な衣類を持ってないので、先生に夏期大学に戻って、太一の荷物の中から着る物を持ってきてほしいと言ってます」
豪利が電話に出た。「太一の荷物なんてどれかわからないよ。車の中に俺の雨具があるから、それを着たらいい」
豪利が鷹狩山に着いた時にはすっかり闇になっていた。豪利は無人の駐車場に車を置き、真っ暗な山道を懐中電燈で照らしながら登っていった。暗闇の向こうにちろちろと燃えている火が見えたが、生徒たちの姿はなかった。
暗い道の真ん中に、白いものがぼーっと立っていた。人間の形をして、頭の先から足の先まで白かった。豪利はゆっくり近寄って、白いものの前に立った。光を当てないで、し

ばらく見つめた。
「太一か？」
キャーッという声をあげて、少女、少年たちが木の後ろから飛び出してきた。克兄ちゃんもにこにこしてその中にいた。
「怖かったでしょ、先生？　透明人間、怖かったよね？」
「おお、透明人間、怖かった」
太一はロールペーパーと新聞紙で、頭から腕、足の先までぐるぐる巻きにされていた。
「うん、いい格好だ、太一。ほら、これを着な。みんなに世話になったんだ。『ありがとうございます』って、言葉に出すんだぞ」
豪利が夏期大学に戻ったのは夜の十時を過ぎていた。豪利は鷹狩山班が握ってくれたおにぎりで夕食をとり、だだっ広い講堂のど真ん中に布団を敷き、点々と散らばっている荷物に生徒たちの息吹を感じながら眠りに落ちた。

33　「太一、相手の目を見なさい！」

合宿四日目。昼の十二時前後にはキャンプ地からそれぞれのグループが戻ってきて、班ごとに野菜、肉を入れた即席ラーメンをつくって食べた。
中一の太一はディパックを背負ったまま講堂の隅で眠ってしまったので、生徒たちは起こさなかった。一時間ほどして太一は目を覚ますとぼんやりしたままだった。ルリ子がディパックを下ろしてやった。
「太一の分のラーメンの材料は、台所に置いてあるからね。自分でつくって食べてね」
太一はのろのろと台所に行ったが、しばらくすると戻ってきて、荷物の中に座りこんで、またぼんやりした顔になった。
「太一はラーメンのつくり方を知らないんじゃないのか？」と豪利が親分の理王に聞いた。
「そうかもしれません。でも太一が自分から言い出すまでは助けてやりません」
「そんなのかわいそうだよ」とモトキが涙声になった。「何にも言えない子なんだよ」
「ダメです。昨日も防寒着を忘れたことを言えず、モトキが気がつくまで、寒さの中でふるえていたじゃないですか。いい機会です。『助けて』を言えないことの結果を、太一は学ぶ必要があります」
「ぼくもそう思います」とマキトが言った。「太一はぼくとアッキーに、町田から夏期大学までの行程をメモにして渡してくれたのに、自分は町田駅にたった一人でいたんです。人を誘えなかったのです。人を誘ったり、助けを求めることができなきゃあダメです」
豪利がモトキに言った。「理王は体の小さな太一が眠っていたから、昼飯に起こさなかったのだ。その太一が空腹なのに何も言わないから、理王は厳しく当たっているのだ。きみは理王に賛成できないのなら、行動したらどうなんだ？」
「わかりました。そうします」とモトキが太一の方へ行きかけたとき、アッキーが走って

いって太一の前に座り込んで話しかけ、太一の手を引いて台所へ向かった。
克兄ちゃんが「太一の動きに意思が入いったみたいです。昨日の鷹狩山から初めてのことです。太一がどうするのかをぼくは見に行きます」と言うと、みんなも後に続いた。
食堂のテーブルの上には食材が置いてあり、アッキーが太一に説明していた。「ガスコンロのつけ方、おまえ、わかる?……わかるかって、おれ、聞いてんの！　うんとか、うんじゃないとか言えよ。うんじゃなきゃ、人に聞けよ。おまえ、いつまで赤ちゃんやってんだ！　もう大人になってんだよ！」
ルリ子が「劇、見てるみたい」と足をばたばたさせた。
アッキーは「あとは自分でやれ！　わかんなきゃ、聞け！」と言って太一から離れた。
太一はラーメンの袋を手に持ったままぼんやりしていた。「袋から中身を出すんだよ」と茂樹が声を飛ばしたが、太一の手は動かなかった。理王が太一の前に仁王立ちになった。
「太一、ラーメンを食べたいんだろ?……おれの顔を見ろ。相手の目を見なさい！　『ラーメン、食べたいです。つくり方、教えてください』って言いなさい」
小さい太一が身長百七十センチにもなった理王を見上げ、とつぜん床に正座した。
「ラーメン、食べたいです。つくり方、教えてください」
理王があわてて正座した。「よござんす。お教えいたしやしょう」
理王は振り向いて言った。「中一生が、教えてやりな！」
「はーい！　太一、ラーメン、つくろう！」
他の生徒たちが講堂に戻ると、ヒッポが聞いた。「ゴリ先生は、『太一には何も働きかけをしてこなかった』と言いましたが、何か考えがあってのことですか?」
「うん……おれはある生徒の成長を急ぎすぎて、指導を間違ってしまったことがあったんだ。その反省から、『生徒の姿が見えてくるまでゆっくり待とう』と思うようになって、それで待てるようになったんだが、太一の心は待っても見えてこないんだ。話しかけてもこっちの目を見ないから、話しかけなくなってしまった。それが一昨日のルリ子の『太一を笑わせてやる』、理王の『荒療治が必要だ』の言葉から、こんな展開になった。驚きだ。俺の間違い話については折を見て話す」
「先生の間違い話、ぼくも聞きたいです」と克兄ちゃんが言った。「太一は鷹狩山で、寒いことも衣類がないことも言えないで、ただ震えていただけですから、理王に『夏でも凍死することがあるんだ』ってきつく叱られて、泣いたんです」
「おお、太一が泣いたか！　うん、反応が見えたな」

34　言葉がおそい鉄平

高校生と中三生の夕方のミーティング。
「各キャンプ地から報告をしてもらいます。先ず、ホッホ、親分をやってみて、どう思ったのかを話してください」

「ぼく、親分やろうとしたら体が震えて寒くなってしまいました。チャンちゃんがそれを見て、剣矢に親分を変えてくれました。ぼく、情けないです」
「でもこいつね、そのあとおれの親分ぶりを見ながら、いろいろ質問してきたんだ。こいつ、次は親分やろうと思ってるみたいだよ」
アズミはみんながホッホに励ましの眼差しを向けるのを見ながら報告した。「鹿島川班はね、天然記念物のカモシカが、目の前の崖にやってきたんだ。みんな静かに眺めたよ。鉄平の親分ぶりもキャンプをのどかにしたよ」
「だけどおれ、優心が寝袋を忘れたこと、気がつかなかった。おれ、親分、ダメだった」
「そんなことないよ。優心はマットを丸めて腕に抱えていたから、寝袋はリックの中に入れてあるものと.みんな思っていたんだ。寝るときになって、優心が寝袋を忘れたことがわかると、鉄平は『気がつかなかったのは自分の責任だ』って言って、自分の寝袋を優心に貸してやったんだよ」
「えーっ、鉄平、寝袋なしで寝たの？　昨夜は冷えたよ。寝られたの？」
「寝たよ」
「寝てないよ。明け方ぼくが目を覚ましたら、鉄平は外を歩いて体を温めていたんだ。それでぼくの寝袋を貸してやったけど寝不足です。でも問題は、優心が『自分が寝袋を忘れたことに気がつかなかったのは、親分の責任だ』って、鉄平をなじったことなんです」
「うっそ！」と生徒たちが驚いた。
「あーっ、優心はそんなことを言う子じゃないです」とデップリンがとまどった。「だけど、優心は合宿に来てから変なのです。先生、中一クラスで何かあったのですか？」
「ないよ。優心は六月に入塾したばかりだ。家庭に何かあったのかな？」
「それはありえません。おじちゃまもおばちゃまも教養豊かな方々です」
「俺もそう思うが、そんな家の子がどうして責任転嫁をするようなことを言ったんだ？」

35　デップリンが下級生に批判される

夕食後、食事づくり当番のデップリン班に対する感想を、中三生、高校生たちで行い、デップリンは「レストランで食べるくらいにおいしかった」とほめられて大満足だった。
子分役のホッホは「食事づくりって白いけれど、大変なことなんですね。ぼく、これからはお母さんの食事づくりを手伝います」と良い顔をした。
中二のシオ子は「デップリンの指示が完璧だったので、子分は何にも考えないですんで、楽でした」と言った。
「本当にそう思うのか、シオ子？」と豪利が聞いた。「おしゃべりで発想も面白いシオ子がデップリンといっしょになったら、とんでもなくにぎやかなはずなのに、台所から聴こえてきたのはデップリンのでかい声だけだったぞ」
シオ子が首をすくめた。「本当はつまんなかったです。何もかも命令されて、しかも完

壁で、班員に工夫できることがなかったんだもん」
デップリンががっくりした。「あー、それこそ、ぼくが剣矢に反抗されたことなんです」
豪利は「雷介は班員としてデップリンの親分ぶりをどう見たのかな？」と聞いた。
「ぼくはデップリンの表現意欲の強さを学んでいました。ただ、デップリンは自分のイメージを伝えることには熱心でしたが、相手を見つめていません。雷介という人間を見つめてほしかったです」
「あー、そうなんです。おいしい食事ができたのはぼくの喜びにはなったけど、子分たちの喜びにならなかったのです」
「そんなことない」とジュニアが落ち着いた声で言った。「デップリンといっしょにいると、人は豊かな気持ちになるんだ。きみは食事づくりの指示をしながら、小さいときに剣道をやっていて、青木という子には勝てなくて、泣いてばかりいたってことを、面白おかしく話してくれた。きみの話には青木の人柄の良さ、きみの温かさが表れていて、聴いていて豊かな気持ちになったんだ。きみの周りに人が集まるのはそういうことだよ」
「ありがとうございます。励みになります。でも雷介に言われたことは大ショックです。先生、口数は減らせるでしょうか？　しゃべりたいのを我慢できるでしょうか？」
「そうさなぁ……デップリンがしゃべりたいのを我慢していいのかな？　ツッパリはきみに口数を減らせとは言ったが、しゃべりたいのを我慢しろとは言ってないぞ」
「はあ？……そんな……」
「そうか……ではきみは何のために口数を減らせって言われたんだと思う？」
「相手にしゃべる機会を与えるためです」
「何のためにしゃべる機会を与えるのだ？」
「相手を生かすためです」
「どうやって生かすのだ？　シオコを生かすにはどうするのだ？」
デップリンは言葉につまって、理王に助けを求めた。
理王が聞いた。「今、おまえは雷介に、『雷介という人間を見つめてほしかった』って言われたけど、おまえは雷介という人間をどう見えているのだ？　『すごい一年生』なんて当たり前の言葉は使わないで言ってよ」
デップリンは色白の腕が赤くなるほど、太い腕を組んだ。
その夜、豪利がデップリンと話したいと思って探すと、アズミが「デップリンは瞑想石に座っています」と夜の庭に目をやった。
「瞑想石？　何だ、それ？」
「夏期大学の木崎湖を見下ろす庭に大きな石があります。デップリンは毎晩その石に座って、大親分としての一日を振り返っているのです。それでみんながその石をデップリンの瞑想石と名付けました」
理王がデップリンを呼びに行き、克兄ちゃんといっしょに戻ってきた。
「きみは瞑想石に座って、今日はどんなことを省みたんだ？」

「はい、雷介から『デップリンは人を見つめていない』と言われた言葉と、先生から『見つめろ、そうすればいろいろのことに気がつくようになる、って言われたことを考えました。でも、『見つめる』って意味がぼくにはもう一つわかりません」
「では言おう」
「いえ、自分で考えます。ヒントだけください」
「では聞く。きみは心配性の人間でありたいのか、親切心いっぱいの人間でありたいのか？……どっちだ？」
「はあ？……何をおっしゃりたいのか、ぼくは……」
「そうか……うん、今日はもういい。一日ご苦労さん。きみは大親分として良い合宿を創っているよ」
「嬉しいです」と言って、デップリンは理王といっしょにデップリン石に戻って行った。
アズミがその姿を見送りながら克兄ちゃんに言った。「あの人が自分を振り返る姿を、ぼくは初めて見ました」
「雷介の言葉がショックだったのかね……だが、彼はショックの受け方がいいなぁ」
「おお、きみたちはそう思ってくれるか……アズミは次のキャンプ地はどこへ行くんだ？」
「空飛山に行きます。克兄にあそこからの風景を見せたいです」
「おお、それならデップリンも誘ってくれ。だがデップリンにはリーダーをやらせないで無役にしてくれ」
「はい、そうします。ぼくもデップリンには、人の話に耳を傾けることを知ってほしいと思っています」

36　戦争孤児だったおじさんと出会う

合宿五日目は休養日で、生徒たちは自由に過ごした。農業に興味があるリサは、空飛山からの帰りに見かけたブルーベリー畑を、中二のサユリといっしょに見に行った。サユリはパティシエになりたいと思っていて、果物に興味がある。
二人がブルーベリーの畑と北アルプスを背景に写真を撮っていると、畑で働いていたおじさんが声をかけてきた。おじさんはリサが空飛山で〈初恋〉を歌っていた時に、リサの歌を喜んでくれた小林さんだった。
小林さんはリサたちにブルーベリーを摘んで食べさせ、ゴザに座ってお茶を飲みながら、自分は戦争孤児だったが、大町の農家に拾われ、この風景の中で育てられてきたことを話した。リサとサユリは小林さんの体験を、ティーニータイニー塾の生徒たちにも話してもらいたいと思って連れてきたのだ。
豪利が小林さんに、生徒たちと夕食を共にし、その話をしてもらいたいと頼むと、小林さんは喜んで受け入れ、いったん家に帰っていった。

「これ、おいしい！　これ、カントリー・ジョウのカレーの味だ！」と、夕食を食べ始めたとたんに、デップリンが叫んだ。
「当たりでーす」とキララ子が喜んで小林さんに話した。
「リサが小林さんにこのカレーライスを食べていただきたくて、栂池高原のカントリージョーというスキー宿に電話をして、作り方を教わったのです」
「そうかね、そうかね、えらくうまいカレーだわやぁ」
小林さん親子は喜んで、「これはおらの牛の乳で作ったブルーベリーケーキだでね。みんなして食べておくれや」とたくさんのケーキを出してくれた。
食事が終わるとリサが、「空飛山で、小林さんと先生が方言で話し合っていたのが面白かったです。大町の言葉で話してください」と頼んだ。
小林さんは日に焼けた顔で生徒たちを見回した。「みなさんは日本が太平洋戦争で、アメリカやイギリス、中国相手に戦争をして負けたことは知ってるずらね？　この戦争で日本人は戦死した人、原子爆弾で死んだ人、空襲で死んだ人など、長野県と山梨県の人口を足したくらいの衆が死んだだ。戦争ってものは人がたんと死ぬのがいけないけどせ、個人にとって悲しいのは、自分の身近の人が死ぬってことだいね。人はそれぞれの物語を創って生きるけど、戦争ってものはその物語を葬ってしまうだ。先生はご親族を戦争で亡くしていないかね？」
「四人戦死してるです。おらのオヤジの昇は、お腹の中にいる時に父親が日露戦争で戦死してしまい、母親は昇を産むと、乳飲み子を残したまま家を出て行ってしまったもんで、昇のジジ、ババは昇をおんぶして、よその母親たちのところへ乳もらいに歩いたです。昇はジジ、ババが可愛がってくれたもんで、運動、勉強をよくする子に育ったですがね」
「そうかね、そうかね、今と違って食べ物がない時代に、人様の乳をもらって歩くってな、容易なことじゃなかったずらね……生徒のみなさんは焼夷弾とか空襲という言葉を耳にしたことがあるかや？……おらは空襲で家族を全部なくして、浮浪児になって、いま少しで飢え死にするところを、拾ってもらっただいね」
「浮浪児って、何ですか？」
「戦争で身寄りが死んじまって、食べ物も家もなくなって、学校にも行けずに、街中をさまよって、やっとこさ生きている子どものことせ」
小林さんは「空襲」という字を黒板に書いた。「昭和二十年、東京にアメリカの飛行機が爆弾を落としまくって、ふつうの人たちを焼き殺しただよ。日本の家は紙と木でできてるで燃えやすいだね、アメリカの飛行機は、油の入った焼夷弾という爆弾を空からばらまいて、あたり一面を火の海にしたもんで、逃げ場をなくした衆たちが焼き殺されただよ。赤ちゃんを背負ったまま黒こげになった母親、お腹の下に子どもをかかえて死んだ父親。火から逃げようと隅田川に飛びこんでおぼれた人。一晩で十万人が死んだだね。先生は空襲は受けておいでかね？」
「台湾に住んでた時に空襲にあってますが、幼児だったで記憶はないです。おらのワイフ

は品川区に住んでいて空襲を受け、そのときは三歳で、小学生の姉、乳飲み子の妹といっしょに、爺ちゃんと婆ちゃんにあずけられ、二手に分かれて逃げたです。ワイフの母親とお手伝いの姐やは家を守るために残って、無事だったら洗足池で落ち合おうと決めて、じじ、ばば、子どもたちを逃がして、母親は火が弱まってから約束の池へ行っただが、だれにも会えなくて、みんな死んじまったって思ったってせ。だが幸い、次の日に同じ場所で全員無事で会えて、それからみんなで家に戻ってみると、家のあったあたりは一面の焼け野原になっていて、その中に自分の家一軒だけが立っていて、その後数年間、近所の人たち数家族がいっしょに住んだだって」

「一軒だけ焼けなかったって、どうしてですか？」

「うん、ワイフの母親はオリンピック選手に選ばれた人で、気力、体力があったし、お手伝いの姐やも気力と力持ちの娘で、焼夷弾が落ちてきたら火を消してやろうって、二人で空をにらんでいたんだって。実際、離れの部屋は焼け落ちたが、庭に落ちた焼夷弾は火を吹き出したところを庭の井戸水をぶっかけて消し、母屋にも一発が屋根を突き破って落ちたが、幸い火を吹かなかったもんで、母親がそれを抱きかかえて庭に放り投げただ。この二人の女性の活躍は新聞に載ったって。小林さんはこの時の空襲で火に追われたですか？」

「そうずらが、おらもちっこかったで、火の記憶はないだね。けどせ、一人じゃ逃げられない幼児が今ここにいるってことは、だれかに助けてもらって逃げられたってことだいね」

小林さんはそう言って、リサの顔を見つめた。するとデップリンが聞いた。「小林さんはリサをずっと見つめてお話しになってますが、隣にもキララ子というきれいな女性が座っています。どうしてリサばかり見つめるのですか？」

とつぜん小林さんの目から涙が落ちた。息子の美麻くんが説明した。

「オヤジは命を助けてくれた自分のお姉ちゃんの姿を、リサさんに重ねて見てるだね。オヤジは昨日リサさんに会って家に帰ると、『おら、お姉ちゃんに会った。あの嬢ちゃんはおらのお姉ちゃんだ』って何度もつぶやいていただ」

小林さんは土の色のしみこんだ手ぬぐいで目をふいた。「おらはいつ、どこで生まれただか、名前はなんていうだかもわからないだよ。親きょうだいのことも覚えてないだ。たぶん家族は空襲でみんな死んじまっただね。だが、おらには小学低学年生くらいお姉ちゃんがいて、おらを助けてくれたらしいだ。顔は覚えてないが、優しくってふんわりした雰囲気だったいね。日本は戦争に負けて、食べ物もなく、家もなく、会社や工場も焼け、大人は仕事を失う。そういうところへ生き残った兵隊さんたちや外国に住んでた衆が戻ってきて、職を求める。だで、政府はそういう衆の対応におわれて、浮浪児なんぞには手がまわらなんで、ほったらかしせ。そんな中で、身寄りをなくした小さい子たちはどうやって生きたかね。小さい子は焼け野原で食べ物を探すなんてことはできない。浮浪児になってさまよい、大人に食べ物をねだってじゃけんにされ、飢え死にした子たちもいただよ。けどせ、おらみたいに幼いのに生き残った浮浪児もいたってことは、優しい大人だってたんといて、わずかばかりの食べ物をゆずってくれただね。浮浪児の中の大きいお兄ちゃんや

お姉ちゃんたちの中には、どこかから手にいれた食べ物を、小さい浮浪児に分けてやったり、盗みを教えてやったりしただね。さもなきゃ小さい子はみんな飢え死にせ……先生は戦争のつらい記憶ってあるだかね？」

「実際の体験はないです。おらは戦争中にオヤジの転勤で、三歳で台湾に行ったです。妹は一歳、弟はお腹の中でした。そのとき乗っていた客船がアメリカの潜水艦に追いかけられたけど、ジグザグ運転で逃げ切って、無事台湾に着いて、おらたち乗客を降ろし、たくさんの兵隊さんを乗せて、次の目的地に向かって台湾の港を出たところで、潜水艦に撃沈されたそうです。おらの戦争体験と言っていいものと言えば、戦争が終わって、台湾から日本に戻ってきて、平和になってからあるです。小学二年生で神社で遊んでいたとき、一人のお兄さんが話してくれたことがおらの戦争体験です。そのお兄さんは兵隊として中国で戦った時に、一人の中国人の捕虜を銃剣で刺し殺す役を命じられたんです。お兄さんは後ろ手に縛り上げた捕虜に、人生最後のタバコをくわえさせ、マッチに火をつけると、捕虜は感謝の目でお兄さんを見ただって。だけど、お兄さんはその火をタバコには点けなんで、捕虜の耳をじりじり焼いただって……捕虜は身動きもせず、お兄さんを見上げていたってせ。おらはその話を聴いて、子ども心にもひどいことをする人だと思ってね、その話を聞いてから何年も経つが、俺はいまだに捕虜の目を想う。だがこの話には続きがあるだよ。おらが大人になって、知人の結婚式で大町に帰ったとき、宴会で一人の感じの良いおじさんから、「ゴリちゃん」と呼びかけられたんだ。おらには記憶のない人だったが、そのおじさんは子どものおらたちとよく遊んでくれたそうで、話を聴くうちに、そのおじさんこそ中国人捕虜の耳を焼いた人だってわかっただ。おらはこの人が本当にそんなひどいことをしたのかと思って、心の中に重くあった捕虜の話の真偽を確かめたんだ。そしたらおじさんはひどく狼狽して、『自分は肺結核にかかって、戦争には行っていない』って言うんだ。じゃあなんでそんな話をしたのかって聞いたら、そういうことを喜んで話したり聴きたがる人たちがいて、おじさんも聴いて覚え、小さい子どもたちの反応が面白くて、ついかっこつけて話してしまったんだって言って恥じた。だがおらは『それは作り話ではないずら？』って突っこむと、おじさんは『日本軍の中にはそういうことをやった部隊があり、それを手柄のように話す兵隊帰りがいたり、聴いて喜ぶ人たちがいて、自分もその一人だった』って応えた。これがおらの戦争体験だね……小林さんが大町育ったというのはどうしてなのですか？」

「この近くの農家の小林って若夫婦に子がなくて、東京に行けば浮浪児がごろごろいるで、だれか良い子を拾ってこようってわけで、夫婦は東京へ行っただ。そしたら地下道に、ぼろぼろの服を着て、汚れて、やせ衰えた子どもたちが寝転がっていて、その中の小さな男の子が「食べ物をください」って、弱々しい声だけど、しっかり言っただって」

小林さんはそこまで話すと「あとはワレが話してくれや」と息子の美麻くんに言った。

「若夫婦がその男の子に身寄りを聞くと、『お姉ちゃんがいる』って答えたけど、そばにいた大きな浮浪児が、『その子のお姉ちゃんは今朝死んだ。ゴザに丸められて運ばれてい

った』と教えてくれただって。小林夫婦はこの小さな男の子からいろいろ聞き出そうとしたが、名前がケンくんということと、お姉ちゃんと呼ぶ子がいたことしかわからなくて、この子は放っておいたら死ぬって思ったもんで、教えてくれた浮浪児におにぎりをあげて、ケンくんをおんぶして連れ出し、牛の乳を飲ませ、魔法瓶で持ってきたお湯でソバガキを作って、少しずつ少しずつ与えてやったって。ケンくんは「おいしい、おいしい」って言ったってせ。そして夫婦はケンくんをＳＬ列車に乗せて、大町に連れてきただが、ケンくんはだっこされているあいだ眠り続け、目を覚ますと少し食べて、また眠ったって。家に着いて、風呂に入れ、近所から子どもの服をもらってきて、「もう今日からケンくんはこのお家の子どもだよ。寝んねはお布団の中、マンマもいっぱい食べていいだよ」と言うと、ケンくんはきちんとおつくべして、正座のことだがね、『よろしくお願いします』って言ったってせ。この小林夫婦に女の子が生まれて、成人してケンくんと結婚して、ぼくが生まれたです」

デップリンが身につまされた顔になって聞いた。「小林さんは空腹のつらさを覚えていますか？　ぼくは空腹には耐えられません」

「覚えていないだ。おらのお姉ちゃんはおらに食べさせて、自分は食べずに死んだらしい。小学低学年生の女の子が、弟を生かすために自分は食べなんで死んだ……先生はおらより二つか三つ歳上だと思うけど、空腹を覚えておいでかね？」

「覚えてないです。台湾でアメリカの飛行機の空襲を避けて田舎に疎開したときは食べ物はなく、住んだ家は床も壁も天井も竹だけでできた避難小屋だったそうです。おらがその部屋でひざを抱えてじっとしていたので、母が『おんもで遊びなさい』と言ったら、『おんもで遊んだらぽんぽんがすく』っておらが応えたそうです。母は子どもたちに食べさせるために、自分は食べないで倒れたこともあったそうです。オヤジは食べ物を得るために、おらを連れてドジョウすくいに行って、台湾のとてつもなく太いドジョウをとったことと、オヤジが山から蛇をひきずって帰ってきた情景は覚えています。日本が戦争に負けると、おらの家族は台湾から母の実家のある大町に引き揚げてきたですが、母の実家が商店だったし、親戚もみんな農家だったで、なんとか助けてもらったんだと思います。日本には食べ物がなく、おらの家は米を買う金がなく、記憶の中には、青い葉っぱの中に真っ白い米粒が少し浮いていて、それをオヤジが自分の茶碗から箸で一粒ひと粒つまんで、子どもたちの茶碗に入れてね。三歳の弟は待ちきれないで騒ぐと、四歳の姉が弟を抱きしめてね、そうすると弟が静かにしたです。親が不在のときに、おらは妹と弟に「お兄ちゃん、お腹がすいた」と言われて、近所の家に食べ物をもらいに行った記憶はあるけど、空腹でつらかったはずの記憶は覚えてないです」

生徒たちがしんとして聴いていると、つらそうな顔をしていたデップリンが聞いた。

「ケンくんが食べたソバガキってどんなものなんですか？」

「素朴なものせ。ソバの粉をお湯で溶いて、団子にしてソバツユなんぞで食べるだ。質問の兄ちゃんは、えらく立派な体をしてるで、きっとうまい物を食べてるずらが、ソバガキ

みたいな素朴な味もいいもんせ。食べてみましょ」
生徒たちが笑うと、デップリンは両腕を大きく広げた。「まあ、まあ、まあ、お静かに。明日のキャンプの空飛山班は、豚汁とごはんの予定でしたが、ソバ粉を団子にして豚汁の中に入れることに変えます」
「やあ、えらい長くしゃべっちまったいね。おらの話を聴いてくれてありがとさん。おらはたくさんの衆に助けてもらって生き延びただが、そういう者として言っておきたいことがあるだ。戦争ってものは政府がやって、一般の人は協力させられ、死ぬのも殺すのも一般の人だでね。選挙権を持つようになったら、みなさんは選挙には行っておくれ……おやすみなさい」
小林さんは別れ際に、明日、ソバの刈り取りをすること、家の裏の川でイワナが釣れることを話した。「おらの土地で、キャンプをやっていいでね」

37　中一生優心を生徒たちが追放する

小林さんが帰った後、合宿六日目のキャンプ地とメンバーを生徒たちが決めていると、剣矢がホッホに寄っていった。
「おまえ、親分、やってみなよ。おまえの尊敬する理王がおまえを親分に推してるんだよ。おまえは学習力があるから経験を財産にできる。おれ、おまえがリサに地理を教えてるのを見て、おまえって優しい奴だってまた思った。おれ、おまえは医者になったらいい、って思い始めてんだ。だけど、おまえは人とかかわるとおどおどしちまう。親分やって、理王に表現意欲を鍛えてもらえよ。
次の日の朝食後、豪利は中二のアユ子とヒロヨを車に乗せ、食料の買い出しをすませて店を出ると、「こんな田舎にもケンタッキーフライドチキンがある！」と二人がはしゃいだので、豪利が「買い物を手伝ってもらったから、ごちそうしよう」と店に入った。
豪利が二人の注文を見て店員に、「僕もフライドチキンと、ジャガイモの千切りの揚げたやつ」と言うと、店員の若い娘がぱっとレジの向こうにしゃがみこんだ。アユ子とヒロヨは、「先生、日本語に訳し方が上手！」と喜び、レジの向こうから顔を真っ赤にして立ち上がってきた娘といっしょになって笑った。
テーブルに座って食べている時、アユ子が「優心のことですけど」と憂いの表情を豪利に向けた。「みんなと交わろうとしないんです」
ヒロヨも「優心はわたしたちを拒絶してるんです」と言った。
「ヒロヨの笑顔を拒絶する者なんていないよ。だれの心も溶かす笑顔だ」
「拒絶でなくて、ホームシックにかかっているんじゃないでしょうか？」。
「遊び盛りの男の子がホームシックにか？」
「優心は今朝、キイロちゃんを『お母さん』て呼んで赤くなったんです。キイロちゃんは『間違えてもらえてうれしいわ』ってにっこりしてあげました。優心はお母さんや妹たち

を思って、気持ちが落ちこんでいるような気がします」
「そうかもね。昨日、鹿島川キャンプからの帰り道で、優心が畑の土手で赤く色づき始めたほおずきの実を見つけて立ち止まったので、（男の子がどうしてほおずきを？）と思って聞いたら、『妹たちがほおずきちょうちんの実で遊ぶんだ』って応えました」
豪利たちが宿舎の夏期大学に戻ると、中三生、高校生たちが堅い表情で豪利の前にやってきて、デップリンが正座した。「先生、もうしわけありません！　ぼくは出過ぎたことをしてしまいました。優心を町田へ帰らせてしまいました」
「おお……そうか」。豪利はさりげない顔をした。「アズミ、生徒たちを集めてくれ」
豪利が講堂の畳の上に腰を下ろすと、生徒たちがそっと集まってきた。
「キャンプに行く準備をみんながやっていた時のことだったんです」とアズミが説明した。
鉄平が優心のところに行って、「明日はキャンプに行くときに、寝袋を忘れないでね」と声をかけると、優心が「うるせー、気がつかなかったおまえが悪いんだ！」と言ったのだ。生徒たちがハッとした瞬間、「てめえ！」と怒鳴り声をあげて、マキトとアッキーが優心に殴りかかった。ヒッポがさっと動いて二人を抱きかかえたが、デップリンは怒声をあげて優心を壁まで突いていき、巨大な胸を小柄な優心の体にがーん、がーんとぶつけた。
「あなたは感謝ということを知らないのですか！　寝袋を貸してくれた人に、あなたはなんてことを言うのですか！　あなたはティーニータイニー塾にいてはいけない人です。出て行きなさい！　帰りなさい！」
大声であっても、言葉の調子はいつも温かいデップリンが見せた怒りだった。体をゆすって激しく息をはくデップリンを、理王が抱いた。
アズミとジュニアが、荷物を背負って出て行く優心を追いかけた。
「ゴリ先生が戻ってくるまで待ちなさい」
「ぼくは帰ります」
「帰らせてあげなさい」。そばに来ていた克兄ちゃんが穏かに言った。「優心ははっきりした意志を持って言っているんだよ」
豪利はそこまでを聴いて、「言いたいことがある者はいるか？」と生徒たちを見回した。
剣矢が言った。「おれたち中三は優心に声をかけてきました。でもヤツは無反応でした。あれじゃあ合宿に来ている意味ないです」
「中一生たちはどうなんだ……草琳は優心といつもいっしょだったな？」
「はい。優心は合宿に来てから変なんです。どうしてかわかりません」
デップリンが言った。「ぼくは優心の家に電話をして、おじちゃまに詳しく話しました。おじちゃまは言いました。『ヒロくんが子ども剣道クラブで、優心をなにくれとなく導いてくれたことを、おじちゃんたちは心から感謝している。そのヒロくんが言うのだから、優心に非がある。宮坂豪利先生には合宿のことだけを考え、こちらには電話はくださらないようにと伝えてほしい。こちらからも二学期になるまでは、連絡を差し上げない』ということでした」

「そうか……アッキーとマキト、きみたちが怒ったのは当然だ。カウンセラーたちは責任を感じなくていい。俺が優心の様子に気がつくべきだった。克兄、良い判断をありがとな」

38　ホッホくんがリーダーなる

理王とチャンちゃんがキャンプに出発しようとしていると、ホッホがやってきて不安そうな顔をした。

「ぼく、自分らしい親分というのがわからないんですけど」

「それがおまえらしい親分だよ」

「はっ？……ぼくらしい親分がわからないってことがですか？」

「そうよ。わからないこと、知らないことを素直に出して、親分をやってみな」とチャンちゃんがひまわりの笑顔で応えた。「ホッホくんは知らないことをちゃんとわかるようにになるる人だと思うわよ。自分の成長を期待しながらやってみな」

各班が夏の日ざしの中を出発していった。鹿島川班は長い坂道を上り、高原を抜け、汗をふきながら鹿島川の岸に立った。木陰に入ると汗がひいた。

「こういうのをさわやかな感覚って言うのかなぁ……このままこうしていたいなぁ……でもぼくは親分やらなければいけない。ぼく、人に命令なんてできるかなぁ？」

ホッホの独り言に理王がくっくっと笑った。ホッホがはっとした。

「みなさん、聴いてください。ぼくはリーダーになったことがありません。キャンプもやったことがありません。ぼくは何を言えばいいのか、よくわからないんです」

「ぼくたちが安心できるように指示してください」と中一の雷介が応じた。

「安心できるようにって……どうやってでしょうか？」

「それは自分で考えてください」

ホッホは少し考えて、心を決めた表情をした。「これから何をするかをぼくが示して、みなさんが行動できるようにします。では、最初にテントを張る場所を決めます。次に野グソの穴を掘ります」

そう言ってからホッホは赤くなってチャンちゃんを見ると、チャンちゃんが両腕で大きな丸を作った。

「先ず炊事用の薪を集め、休憩をとってから夕食作りに入ります。メニューは白いご飯、具がいっぱいの牛乳の山賊鍋、野菜サラダと、ソバガキです。小林さんからいただいたそば粉で、ソバガキを味わってみます。テントはどこに張りましょうか？」

「あそこに砂の所がある！」とアッキーが指した。

「川の中はだめです」と雷介が言った。「ここは天気でも、上流は雨になるかもしれません。それにあそこには流木がたまっています。大雨の時には水が来るってことです。」

「向こうに草地がある！　葉をいっぱいつけた木もある！」と中二のアヤ子が叫んでピューンと走って行き、草地から叫んだ。「平らでーす！」

みんなで移動した。草地に続いて畑があって、お爺さんがクワで耕していた。
理王が「ホッホ、ここにテントを張っていいかを、お爺さんに聞いてきな」と言った。
「ぼく、人に話しかけたことないですけど」とホッホは気後れの顔になったが、生徒たちの笑顔に押されてお爺さんのところへ行き、戻ってきた時には、にこにこ顔で野菜を持っていた。「高原野菜です。生でも煮てもおいしいんですって」
「ありがとうございまーす！」。生徒たちがお爺さんに手を振った。
ホッホは自分の言葉に人が動いてくれたことで勇気が出て、「テントを張りたい人？」と呼びかけると、桃香とアヤ子が手を挙げた。「穴を掘る人」にはアッキーとホッホ、「河原の石でカマドを作り、薪を集める人」には理王と雷介と太一がなった。
理王は雷介と太一を連れて河原に下りた。「最終日のキャンプファイヤー用の流木も集めて土手に積んでおこう。先生が車で取りに来るからね」
小さな太一が太きな流木を抱えてふらつきながら歩く姿を見て、理王が「太一、りっぱな戦力になっているよ」とほめた。太一は子どもの顔で「はい」と嬉しそうに応えた。
ホッホは、「夕食の準備を始めるまで一時間の休みをとります」とみんなに告げると、裸足になって川に入り、水の中をバシャバシャと歩いた。理王が、「北アルプスの雪解け水だよ。足が切れるくらい冷たいだろう」と声をかけた。
「冷たいです。ぼく、こういうことをやってみたかったんです」
「おまえ、よくその言葉を言うね。おまえの親分ぶりはいいよ」
「ほんとうですか！　どんなところがですか？」
「自分にはリーダー経験もキャンプ経験もない、って言ったことがさ」
「よかった。チャンちゃんに、『知らないことは知らないって言え』って言われたことを意識してやってるんです……あの……東大医学部って難しいんでしょうね？」
「おまえ、ここでそんなことを聞くのか？　おまえ、キャンプを楽しんでいないのか？」
「楽しんでいます！　はらはらどきどきしながら楽しんでいます。でもお母さんの顔が出てくるんです」
「東大医学部に行けってか？」
「お母さんの夢なんです。お父さんが江川医院を閉じってしまったものですから、お母さんはぼくに医院を復活させてほしいって思っているんです。ひいお爺ちゃんも、お爺ちゃんも、お父さんも東大医学部だったんです」
「家の伝統を守りたいってわけか……それっておまえの将来に必要な選択なのかな？」
ホッホは裸足の足の裏で河原の砂をこすりながら、あいまいな表情で言った。「東大を受けないなんて言ったら、お母さん、泣きます。あの人、少女みたいに泣くんです。理王のお母さんは泣きませんか？」
「泣かねえよ。蹴りをいれてくる」
「よけるんですか？」
「よけねえよ。空振りはむなしいじゃん」

「泣かないお母さんって、いいなぁ。ぼくがリーダーシップを学ぶキャンプに遅刻したのは、出発間際になって、お母さんに泣かれたからなんです。」
「行くな、ってか？」
「ティーニー塾の人たちの間に入ったら、ぼくはズタズタにされてしまう、って言って」
「ズタズタにされたよね」
「真っ二つにされました。血がバヒャーッ、ドバーッて出ました。それをみんなが縫ってくれました」
「おまえの母親、おまえが良い顔でリーダーシップキャンプから帰ってきたのを見て、妹をすぐにティーニー塾に入れたんだろ？　そういう母親なら、おまえにとって何が大切かをわかってんじゃないのか？」
「えっ？　ぼく、お母さんのこと、そんなふうに考えたことがありません。いつも命令されてばかりでしたから」
「昨日、おまえ、剣矢に良いこと言われたけど、心に留めてあるか？」
「はい、留めてあります。『おまえは優しいから、医者になったらいい。それには表現意欲をつけろ』って言われました」
「表現意欲のない者が医者になっちゃいけない」
「ぼくのお爺ちゃんがそうでした。お父さんはそれが許せなかったんです。あの、表現意欲はどうやって育てればいいんでしょうか？」
「表現意欲の前に、表現したい内容を持つことだよ。おまえ、ティーニー塾の高校生クラスに来たいんだろう？」
「来たいです。来ます！」
「来たらわかる。だが来たら、おまえはこの塾に取り込まれる。勉強時間が少なくなるね」
「だけど表現したいことを持てる人間になる」
「おまえはどんな医者になりたいんだ？　そうなるには何をどうしたらいいんだ？　ヒッポは楽に東大合格だけど、学びたい先生が地方大学にいるから、そっちを受けるんだよ」
「はい、どんな医者になりたいのかを真剣の考えます……ここは気持ちがいいなぁ。川があって、樹木があって、空の中に山が突き刺さっていて……立っている理王くんも美しいです」
「緑が美しいんだよ……おまえ、紅葉の季節になったら、ここにテント張って、キャンプやって、のんびりしながら自分を見つめてみなよ」

39　「表現意欲はどうやって育てるの？」

合宿七日目の午後。
「先生、おみやげ！」。リサとキララ子が笹の枝にイワナを吊るして帰ってきた。「鉄平が釣ったんです」

「おお、良いイワナだ。釣りがじょうずだな、鉄平」
「小林さんの土地の川で釣った。魚がいっぱい見えた」
「これは先生のお昼ごはんのソバです」とジュニアがソバを広げた。「ぼくたち、小林さんの裏庭にテント張って、イワナを焼いていたら、小林さんにお茶に誘われ、おじゃまして、囲炉裏を囲んでしゃべりました。そのとき打たせてもらったソバです」
「信州のオヤキも囲炉裏で焼いて食べました。おいしかった。作り方教わったから、明日のコンパで作ってみんなで食べます」
「おお、いいね、田舎の味だ。中身のアンは何にするんだ？」
「鉄火ナスと野沢菜の油いためです。野沢菜は古漬けもおいしいと言って、こんなにたくさんくださいました」
「それとね、先生、小林さんは、リサが牛に興味があるのを見て、リサを子牛のところへ連れていって、子牛に名前を付けさせただよ」
「わたし『リーザ』って名前をつけちゃった」
「それから息子の美麻くんは、農業と酪農を学ぶ大学で寮生活をしていて、付属高校もあるんですって。リサが興味を持ったみたいです」
「はい。北アルプスを背にブルーベリー畑で働いている人たちを見ていたら、わたしは空と土の間で働く人になりたい、って思ってしまいました」
「おお、アズミが『リサには草原が似合う』って言っていたな……リサ、美麻くんの電話聞いておけ」
「わたしがもう聞いてあります」とキララ子が笑った。「リサの電話番号も教えて、明日のコンパにも誘っちゃいました」

生徒たちがそれぞれのキャンプ地から戻ってくると、高校生と中三生のミーティングになり、中学生一人ひとりについて、プラスの面を報告しあった。
最初にアズミがデップリンに目をやりながら言った。「デップリンが人の言葉に耳を傾けるようになってきています。そんなデップリンは頼りになります」
「その言葉、嬉しいです。ぼくはアズミくんと克兄が空飛山の草の中に座って景色を見ながら話していることに耳を傾けていたら、二人とも相手の言葉をちゃんと受け取り、自分の言葉を相手の心に向かって返していることに気がつきました。人と対話するとは、こういうことなんだってぼくは発見しました」
「おお、いいねえ！　熱い心のデップリンが、人を見つめることを知ったのなら、表現内容に深さが増すぞ」
「自分でもそう思います。でも先生がぼくにおっしゃった『心配性の人になりたいのか、親切心いっぱいの人になりたいのか』という意味がまだよくわかりません。先生はどういう意味でそんな質問をなさったのですか？　理王、おまえは対話についてのぼくの発見を、どう評価してくれる？」

「うん、おれは小さいころから、おまえの言葉の海にたゆたってきた。そのでっかい背中に安心して寄りかかってきた。そのおまえが、自分を見つめる目、人を見つめる目を持つようになるのなら、おまえはますますおれの良き兄ちゃんだ」
「人はこうやって.成長していくんだね。ホッホくんも、さわやかお兄ちゃんの顔になって親分をやったものね」とチャンちゃんが感慨深そうに言った。
「はい、ぼくはさわやかお兄ちゃんになりかかっています。でもぼくは表現意欲が足りません。それをどうやって育てるのかを考えるつもりです」
　デップリンは「ホッホがそんなことを考えるようになったとは嬉しいです」と張り切った。「では表現意欲をどうやって育てるかをみんなで考えてみましょう！　鉄平、リサさん、どうでしょうか？」
「おれ、表現意欲持とうなんて思わなかった」
「わたしもみんなに合わせていれば安心でした」
「ということは、鉄平もリサさんも、自分の考えと違った方向に物事が進んでいってもよかった、ということですか？」
「ティーニー塾に入って、よかないって思った。だからおれ、しゃべろうとしてる」
　理王が「剣矢はホッホに向かって、『ホッホは優しい心を持っているから、それを表現するために表現意欲を鍛えろ』ってアドバイスしたけど、具体的にはホッホがどうやって表現意欲を鍛えたらいいと思うんだ？」と聞いた。
「自覚すりゃいいんだよ。ホッホは自分の良さを自覚できたみたいだから、それを自信にして表現していけばいいんだ。つまずいたらまた自分を励ましたらいい」
　キララ子は「ホッホくんに厳しかった理王が、ホッホくんをほめるようになってきているけど、理王は何を基準にしてほめているの？」と聞いた。
「おれはその前にホッホに聞きたい。ホッホはどんな医者になりたんだ？」
「患者に寄り添う医者です」
「そんなのは当たり前の言葉だ」
「ぼくには当たり前の言葉ではありません。ぼくが『患者に寄り添う』って言葉の意味を考えるようになったのは、ティーニー塾に入ったからです」
「えっ、えっ、ホッホが理王に言い返した！」と剣矢がびっくりした。
「はい、そのぼくはゴリ先生に質問します。ぼくはもの心ついたときには勉強をやらされていました。でもぼくはチャンちゃんから、ゴリ先生は『勉強しろって言わない』って聞きました。どういう育て方をすれば、チャンちゃんみたいな人になるのでしょうか？」
「生まれつきさ。だけど子育てはしっかり者の母親がやった。俺はいいかげんだった」
「やーだ、先生、だめ、その言い方。ホッホくんは本気で質問してるんだよ」
　チャンちゃんが軽やかに笑った。「お母ちゃんはお父ちゃんのことを、『よその子に対して一生懸命になるくらい、自分の子にも一生懸命になってほしい』って言ってるけど、お父ちゃんはお説教をしないで育ててくれたから、良いお父ちゃんだよ」

「ぼくのお母さんは『勉強』って言い続けました。先生はどうして言わないのですか？」
「その子にはその子の成長の仕方があると思うからだ。チャンちゃんは生まれてくると、まだお目目が見えないうちから、母親の声のする方に向かってほんのりと笑ったんだ。目が見えるようになった頃、母親がだっこしていたら、柱時計に向かってにっこり笑いかけたんだ。母親がおやっと思って、もう一度時計の前を通り過ぎたら、振り向いて、また柱時計に笑いかけたんだ。チャンちゃんは楽しいことへの気持ちの切り替えも速かった。ピアノの鍵盤にカラーペンでいたずら書きをして、母親から『お父ちゃんが帰ってきたら、何て言うと思うの？』って叱られたら、べそをかいていた顔がぱっと笑顔に変わって、『ただいまっていう』と応えたんだ。チャンちゃんのように、すぐに楽しい気持ちになれ、人が好きな子どもは、人と交わる中で育っていくと思う。人は勉強したいと思うことに出会ったら勉強を始めればいい。教師の立場から言えば、俺は生徒一人ひとりが成長の物語を持てるように手を貸したいし、生徒たちに『やりたいことを持つ人になってほしい』と思って働きかけているつもりだ」
　ミーティングの後、豪利が克兄ちゃんに聞いた。「空飛山はどうだったかな？　きみはアズミに誘われて行ったんだろう？　アズミはきみに傾倒しているし、東大生活のイメージを持とうとでもしたのかな？」
「ぼくもそれを期待したのですが、アズミはヒグマを追いかけるために北大に行きます」
「ヒグマを追いかける？　アズミは先日の父母会で、『東大に行く』と言ったぞ」
「そうだったのですが、アズミは一昨年はこの合宿の爺が岳登山で天然記念物の雷鳥に出会い、昨年は木崎湖トレッキングコースでツキノワグマの親子を見、先日の鹿島川キャンプでは天然記念物のカモシカを目の前で見ることができ、安曇野を満喫できたから、今度は北海道でヒグマを追いかけたいと言ってます」
　豪利がアズミを呼んだ。「きみはヒグマを追いかけたいほど動物好きなのか？」
「はい、ツッパリくんと出会ったことでそうなりました。ぼくはいとこが全員女の子で、お人形遊びをしながら育ったのですが、ティーニー塾に入って、小五の夏のキャンプで、ツッパリくんがよそのグループに向かってロケット花火を打ちこんだとき、ぼくは心臓が破裂するほどふるえ、それと同時にツッパリくんに心をわしづかみにされてしまいました。（これが男だ。ぼくは男になるんだ）って決心しました。それで男の子らしく乗り物や動物好きになろうとしたら、動物にはまってしまいました。ヒグマを追いかけたいというのは本気です」
　そう言ってアズミがみんなの所へ戻っていく姿を見ながら、豪利は克兄ちゃんに言った。「ヒグマを追いかけるか……俺は動物とアズミの間にはたくさんの人がいる方が、彼の優しさが生きるように思うんだがな」
「その優しさなんですが、アズミの優しさの中には悲しみがありますね」
「悲しみがある？……どういうことだ？」
「アズミが空飛山キャンプで、ぼくに語ってくれたことから思ったのです。アズミは中一

の優心の様子に気づきながら、自分が通り一遍の働きかけしかしなかったことで、優心が合宿から追放されることになってしまったと後悔し、リーダーシップキャンプではホッホが剣矢にやっつけられたときも、まずい、と思っているうちに、ツッパリくんが助けてやって、アズミは『何も行動しなかった自分が悲しい』と言っていました」

「そうか、それで俺の疑問が溶けた。デップリンが小三の時のサマーキャンプで、小高の男の子たちにおもちゃにされて泣いたことがあったんだ。まあ、にこにこ子豚ちゃんでかわいかったからだが、おれはてっきりいじめられていると思って、男の子たちをひっぱたいたんだ。そのときアズミは輪の外にいて、デップリンに手出しはしていなかったのだが、悲しそうな顔でデップリンを見ていた。それ以来、俺はアズミの（あの悲しそうな顔は何を意味するんだろう）とずうっと気になっていた……あれは〈行動しない自分が悲しい〉という表情だったのか……アズミの知性は、いずれは自分の行動の仕方を見つけると思う」

40　目立たない生徒たちがかっこいい役に

夕食が終わると、全員で明日の合宿最終夜の打ち上げコンパの相談をした。庭にキャンプファイアーの薪を組み立て、料理台のセッティングをする人を決め、食べたい料理を決めた。信州名物オヤキ、おでん、じゃがバター、焼きそば、焼きおにぎり、豚汁、フルーツポンチ、そして薪の火で焼いて食べる町田市名産品の独逸屋のソーセージとなり、それぞれの料理を作る人を決めた。

その後、高校生カウンセラーたちは、キャンプファイアーの〈名誉の点火役〉に、誰を選ぶかを話しあった。

「人の顔を見ることができるようになった太一を推したいです」とモトキが遠慮がちに言うと、ヒッポが首を傾けた。「点火役の生徒は、合宿で最もよく遊び、働いた人が選ばれるんだよ。太一はほとんど目立たなかったよね」

「そう言われると思いました。太一が変わったのを知っているのは、中一生と理王くらいですから、太一を選んだら、他の人たちが変に思うかもしれません。ですけど、ぼくは太一が成長しようと思っていることを評価してやりたいです.」

「おお、そうか……きみたち、モトキとヒッポの判断の違いについてどう思う？　名誉の点火役を選ぶ基準をどこに置くのかな？　他の生徒と比べてよく活動したということに置くのか、その生徒として成長したことに置くのか？」

「あっ、そうでした！」とヒッポが頬を叩いた。「ぼくは目立つ人、強い人を思ってしまいました。ぼくも太一を推します。その理由を話すね。ぼくが中三の時、ぼくと同じ中学校の同じ学年からティーニー塾に来ていた生徒がいてね、彼が入塾したばかりの頃、教室に入るときにチラチラっとあたりをうかがうような目つきをすることに、ゴリ先生が気づいて、彼に『何か心配ごとがあるんじゃないか』って聞いたら、彼が言いよどんでね、それを見た生徒の一人が、『この塾では安心していいんだよ』と言ったの。それで彼はある

連中から突き飛ばされたり、金をとられたりしていることを話したんだ。それでゴリ先生は、突き飛ばされたときに頭を打たない転び方を教え、ぼくたちも彼を励ます意味もあって、いっしょになって転び方の練習をしたんだ。もう一つ先生はいじめられたときの気持の持ち方、対応の仕方を教えてやったら、彼はいじめられなくなったんだよ」

「ゴリ先生はどんなことを教えたんですか？」

「うん、彼はいじめられても、黙ってがまんしていたからいじめられ続けたんだ。そこで俺は彼に、『痛い！　やめて！　など大騒ぎしろ』と言ったんだ」

「そうしたら、彼はそれをやったんだよ。『人殺し！』ってまで叫んでね」とヒッポがあきれながら話を続けた。「彼が学校で大声でわめく声が聞こえてくると、もうみんな走っていって、その連中を取り囲んで、言葉で猛烈にやっつけたんだ。あっという間にいじめはなくなってしまった。そして彼はティーニー塾の夏合宿のキャンプファイヤーの点火役に選ばれたんだ。彼はそれまではどこでも何にでも選ばれたことがなかったはずだから、自信になったと思う。太一もおとなしいから、あまり人から相手にされてこなかったと思うけど、理王の報告などから、彼は自分を変えようとしているんだと思う。ぼくも太一をほめてあげることにします」

「わたしはリサちゃんを推薦します。やりたくなかったリーダーをやり遂げたんだもの」

「ルリ子も選んであげよう。ルリ子は小一から学校に行っていないのに、あののびやかさは素晴らしい。ルリ子は『不登校の子は町の中をうつむいて歩くけど、わたしはティーニー塾に入ったおかげで、上を向いて歩くようになったんだよ』って、自分で言って笑ってるんだよ」

「ぼくはこの合宿八日間の自分の食事を、一人で作り通したアッキーを推します」

「中二の男の子が、毎日三食を作り通したんだよね！」

「おれたちが、アッキーを励まし続けたことも、誇りにしていい」

「理王を推します。理王の勉強力の高さを知らない後輩たちでさえ彼に憧れるというのは、理王には体からにじみ出てくる品性があるからで、彼の存在自体が嬉しいんです」

「ゴリ先生はキララ子も選んであげたいのでしょう？」

「おお、だが今年は選ばなくていい。俺は二年後の合宿で、アズミのやっているボスカウンセラーの役をキララ子にやらせたい。キララ子は求められないかぎりリーダーをやらない。それがリーダーシップキャンプの指揮官に理王から推されたら、すっと受け、指示、判断、進行が知的でしなやかだった。キララ子が表に出たら、彼女の関わっている世界の奥行が深くなるほどのセンスを彼女は持っている。そういう能力を彼女に自覚させたいから、むこう二年間は人を見、自分を見つめさせてから、ボスカウンセラーにさせたい……うん、きみたち、良い選び方をしてくれた。キャンプファイヤーに火が入ってリサの歌が終わったら、選んだ理由をアズミがみんなの前で言ってやってくれ。中学生たちには人の見方の学びにもなる」

「先生、アッキーの食物アレルギーのことなのですが」とキイロが言った。「アッキーも

食べたい料理に手を挙げました。アッキーは、『最後の夜くらい、みんなといっしょのものを食べたい』って言っているんです」
「アッキーは、お母さんが合宿のメニューに合わせて作ってくれたレシピを見ながら、みんなと同じものを作って食べていたじゃないか」
「そうですけど、アッキーは最後の夜は、みんなと同じお鍋や鉄板から、いっしょにつついて食べたいんですって」
「そうさせてあげましょう！　同じ鍋からつついて食べさせてあげましょう！」とモトキが涙声になった。
「おお、そうか、数年前にも食物アレルギーのひどい生徒がいて、俺が鍼灸師に相談したら、男の子は精子ができ、女の子は生理が始まると、アレルギーから脱出できる子たちがいると言われ、その生徒はまさにそうなって合宿を楽しんだ……アッキーを呼んでくれ」
　アッキーがやってきた。「高校生たちはきみに、自分たちと同じ鍋から食べさせてやりたいと思ってるんだが、きみは添加物が入ってるものを食べたら、すぐにアレルギー反応が起きるのだろう？」
「ぼく、だいじょうぶ！　ぼく、だいじょうぶ！」と、アッキーの顔色が一気に赤くなり、「ヤッターッ、ヤッターッ」と叫んでびょーん、びょーんと跳ねた。「ぼく、化学肥料とか添加物とか使ってたら、口に入れたらすぐわかる。ベロがピリッとするから吐き出す！　ぼく、みんなといっしょの鍋から食べたい！」

41　「なにやってんだ、おれ、悪ぶってんじゃねえよ！」

　合宿八日目。朝から好きな所へ出かけて遊びまわった生徒たちが帰ってくると、コンパの作業に入った。広場には、キャンプファイアー用に拾ってきた流木が形よく積み上げられ、食べ物を置くテーブルが並べられ、裸電球がセットされた。台所と食堂ではそれぞれのグループが食べ物作りをにぎやかに楽しんでいた。
「ここは何を作っているのかな？」
「ヤキトリです」
「おお、アッキーが串に指しているそのヤキトリの肉は、アッキーも食べてだいじょうぶ、って肉屋が言ってたからな」
「先生、こっちのグループは信州のオヤキを作ってるの。アンは野沢菜漬けをごま油でいためて、皮で包んでいるところ！　あーっ、また皮が破れちゃったー！」
　とっぷりと陽が落ち、生徒たちは積み上げられた流木の周りを囲んだ。
　合宿大親分のデップリンが豊かなバリトンの声で言った。「それぞれの人に発見があり、感動がありました。今夜はその財産をおたがいに交換してください」
　ロープに吊るされた裸電球が消され、生徒たちが手にしていた懐中電灯が消され、暗闇になった。坂の上の樹木の中にタイマツの火が遠くともった。五つの火がゆらゆらと坂を

下りてきて、積み上げられた流木の底に置かれた。枯れ葉に火がついた。火は横に広がり、縦に伸び、ぱちぱちとはぜ、満点の星空の中に炎が突き刺さり、星を消し、生徒たちの笑顔を写しだした。豪利のハーモニカが鳴り、リサと克兄ちゃんの二重唱が流れた。

遠き山に　日は落ちて　星は空を　ちりばめぬ　今日のわざを　なしおえて
こころかろく　やすらえば　風は涼し　この夕べ　いざや楽しき　まどいせん

（堀内敬三作詞）

ハーモニカの余韻が炎の中に吸いこまれた。アズミが点火役の生徒たちの選ばれた理由を説明し、小林美麻くんがブルーベリーケーキを持って参加していることを伝え、キイロがどんな食べ物があるかを説明し、デップリンが乾杯のグラスを炎に向かって掲げた。

食べて、歌って、踊って、しゃべった。高校生たちは中三生たちを頼もし気に見つめ、中三生たちは中二、中一生たちに積極的に話しかけ、克兄ちゃんと美麻くんは大学生同士で隣り合い、キララ子はリサを美麻くんの隣に座らせた。

夜がふけ、講堂に戻って寝る生徒、地面に横たわって、天の川を見ながらしゃべり続ける生徒、小さくなった火でオヤキを焼いて食べる生徒、夜がそれぞれを包んでいった。

合宿最終日の午前中、生徒たちは夏期大学の建物と林の中の大掃除をすませてから、木崎湖を見下ろす庭に円を組んだ。

「みなさん、この大きな木造の建物、周りの林、目の下の木崎湖を心におさめてください。ぼくたちはここで青春のひと時を過ごしました。では合宿大親分のデップリン、言葉をお願いします」

「みなさーん、合宿を楽しめましたか？」

「楽しめました！」

「成長できましたか？」

「成長できました！」

「ぼくたち中三生も一人ひとりが成長できました。ぼくたちは先輩から受け取った〈愛の心〉を来年の中三生たちに渡します。来年ぼくたちは高校生になってこの合宿を支えます。そのとき理王はまだ中三ですが、ぼくたちといっしょに高校クラスに移り、カウンセラーになって合宿に来ます」

合宿大親分の役をやり遂げたデップリンが誇らしげに叫んだ。「〈人と触れ合い、自分と出会う遊びの合宿〉を、今、終了しまーす！」

歓声と拍手が天空を貫いた。その中に中二のマキトの声があった。

「えーっ、理王くんは中三じゃないんですか？　俺と同じ中二？　あーっ、おれ、何やってんだ！　悪ぶってんじゃねえよ！」

42　追放された中一生優心の父親が来塾

夏休みが終わり、明日から秋の授業が始まるという日、豪利が庭で雑草を抜いていると、身なりの整った若い男性が道路から豪利を見つめていた。

豪利は姿から想像して、「優心くんのお父さんですか？」と声をかけた。

「はい、私は鈴木優心の父親です」

男性は姿よく庭に入って来ると、「優心が合宿でたいへん失礼なことをしてしまいました。まことにもうしわけございません」と深々と頭を下げた。

「伊藤ヒロキくんが大町から電話で報告してくれたことと、優心が帰ってきて私に説明したこととが一致しておりました。お詫びのしようがございません」

豪利は男性に濡れ縁に腰を下ろすように勧め、ポットの冷水をコップに注いだ。「これはその辺の土手に生えているミントの葉を摘んで、お茶にしたものです」

男性はしなやかな腕の動きでコップに口をつけ、「ほのかな味ですね」とコップの中の緑の葉を見つめた。

「私は野草からお茶を作ったり、草花を愛ずるという心がなくて……人に隙を見せまいとして生きてきました……それが優心を余裕のない人間にしてしまったのかもしれません。」

「いや、優心くんは気持ちの良い少年です。ただ、その彼がどうして……」

「親の別居です」

「……そうでしたか……」

「はい……妻はこちらの塾のことを、伊藤ヒロキくんのお母さんからうかがっておりまして、私どもが別居する直前に、優心をこちらにお願いしたのです。優心の気持ちが落ちこまないようにと考えてのことです。優心は自分の意志で私の方に残りました。別れの時には、『お兄ちゃん、お兄ちゃん』と泣く妹たちを、優心は代わる代わるだっこして言葉をかけ、最後は笑って別れました。その優心が母親がいなくなったことで、あんなにバランスを崩すとは思っていませんでした」

「……僕もお母ちゃん好きの男の子だったなぁ。僕は六歳のとき、敗戦で台湾から日本に戻ってくると、大きな空き家の一部屋だけを借りて、親子五人で住んだのですが、僕は母がいないと、借りていない部屋まで開けて、『お母ちゃん』と呼んだものです」

「優心も大らかな母親が好きでした。私はきちんと育てたい方で、優心を厳しくしつけました。優心は小一で子ども剣道クラブに入ると、二つ上のヒロキくんが優心を何くれとなく世話をしてくれまして、私ども夫婦はヒロキくんの優しさと真っ正直な人柄に全幅の信頼を寄せました。そのヒロキくんからの涙の電話で、優心が寝袋を貸してくれたお兄さんにひどい言葉を返し、ヒロキくんが怒って優心を合宿から追放したという報告を受けた時にはぼうぜんとしました。私は優心を善悪の判断ができる子どもに育てたつもりでした……優心は合宿から追い出された理由を私に報告すると、部屋に引きこもってしまいました。夜遅く私が優心の部屋をのぞくと枕がぬれていまして……私たちは集合住宅の四階に住ん

でいるのですが、優心は学校が終わって、我が家の窓が見える所まで帰ってくると、いつもリコーダーを吹くのです。すると小さな双子の妹たちがベランダに飛び出していって『お兄ちゃん』と叫び、優心は『ぞうさん』のメロディーを吹いてやり、妹たちは力いっぱい歌ったのです。『ぞうちょちゃん　ぞうちょちゃん　おなながなないのね　そうよカバちゃんが　……』。歌がある我が家でした」

豪利は立ち上がると、庭で赤く色づき始めているほおずきを、根をつけて掘り上げ、父親にわたした。

父親は「この赤い実はほおずきちょうちんですね」と頬をゆるめた。

「その〈ほおずきちょうちん〉という言い方を、優心くんは合宿でも言っていました」

「はい。優心が幼い時に、母親が赤い実をつるしている茎を振って、『おさるのかごやはほいさっさ、日暮れの山みち細いみち　ほおずきちょうちんぶら下げて』と歌ってやっていたのです。優心も大きくなって、妹たちのままごと遊びに、ほおずきちょうちんの赤い実を、妹たちのヘアバンドに吊るしてやったりしていました」

「ほおずきのちょうちんおつむにおままごと、か……この苗を優心くんにあげてください」

「ありがとうございます。でも優心は人に対して言ってはいけないことを言ってしまったことを十分理解しています。あの子はこの責めをずっと背負っていくと思います」

「いや、中一生にそんな重荷を背負わせてはいけません。父親の助けが必要です」

「……どんな助けをでしょうか……」

「この塾に戻すことです。戻ってくれれば、気持ちが楽になります。生徒たちがそうしてくれます。生徒たちの気持ちがこのほおずきに込められていると言って渡してください」

「ありがとうございます。一つ質問させてください。先生は先ほど、私が優心を『善悪の判断ができるように厳しく育てた』と申しましたら、ちょっと疑問の表情を浮かべました。それはどういう意味なのでしょうか？」

「あ、そうでしたか……ではうかがいますが、お父さんは中学校の先生だそうですが、何か部活の指導をされておいでですか？」

「合唱部の指導をしています。全国大会に、いつももう一歩というところで、出場を逃しています。私の指導法に問題があると思うのですが……今のご質問はそのことと関係があるのでしょうか？」

「あなたは怒鳴りつけるタイプの指導者ではないですね？」

「はい、それは.しません」

「しかしプライドが高く、『オレについてこい』と思って指導している」

「……宮坂先生、思っておいでのことをおっしゃっていただけますか？」

「ではうかがいます。あなたは生徒たちに考えることをさせているのかな、と僕は思ったのです。優心くんがあんな言葉を吐いてしまったということは、父親が厳しく教えた善悪の判断は父親の判断であって、優心くんのものになってはいないんじゃないでしょうか？」

「おっしゃる通りです。ものを考える人間に、私が優心を育てられなかったということで

す。合唱部が全国大会一歩手前でいつも終わっているということもそうです」
「生徒たちの顔ぶれは毎年かわっても、指導者が生徒一人ひとりを生かしてやれば、生徒たちはコンクールには敗けても、この仲間たちとたくさんのことを学び合えたという自覚と感動を持ちます。ティーニー塾では英語劇発表会があり、今年は七クラスがあって演目はそれぞれ違いますが、もし全クラスが、例えば「オオカミと七匹の子ヤギ」をやったら、出てくるオオカミの雰囲気も劇の雰囲気もクラスごとに違うでしょう。僕は生徒の特長、クラスの特長を生かすように導きます」

次の日、豪利は中三生のクラスで、優心の親の別居のことを話した。
デップリンは「別居とは知らなかったです。ぼくは優心に会って謝ります。そうしないとぼくはいつまでも後悔します」と言った。
「うん、そうか……だがしばらく待て。優心の心が落ち着くまでには時間が必要だ。それに俺が先に会う」
豪利は生徒たちに言った。「ティーニータイニー塾には、行事が終わるごとに、自分が出会った人物のプラスの面を評価することをやっている。では今から、合宿での優心のことを、〈愛の心〉を持って評価してくれ。それを俺が優心に伝える。
中三生たちは優心のプラス面の評価に困った。中一の優心がこの塾に入ったのはつい六月のことで、中三生たちが優心と出会ったのは夏の合宿が初めてで、それも数日いっしょにいただけだったからだ。
豪利は「人のプラスの面は見つけようとすると見つかるものだ。自分の成長にもなる。よく考えて見つけてくれ」と言った。
「優心の鉄平への言葉は許せないけど、言葉遣いは丁寧なヤツだった」
「わたしは許します。動きがきびきびしていて、感じ良かった」
「人を見る時の目が優しかったわ」
「優心くんはぼくに、どうしてホッホと呼ばれるのかって質問してきて、ぼくの説明を真面目に聴いてくれました。理王は食事班では優心の親分でした。彼をどう思いますか？」
「表情がいつも清々しかったから、みんなもヤツを許すと思うけど、ヤツは自分を許さないんじゃないかな。夏期大学から出て行ったとき、そんな顔をしていた。克兄はヤツを駅まで見送ったけど、どう思いますか？」
「覚悟の決まった顔だった。自分を恥じたんだと思う。かばったり、慰めたりじゃない言葉が彼には必要だ」
「わたし、学校の合唱部の練習のとき、中一のルリちゃんから優心の人柄を表しそうな素敵な話を聴いたんです。でも歌の練習で話が切れちゃったので、今、ルリちゃんに電話して聞いみます」
「おお、みんなにも聴かせたい話だと思う。ルリ子が暇なら、今から来てもらってくれ」
リサの電話からすぐに、「こんにちは！」という元気な声でルリ子が現れた。みんなで

ひとしきり再会を喜んだ後、ルリ子が話した。
「少し前、マーケットで優心を見かけた時のことです。優心が動かないでじっと一点を見ていた先に一人のお婆ちゃんがいたんです。そのお婆ちゃんは私の近所の人で、娘さんはシングルマザーで働きに出ていて、お婆ちゃんが三人の孫たちの世話をしているんです。その時もお婆ちゃんは手押し車に小さな子と、買い物いっぱいのかごを乗せていて、その品物をリックに入れて背負おうとしていたんだけど、重くって上手に背負えないでいたみたいです。そしたら優心が寄っていってお婆ちゃんに話しかけ、お婆ちゃんの足が悪いのを知って、優心はリックを自分が背負って、もう一つの買い物袋も持ってやろうとしました。私も寄って行って持ってやりました。それから優心は、『たくさん買う時には電話をください。お手伝いします』って言って、自分の電話番号を紙に書いて渡したんです。私もその紙に電話番号を書き加えて、おばあちゃんの家まで二人で送って行きました」。
この一週間後、豪利は町田市の体育館から出てきた優心に、ばったり出会った振りをした。「おお、優心じゃないか！　おっ、担いでいるのは剣道の防具だな？　きみは剣道をやっているのか。俺も高校時代に剣道をやっていて、あと一歩で全国大会出場というところまで行ったんだ。きみはいつから剣道をやっているんだい？」
「小一からです」
「おお、楽しく続けているんだな……うん、剣道はきみに似合う。きみは腰の上に上体をすっと乗せて歩いていて、姿がいい」
豪利は優心を木陰のベンチに誘った。
「きみの得意技は何だい？　メンか？」
「メン攻撃が得意ですけど、コテやドウで勝つこともあります」
「おっ、コテって、相手が剣を振り上げて出ようとしたときに打つデゴテのことか？　ドウって相手が打ちこんできた剣を擦り上げて打つドウのことか？」
「はい」
「おお、その技は相手の攻撃がしっかり見えていないとできない技だ。俺はメンが得意だったが、敗ける時はいつもデゴテを取られた」
「ぼくもたまにデゴテを取られます」
「きみは落ち着いているからたまになんだ。俺は勝ちたい気持ちが体に出てしまうから、竹刀を振り上げた瞬間にコテを打たれたんだ。飛びこむ瞬間にのどにツキをくらって、脳天からひっくり返ったこともあった。きみは落ち着きがある剣士なんだろうな」
「気がはやって敗けることがあります。落ち着くにはどうしたらいいですか？」
「それは難しい問いだ……だいじなことは勝負にこだわらないこと、剣道を楽しむこと、対戦相手を貴ぶこと……そうすれば落ち着いて、相手も自分も見えてくる……ははっ、俺は自分ではできなかったことを言ってる。だがそうなんだ。そこを目指すのが稽古だ」
豪利は立ち上がった。「優心、ティーニータイニー塾に戻っておいで。デップリンは悔やんでいる。俺はきみの寂しい気持ちに気がつかなくてすまなかったと思っている。きみ

が鉄平に一言謝れば、生徒たちはきみを歓迎するよ……じゃあ、またな」
「先生」
「ん？」
「ぼくのお父さんが先生からもらったほおずきちょうちん、ぼく、鉢に植えました」
中三生の授業で、豪利は優心と会ったことと、生徒たちの優心への感想を優心に送ったことを話した。
デップリンは日を置いてから剣道場に行き、道場裏のススキの穂がゆれる土手で優心と向き合った。「ぼくは優くんの寂しい気持ちに気がつかないでしまった。ごめんね」
「ぼくも……」
デップリンはあつい胸の中に優心を抱いた。

43　ホッホくんが家出

十月の中ごろ、ホッホの両親が「こんなものを置いていったのです」と、ホッホの書き置きを持って豪利を訪ねてきた。そこには「少しの間、家出します」とだけあった。
父親は表情に力がある人だった。母親はホッホの携帯電話と貯金通帳、領収書を豪利に見せた。領収書はスポーツ用品店モンベルのもので、ザック、テント、寝袋、鍋、携帯用ガス器具などの金額が書いてあり、キャンプに必要な物がそろっていた。
「通帳を見ると、江川くんは月々のお小遣いをきちんと積み立てていますが、引き出したのは今回が初めてみたいですね？」
「はい、お金を使うことがほとんどない子ですので、お金をおろして家出するなんて考えられなくて、私はおろおろしてしまいました。ちょうど海外勤務が終わって日本に戻ってきた主人が、『家出なんてことを、ホッホくんはできるのだ』って感心したんですの」
「先生がお書きになった〈ティーニータイニー通信〉が毎号、妻から海外の私に送られてきて読んでいましたから、私に動揺はありませんでした。その通信の合宿の報告で、生徒さんたちがホッホくんをほめてくれているところを読んだときには、息子が（こんなことができるようになったのか）と驚きでいっぱいでした。息子がこちらの門をくぐってからの様子や、ホッホという名前の由来、米を洗剤で洗ったこと、ツッパリくんに助けられたことなどを読みまして、私はもう笑うやら感謝するやらでした。そしてホッホくんを妻に任せきりだったことをいたく反省しました。同時に、ホッホくんをこんなとっぴなことができる子にしてくださったこちらの塾には感服しています」
「ホッホくんはどこでキャンプを楽しんでいるのですかねえ？」
「鹿島川です。領収書の担当者名にイチハシとありましたので、その方に尋ねましたら、北アルプスの鹿島川でキャンプをしているはずですと言って、ホッホくんの様子をくわしく話してくださいました。イチハシさんは中学生がたくさんの買い物をするので、初めは慎重に応対したそうですが、ホッホくんが塾でキャンプのことを鍛えられていると話し、

寝袋や防寒着のことなどもしっかり質問してきたので、『息子さんは心配ありません』と言ってくださいました」
「ぼくもそう思います。しかし、ホッホくんの変化の良さ速さにはびっくりだなぁ」
「この妻のお婆ちゃんがそんな人で、この人にもそんなところがあるのです」
「立ち入ったことをうかがいます。お父さんは江川医院をなぜ閉じられ、ホッホくんが医院を復活させようとしていることはどう思われますか？」
「私はオヤジの医者としての在り方がいやだったのです。患者の顔も見ず、自分の判断だけを押し付け、そのくせ患者に文句を言われるとおろおろしてしまって、人と対話ができない人でした。私はオヤジが死んだとき、患者に愛されていない医院など引き継ぐ気持ちになれませんで、ちょうど海外の医療活動の誘いがありましたので、医院を閉じ、二十四歳の妻と四歳の息子を置いて外国の病院に勤務し、仕事に没頭し、家族を省みませんでした。この四月に息子がこちらにお世話になってから、妻の手紙やティーニータイニー通信を読んで、自分がいい加減な夫であり父親であったことを反省しています。江川医院の再開はホッホくんしだいです。私は国内の僻地医療に関わってみたいという気持ちです」
　この日は中三生の授業日だった。豪利がホッホの家出と両親との会話を話すと、デップリンが理王に言った。「おまえ、鹿島川へホッホの様子を見に行かなくっていいの？　ホッホの家出はおまえが勧めたようなものだよ。行くのなら、ぼくもいっしょに行くよ」
「行く必要はない。携帯電話をわざわざ置いていったんだ」
　次の中三生の授業にはホッホのきっぱりした表情があった。
「ぼくね、夏合宿の時、理王くんに『秋になったら一人でキャンプをやってみろ。自分が変わる』って言われたから、鹿島川と空飛山にテントを張って二泊したんです」
「へー、おまえ、夜中、一人で怖くなかったの？」
「怖かったです。夜中にガサガサ歩くよう音がするから、『だれですか？』って呼びかけて、テントから外へ出てみたらだれもいないんです。懐中電灯で照らしてみたら、目が光っていました。鹿だったんです。夜空にはいっぱいの星。朝は紅葉が鮮やかでした。ぼくは星も紅葉も初めて見たと思いました。町田に戻って、『ただいま』って玄関のドアを開けたら、お母さんがにこにこ出てきて、『お帰り！　一人キャンプ、楽しかった？』だって。お父さんも外国から帰っていて、『良い顔してるじゃないか』だって。それでぼく、『高校時代は人といっぱい交わる。旅もする』って言ったんだ」

44　「天声人語」にティーニータイニー塾がとりあげられる

　秋の色が深まった日、豪利が中三生たちに「いい報告があるぞ」と伝えた。
「朝日新聞から何か言ってきたのですか？」
「おお、バカロレアを書いた中川謙さんという記者が訪ねてきてくれたんだ。周りの空気が潤うような紳士だったよ」

「えーっ！　この塾のことが新聞に載るんですか？」
「そうなんだ。天声人語に載るんだって」
「天声人語ってなあに？」
理王がティーニー塾でとっている朝日新聞の〈天声人語〉の欄をみんなに見せながら、
「天声人語に載るってことは、おれたちがカッチョイイ活動をしているって意味になるんだ」と冷静な顔を輝やかせた。
豪利が説明した。「バカロレアの文章は中川さんがパリ支局にいたときに書いたのだが、中川さんは今、本社に戻って、社説や論文記事を書く論説委員をやっているんだ。そこへこの塾の生徒たちのバカロレアの感想文が送られてきたものだから、中川さんが興味を持って取材に来られて、天声人語に書きたいって言ってくれたのだ」
克兄ちゃんの授業のときに電話が鳴った。豪利が電話に出て、「ありがとうございます。明日の朝刊の天声人語ですね」と言いながら、生徒たちに向かって指を丸めた。生徒たちが「ありがとうございまーす！」と電話に向かって叫んだ。
「先生、おれの家、朝日新聞とってない。今夜はここに泊まっていい？　朝の新聞配達を待ちたいです」
「学校へ行くとき、コンビニで買えばいいじゃないか」
「あーっ、子どもはすぐに読みたいんです。大人は子どものわくわく感を大事にしなければなりません。ここでお喋りしながら、お泊り会をします」
克兄ちゃんも泊まることになった。豪利は夜食代を渡して帰った。

「遠く日本から眺めたとき、フランスの教育はなかなか面白い」で天声人語は始まっていた。文章はフランスのバカロレアの哲学の問題を紹介し、フランスの高校生たちが自分の意見を明確に表現する姿に触れていた。
「東京都町田市の〈ティーニータイニー塾〉の教育は『自分の足で歩き、自分の言葉で考える』ことを目標にしていて、このバカロレアについて触れた文章を読んで、『感想を述べよ』と毎年中学二年の秋のテストに出題している。その塾生の感想文の何点かに当方も感想を述べてみよう。フランスに比べ日本では〈積極的に発言しようとする気持ちがない。他人と違う考えを持つことが知れると仲間外れにされると思うのだ〉という正悟君へ。とても重要な指摘だ。いじめ問題も、一つにはここに根がある。▼こんな難問に答えるフランスの若者は、考えが確立しているので〈人の意見をきかないのではないか〉と疑問に思う資季君。たしかにそうした面はある。だからこの国では議論がすごく激しい。これも日本では欠けがちなことだ。コラムの〈私たち日本人〉との言い方に、真汐さんは〈私と書くべし。日本人に失礼だ〉と異議を唱える。そう「私」と「私たち」をすぐ混同するのが私たちの悪い癖だ。▼コラムに触発されて藍さんは〈ものの見方がうまい人こそ未来をつくる〉と予感する。藍さんの表現が心に響く。

45　「ティーニータイニー塾はどうやってできたのですか？」

高校生と中三生の合同研究会の日、「ゴリ先生はティーニータイニー塾をどうして創ることになったのですか？」という生徒からの問いがあって、豪利は話した。

「俺は学生時代、将来は演劇の演出家になろうと思っていた。＜早稲田大学劇団こだま＞の仲間たちも、『あいつは演劇の道へまっしぐら』と思っていた。だが俺自身は、（俺は演劇を通して何を表現したいのか？）ということになると明確なものがなかったし、自分の演出力も薄っぺらで、サークル活動のリーダーとしての意識も乏しかったから、そういう者が劇団を立ち上げることなどできないと思っていた。だがどこかの劇団の入団試験を受けて下積みの苦労をする気にはなれず、演劇をやるのだ、という気持ちだけがあって定職に就かず、大学を卒業してもふらふらしていた」

「ゴリ先生にもふらふらしていた時期があったのですか？」

「あった。若い時代には夢と現実の間で思い迷うときがある。俺は演劇をやりたかったから、飲み屋でバーテン、東南アジア料理店で皿洗い、築地の青果市場で果物の積み下ろしをやったりして働いていた。だから自分ではふらふらしているという自覚はなかったが、妹や弟は働いているのに、俺は金がなくなって親から援助してもらったり、弟が金を送ってくれたりしたこともあったから、やっぱりふらふらしていたんだ」

「親からは就職しろとかって言われなかったのですか？」

「うん、金も財産もない親なのに言わなかった。俺のオヤジは若い頃、歌舞伎の師匠から三味線と歌を習っていて、師匠から、『筋が良い。歌舞伎に入って、舞台で三味線、歌をやれ』と引っ張られていた。それがちょうどオリンピックで、前畑秀子という水泳選手が、日本女性初の金メダルを取るかどうかという大騒ぎの時で、もし前畑秀子が勝ち残って決勝戦に出場したなら、ベルリンから東京に電波で送られてくる写真は、逓信省の技官であった俺のオヤジが受信する役と決まっていた。実際に前畑秀子は優勝し、そのときのゴール寸前の写真はオヤジが受信し、大きな写真にしてロビーに展示したものを、新聞社などが写して紙面を飾ったのだそうで、その写真はその後ずっと教科書なんかに使われている。またオフクロも子どもたちを育て上げた後、民謡や踊りの教室を開いたくらいだから、両親とも、息子が芸の世界でやりたいのならやらせてみよう、という気持ちがあったのかもしれない。

だが俺の方は、（自分は本当に演劇をやりたいのか？）と思うようになっていた。そんなときに、ある市民劇団の演劇公演を観る機会があって、そのときの舞台上の出演者たちに、（市民としてちゃんと生きている）という姿を俺は感じたんだ。特に舞台の隅で、劇の進行に合わせてドラムを叩いている無言のドラマーがいて、その存在感が際立っていた。劇が終わってから、俺は彼のことを劇団関係者に聞いたら、無名のドラマーということだったが、俺は（あの存在感は俺にはない。そんな俺が演劇を通して何を表現したいというのか？）と思うようになった。そういう時、社員募集の広告を朝日新聞で目にした。それ

は詩のような、ラブレターのような長文の文章広告で、俺はその内容にひかれてその会社に入った。そしてこれが出会いとなった。

配属された先が、〈ラボ・パーティ〉という子どもの英語教室を、全国的に展開している部門で、英語力のある女性が自宅などで、近所の子どもたちに英語を教えていて、俺は女性先生たちの生徒募集や勉強会のお世話をする事務局員になった。そうして女性先生たちの子どもを見る眼差しに、青二才の俺は感銘を受け、彼女たちを手伝う仕事にのめりこみ、その一人と結婚をし、気がついたら、あれほど熱中した演劇のことを忘れかけていた。（なんだ、俺の演劇への思いはこの程度だったのか）と思ったら、演劇への関心はなくなってしまった。ちょうどそのとき、会社の責任者から、「東北地方にラボ・パーティを広げたい。きみが開拓をリードしろ」と言われたのだ。きみたちは〈ぐりとぐら〉とか〈ぐるんぱのようちえん〉という絵本を知っているよな？」

「はい、英語劇発表会で、ぼくが象のぐるんぱをやり、理王もリサもキララ子も出ました」

「うん、そうだった。俺が仙台にラボ・パーティ教育の支局を開いた時は、福音館書店が出版している良質な絵本を、俺の入った会社が子どもの英語学習用に英文になおし、それを英語と日本語の俳優が英日対応で語り、林光さん作曲の親しみやすい音楽が流れる、という物語テープを開発した直後だった。

それまでのラボ・パーティの教え方は、デイス　イズ　ア　ペン。イズ　ディス　アペン？　イエス、イティ　イズ。というような文型練習で、子どもにとっては面白いものではない。もちろん俺もそんなことは思わず、その教育方法に疑問を持っていなかったが、この物語テープを聴いた時、俺は格調の高さに感動し、（この教材は子どもの心を動かす。子どもたちはこれを劇にしたがる）と直感した。

この教材が女性先生たちに紹介されると、この物語り教材に心を奪われてしまった先生と、『とんでもありません。英語学習は文型教育です』と、それまでの学習法を主張する先生、この格調の高い物語テープを、英語教材としてどう扱ったらよいのかと戸惑う先生で、ラボ・パーティ全体が混乱した。というのも、会社はこんな魅力的な教材を開発しておきながら、妙な話だがその意味も指導方法も持っておらず、先生たちにも事務局員たちにも、何も説明できないという混乱状態になってしまった。

そういう中に、絵本や物語が好きで、英語の授業の合間に絵本の読み聞かせを日本語でやっている先生たちがいて、この物語教材を使って英語劇発表会をやる先生が現れてきた。その情報が俺に集まって来て、俺は授業見学に行って、そこに子どもたちの生き生きとした姿を見たのだ。文型練習は子どもが机に向かって静かに学ぶことを求める。一方の物語教材はストーリーとイメージが子どもの心を動かし、心は体を動かし、教室は遊びの場となる。俺の興味は〈物語で遊ぶ子どもたち〉の方に行った。

ちょうどその時、「きみが東北地方にラボ・パーティを開拓しろ」と指名されて、俺は三十一歳で仙台に支局を開くことになったのだ。そしてたくさんの素敵な女性たちがラボ・パーティの先生に応募してくれ、自宅に教室を開き、キリスト教会の牧師さんたちが

自分の幼稚園に教室を開いてくれ、ほんの短い間に青森県から福島県までラボ・パーティが広がっていった。

女性先生たちの全てが劇の素人だったが、俺は知ったかぶりの劇指導はしなかった。（この教材の豊かさは子どもの心を動かす。心は表現欲となって体を動かす。女性先生は子どもの意欲に応え、自分なりの劇の楽しませ方を考えだすはずだ。そこから生まれる活動は本物に発展する）と俺は思った。そして東北地方のラボパーティはそうなっていった。

一方、全国のラボ・パーティでは、主要教材を今までの文型練習教材でいくのか、この新しい物語教材で行くのかで混乱していた。そういう時、事務局長から、『東京で全国のテユーター総会をやる。その総会で、事務局員がどれかの物語を英語劇にして、それを観た先生たちが、物語り教材をラボ・パーティの活動の中心にしたくなるように、きみが劇の演出をやってくれ』という依頼があった。

俺は東京に出張し、本部に若い社員たちを集めて相談すると、みんなが乗り気になって、「ブレーメンの音楽隊」をやろうとなった。この会社には、登山、マラソン、音楽、政治活動などやってきた個性の強い若者が多かったが、その連中が一週間、まるで子どものように喜んで演技に熱中した。俺は「表現活動は人の心を開放する」ことを知った。

総会当日、大きな会場に全国からの女性先生たちが集まった。総会の本題に入る前に、余興として「事務局員がブレーメンの音楽隊を劇にして演じます」と司会者が紹介すると、「なんで英語劇なんかやるのか？」という疑問の表情も多かった。

幕が上がった。立派な会場の満席の客室に、林光さん作曲の親しみやすい音楽が豊かな音量で流れ出た。主役のロバがギターを背負って登場した。彼は数年前にはヒマラヤ登山隊員だった若者で、古びた登山服を着て、懐かしい雰囲気だった。

ロバが進んで行くと、よぼよぼのイヌが小太鼓を持って登場した。彼は地方の交響楽団にいた男で、イヌが小太鼓を打つ場面では見事なバチさばきを見せ、次に登場した汚らしいネコは、自分の技を披露する段になると、風貌が一瞬で哲学的に変わり、タンバリンを高々と掲げ、カルメンの曲に合わせてしなやかに踊った。

客席の先生たちは、動物役になって登場してくる人物たちが、自分の地域を担当している事務局員だとわかるとざわめき、驚き、嬌声、感動の声を発するひと時を創った。

俺はこうやって、女性先生たちが子どもたちと歩む姿に学びながら、仙台で数年の充実した日々を送っていた時、知人から彼の勤めている会社に入らないかと誘われ、見学に行き、そこで牛山美信という傑物と出会ってしまった。

牛山くんは俺と同年齢、松本市の出身で、小説家の新田次郎の甥だった。彼はアメリカの大学を出ると、先ず世界を見たいと考え、飛び込みの仕事で日銭を稼ぎながら、たくさんの国を歩き回った男で、ものの見方考え方がでかく、俺は（この男と仕事をしたい）と気持ちが弾み、町田市のこの藤の台団地に移住し、彼のいる会社に移った。

入社するとすぐに、牛山くんは俺に信州安曇野弁で語りかけてきた。

『あんたは上等な人間せ。こういう会社で人に使われてなんで、さっさと独立して、人のため自分のための仕事をしましょ』

俺は牛山くんの言葉は気になったが、入ったその会社が気に入って、すぐにはやめる気にならず、六年間いて三つの店の店長をやり、休日にはボランティア活動をやった。

俺の住んでいる町田市のこの藤の台団地には、肩ひじ張らず、気楽に読書会や自然観察会をし、不用品を集めてバザーをし、その売り上げ金で団地にホールを建築し、カンボジアに中学校を建てて寄贈している女性グループがあった。俺のワイフもその一人で、女性たちは団地の中に幼児教室を作り、子どもをのびのびと育てていた。俺はその人たちから頼まれて、地主から幼児教室用に畑を借りてやったり、幼児たちとサツマイモを育てたり、昔話を語ってやったりしていた。

俺はその女性たちから、『大人の演劇サークルを創ってほしい』と頼まれたが、演劇熱が冷めていたので、断りのつもりで、『子どもの劇あそびならやってもいいが』と、いいかげんなことを言ってしまった。そうしたら『子どもたちを集めました。指導をお願いします』ってわけだ。驚いて行ってみたら、十数人の幼児、小学生が集まっていた。

俺は子どもの演劇指導の経験はなかったからあわてたが、子どもたちが期待の目で俺を見ていたから、そこにあった絵本をとりあえず読んでやった。そうしたら、子どもたちの心と体が俺の読みに合わせて動くことが感じられ、劇あそびのイメージが湧いてきた。

それは俺の長女の姿から得たイメージだ。長女が三歳の頃に、「お父ちゃん、カイジョ、カイジョ遊ぼう」と言った。カイジョとは怪獣のことだ。「うん、やろう」と受けてやったら、カーテンの陰にかくれた三歳が、カーテンを開けて、「カイジョ、カイジョ」と言いながら、両腕を伸ばして俺を襲ってきた。俺が「こわいよー！」と叫ぶと、大喜びで、「もう一回、もう一回」と催促だ。そばにいた一歳半のチャンちゃんもお姉ちゃんの真似をして、「ジョ、ジョ、ジョ」と腕を伸ばしてよちよち襲ってくる。俺が怖がる。三歳が一歳を指導して自分を襲わせ、『怖いよ』と逃げる。お姉ちゃんが喜んで手をたたくと、チャンちゃんもモミジの手をたたく。お姉ちゃんがピョンピョンやると、アヒルのお尻を上下に動かす。

俺はその姿を思い出して、（子どもが二人いれば劇あそびが成り立つ）と思い、ボランティア活動として、〈藤の台子どもの劇あそびサークル〉を立ち上げた。

俺は子どもたちに絵本を読んでやり、『これを劇にして遊ぼう』と呼びかけ、子どもたちに好きな役を選ばせ、劇をやらせたら、子どもたちが体いっぱいで喜んだ。そこで、一つの物語を、週一回の集まりの時だけ楽しめばいいと思って始めてみたら、子どもは面白ければ同じ物語を毎週やりたがった。そこで俺は〈台本は創らない、セリフはそのつど子どもたちが考えて創っていく〉というやり方で働きかけたら、子どもたちの気持ちが乗って、台本なしで劇あそびが続いていった。

例えば〈三びきのやぎのがらがらどん〉をやったときだが、『一番小さいヤギをやりたい人？』と呼びかけたら、『はーい！　はーい！』と幼児が数人、二番めやぎは小一、小

二が数人、一番大きいヤギは小三以上だ。化け物のトロルの希望者はゼロ。俺が『どうしてだれもやらないの？』って聞いたら、男の子たちは『トロルはやっつけられるからいやだ』ってわけさ。女の子たちは？」

「汚いからやりたくない、と言ったんでしょう？」

「そうなんだよ。顔や腕から毛が生えていて汚いんだってさ。こうして〈ガラガラドン〉の劇あそびが始まった。一番小さいヤギ数人がいっしょに出てきて、小さくて弱いはずのヤギが、小さくて、やたらに元気なヤギになって、つり橋をわたる場面なんかはもう張り切って、カタン、コトン、カタン、コトンと全力で叫んで床を踏み鳴らすんだな。トロルの役は見ていた母親がやってくれて、『だれだ、おれの橋をわたるやつは！』と怒鳴る。小さい子たちが体を折り曲げて、『いちばん小さいヤギのガラガラドンだ！』といっぱいの声で返す。二番目ヤギも三番目ヤギもまるで元気。大きいヤギがトロルと戦う場面では、『劇では相手の体に触れないで戦うんだよ』と踊りみたいにさせると、みんなすぐにできるようになった。子どもたちはこの劇あそびを何度もやりたがって、最後には母親たち三人が同時にトロルになって、三組の戦いがその場でできてしまい、やっている子ども、やらせている俺、付きそってきた母親、みんながいっしょになって楽しみ、俺は〈劇とは、書いた人、演ずる人、リードする人、観る人の四者が一体になって創り出すものだ〉ということを学び、〈子どもの劇あそび〉というボランティア活動が続いていったのだ」

「それが発展してティーニータイニー塾になったのですか？」

「いや、塾ということは少しも思わなかった。塾を思いついたのは、会社で仕事をしているとき、牛山くんから、『あんたは仕事中に時々笑ってるじゃん。良い笑顔だよ。子どもたちの顔を思い出しているんずら？　そういう人は早く独立して、その笑顔を子どもに向けてやりましょ』と何度か言われていたからだ。

牛山君と出会って、こうして六年の歳月が流れた日、牛山君が、『おらが先に独立するでね。この会社の仕事ならあんたの代わりになる社員はいくらでも育つだよ。だがあんたが自分に合った仕事を見つけたら、あんたの代わりになる人はいないだ。あんたはそういう人だでね』と言い残して退社して行った。

それから間もなく、散歩をしている時、俺は空き家になっている庭つきの木造のそまつな平屋を目にした。俺は何か惹かれるものを感じて、庭に入って眺めているうちに、駆け回っている子どもたちの姿が見えてしまった。そこへ家主のおじさんが声をかけてきたものだから、俺は先のことを何も考えないまま、その家を借りるという約束をしてしまった。家に帰って、「空き家を借りたよ。俺は子どもの英語教室を開く」と家族に話すと。小学生になっていた二人の娘たちが「そのお家を見に行こう」と喜んで、母親の手を引いた。

娘たちはその庭を跳びまわり、家の中に入って畳の床ででんぐり返しをして喜んだ。ワイフは、『子どもたちの駆け回る姿が見えてしまったのだから、教室を開いたらいいわね』と背中を押してくれたのだ」

「先生は英語劇の台本も創っちゃうから、英語は得意だったのですか？」

「得意じゃなかった。中三生の学校の教科書を読んでみたら、訳せない文もあった。それでも教室を開いた。（教え方が工夫できれば、俺の英語力不足なんかたいしたことではない。子どもが楽しく学べるように導けば、子どもは自分の力で伸びていく）と考え、劇あそびサークルでつかんだ〈好きにさせる〉〈のびのび学ばせる〉ことを目的の子どもの英語教室を開いたのだ。

教材はラボ・パーティの物語教材を使わせてもらいたいと、ラボ教育センターに交渉したら、『きみがやるのなら自由に使ってよろしい』と実にあっさりと許可が出たので、劇用に作りなおしながら使っている。こうして子どもの英語教室を開き、やんちゃ坊やの理王に出会い、ツッパリくんに出会い、きみたちと出会っているというわけだ」

「英語教室が他の教科も教える学習塾に発展したのは最初からの計画だったのですか？」

「いやいや、いろいろの教科を教える学習塾にする気持ちは全くなかった。ところが英語教室を開いた年の秋に、小学生の親から算数、国語も教えて欲しいと言われたのだ。俺は算数を教える能力は自分にはないと思いこんでいたが、英語教室に来ている子どもの親たちから頼まれたのだから、先ずは自分にできるかどうかを知ろうと、本屋に行って算数の教科書を開いてみた。そうしたら、（算数嫌いだった宮坂豪利くんが面白がるように教えればいいのだ）と大人の頭で思うことができ、子どもの時の豪利くんを思い描きながら教えてみたら、算数、国語を学びたいという小中学生が増え、学習塾になってしまった。

だが（数学にセンスのない俺が、数学を教えていいのか？）という気持ちを引きずっていた。そして英語教室を開いた一年目の夏に、東大生のガメラに出会い、彼に小学生サマーキャンプで子どもたちの遊び相手のお兄ちゃんになってもらったところ、ガメラの豪快な動きと人柄が子どもたちを刺激した。それで「この男を生かしたい」と、中三生の数学、理科の学生講師になってもらった。ガメラが大学を卒業する時には、後輩の医学部生のヒューモくんを紹介してくれ、ヒューモくんは卒業の時に克兄ちゃんを連れてき、克兄ちゃんが大学を卒業するとき、俺が合氣道仲間の東工大生の高田潤一くんを気に入って学生講師になってもらった。その後はティーニー塾育ちの大学生たちが講師になってきている。俺は英語と国語、中二生以下の数学を担当している。じゃあ俺の英語力はどうかって問われたら、英語力をつける努力はしていない」

「だけど、生徒の英語力、伸びてるよ。どうしてさ？」

「剣矢、それ、ぼくに答えさせてね」とヒッポが大きな笑顔になった。「ぼくの高校の英語の先生が、ぼくが手にしていたゴリ先生の創った英語の基本文型集を読んで、『こんな文型集を考え出した方の授業を見学したい』と言って授業見学に来たんだ。見学が終わってその先生は言った。『私は英語の教え方のノウハウを教わるつもりで見学させてもらいましたが、そんなことではありませんでした。この塾は人間と向き合っています』ってね」

46　教師としての失敗と反省

『『ゴリ先生には失敗や反省はありましたか？』って聞いたら、先生は『あった。いつか話す』って言いました。それを聞きたいです」とキララ子が求めた。

「おお、小さな反省や失敗はいっぱいあったが、特に子どもを導く者としてやってはいけないことを二つやった。一つは生徒をひっぱたいて塾から追放してしまったこと、もう一つは、ある中学生の女の子の努力に、俺が感謝の言葉を言わなかったことだ」

「生徒をひっぱたいて、塾をやめさせたなんてこと、ゴリ先生がやったんですか？」

「やった……心はとても優しいのだが、恐ろしく気が弱い中三男子がいて、俺は彼の気の弱さをなおすために、夏の合宿でいろいろやらせ、励まそうと計画を立てていたんだ。ところが合宿間際になって、彼が参加しないと言ってきた。その理由が〈仲のよい友だちが合宿に行かないから〉だった。俺は猛烈に腹が立って、（せっかくいろいろ体験させてやろうと計画していたのに、なんて情けないやつだ）とひっぱたいて、追い出してしまったのだ。だが後になって考えてみたら、俺は彼を励ますために立てていた計画のことを、彼に一度も話していなかったことに気がついた。もし前もって話してやっていたら、彼もその計画に加わり、自分の活躍する姿をイメージできたと思う。それを話してもらっていなかった彼は、何が何だかわからないまま追い出されてしまったのだ」

「ひどーい。先生は反省したの？」

「すぐにはしなかった。かわいそうなことをしたとは思ったが、情けない奴だと思ったままだった。反省をしたのは数年も経ってからだ。今の俺だったら、〈彼の気の弱さこそが彼の長所だ〉と思って、伸ばしてやれるのにな……後悔している」

「もう一人、女の子への反省というのも聞きたいです」

「うん、その子は小さいうちから音楽をやっていた上に、文学的センスもあり、知性の高い少女だった。俺は〈白雪姫〉の英語劇で、幾つかの場面に音楽を流したいと思って、彼女に選曲を頼んだら、彼女が選んでくれたのは有名曲ばかりで、俺のイメージに合わなくて使わなかった。だが俺はその理由を彼女に言わなかった。彼女が音楽をやっているといってもまだ中学生だ。知ってる曲は少ない。その中で彼女は一生懸命に考えて選んでくれたはずだ。人の悲しみというものがわかる彼女は、その英語劇を創作するくらいの気持ちで曲を選んだかもしれない。だが俺はそのことに頭が働かず、努力への感謝の気持ちを持たなかった。そのことに気がついたのも数年も経ってからだった。俺の心の不足だ」

「数年後に気がついたのは、何かきっかけがあったのですか？」

「デップリンが小六のときに書いた『ぼくはゴリ先生がほめてくれる言葉に恋い焦がれています』というあの作文だよ。あの文章を読んで俺は、その少女のことを思いだして後悔した。それ以来、〈良いことも悪いことも、思ったことは、しっかりした言葉にして伝えよう、子どもはほめて育てよう。子どもの長所に反応できるように自分を鍛えよう〉と心がけている」

「それからは思ったことは全て、生徒に伝えているの？」
「いや、全てを伝えるということはしない。一つの言葉が決まるまでには、ああでもないこうでもないと考え、初めは未熟な見方や間違った見方をしている。それを練り上げていく過程を経て、一つの励ます言葉、勇気を与える言葉ができ上る。その言葉を伝えている」
「ゴリ先生は、受験だ、偏差値だ、勉強しろ、って言わないけど、みんな勉強する。俺は苦手だった数学が面白くなっている。先生も克兄も俺の言葉力をほめてくれるからだよ」
「おお、言葉力をほめられたことで数学が面白くなったとは嬉しいな。どうしてなんだ？」
「おれ、図形問題はイメージを働かせられるから好きだよ。おれの嫌いなのは長々と日本語で書かれている方程式の問題なんだ。『何だよこのかったるい日本語は？』と思って気持ちが後ろ向きになっていたの。そういうとき、おれの日本語力をほめられて、『方程式の応用問題の文は日本語なんだ。おれの日本語力を生かして、これを数式に変えればいいんだ』って気がついたら、かったるく見えた文が、イメージとなって浮かんできて数式になった。今は面白いって思う』。
「おお、『自分の日本語力を生かそう』って、自分で思えたんだ！　素晴らしい。俺も数学嫌いだったから、そんな俺が剣矢にアドバイスできるなんて思ってもいなかった。だが剣矢の言葉力には魅力を感じていたから、『言葉力を数学でも生かせるんじゃないか？』という程度のことを言ったんだが、そこから剣矢が言葉力を数学に生かすようになるとは想像しなかったな。今の俺は剣矢と向き合っていると、剣矢の長所が見えてくる。それを言葉にしてほめてやれば、剣矢は張り切って自分で考え、工夫し、人としても伸びていくと思える。そうやって獲得した力は剣矢に自覚され、他のことにも応用され、生きる力になっていく、と自信を持って言える」
「それなのにさ、この塾、生徒が増えないじゃん。先生はちゃんと生徒募集やってんの？」
「えっ……あ、まあ、年に一回は、チラシをまいている」
「文字数がいっぱいのチラシで、受験のことは書いてなくて、この塾の考え方が書いてあるけどさ、あれだけの文字数を読む人いるの？　おれが中一で入塾した後、このクラスに入ってきたのは鉄平とホッホだけだよ。先生はこの塾に合わないと思った生徒は断ってんじゃないの？」
「ゴリ先生はそんなことはしません！　希望者は受け入れます」とデップリンが大声で言った。「ぼくたちが中学生になるとき、このクラスからやめた人たちが三人います。どの人もこの塾を楽しんでいたから、ぼくはショックでした。でもゴリ先生は、『人にはいろいろの考え方があっていい』と思っているのです」
「デップリンは長い間ティーニー塾にいるのに、誘ったのは中一の優心だけなんだろ？」
「ティーニー塾はぼくの秘密の場所です。だれにでも紹介するって気にはなれません」
「あー、この塾、つぶれる！　つぶさないでよ、先生。こんな良い塾、ないんだよ！」
「あるさ。自分の考えを持って、子どもと向き合ってる塾はいっぱいある」
「もう一つ先生に質問があります。ティーニー塾では、高校生が講師になって中学生を教

えることをやってます。ぼくも高校生になったら授業を持ちたいと憧れています」
「おお、デップリンは人気者の先生になるぞ」
「嬉しいです！　でもゴリ先生はどうして高校生講師なんてことを考え出したのですか？」
「おお、そこを質問してくれたか！　嬉しいね」
「わたしは高校生のアズミくんから教わった時には、アズミくんが神々しく見えました」。
「きみたちの驚きは嬉しいな。では、俺が高校生に授業をさせている理由はわかるかな？」
「子どもは人と人との良き出会いによって成長していくから、先生はぼくたちに年の近い魅力的な先輩を出会わせようとしてるのだと思う」
「ヒッポの授業は、教えることに誇りを持っていることが感じられる」
「わたしはアズミくんに『リサは草原が似合う』って言われて感激しました」
「おお、嬉しいな。この塾の生徒募集チラシには、ある言葉が大きく書かれているが、誰か記憶にあるかな？」
「<小さな教室、大きな笑顔>だよ。おれはその言葉にひかれて入ったんだもん」
「おお、その言葉を考えてくれたのは、マコくんというティーニータイニー塾の最初の高校生だ。マコくんはできたばかりのこの塾に中二で入いると、夏合宿、スキー合宿を盛り上げ、清々しい人柄は年下の生徒たちの憧れのお兄さんになった。俺はこの少年を生徒たちの前に立たせたら、生徒たちは励みを受けるに違いないと考え、彼が高二になったとき、中三生の地理の講師を、週一回、一年間やってもらった。俺が彼につけた条件は、月に一回は自分という人間を表現できるように、何か具体的な体験や思うことを語ることだった。
　これがよかった。マコくんは中学校の担任の先生を尊敬し、その先生のことを生徒たちに語った。その内容が深かったので、俺はその先生に、彼の言葉と人柄を書いた手紙を送った。そうしたらその先生から返事があって、彼を「現代には珍しい干し草の香りがする少年です」とあり、俺は魅力のある高校生を生徒たちの前に立たせることに自信がついた。
　マコくんの一つ下の学年に関口門太とツッパリがいた。門太はとんでもない学力の生徒だったから、彼が高二になった時、中二クラスの数学の講師をさせた。彼は頭の良さを誇ることがなく、わかりやすく根気よく教え、俺自身が彼から教える姿勢を学んだくらいだ。すると彼の指導ぶりを見たツッパリが、「おいらにも講師をやらせろ」と言ってきた。俺はそんな主張ができるツッパリに感動して、歴史の授業をさせた。ツッパリは気風がよくて優しい。後輩たちが憧れた。次の年は美音が高校生講師になった」
「あー、ゴリ先生は知ってますか？　美音さんはティーニータイニー塾の男たちのマドンナだったそうです」。
「女の子たちにとってもマドンナでーす！」
「だけど先生、学習塾で高校生が教えることに、親たちから疑問が出なかったんですか？」
「初めは出なかった。二か月に一回、この塾の様子や考え方を書いたティニータイニー通信を発行し、親あてに子の様子を書いて知らせているし、父母会は毎年やっている。またスキー、キャンプ、合宿、英語劇発表会などで、親たちは子どもの姿を見て、この塾を信

頼してくれていたからな。だが高校生に講師をさせることを始めてから四年目に、中一生の母親が俺に直接疑問をぶつけてきたから、俺はその母親に、美音の授業を見学してもらった。その母親は授業が終わると、『わたくしは数学が好きでしたが、美音さんの説明がわかりやすく、わたしはまた数学で遊んでみたくなりました。それに美音さんには香りがあります。中学生のお嬢さんたちがうっとりして美音さんを見ていましたが、わたしもうっとりしてしまいました。『生徒たちを素敵な先輩に触れさせて。良い影響を受けさせたい』というこの塾の意図がとてもよくわかりました、と言ってくれた。

こうして四年間に四人の高校生たちがそれぞれの良さを見せてくれたのだが、その後二年続けて高校生でつまづいてしまった。原因は俺の配慮不足だった。五人目の高校生講師には地理の授業を持たせたのだが、彼が授業で、『黒海沿岸のウクライナは黒土地帯で、黒土は小麦の生産に適している』と言った。それは教科書や参考書に書いてあることをそのまま言っただけだったから、俺は彼に「どうして黒土地帯では小麦がたくさん採れるのだ？　黒土とはどんな土なんだ？」と質問した。そうしたら彼は口を大きく開けて、とつぜん大声で泣き出したのだ。俺も中学生たちも呆然としてしまった」

「先生はその高校生をどうやってなぐさめたのですか？」

「なぐさめることはしなかった。俺が言ったのは、『知的関心が高いきみが、その程度の説明しかできないのか？　俺はこの近くに畑を借りているが土は真っ黒だ。土は岩石がくだけてこまかくなり、そこに草や木の葉が積もって腐葉土になり、とてつもない歳月をかけて黒土になって堆積したもので、作物が良く育つ。このあたりも黒土だから、手で握ってみろ』と話した。その高校生は授業が終わってから、『講師もティーニー塾もやめさせてください』と言ったから、『俺はきみの人柄に期待しているから、俺からはやめさせない。やめたいのなら自分で決めろ』と言った。彼はお父さんにも言われたそうだ。『講師をやめるのはいいが、ゴリ先生に対しては裏切りだ。ティーニー塾をやめるのは許さない。みっともない姿をさらしたままやめたんでは、負け犬が逃げたのと同じだ。一生の負い目になる』と言われて、彼は講師を続け、良い授業をし、ティーニー塾を卒業していった。

次の年にも講師をやらせたい生徒がいたので、高校生クラスの際、そのことを彼に話したら、これが変なことになってしまった。彼はみんなの前で持っていた鉛筆を落とすほど震えて、塾をやめてしまった。俺は人があんなおびえ方をするのは見たことがなかった。

俺は当たり前のことを注意したつもりが泣かれ、励ましたつもりが震えられてしまい、いささか自信をなくし、そのあと二年間、高校生講師を置かなかったが、教員志望のヒッポが講師をやりたいと名乗り出てくれたので、一昨年はヒッポが中二に、昨年はアズミがきみたちに数学を教えたのだ」

「あー、それを聴いて、ぼくも何かミスしないかと心配性が顔を出しそうです」

キララ子が微笑んだ。「デップリンは心配性をやめたんでしょ？」

理王も応じた。「おまえの豊かさはみんなを楽しくする。おまえは豊かさ独演会の授業をやればいいんだ」

「うん、そうだぞ。ではきみたちに聞こう。高校生が講師をやるのは、中三の地理か歴史と、中二の数学に限っているが、きみたちが高校生になった時、俺がきみたちの誰かに講師を頼んだら、引き受けてくれるかな？」

キララ子が手を挙げた。「わたしはやりたいです。でも一年間は長すぎます」

「うん、そこなんだ。アズミは『高校生講師は続けてほしい。教える方も教わる方も人として成長できる』と言っているが、ヒッポはやってみてどう思ったかな？」ハ

「教科を教えることは難しくなかったですが、大変だったのは、毎月一回は自分の体験や思っていることを、中学生の成長に役立つように語ることで、これにはずいぶん頭を使いました。一年間で十二回もそういう話を準備するのは簡単ではありません。それに一人の高校生が一年間やったら、他の素敵な高校生の出番がありません。もっと短期でもいいんじゃないでしょうか？」

「そう思います。キイロちゃんやチャンちゃんの話も聴きたかったです」

「うん、そうか……キイロは良い話をすると思うが、チャンちゃんは遊んで育ってきた子だから、教科の指導はどうかな？」

「先生、その考え方はおかしいです。ティーニー塾はそれぞれの生徒の長所を大切にしている所です。チャンちゃんは女の子たちの憧れのお姉ちゃんです。わたしたち、チャンちゃんのことをもっと知りたいです」

「そうでーす！　チャンちゃんが木崎湖で泳いでいるとき、波を立てないでスーイスイって泳いでいました。どうしてあんなにきれいに泳げるのか知りたいです」

「うん、そうか、お爺ちゃん、お婆ちゃんがオリンピックの水泳のコーチと選手だったから、チャンちゃんはその指導を受けたんだ。母親のおじさんの一人は、オリンピックの棒高跳びで銀メダルを取り、銅メダルを取った日本人選手とメダルを半分ずつに切って、銀と銅のメダルを張り合わせた西田修平だ。母親の妹も日本選手権で優勝している」

「チャンちゃんのお母さんはスポーツ選手にならなかったんですか？」

「ならなかった。学童記録を出したが、スポーツより歌に興味があって、小、中、高、大学と合唱をやり、先日は早稲田の卒業生合唱団で、ザルツブルグ国際音楽祭に出演した」

「チャンちゃんはオリンピックを目指さなかったのですか？」

「小さい時は目指していたけど、俺がやめさせた。チャンちゃんは脚の回転が速く、スポーツクラブでも見事な身体能力だったらしいが、小三の時、クラブから泣いて帰ってきて『もうオリンピックには行かない』って言ったんだ。コーチがチャンちゃんにとつぜん厳しくなって、ミスを大きな声で怒るようになったんだ。ミスの中にこそその人の個性があるのに、それがわからないで、成長期の子どもを怒鳴って指導するようなコーチは、人を育てられない。チャンちゃんは人間大好きで、それを長所として成長していく子どもだ。それがわからないような人に指導を受けたらいけない。俺がそう言ったら、小三のチャンちゃんはあっさりクラブをやめてしまった」

「チャンちゃんみたいな素敵な先輩は、勉強の指導でなくても、わたしたちの前に立たせ

ることを先生は考えてください、わたしは七年前の小学生キャンプで、チャンちゃんから、キララ子はダンスが向いていると言われて、ずっとモダンバレーをやってきているんです」
「先生の奥さんにも教えてもらいたいです。昨年、先生が入院した時、奥さんが英語の授業をして、『線路は続くよ、どこまでも』の英語の歌を教えてくれて、みんなで歌いました。<ある日、森の中、熊さんに、出会った>の歌も、奥さんの指導でみんなで英語に翻訳したもんね」。そう言って、生徒たちが歌いだした。

one sunny day, one sunny day, I met a bear, I met a bear……

47　英語劇「ブレーメンの音楽隊」の練習

学校の二学期が終わって冬休みに入ると、ティーニータイニー塾では中三生の冬期講習が始まる。豪利が講習のやり方を説明していると、デップリンが言った。
「高校受験はみんな余裕です。キララ子とぼくは都立町田高校、鉄平は薬師高校、リサさんと剣矢は私立高校に合格します。ホッホは系列の高校に進学、理王は筑波大駒場中の二年生で受験はありません。だから英語劇の練習をやりましょう。みんなも望んでいます」
「英語劇発表会は三か月も先だぞ。その前に高校入試もある。どうしてそんなに早くから劇練習を始めたいのだ？」
「このクラスの人たちは面白いです。時間をいっぱい使って触れ合いたいです」
「おれ、そのことでみんなに聞きたい」と剣矢が言った。「学校でこの塾の英語劇のこと話すと、『入試を前にして、なんで劇なんかやって遊んでんだ？』って言われて、うまく説明できない」
「あー、剣矢がそんなことを言うんですか！　あなたはティーニー塾の看板を一目見ただけで、この塾は自分にぴったりだと直感が働いた人です。その直感を言葉にするのです」
「それで剣矢はなんと答えたのだ？」
「おれの塾では英語の文章をいっぱい読むし、文型練習のカルタ取りをやるって答えた」
「それでいいさ」
「よくありません。それではこの塾の本質を表現できません。ぼくは小三で英語劇の桃太郎をやって、ゴリ先生がほめてくださったことで自信がついたのです。剣矢もみんなに感性の良さをほめられて、自信になっているはずです。お互いに励まし合い成長していくのがこの塾です。それを言うんです。ではみなさん、受験前なのに英語劇の練習を始めていいかどうかを話し合いましょう。公平な見方をするキララ子、司会をお願いします」
　キララ子が軽やかに笑った。「ではリサ、意見を言ってください」
「わたしは劇をやりたいです。みんなが燃え上がって、それぞれの長所が響き合います」
「理王はどう思いますか？」
「この塾の劇練習は人と向かい合う。人と向かい合い方が深い」
「そうですとも！　ぼくたちは過去の入試英語の長文問題なんかをやる必要はありません」

「いや、長文問題はやったほうがいい」と理王が言った。
「はあ？　入試問題なんかちょいちょいのちょいの理王が、なんでそんなこと言うの？」
「ゴリ先生が出してくれる長文は内容が面白いんだ」
「そうだよ。内容が面白いんだよ」と鉄平がのっそりと言った。「ゴリ先生は国語の長文問題を、テスト問題としてじゃなくって、『言ってることが自分にとってどうなのかを考えながら読め』って言った。おれ、英語の文章もそうやって読んだら、内容見えてきた」
「おお、鉄平、嬉しいね。そう、入試問題には、中学生たちに読ませたい文章が多いんだ」
リサが豪利に顔を向けた。「わたし、農業大学の付属高校に行きたいんですけど、親は音学関係の高校に行って、好きなだけ歌った方がいいって言うんです」
「俺も親と同じ見方だが、リサが農大付属とは、またなんでだ？」
「わたしは小さい頃から牛が好きでした。でも触ったことはなかったんですけど、夏合宿で、小林さんの牧場で牛を触らせてもらい、子牛にリーザという名前もつけさせてもらってから、酪農に興味を持ってしまいました。わたしは大きな声が出ないから歌手にはなりません。合唱団で歌えれば満足です。酪農を学ぶために農大の付属高校に行きたいです」
「リサ、小林美麻くんは農大の学生よ。それにお父さんは大町の合唱団で歌っているのよ」とキララ子が目を輝かせた。「では、受験を前にして、劇の練習を始めるかどうかについて話を戻します」
「おれ、多摩丘陵高校を受ける。おれ、あの学校のサッカーが好きなんだ。今日が受験日だったら難しいけど、まだ何日もある。おれは弱点の数学が伸びているって自覚があるから、おれは合格する。鉄平ももう決めたよね？」
「おれ、薬師高校に行く。薬師の野外活動部はツッパリくんが創ったから」
「ほら、先生、高校受験はもうみんな心配なしです。さあ、〈ブレーメンの音楽隊〉の劇を始めましょう」
「あはっ、きみたちはツッパリたちのブレーメンを観て感動したんだったな」
「でもツッパリくんたちの真似はしません。このクラスらしい劇を創ります」
「おお、いいね。台本はツッパリたちが創ったものを使うのだろう？」
「自分たちで創りまーす！」
「ほう、それは素晴らしいが、日本語でセリフを創ってから英文に翻訳し、俺が修正し、さらに英語のできる人にチェックしてもらうのだから、台本完成には日数がかかるんだぞ」
「ティーニー塾の生徒はパワーがあります。集中力があります。正しい英語なんてこと考えないで、いざとなったら単語を並べればいいと思う人たちです。だからゴリ先生は、ぼくたちの表現意欲を優先してください」
「おお、そうだよな、やってみるか。劇の演出をやるのはキララ子か？」
「いえ、デップリンにやらせたいです。デップリンは夏合宿で大親分の経験をしてから、人を見る目が深くなっています。この劇作りでもリーダーをやって、その目を深めていってほしいです」

「ありがとうございます。ではぼくがリーダーをやります。ぼくはしゃべりたいのを我慢して、みなさんにしゃべる機会をたくさん持ってもらいます」
「やーだ、我慢しちゃだめ。デップリンのおしゃべり、面白いんだもん」
「面白いけどさ、デップリンが演技指導なんてできるんか？」
「何てことを剣矢は聞くのですか！　ぼくが演技指導をできるはずがありません。演出はゴリ先生です。ぼくは全体の進み具合を見る役です。そうですね、先生？」
「うん、デップリンは全体をリードする総監督だ」
「そうですとも、ぼくは総監督です！　では、先ず日本語での台本作りを始めましょう」
「いえ、だれがどの役をやるかを決めた方が、言葉のイメージがわくんじゃないかしら？」
「あ、キララ子、なるほどです。では、この話には四匹の動物が登場します。このクラスは七人ですから、あと三人の役を創る必要があります。では主役のロバから決めましょう。ロバ役はだれがいいですか？……またぼくですか？　ぼくはいつも主役ですよ……ではロバの役は後まわしにして、他の役から考えましょう」
「おれはイヌの役をやる」
「へー、気品があるってキララ子に言われた理王が、くたびれたイヌをやるの？」
「おれはやりたいことがあるんだ」と理王がいたずら坊主の顔になった。
「キララ子はネコをやりまーす」
「リサはオンドリを希望します」
「いいですね！　おしとやかなリサさんが、大声で叫ぶオンドリ役に挑戦です！　続いて剣矢、鉄平、ホッホ、そしてぼくの役を考えましょう。さあ、ロバをやりたい人は？……おや、おや……だれも手を上げませんね……ぼくは……ロバ役に鉄平を推薦しまーす！」
　生徒たちが驚きの顔になった。
　するとリサが、「わたし、鉄平くんのロバさん、見たいなあー」と歌うように言った
「だよね、見たいよね！」と生徒たちの顔がほころんだ。「『自然を感じさせる人』って克兄が言った鉄平は、ロバの雰囲気、創れるよね！」
「だけど、おれ……学芸会で、いつも、小鳥5、とか、木2、だよ」
　理王が親し気に笑った。「あんたは剣矢からも、『懐かしい感じがする人』って言われたんだ。そんなロバをおれは観たい」
「……おれ……ロバ、やる」
「じゃあ、おれ、サルになる！」
「剣矢にぴったりですねえ！　サルはどういう理由でそこにいることにしますか？」
「おいぼれて失敗して、追い出されたことにする」
「ではどんな失敗かはイタズラ好きの剣矢が考えてください。さて、次はぼく、デップリンはどんな役がいいでしょうか？」
「あんたはブタ！」と理王が腕をぐいと伸ばした。
「けっこうですね！　ぼくは歳をとって役に立たなくなったブタです」

「ちがう！　そばにいるだけで、みんなの心が豊かになる爺さんブタだ」
「ありがとうございます！　ぼくの爺さんブタを、みなさん、お楽しみに！　次、ホッホの役を考えましょう」
　ホッホが青ざめた。「ぼく、学芸会で、いつもばかにされてきました」
「ティーニー塾は人をばかにしません。でも……それだったらナレーター役をやってもらいましょう。演技はやらなくてもいい役です」
「それはだめよ。この塾に入った以上、演技をやらないともったいないわ」
「そうよ、ホッホくんにはナレーターとロバの飼い主の役の二つをやってもらいたいわ」
「やりな、ホッホ」と理王が本気の表情で勧めた。「劇作りを通して人として成長するのがティーニー塾だよ。この体験が基礎になって、いろいろの面で自信が持てるようになる」
「はい……ただ、ぼくは演技するってことがどんな意味なのかも、どんな演技をしたらいいのかもわかりません。でも、ぼく、やります」
「すてき、ホッホくん。じゃあ、ブレーメンの絵本を読んでから、何の役がいいかを考えましょう。理王、これを読んでやって。あんたの温かい声で、ホッホくんをお話の世界に連れて来てね」
　理王が絵本をホッホに向けて開き、〈一人の男がロバを飼っていた。ロバは、自分が年をとって役に立たなくなったので、主人が処分しようとしているのを感じて、『ブレーメンの町へ行って、音楽隊に入ろう』と逃げ出し、イヌ、ネコ、オンドリと出会い、四匹でブレーメンへ向かって行くと、途中で森の中で泥棒の住みかを見つけ、泥棒たちを追い払い、そこに住んで幸せに暮らしました〉と読んだ。
「うん、母親ゆずりの響きの良い声だ」と豪利がうなずいた。「お母さんは鈴を転がすような声をしている。理王はその声を聴いて育ったんだなぁ」
　ホッホが独り言を言った。「ぼく、お母さんに絵本読んでもらったことないです」
「そんなことってないわ」とキララ子が言った。「ホッホくんのお母さん、とってもきれいな声をしているわ。お母さん、それを誇りにしているはずよ。その声であんたに絵本を読んでやったはずよ……では先生、劇をやることにみんなが盛り上がっています。冬期講習の英語は英語劇を中心にしてください」
「うん、わかった、そうする」
　生徒たちが帰った後、克兄ちゃんが「ぼくも楽しみです」と明るい顔をするのを見ながら、豪利はちょっとあいまいな表情をした。「俺は鉄平が主役になるなんて思ってもみなかった。鉄平はしゃべらないし、大きな声も出さない。そんな鉄平を、生徒たちはどうして主役に推し、鉄平はどうして受けたんだろうな？……だが俺は鉄平と向き合うよ」

48　ホッホくんがさわやかお兄ちゃんに

冬期講習初日の英語。

「きみたちの希望通り、英語に関しては受験対策はやらない。英語劇をやる。では『ブレーメンの音楽隊』を、先ずは日本語でやってみよう。どんなふうにやろうか？」
「幕が開いたら舞台の脇で、ナレーター役のホッホが、ロバが逃げ出すところまでを説明的に話してから、ホッホはその場で飼い主の役に変化して、ロバに語りかけたらいいです」
「おお、いいね。ではホッホ、最初は自分で日本語のセリフを創って言うんだ。絵本の文と同じでなくてもかまわない」
　ホッホが青ざめたので、デップリンが絵本の最初のページを開いてホッホに渡し、ホッホが読み終わると絵本を取り上げた。「さあ、出て行くのです。教室の真ん中に立つんです。初めはつっかえて当たり前です。つっかえながら言葉を創っていくのです」
　ホッホは不安いっぱいの表情で教室の真ん中に立つと、「ある男がロバを」から「ロバはブレーメンに向って歩き出しました」までを頼りな気に言って豪利の顔を見た。
「おお、それでいいぞ。きみは自分で言葉を創ったんだよ。ではその言葉を言ったあと、飼い主役に変化して、ロバに語りかけてごらん」
　ホッホがもう一度ふわふわと出てきてナレーター役の言葉を言うと、ロバ役の鉄平が荷物を背負うかっこうで登場した。
　ホッホはほんの一歩だけロバに近づいて、感情のない声で、「あの野郎、老いぼれちまって役にたたない」と言ったが、そのあとはどうしたらいいのかわからない顔になった。
　豪利は（おっ、ホッホはロバに向かってちょっとだけだが動いたぞ。ホッホはやる気になっている。そこをどうやって励ますかだな）と考えていると、剣矢がヒーヒー笑っているのが目に入った。
「何がおかしいんだ、剣矢？」
「ちがうの、ちがうの！　ホッホを馬鹿にして笑ったんじゃないです」
「わかっている。だが何がおかしいんだ？」
「だってホッホの落差が大きいんだもん」
「落差が大きい？」
「ホッホは夏合宿で、さわやかお兄ちゃんに成長したんだよ。それが今はまた病人みたいになっちゃって、さわやかお兄ちゃんとの差が大きすぎるんだもん」
「そうですとも、ホッホ！」とデップリンが声を大きくした。「あなたは成長したのです。病人に戻ってはいけません」
「病人には戻りません！」
「おお、いいぞ、ホッホ、その調子だ！　きみはロバが登場したら、ロバに向かって一歩近づいた。それは気持ちが飼い主役になっているということだ。ほんのちょっとの動きだったが、演技をやったことがない者にはできないことをきみはできたんだ。素晴らしいことだよ。もう一度やってみような。今度は、『ぼくはホッホくんです』と言って、ここにきみの妹がいるつもりで、かっこいいお兄ちゃんになって出てきてごらん」
　ホッホは顔を赤らめたが、スキップをして出てくると、少し大きな声になって、「ぼく

はさわやかお兄ちゃんのホッホくんでーす！」と手を振った。
即座に生徒たちが、「さわやかお兄ちゃーん！」と手を振り返した。
「おお、いい！　きみは自分からスキップして手を振った。うん、きみは工夫力がある」
剣矢が不思議そうに言った。「おどおどしてたヤツが、元気になりそう。なんで？」
「おお、ホッホ、剣矢はきみをほめているのだぞ。では次にロバが逃げ出したくなるような言葉を、ロバの飼い主として言ってみよう」
ホッホがまた困った顔になったので、生徒たちは、「これ以上むだ飯を食わせられない」「売り払おう」などの言葉を考えてやった。
「ホッホ、そういった言葉をきみが創るんだ。とちるのを怖がるな。言いなおしてもかまわない。最初からやってみるぞ」
豪利は手のひらをパンと打って、「はじめ！」の合図を送った。
ホッホは小走りに出てきて、さっきよりまた少しだけ、はっきりした調子でナレーター役の自分を紹介した。だが飼い主役に変わるところで、急に無表情になって、声も小さくなった。
デップリンが大声で注文をつけた。「そんな言い方ではナレーターと飼い主の区別がつきません。区別のある表現をしなさい」
「待て、デップリン。きみの要求は理屈としては正しいが、ホッホに対しては違うぞ」
「どうしてでしょうか？　ここは二つの役の違いが必要なところです」
「そうなんだが……演技が初めてのホッホに、それを求めるのは無理じゃないのか？」
「二つの違いを演じるなんて簡単だよ」と剣矢。
「簡単じゃないわ。それにデップリンみたいな大声で言われたら、人は委縮します」
「あー……だけどぼくのこんな程度の言葉で、ホッホはなぜそんなに青ざめたのですか？　あなたは飼い主役を、どうして無表情にやったのですか？」
「ぼく……演技やると、いつも笑われたりバカにされてました……それを思いだして……」
「そうでした、小学生の時、あなたは確かにそうでした」とデップリンが考えこんだ。
「理王、おまえなら、こういう人にはどうアドバイスをする？」
「おれならホッホの良い点を励まそうと思うけど、それだけの目をおれが持っているかどうかだ」
「で切ると思うわ。ツッパリくんや克兄が、ホッホくんの良いところを励ますのをみて、わたしたちも励ましてきたわ。それでホッホくんは元気になったのよ」
「だけど今はまた自信がなさそうにしてます。ぼくの言い方がきつすぎました」
「言い方の問題じゃないわ」とキララ子が言った。「ねえ、ホッホくん、受け取り方を変えよう。あんたは人の励ましを素直に受けるところが素敵なの。デップリンの言葉を励ましと思いましょう！　ゴリ先生、ホッホくんの演技指導にアドバイスをお願いします」
「おお、きみたちはホッホの励ましの受け方がいいことに気がついていたのか！　おお、たいしたものだ。ではその知恵を絞って考えてみろ」

生徒それぞれが考える顔になった。
キララ子がホッホに聞いた。「ホッホくん、あんたはどんな言葉をもらったら元気が出るかしら？」
ホッホの顔が赤くなった。「ほめてもらうことです」
「だよね！」と生徒たちが一斉にうなずいた。
「そうしたらぼく、変身します」
「変身？」と豪利が笑った。「変身とは面白い。きみたちが指摘したように、ホッホは前を向くことができる。きっと飼い主の姿を面白いものにするぞ」
鉄平はいった。「よぼよぼの飼い主が、よぼよぼのロバを追い出すっていい」
「ホッホくん、よぼよぼの飼い主、やってみせて」とリサのソプラノ。
ホッホが立ち上がって、とつぜん酔っ払いのようにふらつく演技をした。。
生徒たちがわっと笑った。「ホッホが変身！」
豪利も「面白い。もう一度ナレーターから飼い主までをやってみせてくれ」と指示。
ホッホは演じた。
「おお、いい、いい、とてもいい！　その上でホッホ、若いさわやかナレーターから、よぼよぼの飼い主に変わる瞬間を、面白く表現できないかな？」
ホッホが勢いよく回転し、ぴたりととまった。それから腕をのろりと伸ばし、ロバに向かって腕をぶるぶる震わせた。
「あ、あ、あいつめ、歳を取っちまって、役にたたん。売っちまうか？　食っちまうか？」
生徒たちがどっと笑った。
豪利も「ホッホはこんな面白いやつだったんだ」とホッホに向かって手を叩きながら、内心では、（遊びを知らないで育った子どもが、なんでこんな急な変化ができるのか？）と驚き、キララ子には「ホッホは喜劇のセンスがあるかもしれないぞ」とささやいた。

49　言葉のおそい鉄平が劇の主役に

豪利はロバ役の鉄平に顔を向けた。「ロバは飼い主の言葉を耳にして、何と思うかな？」
「ブレーメンに行って音楽隊に入ろうって思って、歩きだす」
「ではそれでやってみよう」
鉄平が演じ、年老いたイヌ役の理王が登場し、ロバとイヌの間でセリフが交わされた。
「あっさりしていて、わたしはつまんないな。鉄平くんの雰囲気、わたし好きなんです」とリサが言った。「ゴリ先生も夏合宿で、鉄平の雰囲気には味わいがあると言いました。わたしはそれを味わってみたいんです」
「うん、そうか、飼い主の言葉を聞いから旅立つまでのロバの気持ちを表現したいな」
「子どもの劇にそんな複雑な心理描写はいりません。さっさとブレーメンに向かって、物語を進めていきましょう」とデップリン。

「おれはリサに賛成だ」と理王。「ロバの気持ちの変化を表現した方が物語に深みが出る」
「おお、二つの異なった意見が出たな。どっちがいいかな？……ロバをやる鉄平はどう演技したいかな？」
「そんな演戯、おれ、どうやったらいいかわかんない」
「そりゃそうだ……では、どう表現するか？……しゃべらない鉄平がロバ……」
「先生」とキララ子が確信の表情で呼びかけた。「鉄平くんは何も言わなくっても雰囲気があります。その雰囲気を表現できませんか？」
「おお、なるほど、鉄平の素朴な雰囲気を生かし……しゃべらない鉄平を生かす……克兄、きみはどう思うかな？」
「はい、ぼくは鉄平には森や緑を感じています。人として鉄平はぼくに森や緑を感じさせてくれた初めての人です。ぼくはしゃべらないロバを想像してしまいました」
「おお、きみたちも克兄も良いことを言ってくれた。鉄平はロバ役としてどうしたい？」
「おれ、味わいがあるなんて言われたことなかった。おれ、自分を味わいたい」
生徒たちが大笑いをし、デップリンも「みんなで鉄平を味わいましょう！」と納得した。
「では飼い主の言葉にショックを受けるロバの気持ちをどうやって表そうか？」
「喋らない、動かないで、ぼうぜんとした気持ちを表す」

「ぼうぜんとするが、生きたいと思う」
「空を見上げる。ギターに手が行く」
「ボロンと弾く」
「その音で、音楽隊に入ろうと希望がわく」
「ギターを弾きながらブレーメンに向かって歩き出す」
「こんなふうに演技したら、リサが言った鉄平の雰囲気を出せると思います」
『音楽隊に入ろう』という言葉は、ナレーターが言うことにしますか、ロバがいうことにしますか？」
「鉄平はどうしたい？」
「ロバが言いたい」
「どうして？」
「ギターの音が呼びかけてきた」
「おおっ、音が呼びかけてきたのか！」
豪利は包むような笑顔で鉄平を見つめた。「きみは言葉数が少ないのに、心が見える表現をするんだなぁ。うん、よーし、良い場面になりそうだ。ここはしっかり練習してくれ」
ロバがイヌに出会う場面に戻った。
イヌ役の理王が勢いよく飛び出してきて、鉄平に向かって激しく吠えかかった。鉄平は立ち止まったまま動かなくなった。
豪利が（鉄平は理王のアドリブをどう受けるのか？）と思って待っているうちに、長い

〈間〉ができてしまった。
「鉄平、ここでロバが何かを言わないと、物語が進んで行かないから、次の練習日までに言葉を考えてきてくれ」
それから豪利が理王に問いかけた。「さっききみは、よれよれの老いぼれイヌを演じたのに、今は激しく動くイヌを演じた。どうして急に変えたんだ？」
「鉄平がみんなの意見を聞いて、イヌの雰囲気をすっかり変えたので、ぼくも自然に変わってしまったんです」

英語劇練習の一日目が終わって生徒たちが帰り、静かになった教室で、克兄ちゃんが豪利に言った。
「生徒たちがホッホを励ますのがいいですね。それを受けてホッホの演技がみるみるよくなっていくのにはびっくりしました。演技ってあんなに変わっていくものなのですね」
「うん、俺は初めはホッホの情けなさそうな姿には困ったが、剣矢がヒーヒー笑っているのを見て、剣矢のああいう反応には何かヒントがあるかもしれない、と思って笑った理由を聞いたら、こんな展開になったんだ」
「ホッホの前向きになる速さは驚きです。鉄平についてですが、ホッホは不安そうに先生の顔を何度も見たのに、鉄平は先生を一度も見ませんでした。どうしてでしょうか？」
「おお、克兄はそこに気がついたのか。うん、鉄平は理王に吠えかけられたとき、何も反応しないで長い〈間〉を作ってしまった。演技の素人は〈間〉を作ることができない。だが鉄平はそれができて、俺の顔を見なかった……なんでかな？」
「鉄平はその場にいることに安心している、ということはありませんか？」
「うん、そうか、彼はびくびくしていないんだな。かわいがって育てられた子どもが持っている心の安定感がある」
続く日の劇練習で豪利が鉄平を呼んだ。「克兄がきみのことをほめている。俺が中学生のきみに、『鉄平には味わいがある』と言ったら、きみはどう思う？」
「おれ、うれしい」
劇の練習はイヌ役の理王がロバに向かって激しく吠えかける場面をやった。前回、イヌ役の理王がロバの鉄平に吠えかけるのに対して、鉄平が長い〈間〉をとってしまったので、豪利が鉄平にセリフを創ってくるようにと求めた場面だ。生徒たちは鉄平が豪利の指示にどう応えるのかを期待をした。すると、鉄平が実にのんびりとイヌに向かって言った。
「そんなに吠えたら、体に悪いよ」
予想しなかった表現に生徒たちが笑った。鉄平ののんびりした言い方がとぼけた味になっていた。
イヌも怒りをおさめた。「ロバどん、聴いてくれよ。おいらは長の年月、主人の狩りのお供をして、獲物をうんとこさ捕まえてきたんだよ。それなのに、おいらが老いぼれて狩に失敗するようになったってんで、主人め、おいらをこん棒でぶち殺そうとしたんだよ」

二匹の間でやりとりがつながり、イヌが「おいらもミュージシャンになりたいぜ。おいらの技を見てくれ」と手のひらを打って踊った。
「良い技だ！　いっしょに行こうぜ、ブレーメンへ！」
ロバとイヌが歩いて行くと、ネコ役のキララ子がふらりと登場し、床にぺたりと座りこんで、もの悲しい鳴き声をたてた。ロバは立ち止まってネコを見つめ、「ネコのねえさん」と呼びかけ、そっと近寄って腕を伸ばした。「なにかつらいのかい？」
ネコがしんねりとロバを見上げた。「ああ、長耳くん……あたしゃね、長の年月、女主人のためにネズミを追いかけてきたんだよ。それなのにあたしが歳をとって、暖炉のそばを離れなくなったてんで、あのババアめ、あたしを川に投げこもうとしたんだよ。それであたしゃバイオリンだけ持って逃げ出してきたってわけだがねえ……この先、どうやって暮らしを立てていけばいいのかねえ」
ネコのセリフの間じゅう、ロバの鉄平はネコに向かってなぐさめるように腕を伸ばしたままでいた。豪利は（動かないのに、良い雰囲気になっている。キララ子は良い目をしている）と思った。
ロバは「バイオリンとはいいねえ。おいらたちの技と合うかもしれねえぜ。おいらたちゃ、ブレーメンへ行って、音楽隊に入れてもらうつもりなんだ。さあ、おいらたちの技を観てくれ、聴いてくれ」とギターを鳴らして踊った。
「あらまあ、それならあたしも仲間に入れておくれよ」とキララ子は言って、バイオリンを弾く演技をしながら、老いぼれネコらしくよろよろ踊った。
すると剣矢が言った。「老いぼれネコのよろよろ踊りじゃなくって、おれ、キララ子の若くてしなやかなダンスを観たいな」
「おお、なるほど。きみたち、剣矢の言葉をどう思う？」
リサが嬉しそうに応えた。「あのね、先生、キララ子といっしょに歩いていると、振り返ってキララ子を見る人多いんだよ。そんなネコを観せたいです」
「同感です。ティーニー塾の劇は、生徒を生かすことが第一です。元の物語に忠実じゃなくていいんです。ここは美人ネコが歌い、踊ることにしましょう。どんなやりとりにするかはぼくたちが残って考えますから、先にオンドリの場面をやりましょう」
ネコも仲間に入って、ブレーメンへと向かった。オンドリ役のリサがリズムの良いステップで中央に立ち、「コケコッコー！」と思い切りよく鳴いた。
「ヘーイ！　赤いトサカのだんなさん、まるでこの世とお別れのように叫んでるねえ！」
「この世とお別れなんだよ。明日、客が来たら、あっしはスープにされちまうんだ」
「おっと、スープにされちゃいけねえや。だんなのトサカは赤くてみずみずしい。声もいい。おいらたちと組んで歌い手をやってくれよ！」
「よーし、面白くなりそうだ。克兄、観ての感想は？」
「劇ってこんなに面白いのですね。ぼくもやってみたいくらいです」
「克兄、仲間に入ってくださーい！」

「おお、きみたち、克兄の役を創ってやれるか？」
「創りまーす！　それから理王、あんたのダンス、リズムがよかった。何の曲だったの？」
「おれたちわかったよ」。剣矢とリサが声をそろえた。「おもちゃのチャッチャッチャ！」
「当たりでーす」とデップリンが声を弾ませた。「ここは美音さんのバイオリンの伴奏で、おもちゃのチャチャチャチャにします。理王のイメージの中には、ツッパリくんたちがブレーメンをやった時のネコ役、美音さんのバイオリンの音があるのです。ぼくたちはもう、美音さんにお願いしてあります。では先生、リサさんの変化をほめてやってください」
「おお、リサ、とつぜん大きな声になったね。どうしてなんだ？」
「はい。ホッホくんも鉄平くんも成長していくのに、長い間ティーニー塾にいるわたしが引っこみ思案ではいけないと思ったのです」
「それ聞いて嬉しい、リサ！　でもあんたの声は静かな歌の方が似合うんじゃないかな？」
「そう思います。リサさん、みんなの前で歌うとしたら、歌いたい曲ってありますか？」
「わたし、フォスターの〈夢路より〉が大好きなの。でもこの場面には合いません」
「合わなくてもいい。おれたちはリサの声をみんなに聴かせたい」
「理王に賛成です。ここは先生、〈夢路より〉を歌うことにしましょう！」
「おお、いいね。デップリン、きみは素晴らしい総監督だ。鉄平の人柄を生かし、リサの声を生かそうとしている。そこでだ、デップリン、このオンドリの場面から先はきみが演出をやってみないか？」
「とんでもありません！　ぼくは演技指導などできません」
「演技指導はできなくていい。もうホッホと鉄平の演技は見通しがたった。あとの役は、小さい頃から何回も劇をやってきて、表現力も工夫力もついている生徒たちが考えるから、演技のことはみんなに任せておけばいい。総監督デップリンに必要なことは、任せられることは任せ、個々の人の持っている良さを引き出すことだ。引き出せない場合は引き出せる人にアドバイスを求めればいい。リーダーに必要なことは人として信頼されること、みんなの力を引き出すことだ。それがデップリンにはもっともふさわしい。きみは総合的なリーダーを目指せ。これからの人生においてだ」
　理王も確信の表情で言った。「おまえはまさにそういう人だよ」
「ゴリ先生、理王、みなさん、ありがとうございます。その期待を受け止めるように心がけます。ではこのブレーメンでは、ぼくは演出家をやらせてもらいます。さあ、みなさん、サルの登場場面に入りましょう」
　四匹の動物たちが楽器を奏でながらブレーメンへ向かって歩いて行くと、サル役の剣矢が勢いよく登場し、飛び、跳ね、回転、バク転、ポーズと次々に演じた。するとデップリンが青い顔になった。
「ゴリ先生、やっぱりぼくに演出家はむりです。今の剣矢の動きは、ぼくはどう判断したらいいのかわかりません。そんなぼくががんばって演出をやろうとしたら、ぼくは悩み、心のバランスを失い、後遺症を持つかもしれません。演出はキララ子にやらせてください.

「あっはっは、言葉の多いデップリンは、自己否定にも言葉が多いな。だが俺はきみに、自分の豊かさを自覚させ、自信を持てるように働きかけるからな。きみのような魅力を持った人を眠らせたままにしてはけないんだ……では、前に進もう。キララ子、演出をやってみないか？」
「はい、やります！　でも先生、わたしも今の剣矢の演技にはアドバイスができません。どう指示したらいいのでしょうか？」
「キララ子は剣矢に、上手な演技をさせたいのか？」
「えっ、……違うのですか？」
「違うな」
「〈大事なことは何か〉ってことでしょうか？」
　キララ子はそう言ってから剣矢に目をやった。「あんたの動きはかっこよかったけど、動きが多すぎて、何を表現したいのかわからなかった。サルはどうしてここにいるの？」
「動物たちの話を立ち聞きして、仲間に入りたくなったからだよ……あ、そっか、おれ、よけいなことまでやったんだ。おれ、動きを整理する」
「そうよね……でも、どう整理したらいいのかしら？」
「キララ子、きみは剣矢にどんな演技をさせたいのかな？」
「わかりやすい演技です。でも剣矢のかっこよさも出したいです……ねえ、剣矢、あんたがやった演技のうち、大事な意味のものを一つか二つにして、あとは捨てようよ」
「それは捨てすぎです」とデップリンが反対した。「剣矢の演技はぼくなんかには思いつかない表現です。スピードもあり、華やかです」
　リサは「わたしには剣矢の動きは速すぎて、気持ちがついて行けませんでした。もっとゆっくりやって、観ている人たちの心を剣矢の動きに参加させてほしいです」
　理王も言った。「おれもリサに賛成だ。剣矢の最初の演技で、サルの物語が見えたんだ」
「ほう？　『最初の演技でサルの物語が見えた』とはどういう意味だ？」。
「剣矢はバク転で登場すると、ぴたっとポーズをとって動物たちを見つめました。それだけでサルが動物たちの話に興味を持ち、その後どうするのかを、観ている人たちが想像したくなるような演技でした。だけど剣矢は顔の演技などいろいろをやって、観客の想像力を妨げました。それにやりすぎで、剣矢の品の良さがなくなります」
「おお、なるほど……剣矢。きみはやりたがり屋ではあっても、でしゃばりでも、かっこつけ屋でもない。やりすぎなければ、理王の言う通り確かにきみは品が良い」
　キララ子が聞いた。「ゴリ先生、演技の基本は何でしょうか？」
「簡単だよ。剣矢、きみはサルがシンバルを叩く演技をやったが、叩いて、すぐに腕を開いてまた叩く、という動作を続けた。それでは忙しすぎて観客の心に響かない。一つの動作が観客の目に入るのにも、意味がわかるのにも、音を想像して聴くのにも、それなりの時間が必要だ。演技というのは、動く、静止する、間をとる、の組み合わせだ。演技はわかりやすく単純がいい。顔や目の演技はやるな。人間が安っぽく見える」

50　「わたしはあなたを大好物です」

　サルの場面までの日本語のセリフができたところで冬期講習の前半が終わり、後半は日本語のセリフを英文になおす作業になった。

　鉄平が豪利に言った。「おれ、高校、行く。けど、途中でニュージーランドに留学する。おれ、自然とかかわる仕事したい。姉ちゃんが留学して泊っている家のおじさんが、野外活動のリーダーやってるから、そのおじさんから学びたい。それと、おれ、言葉、すぐ出てこないから、もう一つの言葉もできる人になりたい」

「鉄平くん、すてき！　鉄平くんの話し方、みんな好きなの」とリサがまーるい目をまーるくした。

「ティーニー塾だからだよ。それとおれ、思ってること、すぐ言葉にできない。おいてけぼりになっちゃう」

「鉄平、リサが言った通りだぞ。きみのゆっくりした話し方には人間味がある。それが自分の長所だと思ったらいい。それに『将来、自然にかかわる仕事をしたい、もう一つの言葉を学びたい』なんて、たいしたものだよ」

「おれ、留学したら、野外活動、うんとやりたい。それで、『明日天気なら、キャンプに行かないか？』って人を誘いたいとき、『～なら』は英語でどう言うか教えてほしい」

「おお、きみたち、その言い方を知らないとして、どんな言い方で表現できるかな？」

「『明日は晴れです』とか言って、『レッツゴウ』とか『～したい』とかって言えば、わかってもらえるよ」

「うん、そう。鉄平が外国人に、たどたどしい日本語で道を聞かれたら、鉄平はわかってやろうとする。鉄平がたどたどしい英語で教えてやっても、相手はわかろうとする。鉄平に相手が、『わたし、あなたを大好物です』と感謝したら、鉄平は何て応えるかな？」

「ありがとう、って応える」

「それと同じだ。きみはのどかに細野鉄平をやるのが魅力だ……さて、克兄、日本語のセリフの英文翻訳はきみが指導してみないか？」

　克兄ちゃんは張り切った。「中学校で学ぶ英語で、かなりの表現ができるから、なるべくそれを使ってやってみようね」

　生徒たちはティーニータイニー塾の英語文型集を参考に、克兄ちゃんの助けを借りて英文にし、それを克兄ちゃんが録音し、生徒たちはサルの場面までの英語台本を創り上げた。

　劇の練習は生徒七人の気持ちがまとまっていて、豪利が口を出すことはほとんどなかった。克兄ちゃんも生徒たちの劇表現を楽しそうに観ていた。

「克兄は、生徒たちの発音やイントネーションで変なところがあっても注意をしないが、何か理由があってのことかい？」

「はい、生徒たちの英語が生きているからです。ぼくは普通の読み方で録音したのですが、

生徒たちがそれを劇にして表現していくうちに、言葉に勢いがついてきたのです。そういうところで、発音がどうのこうの、イントネーションがどうのとやったのでは、生徒たちの言葉の勢いを殺してしまいます。ぼくも先生に質問があります。先生はキララ子や理王、リサ、デップリンには、演技指導をあまりしないのはどうしてかということと、演技経験がないホッホと鉄平に対しても、同じ場面を何回も練習させることをしないのに、二人とも見ている前でよくなっていくのはどうしてなのか、ということをお聞きしたいです」

「うん、キララ子たち四人は小さい時から英語劇をやってきていて、心と体を働かして楽しむことができるようになっているから、そこを尊重して好きにやらせている。その結果、俺が考えつかなかった面白い表現をすることがたびたびある。あとの質問の、『素人なのに同じところを何回もやらせないのはなぜか？』に対しては、だれか説明できるか？」

キララ子が受けた。「子どもの劇は遊びだから、なるべく途中で切らないで、長く演技をさせて遊ばせたい、というのがゴリ先生の考え方です」

「おお、そうだ。これは俺の子どものときの体験から来ている。俺は小一のとき、わら縄で赤ちゃんを背中におんぶした小四のお兄ちゃんから野球を教えてもらったのだ。ボールは布きれを糸でまいて丸くした物で、このお兄ちゃんはボールの投げ方から教えてくれ、少し投げられるようになるとボールの捕り方、次には打ち方、走り方、滑りこみ方までも一気に教えてくれた。そのお兄ちゃんは一つのことを何回も練習させることはしないで、野球全体を遊ばせてくれたから、野球が初めての俺でも野球というものがわかって楽しめだ。俺は夜中に寝ぼけて起き上がって、バットを振るかっこうをして、「野球っておもしろいわやあ」と言ったそうだ。

そして俺はこのお兄ちゃんの教え方とは正反対の体験を小二のときにした。俺はピアノの音が好きだった。俺が生まれると、オヤジはしょっちゅう童謡のレコードを買ってきて俺に聴かせたそうで、その伴奏がピアノだったから、それでピアノ好きになったらしい。小二のとき、夕方になると、ある家から童謡を歌う子どもの声とピアノ伴奏の音が聴こえてきて、俺はよくその家の前にたたずんで耳を傾けていたんだ。そしたらオフクロが『ピアノを習わせてあげたいけど、うちにはピアノを買うお金がないの』と言ったから、俺は『学校のオルガンで練習するから』と主張して、親が遠い町にピアノの先生を見つけてくれた。その先生はピアノがない俺に、紙に鍵盤を手書きで書いてくれた。そういう意味では良い先生で、俺は週一回、往復三時間をかけて先生の教室に通った。だがその先生の指導方法は、できないところを何度も何度も弾かせるというやり方だった。俺の方は紙の鍵盤とオルガンで練習してきた曲を、本物のピアノで最後まで弾きたかったのだが、先生は俺の気持に気がつかなかった。俺も小二では自分の気持ちを言葉で表すことを知らなくて、けっきょくつまらなくてピアノをやめてしまった。

俺の劇指導はその二つの経験を生かしている。〈部分だけをやらせるのではなく、全体を遊ばせる。間違えてもいい、子どもが楽しいと思うことを優先させる。そうすれば子どもは自らの意志で自分の世界を創っていく〉というふうに期待して、演技指導している。

そうすると、その子の演技全体がとつぜんよくなってしまうことがたびたびある。演技の技術が向上したというより、（この子の人間性に何か豊かなものが加わった）と想像できる瞬間だ。人間の不思議な能力には感嘆する」

51　ルール無視の剣矢の高校受験

剣矢が飛びこむようにやってきた。

「ゴリ先生！　おれ、創育学園高校に入って、ラグビーやりたい！」

「ラグビー？　きみは多摩丘陵高校のサッカー部から誘われているんだろう？」

「だけどセレクションには呼んでもらえなかった。それで、多摩丘陵高校の監督に会いに行って、落ちた理由を聞いた。監督はおれのことを知っていて、『きみの動きは鋭くていいが、一人でやってしまうことが多すぎる』って言った。おれ、納得した」

「うん、そうか。だがきみはラグビーはやったことがないのだろう？」

「そこから先、ぼくが説明します。ぼくが剣矢にラグビーを勧めたようなものですから」とデップリンが誇らしそうな顔をした。「ぼくは図体がでかいから、創育学園でラグビーをやらないか、って先輩から誘われていたものですから、剣矢の気分転換も兼ねて、創育学園のラグビーの試合見学に剣矢を誘ったのです。そうしたらこの人、一度でラグビーを気に入ってしまって、創育学園のラグビー部に入りたいって言いだしたのです」

「ほう、どうしてなんだ？」

「この人、ラグビーを観たのは初めてなのに、猛烈に興奮して、『そこだ！　そっちだ！ボールをまわせ！　走れ！』って叫びまくったのです」

「おれ、自分がボールを持って走っている姿が見えたんだ。走っていくコースも見えた。それにラグビーはボールを蹴って、持って、走って、ぶつかって、取っ組み合って、おれはこういうスポーツやりたいって思った。選手も観客も態度がよかった。おれ、創育学園でラグビーやる。難関校だけど受ける」

創育学園高校の入学試験があった日は、ティーニータイニー塾中三生の受験前特訓中だった。そこへ入試を終えた剣矢が意気揚々とやってきた。

「できたよ、おれ！　英語は満点、数学もできたつもりだけど、おれ、おっちょこちょいだからわかんない。国語に小作文があって、三つの題の中から一つ選んで書けってあったから、『創育学園で私がやりたいこと』を選んで、創育学園のラグビーの試合を見たときの感想を思いっきり書いた。問題はやんなかった」

「えーっ、おまえ、問題に手をつけなかったの？」

「作文書いているうちに、書きたいことといっぱい出てきたからやめられなくなって、解答用紙の裏も使って書いちゃった。しょうがないよ」

入試が終わった。デップリン、キララ子、鉄平は都立高校に、剣矢とリサは私立高校に

合格した。
　中三生たちは高校合格祝いに、見事なデコレーションケーキを理王の音頭で作り、スパイスのきいたカレーライスをリサの指導で作り、その夜は塾に泊まりこんで、サルの場面からブタの登場までを日本語で創り上げ、次の授業で豪利の前で演じた。
　剣矢のサルが軽快な演技をしたあと、デップリンがブタになって満面の笑顔で登場した。
「旅のみなさん、ぼくもお仲間に入れてください」
「おーや、ブタじゃないか？　ブタがどうして仲間に入りたいんだい？」
「ぼくは腕のいい料理人だったのです。ところがたった一度、塩と砂糖を間違えて料理を出したばかりに、クビになってしまったのです」
「料理人ともあろうものが、味見をしなかったんだ！」
「あんた、何か楽器をできるのかい？」
「できません。でも歌が得意です」
「歌手はいらない。おれたちにはオンドリという歌い手がいるんだ」
「まあまあ、そう言わずに、ぼくをよくごらんください。人はぼくを見ると嬉しくなるのです。ぼくはきっとみなさんのお役に立てます」
　生徒たちが理王に目を向け、イタズラを期待する顔になった。
「うん、役に立つことが一つある。ブタの丸焼きになって、おれたちに食べられることだ」
「ああ、やっぱりね……では、どうぞぼくを丸焼きにして、めし上がってください」
　デップリンは巨体をどーんと地面に横たえた。生徒たちが嬉々とした。
「さあ、友よ、このでかすぎる体から、手足を切り離そうぜ」と理王が空に向かって叫んだ。「包丁よ、飛んでこーい！……ほーら、飛んできた！」
　理王は包丁を一人ひとりにわたす仕草をした。
「おれはこのりっぱな太ももをもらうよ」
「おれ、もう一本の太もも」
「わたしはたくましい右腕」
「わたしは左腕」
「おいらはぱんぱんに張ったほっぺた。さあ、包丁を振り上げろ！　切るぞ！」
　動物たちが包丁を振り上げた。
　見学に来ていたヒッポとアズミが困惑顔になって豪利を見た。
「そーこーまーで」と豪利がのんびり声で言った。「おーい、デップリンくーん！　体を起こしたまえ」
　生徒たちは包丁を振り上げたまま動かなくなり、デップリンはぼんやりした表情になって起き上がった。
「デップリンくんよ、きみはこのザマを、親に見せられるかな？」
「あー、あー、ぁー」
「親たちはこれを観たら、困って笑うしかない……そんな笑い方をさせていいのか？」

生徒たちは振り上げた腕を力なく下ろした。キララ子はしょんぼりと豪利の前に行って、頭をさし出した。豪利はゲンコツに「ハーッ」と息を吹きかけ、腕を高く振り上げ、それから人差し指の先でチョンとキララ子の頭を突いた。
「きみたちは小さい時からいっしょにやってきたから、つい調子に乗ってしまったってわけだ。うん、ブタが『楽器をできない』というところまではよかった。その後は創りなおせ。キララ子のお爺ちゃんが『ブラボー』と叫ぶ姿を想像しながら創るんだ。克兄の役も創れ。今日はここまで」
中三生たちがひっそりと帰ると、豪利、克兄ちゃん、ヒッポ、アズミが向かい合った。
「教員志望のぼくには、いい勉強になりました。先生がストップかけたとき、理王はほっとしていました」
「ああいう知性の子も、ときには勇み足をするさ。理王はこの塾にいる間に、イタズラでもなんでもやっておいた方がいい」

52　「デップリンが人を生かせるようになった！」

中三生たちそれぞれの進学先が決まったので、生徒たちは英語劇発表会に向けて劇創りに集中し、発表会二週間前に、豪利と高校クラスの生徒たちに観てもらうことにした。
大学生の美音がイヌ役の理王の踊りに合わせるために、バイオリンを持ってチャンちゃんといっしょにやってきた。
「美音さーん！」。リサとキララ子がかけよった。「わたしたちのこと、覚えていますか？」
「あらーっ、リサちゃんとキララ子ちゃん！」
二人が飛び上がって喜ぶと、「ぼくたちのこともわかりますか？」とデップリンと理王が顔を突っこんできた。
「わかるわよ！」と懐かしそうに微笑む美音を見て、キララ子が、「チャンちゃんのお姉ちゃん、笑顔がすてき。わたしもチャンちゃんのお姉ちゃんのバイオリンで踊りたいな」と言って、くるりと回転した。
「キララ子が踊る場面はあるの？」
「ありません。ネコがイヌを相手にするときに踊りたいです」
「踊っちゃいなよ。思いっきりよくね」
中三生たちは豪利と高校生の前で「ブレーメンの音楽隊」を演じた。終わると、キララ子が上気した表情で高校生たちに聞いた。「劇の終わりに付け加えたパフォーマンスは、どう思いましたか？」
「とても楽しかった。キララ子の演出は人を生かしているね」
「克兄に対するきみたちの敬愛の情も表されていたね」
「嬉しいです」とキララ子は喜んだが、ホッホを見ながら言った。「この人の泥棒役の演技が不安定です。でもアドバイスの仕方がわかりません。先生、お願いします」

「うん、後で考えてみよう。その前に剣矢、サルの楽器はきみのアイディアか？」
「そうだよ。田舎のお爺ちゃんの村では、夜に拍子木を打って、『火の用心』と叫んで歩くから、そこから思いついた」
「剣矢は発想が面白い。きみは高校生になったら、ティーニー塾には来ないのだろう？」
「うん、ラグビー部に入るから、ここに来る時間がない」
「おお、そうか、きみは大事なことを学び取れる人間だ。ラグビーを通して、人間のことを学べよ。では剣矢には旅立ちを祝う言葉を贈ろう。剣矢は自分の長所を言えるか？」
「言えるよ。おれの長所は、やる気があることと性格がきれいなこと」
「ほお、性格がきれいと自分で言えるとは素晴らしい。誰かに指摘されたのか？」
「自分で思ってる。おれ、ずるいことしないもん」
「全くだ。だから人はきみと安心して付き合えるのだ。きみも人と深く交われよ」
「うん、そのつもり。だけどさ、おれ、言っちゃいけないこと、言っちゃうんだよね」
「まだガキだからさ。ガキンチョのうちに失敗をやって、人からやっつけられておけ。きみは自分の間違いを認めることができる。マイナスをプラスに変える力がある。いっぱい失敗し、それを財産にして成長していけよ……さてキララ子、克兄の役柄はどうやって思いついたのだ？」
「はい。初めは克兄にも動物の役をやってもらおうって、みんなで考えたんですけど、良いストーリーが思いつかなくて……」
　剣矢がそこから先を話した。
デップリン：人間が登場することにしたらどうでしょうか？
理王　：克兄の人柄が出るような役は何かね？」
リサ　：克兄は高校時代は合唱部で指揮者をやっていたのよ。
克兄　：指揮者がこの動物たちと出会ったら、楽団を創ろうという話に発展するよね。
剣矢　：楽団を創って、ブレーメンに行くことにしよう。劇の終わり方がいい。
鉄平　：終わり方いいけど、なんか、物足りない
リサ　：グリムの童話ではブレーメンに行かないで、森に住むことになっているわ。
ホッホ　：薬師池の森に住むことにしましょう。あの森はなごみます。
剣矢　：こんなふうに話し合ったんだけどね、先生、デップリンがかっこいいんだ。考え深くなって、おしゃべりが少なくなって、キララ子に任せられるようになったんだよ。
理王　：そう。おれの兄貴分が、人を生かそうとするようになってきてるんだ。
豪利　：おお、いいね。デップリンや、みんなにきみの成長過程を話せないかな？
デップリン：話せますとも！　ぼくも語りたいです。
豪利　：よし、ではデップリンが語る前に、きみたちに相談したいことがある。キララ子から、泥棒役のホッホの演技について、アドバイスの仕方を相談されたんだが、俺は泥棒の場面はなくそうと思っている。きみたちの劇はこの塾の発表会には長すぎる。
剣矢　：ダメだよ！　なくしたら、ホッホのセリフはロバの飼い主役のたった一言だ

けになっちゃうよ。そんなのかわいそうだよ。
リサ　：そう思います。ホッホくんには敗者復活戦をさせてあげたいです。
豪利　：敗者復活戦？　リサちゃんがそんな言葉を使うのか？　どういう意味だ？
リサ　：ホッホくんは入塾した時にはおどおどしていたのに、夏合宿ではさわやかお兄ちゃんになりました。この劇のロバの飼い主役でも初めは不安そうだったのに、先生からアドバイスを受けたら、突然くるりと回転して面白かったです。ホッホくんはおどおどをやめて、前向きになれる人です。敗者復活戦として泥棒役に挑戦させてあげたいです。
剣矢　：賛成！　ホッホ、さわやか泥棒になれ！
デップリン：無理です。ホッホのおどおどはぼくの心配性と同じで、なおせません。
リサ　：やーだ、そんなこと言っちゃだめ！　ホッホくん、やろう！
剣矢　：デップリンさあ、おまえの心配性はなおってきてるんじゃねえの？
デップリン：それはぼくが自分のプラスの面を見ることを学んだからです。さらにぼくはリサさんに、デップリンは親切心いっぱいの人だ、って言ってもらえ、みなさんから信頼されていることも改めて感じて、ぼくは親切心をもって人を見つめ、語りかけることを意識するようになったからです。
キララ子　：あっ、わかったわ！　さっきデップリンは心配性は性格だから治らないって言ったけど、今、あんたは、自分のプラスの面を見ることを学んだから治ったみたいなことを言った。人は考え方が変われば成長できるのよね。ホッホくんも考え方を変えよう。ホッホくんは人の励ましを受け入れられる人なの。だから、きっとやる気になるわよ。
ホッホ　：ああ、ほめられるって嬉しいな。　ぼくに泥棒役をやらせてください！
キララ子　：ホッホくん、わたし、あんたに聞きたいことがあるの。あんたが夏合宿のキャンプで、面白い動きをしたことがあって、わたしが『それ、何？』って聞いたら、あんた、『パントマイム』って答えたよね。それを今、やってみせてくれない？　ゴリ先生もあんたのロバの演技を観て、『ホッホには喜劇のセンスがある』って言ったのよ。
　生徒たちが期待の顔をホッホに向けた。ホッホはすっと前に出た。両腕を伸ばし、肘を直角に曲げ、ロボットみたいな動きで、『カックリ、ヒョッコン、カックリ、スー』と言いながら踊った。美音がホッホの動作に合わせて即興でバイオリンを弾いた。
キララ子　：ホッホくん、あんたがこんな大胆なことができるって、どうしてなの？
ホッホ　：はい、ぼく、数年前にテレビでパントマイムを観て、とりこになってしまい、自分でいろいろ演じて、変身を楽しんできてるんです。
豪利　：親の前でも変身をやったのか？
ホッホ　：いえ、部屋でこっそりやって、夜は窓に自分の変身を写して楽しみました。ぼくが四歳くらいまでは、お母さんが絵本を読んでくれて、二人で絵本の中の人物を遊んだりしたそうです。ぼくはお母さんの口調までおぼえて、真似できないところは、『なんで読めないんだよう！』って、本に向かって怒っていたそうです。
豪利　：おお、それでわかった。きみが落ちこんでも立ち直りが速いのは、お母さん

の声がきみの体の中にしみこんでいるからなんだな。うん、そうか、そうか。
デップリン：ぼくが知っている小学生のホッホは鈍い人だったのに、今の踊りにはリズムがありました。どうしてですか？
ホッホ　　：はい、ぼくが小さい時、お父さんがいっぱい遊んでくれたんですって。でもお父さんは外国に行ってしまって、それっきりになったんですけど、ぼくはティーニー塾に入って、いろいろ体験をしているうちに、小さいときに学んだ感覚がよみがえってきているみたいです。
キララ子　：あんたは飼い主役を頼りなさそうにやったのに、先生がちょっとアドバイスをしたら、あんた、とつぜん勢いよく回転をしたわよね。今のパントマイムも気持ちが入っていたわ。
ホッホ　　：はい、ぼくは小さいとき、絵や音楽の教室に通っていて、ぼくと遊ぼうと寄ってくる子たちがいたんだけど、ぼくがどうしたらいいかわからないでいるうちに、みんなぼくから離れていってしまいました。ぼくが何かトロイことをした時だけ、みんながぼくを笑いました。それでぼくは相手にしてもらうために、トロイ子を演じるようになっていき、自分でもぼくはトロイ子なんだと思うようになりました。ぼくはリーダーシップキャンプでトロイことをやり、やっつけられ、絶望で気を失いかけていた時、ツッパリくんが抱きしめてくれ、克兄が腕をからませてくれました。ツッパリくんの胸の温かさ、克兄の支える力、そのとき見上げた空の青を、ぼくは忘れません。ティーニー塾の人たちがぼくと向き合ってくれていることもわかり、ぼくはトロイ子の振りをやめて、自分を正直に表そうと決めました。
　ぼくは学校のテストで高得点を取ると、『何でこんなヤツが？』という目で見られ、その目におびえてきたのですが、この塾の人たちはぼくをやっつけても、ぼくを励ましてくれました。ぼくは、（ぼくの学校にも、こういう良い人たちがいるはずだ）と思うようになりました。そうしたら、学校の人たちも話しかけてくるようになり、ぼくも友だちの輪の中で笑っているようになっています。ぼくはティーニー塾に入ってまだ日が浅いですが、ぼくにとっては熱い日々です。夏合宿の生徒たちの感想文の中で、ぼくが度々ほめられていて、ぼくはもう驚きました。おどおどホッホくんがさわやかお兄ちゃんになったという指摘には、布団の中で泣きました。英語劇になって、ぼくの演技が変わって行くのも不思議な感覚です。ぼくは自分をほめることを知りませんでしたから、剣矢が剣矢自身のことを、「性格がきれい」と言った言葉には感動しました。（ぼくも自分をほめる言葉を持とう。さわやかお兄ちゃんになろうと思っている自分をほめよう）と思っています」
　豪利がホッホに言った。「発表会できみの親が、きみの演技を観たらなんと思うかな」
「お母さんは少女みたいに泣きます」
「泣いたらいい。キララ子のお爺ちゃんの『ブラボー！』と重なって、にぎやかでいい」
　デップリンが、「おろおろ坊や、おどおど坊ちゃまでしかなかったホッホが、こんなに成長して、ぼくは感激です」と言って、目をうるませ、太い腕で顔を拭った。「いえ、感

激よりも感動です。ではぼくの成長の感動物語をお話します」

デップリンは響きの良い声で語り出した。「ぼくは小さい時から、いつでもどこででも好きなようにリーダーをやり、受け入れられてきて、ぼくは伊藤ヒロキという自分に疑問を持ったことがありませんでした。ところが、リーダーシップキャンプで、ぼくが出した指示が剣矢には反抗され、リサさんには自信をなくさせ、ツッパリくんからは、『相手を生かせ』と叱られました。

人に批判されたことがなかったぼくはショックを受け、反省したつもりでしたが、自分の見つめ方がわからなくて、反省ができませんでした。そしたら夏の合宿で、中一の雷介から、『デップリンは人を見ていない』、つまり『相手の人間性に興味を持っていない』と指摘されてしまいました。

先生からは、『きみは見つめることをやっていない。きみは見つめることができるようになれば、たくさんのことが見えてくる』と言われました。ぼくには先生の言葉の意味があまりわかりませんでしたが、自分が人の言葉に耳を傾けてこなかったことには気づき始めていたので、人を見つめようと意識しました。そのすぐ後の空飛山キャンプで、アズミくんと克兄が話し合っている姿を見つめました。そうしたら、二人がお互いの言葉に耳を傾け、自分の言葉を相手の心に向かって返していることに気がつきました。（対話ってこういうことなのだ。ぼくは一方的にしゃべりまくってきて、相手のことを知ろうとしなかった。これからは相手を見つめ、対話をしよう）と初めて思いました。

合宿の最後の夜のコンパ。食べ、歌い、踊り、夜が更け、中三生と高校生たちはキャンプファイヤーの残り火の周りで、それぞれの思いを語りました。合宿大親分のぼくは、合宿が実り多く終わろうとしていることに満足でした。でも一つだけ、気になっていたことがありました。それはゴリ先生から、「きみが、自分を心配性の人と思うか、親切心いっぱいの人と思うかで、言葉も行動も違ってくる。きみはどっちでありたいのか？」と問われていたことです。

ぼくは理王に、『ゴリ先生の問いをどうとらえたらいいのかよくわからない』と言いました。すると理王は『おまえは心配性をやめたいと言ってるが、なぜだ？』と聞くので、『心配性は自分の気持ちを小さくしている。人へはおせっかいになって表れている』と応えました。理王は『ではリサがおまえを、親切心いっぱいの人、と言ったことについては、どう思うか？』と言うので、『嬉しい』と答えました。すると理王は『そんな答えを求めたのではない。リサの言葉から、おまえが自分を、親切な人間と自覚できるようになっていたら、おまえはリサの自信をなくさせるようなことはしなかったんじゃないのか？』、と問いつめてきました。

ぼくは考えました。（ぼくが自分を「親切な人間」と自覚していたなら、リーダーシップキャンプで、料理は料理の得意なリサさんにまかせ、リサさんを生かすことができたはずだ。人を見つめることができていなかったぼくは、自分の心配性がおせっかいになって、その結果、リサさんを追いつめてしまったのだ）と気がつきました。ぼくは夜空の星に向

かって問いかけました。『ぼくの一つの言葉、一つの行動が、人によって捉え方が違う。どうしたらいいのか？』

するとキララ子が、『あんたは心の底から親切な人なんだ。だけど人によってはおせっかいととらえられ、うるさいってなり、別の人には親切を感謝されるのだ。だから相手に応じて、言い方、やり方を変えればいい』と言ったのです。

この一言で、ぼくの視界が広がりました。ぼくは大地に寝そべり、天空に向かって、『わかったぞ！』と叫びました。満天の星でした。

〈真砂なす　数なき星の　その中に　我に向かいて　光る星あり〉

ティーニー塾の短歌のカルタ取りの中で、ぼくが一番好きな歌です。キララ子星がぼくに語りかけてくれたのです。〈相手を見つめ、相手に合った言葉、行動をとればいい〉と。

こうしてぼくは人を見つめることを意識するようになると、言葉数が減りました。ぼくは小学生の時、ツッパリくんたちの英語劇〈ブレーメンの音楽隊〉を観て、ロバ役のツッパリくんが、ビートルズの曲を全身をゆすってギターを弾き、歌う姿に憧れてしまいました。それ以来、（ぼくもいつかロバ役をやろう。ぼくは思い切りユーモラスなロバを演じよう）と思ってきました。そして今年、ぼくたちがブレーメンをやると決まったとき、ぼくは（いつも主役をやってきた自分が、また主役をやっていいのか？）と思って、中三生たちを見つめました。そうしたら鉄平の人柄に気がついたのです。（鉄平の素朴さを生かしたい）。ぼくは鉄平をロバ役に推しました」

ゴリ先生は鉄平の味わいを引き出し、ホッホの中に、さわやかお兄ちゃんの姿を見い出し、その後のオンドリの登場からの演出をぼくにまかせてくれ、ぼくはリサさんの美しい声を生かすことができました。

ところが剣矢のサルの演技になって、ぼくは手も足も出なくなり、キララ子に演出役を代わってもらいました。それがぼくには正解となったのです。

ぼくが特に印象に残ったのは、キララ子が泥棒役のホッホのちょっとした仕草から、ホッホの興味がパントマイムにあることに気がつき、それを面白がり、ほめ、ホッホをやる気にさせていったことです。もしぼくがあのまま演出をやっていたら、ぼくは『がんばれ』だけを連発し、その結果、ホッホを再びおどおどホッホにしてしまったかもしれません」

すると「そうはなりません」とホッホが言った。「ぼくも鉄平のように、『ぼくって、いいじゃん』と言いたくなってきているんです」

「そうなのです。これからのぼくは、それぞれの人が自分を生かす力を持っているということに目を向けます。ぼくはキララ子がゴリ先生に、『剣矢の魅力を生かすにはどうしたらいいですか？』と質問したのを見て、リーダーという者は、知らないことは人の知恵を借りられる人なのだ、それぞれの人の長所を引き出し、お互いに認識させ、協力させあう役なのだと知りました。ぼくは人を見つめ、人を生かすことを心がけます。ぼくがこよなく愛するみなさん、これからも、ぼくをやっつけ、励ましてください」

デップリンが語り終わると、リサが歌うように言った。「ゴリせーんせ、デップリンが

恋い焦がれているゴリ先生のほめ言葉を、贈ってやってください」
「おお、その必要はないぞ。今のデップリンの話は首尾一貫していて、感動の成長物語になっていた。俺のほめ言葉など、いらない」
「いります。中学生活の締めくくりに当たって、先生はぼくにほめ言葉を贈ってください」
「おお、そうか……デップリン、俺はきみの話を聴きながら、（デップリンは初心を大切にしているんだなぁ）と感嘆していたよ。きみは小さい時に、隣の家族の品の良い言葉遣いに憧れてからは、今に至るまで、丁寧な言葉を遣ってきている。小三でツッパリに『言葉を大切にするやつはいいぜ』とほめられてからは、言葉を意識して語っている。そして今、相手を見つめ、その人に合った生かし方をしようと考えるようになっている。俺もデップリンに、『言葉数を少なくして、相手に表現する機会を与えろ』と言ったが、デップリンは常に真剣で、人に対して温かい。だから俺は、『きみはしゃべりたい時にはしゃべるのがいい。しゃべることできみは人に力を与え、自分自身も育てる』に訂正する」
「ゴリ先生、そういうぼくが良きリーダーになるための心構えをアドバイスしてください」
「見て、聞いて、考えて、判断して、人に発信する」

53　「ブレーメンの音楽隊」の劇発表

英語劇発表会の日が来た。小学校低学年クラスの劇はウクライナ民話の「てぶくろ」、二つの小高クラスは「三匹の子ブタ」と「赤ずきん」、中一クラスは「ヘンゼルとグレーテル」、中二クラスはグリムの「小人と靴屋」と続いた。
高校生クラスは豪利が創った「おれたちオオカミ、極悪人」を演じた。
二人の泥棒役のアズミとジュニアが、歌い、踊りながら客席から登場してきた。
「おれたちオオカミ、極悪人。泣く子も黙るウルフギャング。犯した悪事は数知れず、手にした宝は山のよう……とは真っ赤な偽り。おれたちゃまぬけ、お人よし。だましたつもりがだまされて、奪ったつもりが奪われて、追われ追われてあの町この町、流れ流れて、今、ここへやってきたってわけよ……なになに？　ここは子どもの国だと？……えっへっへ、いっひっひ、よしよし、子どもたちをだまくらかして、この国を乗っ取ろうぜ！」
ところが、オオカミ極悪人たちは、チャンちゃんをリーダーとする子どもたちにやっつけられてしまう。そのあと極悪人たちは子どもたちの優しい心に打たれて気持ちを改め、痛快に活躍する、というストーリーである。ティーニータイニー塾の劇では、戦う場面はいつも子どもたちの人気で、今年は女子のチャンちゃんが男子のアズミとジュニアを投げ飛ばし、二人は思い切りよくやっつけられたので、子どもたちは大喜びだった。
プログラムの最後は中三生クラスの〈ブレーメンの音楽隊〉である。

幕が開き、ナレーター役のホッホが、軽快に飛び出してきた。
ナレーター：みなさん、こんにちは！　ぼくはさわやかお兄ちゃんのホッホくんでーす。

（ホッホが客席に向かって手を振る。ホッホの母親のヒーッと言う悲鳴がおこる）
ナレーター　：ある男がロバを飼っていました。
（ロバ役の鉄平が荷物を背負い、くたびれた格好で登場する。さわやかホッホくんはくるりと回転すると、よぼよぼの飼い主役に変化、ロバに向ってぶるぶるふるえる腕で指す）
飼い主　：あ、あ、あのやろう、お、老いぼれちまって、役に立たん。処分するか、くっちまうか？（去る）
ロバ　：処分？　おら、まだ死にたくねえ……（ギターをつま弾く。遠い空を見上げる）　おお、この音だ……そうだ、ブレーメンの町へ行って、音楽隊に入ろう。
（舞台脇でホッホがくるりと回転。老いぼれ飼い主からさわやかお兄ちゃんに戻り、模造紙を広げ、〈夢を追いかけどこまでも〉の歌詞を客席に見せる。ロバがギターを弾く格好をし、美音が舞台の端でバイオリンを奏で、客席の生徒も親も歌う。

夢を追いかけどこまでも　野を越え山越え谷越えて
遥かな町までおれたちは　ミュージシャンの夢　追いかける

ナレーター：ロバが歩いて行くと、たけり狂ったイヌに出会いました。
（真っ赤なロングスカートをはき、真っ赤なセーターを着たイヌが飛びだしてきて、ロバに向かって吠えたてる。客席の生徒たちが騒ぐ。「えっ、あの人、理王？　理王だ！」）
ロバ　：おい、ワン公、どうしたんだい？　そんなに怒ったんじゃあ、かっこ良い姿がだいなしだぜ。
（イヌが逃げてきたことを語る。ロバはブレーメンの町へ行って、音楽師になるんだと言って、がギターを弾く）
イヌ　：いよーっ、見事な腕前だ！　おいらはドラムを叩ける。ダンスも得意だ。
（ドラムを叩き、踊る）
ロバ　：うまいぜ！　おらたちゃ仲間だ！　いっしょに行こうぜ、ブレーメンへ！
ナレーター：ロバとイヌが歩いてゆくと、疲れ切って、うす汚れたネコに出会いました。
（キララ子が黒のセーターと黒のロングスカートを身につけ、よろよろと出てきて、ぺたりと座りこむ）
ロバ　：ネコのねえさん……そんなにぐにゃぐにゃしてたんじゃ、昔のべっぴんがだいなしだよ。どうしたってんだい？
ネコ　：そうとも、あたしゃ、べっぴんのダンサーだったんだよ。それが歳を取って、暖炉のそばを離れなくって、ネズミを捕らなくなったってんで、女団長め、あたしを袋に入れて川へ流そうとしたんだよ。
イヌ　：あんたは姿が良い。おいらがドラムを叩く。ちょいといっしょに踊ってみようぜ」
（イヌとネコがさっと左右に分かれ、美音のバイオリンの〈おもちゃのチャッチャッチャ〉の曲に合わせて、前に出、後ろに下がり、交差し、踊る。真っ赤なイヌの切れ味の鋭

い踊りと、真っ黒なネコのしなやかな動きの対比に、客席が盛り上がる。二匹が決めのポーズで踊り終わると、キララ子のお爺ちゃんが「アンコール」と叫ぶ。タイミングよく、小さな男の子が「もう一回やって！」と叫ぶ。会場は爆笑。美音と三匹がうなづき合い、〈おもちゃのチャッチャッチャ〉を踊る）

ロバ　　：いっしょに行こうぜ、ブレーメンへ。

（動物たちはリサが演ずるオンドリと出会う。やり取りの後、バイオリン伴奏でリサが歌う。

夢路より帰りて　星の光あおげば　さわがしき真昼の　わざも今は終わりぬ
夢見るはわがきみ　知らずや我がしらべを　なりわいのうれいも
跡もなく消えゆけば　夢路より帰りこよ　（津川圭一訳詞）

（四匹の動物たちは、剣矢の演ずるサルに出会う。サルは木の上でポーズをとる）

動物たち　：サルさんよお！　なんで狂ったように木から木へ飛び移っているんだい？

サルが木から落ちちゃあいけねえぜ！

サル　　：それが落ちちゃったんだよ。おらぁ、サーカス団で曲芸をやってたんだ。空高くに張ったロープの上で宙返りをしたり、シンバルをたたいたりして、やんやのかっさいを浴びてきたんだ。それがよう、老いぼれて足がもつれ、客の前で墜落しちまって、おはらいばこになったってぇわけさ。それで体を鍛えなおしてるんだが、だれかやとってくれるかねえ？

動物たち　：シンバルとはいいねえ！　ちょいと鳴らしておくれよ。

サル　　：おやすいご用だ。いいかい、想像してくれよ。今、おいらは空高いロープの上でシンバルを持って立っているんだ。さあ、やるぜ！　ほら、くるりと宙返り。シンバルを大きく広げて……カチ、カチ、カチ……火のよーじん！　火のよーじん！

動物たち　：やっはっはー、拍子木とは面白い！　だが、どうして拍子木なんだい？

サル　　：おいらはサーカス団から追い出された時、親方にシンバルを取り上げられちまったんだ。シンバルはおいらの命だ。そこで拍子木を木で作って、叩いてるってわけだ。

動物たち　：良い響きだ！　いっしょに行こうぜ、ブレーメンへ！

（ブタの役のデップリンが登場する）

ブタ　　：みなさん、お待ちください、ぼくもお仲間に入れてください。（子どもたちが「デップリンだ！」と喜び、キララ子のお爺ちゃんが「待ってました！」と叫ぶ）

動物たち　：おやっ、ブタじゃあないか。ブタが仲間に入りたいとはどうしてだい？

ブタ　　：はい、ぼくは腕の良い料理人だったのです。ところがお客さんの料理に、塩と砂糖を入れ間違えてしまって、クビになったのです。

動物たち　：あんた、楽器は何かやるのかい？

ブタ　　：何もできません。

動物たち　：楽器を弾けない者を連れていくわけにはいかないよ。

ブタ　　：やっぱり無理ですか？（ブタはドーンと巨体を投げ出して横たわる）　ぼくはもう役立たずです。ぼくを煮るなり焼くなりして、みなさん方のお役にたててください。
イヌ　　：そういうことなら……包丁よ，飛んでこーい。（理王が包丁を捕る演技をして動物たちに渡す）……さあ、包丁を振り上げろ！　（動物たち、包丁を振り上げる）
イヌ　　：おっと待った！　食べちまったらそれっきりだ。みなの衆、ブレーメンへの道は遠い。その間の食事はどうするんだ？
動物たち　：料理人が必要だ！
ナレーター：こうしてブタも仲間に加わって、動物たちは「森のブタさん」を歌いながら、ブレーメンへ向かって、とっとこ、とっとこ。
（動物たちが「あるひ」と歌い、客席が「あるひ」と受ける。「森の中」「森の中」、「ブタさんに」「ブタさんに」、「出会った」「出会った。花咲く森の道、ブタさんに出会った」。動物たちはへとへとになって、夜の森に着く）
動物たち　：どこかに寝るところを見つけようぜ。おや、向こうに明かりが見える。
ロバ　　：（ロバが見に行って、戻ってくる）泥棒たちの住み家だ。ごちそうの山だぜ。
動物たち　：うーっ、腹がへってきた。やつらを追っぱらおうぜ！
（泥棒役のホッホが一人で出てきて、舞台中央に座り、食べる演技をおおげさにする。動物たちが抜き足、差し足で、ホッホの後ろにまわって、横一列に並び、いっせいに鳴き声をたて、スローモーションで演技をする。ホッホがパントマイムでカックリ、ヒョッコン、カックリ、ヒョーッと叫んでスローモーションで驚きを表現。親たちが拍手。客席の子どもたちは立ち上がってホッホの真似をする。舞台上手のロバが蹴るかっこう、下手のデップリンが腹をつきだし、舞台中央のホッホが奇妙な格好で受け、カックリ、ヒョッコン、カックリ、ヒョーッ、と叫びながらゆっくり逃げ去る。動物たち、食べ、眠る。バイオリンが朝の曲）
オンドリ　：コケコッコー！　朝だよ！　ブレーメンへ出かける時間だよ！
動物たち　：やあ、ここは緑いっぱいの森だぜ。目の前に池がある。カワセミが止まっている。ここに住みたいねえ。いや、ブレーメンに向かって出発だ。（動物たち、〈夢を追いかけどこまでも〉を演奏しながら歩き出す。克兄ちゃん扮する紳士が登場。以下、セリフは日本語になる）
紳士　　：いやはや、お見事な演奏ですな。みなさんはどういう方々なのですか？
ロバ　　：おいらたちはブレーメンの町の音楽隊に入れてもらおうと思って、これから出発するところだ。
紳士　　：ブレーメンの音楽隊に入りたいですと！　これはこれは、わたしは幸運ですな。わたしはブレーメンの町のレストランで、音楽隊の指揮者をやっている者でしてね。
ネコ　　：音楽隊の指揮者だって？
者ですって！　そんな人がどうしてここへ？
紳士　　：はい、ここはわたしのふるさとでしてね。わたしはここに戻って、音楽隊つ

きのレストランを開きたいと思って、調べにやってきたところなのです。
イヌ　：音楽隊つきのレストランを開きたいのかい？
紳士　：そうですとも。その音楽隊になっていただける方々に、今わたしは出会えたのですなあ。いやはや、なんとも運がいい！　あとは腕のいい料理人探しです。
ブタ　：料理人ならここにいまーす！　とびきりの料理人です！
紳士　：ということは、私の客人は料理を食べながら演奏を聴く、というわけですな。
サル　：まだある！　おらはとびきりの曲芸師だ！
ホッホ　：ぼくはとびきりのコメディアン！
紳士　：おやおや、なんともうれしいですなあ。するとあとは建物探しだけですなあ。
動物たち　：建物ならあそこに空き家がある！
紳士　：おお、おお！　ではあれをレストランにしましょう！
動物たち　：ところでここはどこなんだい？
紳士　：ここは町田で、あの池は薬師池です。音楽隊の名前は何としましょうか？
動物たち　：マチダの音楽隊！
紳士　：けっこうですな！　それでは諸君、レストランを開く準備にかかりましょう。
ナレーター：レストランを開く日がやってきました。店はお客さんでいっぱいです。
紳士　：みなさま、ようこそお越しくださいました。私は店長です。ちょうど料理ができあがりました。では店の諸君、お客様に料理を出してください。当店自慢の料理長、デップリンが腕をふるったものでございます。
（デップリンが料理人のかっこう、満面の笑顔で登場し手を振る。中三生たちは客席に下り、「お坊っちゃまはカレーライスでしたね」「はい、お嬢ちゃん、ティーニータイニー自慢のミネストローネです」「おばばちゃまはビーフステーキですね」などと言いながら、アメ玉を配って歩く）
紳士　：みなさま、召し上がりながら、わたしどもの楽団「マチダの音楽隊」の演奏をお聴きください。ごいっしょに歌ってください」
（克兄ちゃんの指揮と美音のバイオリン伴奏で、「夢を追いかけどこまでも」「おもちゃのチャッチャッチャ」「森のブタさん」を歌い、踊る。デップリンがイタリア民謡をヒッポのフルート伴奏で歌い、最後にリサと克兄ちゃんが、豪利のハーモニカ伴奏で、二重唱「遠き山に陽は落ちて」を歌って幕となった。）

54　塾を卒業する生徒たちの言葉

ティーニータイニー塾を卒業する中三生と高校生たちが壇上に並び、それぞれがこの塾で学んだ感想を語った。

理王（中二。在籍十一年）　：　ぼくはもの心ついたときには、ゴリ先生を相撲で投げ

飛ばしていてスーパーマンでした。ところが小二のとき、とつぜん巨大なお腹がドーンとぼくの前に立ちはだかり、そのお腹がぼくをポーンと飛ばしました。そんなはずはないと、ぼくは悔しくて、夜、ふとんに入っても勝つ姿を想像しているうちに、ぼくは再びスーパーマンになりましたが、次の週になるとまた……。ぼくは中二ですが、この人たちといっしょに高校生クラスに移ります。「質の高い人たちが自分の周りに存在し、崇高な世界を創り上げていく。その場に居合わせるだけで自分を向上させる空間というものがある」。ティーニータイニー塾の高校生クラスです。ぼくも憧れられる人になるつもりです。

リサ（在籍十一年）　：　わたしは引っ込み思案で、人の後にくっついているのが安心でした。それが中三になって、夏の合宿でリーダーをやらなければいけないことになって、わたしはおびえてしまいました。でもカウンセラーの大学生が、わたしの気がつかなかった良い点を指摘してくれ、高校生や同級生の励ましもあって、わたしは「がんばらないのがわたしなのだ」と思えるようになって、自分のリーダーの姿を見つけられました。

わたしは農業に興味があり、農業と酪農を学ぶ高校に行きます。夏は合宿で出会った安曇野のおじさんのブルーベリー畑や牧場で、お手伝いをします。その時には合宿に顔を出します。ゴリ先生、克兄ちゃん、先輩、お友だち、たくさんの励ましをありがとうございました。

キララ子（在籍十年）　：　わたしは小さいころから、リーダーをやらされることが多かったのですが、リーダーが何かということを考えたことはありませんでした。それが中学生になって、先輩方が人の長所に目をやり、人の成長を喜ぶ姿を見て、リーダーの役割を考え始めたとき、とつぜんリーダー役に推薦されました。それでやってみたら、リーダーの在り方でチームが良くも悪くもなるという体験ができ、わたしは人間としての自分を高めようという気持ちになりました。わたしは自分が他人の長所に触れて喜べる人であることを知ったことが何よりも嬉しいです。

デップリン（在籍八年）　：　ぼくは小三でティーニー塾に入り、その年の英語劇発表会で、中三生たちがこうやって壇上で話す姿が輝いて見え、ぼくも（中三生になったらかっこよく話そう）と思いました。そしてぼくはティーニータイニー塾には〈愛の心〉があると発見したので、そのことを話そうと小三で決めました。それから七年、ぼくは先輩や先生から〈愛の心〉を持って育てられ、ぼくも〈愛の心〉を持って後輩のみなさんと接してきました。みなさんも〈愛の心〉を受け継ぎ、自分を育て、後の人たちを励ましてください。ぼくはもう二年間、ティニータイニー塾の高校生として、キャンプ、合宿、スキー、発表会、クリスマスパーティで活躍します。楽しくやろうね、ガキンチョたち。

剣矢（在籍三年）　：　ティーニー塾の先輩たちを見ておれが思うことは、この塾の生

徒たちは自分の成長を自覚して卒業していくということです。それができるのは、先輩たちが「体験したことを意識化する」ということをしているからです。おれにはそれがこの塾に入って一番役に立っていることです。おれは人の欠点を突いてしまうことが多いんだけど、ゴリ先生から、「人の欠点が見えるってことは、人の長所が見えることにもつながるから、人のプラスの面に心を向けろ」って言われ、キララ子からも「剣矢は人の長所をつかむのが上手」って言われ、それで人のプラスの面を見て、それを意識化するようにしたら、おれは人の成長を喜べるようになった。これってうれしい。

鉄平（在籍二年）：おれはしゃべれない人だったけど、ティーニー塾の高校生から、「人に伝えたいことを心の中で絵に描け」って言われて、絵に描いたら言葉になった。そしたら相手も言葉を返してくれて、絵がどんどん描けるようになった。おれは遊んでばっかで勉強しなかったけど、この塾に入ったら、大学生の克兄ちゃんから、おれは「自然を感じさせる人だ」って言われて、みんなからそういうところがほめられて、「おれっていいじゃん」て思った。それで勉強を始めようって思ったら、思っただけで伸びて、始めたらうんと伸びてる。おれを〈自然ぽく〉育ててくれた両親と姉ちゃんと妹に感謝してる。

ホッホ（在籍一年）：ぼくは、家の前を通るティーニー塾の人たちみたいに輝きたいと思って、この塾に入りました。そうしたら、ぼくはキャンプでコテンパンにやっつけられて、自分がダメな人だと思って気を失いかけました。そのとき、ツッパリくんと克兄がぼくを支えてくれました。目を開けたら、みんながぼくを優しい目で見ていました。そのとき「ぼくはこの塾で生きていこう」と思いました。ここで学ぶことはいつも新鮮です。自分が成長していくことも実感できます。剣矢はぼくの成長が速いことを指摘してくれ、ゴリ先生は「それは小さいときに親にかわいがられていたからだ」って言ってくれました。ぼくは自分がダメなのは勉強ばかりやらされてきたからだと思っていましたが、先生の言葉でぼくは今は親に感謝しています。さっきの劇の時から、悲鳴みたいな変な声をたてている少女みたいな顔の人は、ぼくの母です。あれでもう三十四歳です。

新井アズミ（高二。在籍七年）：ティーニー塾には人と人の間に、もう一人、〈優しさという人〉が存在しています。ぼくは自分がおとなしい子どもであることを小さいうちから思っていました。そんなぼくがティーニー塾に入ると、生徒たちの活発さにぐいぐいひかれました。二年前、夏合宿でキャンプをやっていたとき、どこかの高校生たちから、「おまえたちは何者だ。動きが豪快だ」と言われました。確かに人にはそう見えます。ぼくなんかの性格では、その豪快さに飲み込まれて自分を見失いそうに思えますが、この塾ではそうなりません。それはティーニー塾には、優しさという人物がいて、人と人をふっくりと包んでくれるからです。ぼくも包まれ、包む人になっていることを自覚しています。

松本きいろ（高二。在籍八年）　：わたしはこの塾の古ぼけた小さな木の家を見たとき、母が読んでくれた絵本の「ちいさいおうち」や昔話の雰囲気を感じて、優しい気持ちになりました。この塾の子どもたちは動きに力があって、わたしはゆるいのですが、そういうわたしがすぐにティーニー塾になじめたのは、アズミくんが言ったように、この塾には人と人の間に優しさがあるからです。わたしは自分がリーダーシップ能力があるとか、リーダーシップ力を発揮したいとか思わなかったのに、わたしの言葉が受け入れられ、わたしは穏やかに自分を演じられ成長しています。わたしはティーニータイニー塾とわたしを、デップリンのようにこよなく愛しています。

宮坂チアン（チャンちゃん。高二。在籍十一年）　：わたしは勉強をしません。勉強嫌いだからではなく、友だちと遊んだり体を動かすことが好きだからです。わたしのお姉ちゃんは勉強好きで、本もたくさん読み、バイオリンは心をこめて弾きます。でもわたしは小さい時はバイオリンを弾きながら、キョロッキョロと目を動かして、客席の人の顔を見て喜んでいました。父も母も、そんなわたしをお姉ちゃんと比較しないで、「チアンは人間が好きなことが長所だから、将来は人間にかかわる仕事をするだろう。その時が来たら勉強すればいい」と言いました。わたしもそう思って、勉強したくなる日が来ることを期待しています。お父ちゃん、良い塾を創ってくれて嬉しいよ。わたしの誇りだよ。

原田修平（ヒッポ。高三。在籍八年）　：ゴリ先生は生徒が何か言ったりやったりすると、「おお、そうか」と言ってちょっとの〈間〉をとってから、自分の考えや指示を出します。ぼくは先生の〈間〉の意味って何だろう？」と思って質問したことがあります。すると先生は「生徒の言葉や行動を〈手のひらの中で温めている時間だ〉」と言いました。温めていると生徒の姿が見えてきて、自分の言葉を深めたり、生徒たちに考えさせたりできるのだそうです。ぼくは大学に合格しました。二年後、克兄ちゃんの後をついで、中三クラスの数学、理科の大学生講師をやります。そのあとは学校の先生になります。ゴリ先生、この日本のどこかで、「ティーニータイニー塾で学んだことを生かそうとしている若者がいる」と思ってください。

豪利の挨拶　：客席の小学生、中学生たちも何年かしたら、この人たちのような素敵なお兄ちゃんお姉ちゃんになるんだよね。どうしたらそうなれるかな？……体験して、人の話を聴いて、考えて、自分が思ったことを喋るといいんだ。人と違ったことを言っていいんだ。みんなで話し合っていくうちに、自分の考えが変わったり深くなったりしていくからね。この人たちもそうやって大きくなってきたし、僕もこの人たちから学んできたんだ。親のみなさん、ご協力をありがとうございました。これで今年度を終わります。

生徒たちが後片づけをしているとき、「ヒロくん」と言って、小低の女の子二人を連れた母親がデップリンに声をかけてきた。
「あれっ、優心くんのおばちゃま、英語劇を観にきてくださったのですか？」
「ヒロくんのお母さんに誘われたの。優心も『妹たちをティーニータイニー塾に入れろ』って言うから、この子たちに劇を観させたくて連れて来たのよ。ヒロくん、優心が合宿でご迷惑かけてしまったこと、本当にごめんなさい。それなのに優心に優しくしてくださって、ありがとうね。優心も劇を観に来て、鉄平くんにおわびするつもりだったんだけど、剣道の大会の代表選手に選ばれて、大会と重なってしまったの。後日、優心はご挨拶します。それから、おばちゃんとおじちゃんたち、またいっしょに暮らすことになったのよ」